

金華小百話

福せむの松

多やいおは山

あつちの

足代のさくらんぼ

さくらんぼ

又やたのち

川 尾 年 夫 子 道 兵

伊豆山

舟伏山

山

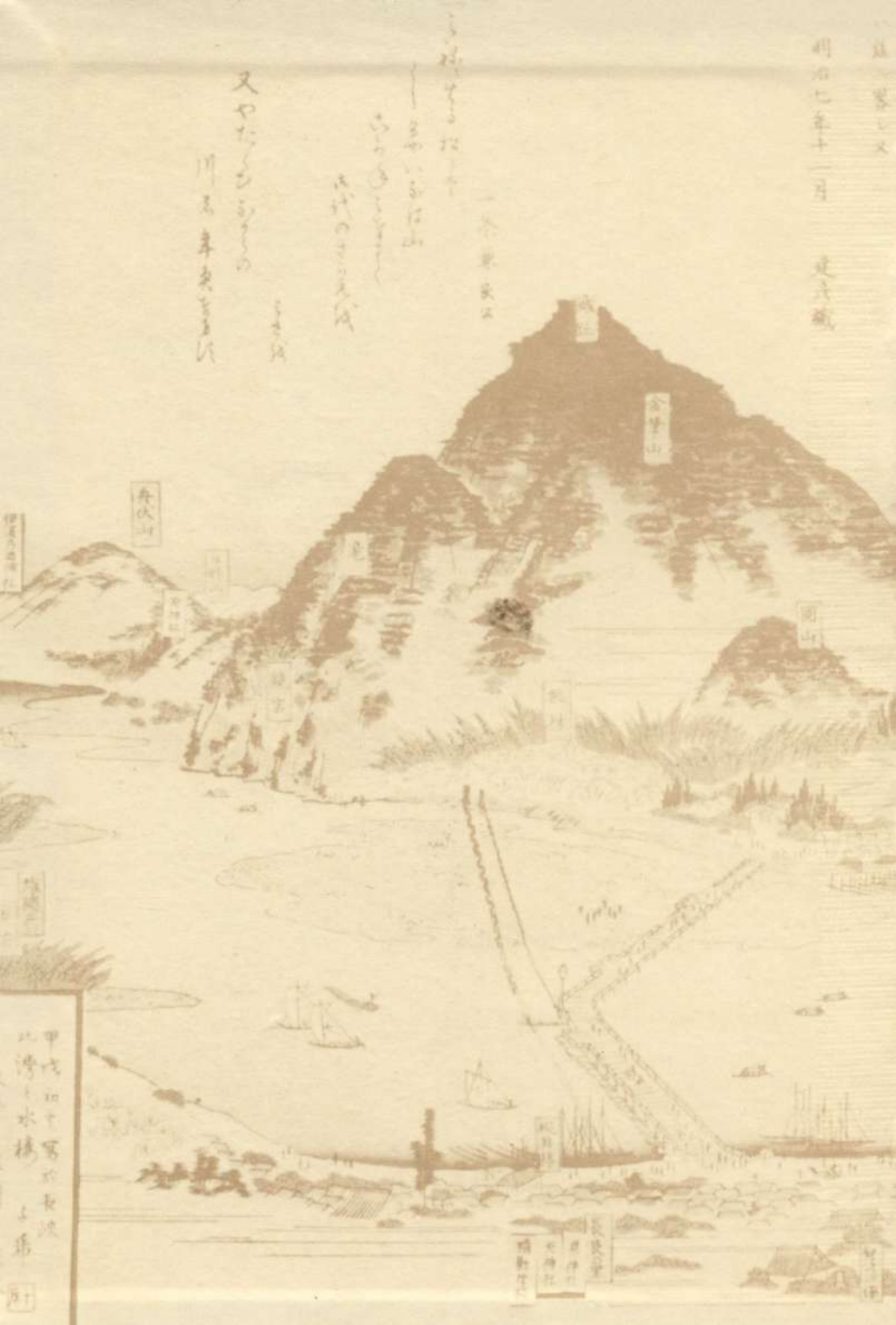
山

山

山

甲戌初十 寫於長波
此湾之水橋 上系

長波山
山
山
山



政存三野ノ國原見ノ郡十ニ波
 縣ハ北緯三十五度二十七分半
 經二度五十九分余一帯リ地勢
 頗レシテ東ハ五ノ員ノ伊奈波
 アリ其山脈東南ニ起リ西南ハ
 山道十ニ加納ノ里ニ達ス森ノ
 毛張ノ名古屋ヲ經テ東海邊ニ
 西北ハ長良川ノ流レニ及
 處ヲニ在リ住夫ノ便ヲ知レ之
 北川ニ私橋ヲ架シテ長良ノ里
 跨リ北ヲ七ノ八ノ區ヲ連接ス中
 ニ新橋アリテ全縣ノ管轄シ中
 ノ學校廣大ナリ市街ノ繁信神
 橋關及ヒ種々ノ會社等アリ氣
 東ノ家作ノ洋風ヲ觀シ爾ノ
 子登取ッテトリ茶ヲ飲シ實ノ
 園一擊撥ノ地ナリ故ニ三野
 港五縣ノ商客口ニ群夫ノ養
 北地ノ山水常々シニ春秋ノ
 得長良ノ櫻刻再臨ノ奇觀ニ
 自詠歌國民ノ歌也



金華小百話



はじめに

鷺見礼司

金華小学校が明治6年2月創立されてより昭和50年2月で満102年になる。その間に地震・火災・台風などの災害と必死に戦い、いかにいためつけられても学校を再建し幾つかの戦争の中で敢然と生き抜き戦後の苦しさを乗り越え、いつの世にも変わらず教育・文化・科学・スポーツ・芸術にうちこんできた。

本書は以上のようにして金華小学校が県下に比類なき伝統と栄光とを築きあげてきた記録と話とである。

そしてこのように学校を支えてきた奥底に流れるものは、岐阜発祥の地の学校であるという名門の誇りと、何にも負けない不屈の愛校の精神とである。これらを永く学校を受けつぐ後の世の者に伝えたいと思う。

本書は、旧職員の方々から沢山の玉稿をいただき、同窓生の方々から多くの昔話を聞き、現職員や多くの方々のご声援をいただいてできあがったのである。本書の発刊に当たり、これらの方々には深く感謝し厚く御礼を申し上げる。

空より見た学校全景

昭和49年6月20日



目 次

はじめに	驚見礼司	頁
実った成果	岐阜市立金華小学校長	三浦義明 1
味読を願って	前岐阜市立金華小学校長	吉岡 勲 2

年度	記 事	頁	年度	記 事	頁
序話	校名の変遷	3	大正時代		48
"	児童数・学級数	5	元	昔の校歌	49
"	校 印	7	2	子守とお手玉	51
明治時代		10	3	マルMのゴムマリ	53
"	米屋町の校地	11	4	校舎炎上	55
"	米屋町の校舎	13	4	我が学校の火事	児童作文 57
"	富茂登の学校	15	5	スミスの飛行機	杉山富美子 59
18	岐阜学校の頃	17	6	奉安殿の話	61
24	濃尾震災	19	7	子どもの読み物	63
25	学校復興	21	8	大正のくらし	65
26	校舎落成式	稲垣知剛 23	9	パンパン遊び	67
30	この頃の運動会	25	10	かくれんぼ	69
33	郵便切手貯金	27	11	少年野球の初め	71
37	長良川の川舟	29	12	おきゃんなクラス	内木たまゑ 73
37	お習字	31	13	銀杏の木	75
37	伊奈波の桜	33	14	夏季学校聚落	加野史郎 77
37	柳ヶ瀬繁昌記	35	14	栄光の少年野球	79
39	法華寺裏の喧嘩	37	昭和前期		84
40	お人形さん遊び	39	元	伊吹登山	赤塚重次郎 85
43	明治の終りのくらし	41	2	着物から洋服へ	山田義三郎 87
43	大工町の校舎	43	3	女子陸上に活躍	鶴飼由己 89
44	校門の話	45	3	児童文集「金華」	91

年度	記	事	頁	年度	記	事	頁
3	神宮・藤井寺の決戦		93	25	子供郵便局		159
4	陸上競技	高崎甚一	95	26	完全給食始まる		161
5	甲判	松原英子	97	26	戸棚1本から図書館	林 公子	163
6	CKからラジオ放送	野田ひで	99	27	創立八十周年		165
7	儀式	伊藤一郎	101	27	今の校歌		167
7	陸上・サンマーパーク		103	28	ラジオコンクール	渡辺政枝	169
8	講堂の話		105	29	生産人の育成	土田 勇	171
8	昭和の初めの暮らし		107	30	蠅とり・遊び		173
9	二つの銅像		109	30	金華児童愛護会		175
9	小学校の暮らし		111	31	いちょうの実文集		177
10	ベースボール		113	32	鉄筋校舎に改築	汲田史郎	179
11	魚とり・躍進博		115	33	川のせき止め	小森芳勝	181
12	兵隊さんの見送り		117	34	伊勢湾台風	梅田一雄	183
13	女子の薙刀	川上千歳	119	34	台風・大水	児童作文	185
13	お話会と縄とび		121	35	びわ湖めぐり	桐山富美子	187
14	師の涙に誓う		123	36	トン子		189
15	寒中修練	中村又一	125	37	動物慰霊塚	古川幸男	191
16	開拓と堆肥作り	大野 隆	127	38	PTAの活動		193
17	職員滑空隊		129	38	創立九十周年		195
17	戦争中の遊び		131	39	敦賀の海浜学習	野村 由	197
18	いも掘り・雪合戦	川瀬知勝	133	40	鼓笛隊と岐阜国体	加藤義男	199
18	戦時下の暮らし		135	41	仲よしの丘	木村勝次	201
19	勤労動員と地震	加藤 勉	137	42	教室にテレビ		203
19	戦争中の学校		139	43	岩石園作り		205
20	終戦前と雑炊の味	寺町百助	141	44	環境の整備		207
20	丹羽訓導の殉職		143	45	雨の万博		209
昭和後期			146	46	クラブ活動始まる		211
21	戦後の学校		147	47	創立百周年		213
21	虱とさつまいも	酒向敏子	149	48	体育館竣工		215
22	豚と配給と映画	山本春子	151	49	PTAの発展		217
22	育友会の発達		153		沿革年表		219
23	自作劇	西村君子	155		* * *		
24	展覧会	堀口すゑの	157		おわりに		225



実った成果

岐阜市立金華小学校長 三浦 義明

金華小学校では校内研修として各職員が個人テーマを設定し研究に励んできました。その中で驚見礼司教頭は、前年度に引き続き本校百年の歩みを明らかにしようとして2ヶ年の成果が実り、ここに「金華小百話」の発刊を見ましたことは、まことに喜びに堪えません。

扉をあけると本校百年の歩みがひたひたと迫ってきて、つい一気に読み通さずにはおれませんでした。これというのも驚見教頭が、学校の膨大な書類を克明に調べ、足でかせぎ、眼でたしかめ、耳で聞きとった貴重な資料の裏付けをもとに、孜々としたゆまず研鑽編集された賜物です。

内容も遠く明治の初めから今日に及び、しかも身近な事柄が取りあげられていて、特に親しみを覚えました。既刊の「金華小百年」を正装の校史とすれば、この「金華小百話」は正に普段着の校史とも言うべきでしょうか。

兎に角、すばらしい本ができあがりました。校下にご在住の方はもとより、遠くこの地を離れておられる方にとっても、懐しいふるさとの匂いがする本です。ここに金華小学校のよすがを偲ぶ好個の資料として、ご推奨する次第です。

学校としましても、この「金華小百話」を子どもの教育指導に十分役立て、生きた資料として活用したいと思います。終りに驚見教頭のご努力に深い敬意を捧げ巻頭のことばといたします。

味読を願って

前岐阜市立金華小学校長 吉岡 勲

小学校は、すべての人がぐくぐりぬける門として誇らかに待ち構え、また前途をたたえて送りだしてきた。わが金華小学校も、その例外ではない。特に尾州藩の代官所を校舎にし、江戸時代の岐阜町を校区として伝統を誇ったので、在学したとの誇りは一段と高い。

そうした誇りは、いくら民主主義社会だからといって引き下げる必要はない。今後一段と内容を充実し、高らかに支えてゆけば良い。そのためには校長の金華における在職年数を長くすることと、校長の人事内申権をもっと強くすることが重要であろう。金華小学校区の皆さんが学校を大切にし、教育をもり立てようと目ざされている意欲は、全市的にみてきわだっている。そのため金華へ転入したい希望の教師は多い。その中から人材を校長に拾い集めさせてくれれば、学校の充実発展は飛躍する。所詮教育は人が人を感動させ薫化させ向上させるものだからである。この「金華小百話」を読むと、教育は人の問題だということに至りつくと思う。

この本は鷺見さんが、こつこつと書きだめ、更には関係者の寄稿を願ってまとめられたものである。思い出はすべてなつかしくなる。苦しかったことも、悲しかったことも、楽しく明るくなることが回想の特長である。まして金華小を卒業したと誇る日、回想は次代の幼少年にかたりかける力を持つはずである。本書の味読をひそかに祈って止まない。

校門前より体育館を望む



校名の変遷

本校は明治6年2月創立した大観舎に、同年同月創立した有道義校が、明治43年4月1日合併して今日に至ったのである。2校の校区は現在の本校の校下を2分し、大観舎は今の東材木町・上大久和町・今町3・4丁目より西、有道義校は今の今町1・2丁目・益屋町・大仏町・梶川町より東である。

大観舎の創立 修業年限下等4ヶ年・上等4ヶ年

明治5年8月3日学制が發布されたので岐阜町では明治6年2月米屋町の旧尾州藩岐阜奉行所の建物を仮校舎として開校し大観舎と称した。

金華学校・伊奈波学校と改称

明治7年4月、2階建の南舎・北舎を新築完成し、金華学校（南舎・男子）・伊奈波学校（北舎・女子）と改称した。

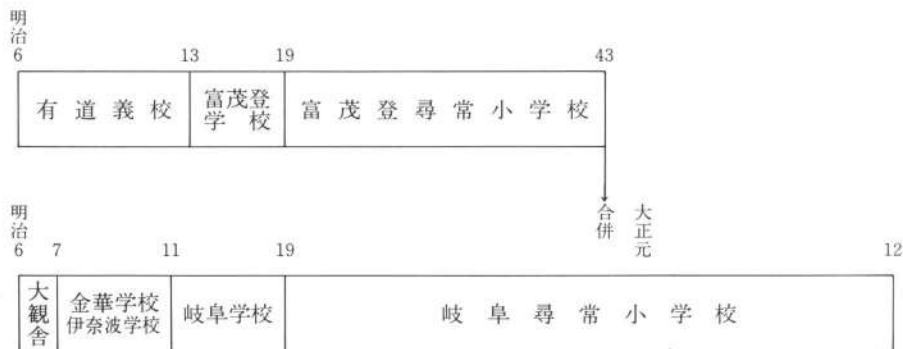
岐阜学校と改称

明治10年5月19日それまで中舎（元奉行所建物）を使用していた遷喬学校（現岐阜高校）が今泉村へ移転したので、中舎を2階建に改築し明治11年7月岐阜学校と改称した。

明治12年9月29日教育令の公布により公立小学校となり修業年限は8ヶ年となった。但し土地の状況により4ヶ年に短縮でき、その4ヶ年も毎年4ヶ月以上授業すればよいことになった。（義務教育16ヶ月）

明治13年12月28日教育令が改正され修業年限は3ヶ年以上となる。

明治14年5月4日小学校教則綱領が公布され初等科3ヶ年・中等科3ヶ年・高等科2ヶ年となる。



明治19年4月9日小学校令公布、尋常小学校4ヶ年・高等小学校4ヶ年、土地の状況により尋常科の代用として簡易科（3ヶ年以内）を設けることができた。本校には尋常科・高等科・簡易科が設けられた。

岐阜尋常小学校と改称 修業年限4ヶ年、明治43年度より修業年限6ヶ年

明治19年11月岐阜学校は岐阜尋常小学校（本校）と岐阜高等小学校（現京町小）とに分立した。明治33年8月1日小学校令改正、尋常科4ヶ年が義務教育となる。

明治40年3月20日小学校令が改正され義務教育が6ヶ年となった。それに伴い本校では明治42年度に5年生、43年度に6年生を置いた。この大改革の時に当り明治43年4月1日米屋町の岐阜尋常小学校に、湊町の富茂登尋常小学校が合併し大工町へ移った。以後修業年限6ヶ年。

岐阜尋常高等小学校と改称 修業年限 尋常科6ヶ年・高等科2ヶ年

大正12年4月1日高等科を併置し、岐阜尋常高等小学校と改称した。

金華尋常高等小学校と改称 修業年限 尋常科6ヶ年・高等科2ヶ年

大正14年10月1日、岐阜尋常高等小学校（本校）と岐阜市尋常高等小学校（現京町小）とまぎらわしいので金華尋常高等小学校と改称した。

金華国民学校と改称 修業年限 初等科6ヶ年・高等科2ヶ年

昭和16年3月1日国民学校令が公布され、昭和16年4月1日改称した。

金華小学校と改称 修業年限6ヶ年

昭和22年3月31日学校教育法が公布され、昭和22年4月1日改称し現在に至る。

有道義校の創立

明治5年8月3日学制が発令されたので富茂登村では明治6年2月7日湊町に有道義校を設立した。設立責任者は土地の有力者桑原善吉で教師3名、男子生徒65名・女子生徒50名で発足した。

富茂登学校と改称

明治13年富茂登学校と改称した。

富茂登尋常小学校と改称

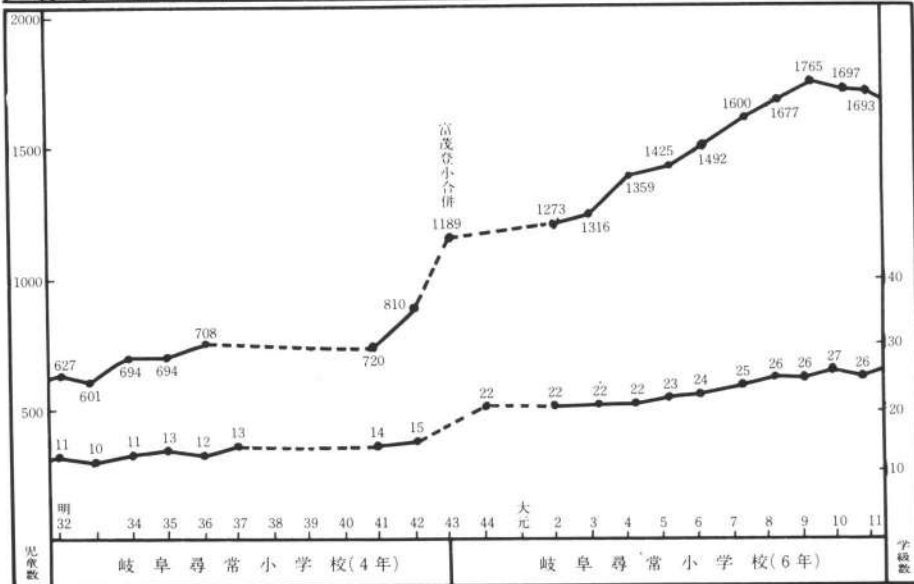
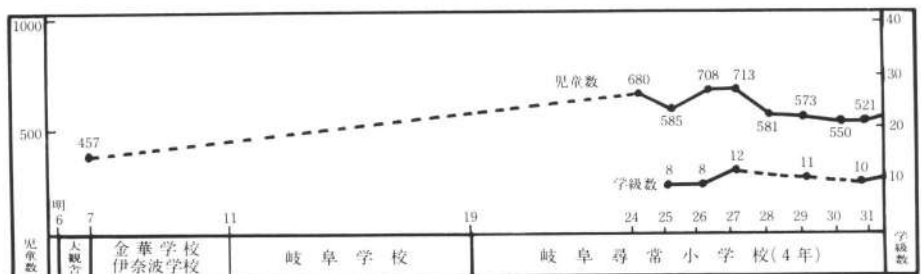
明治19年4月9日小学校令が発布されたので富茂登尋常小学校と改称した。

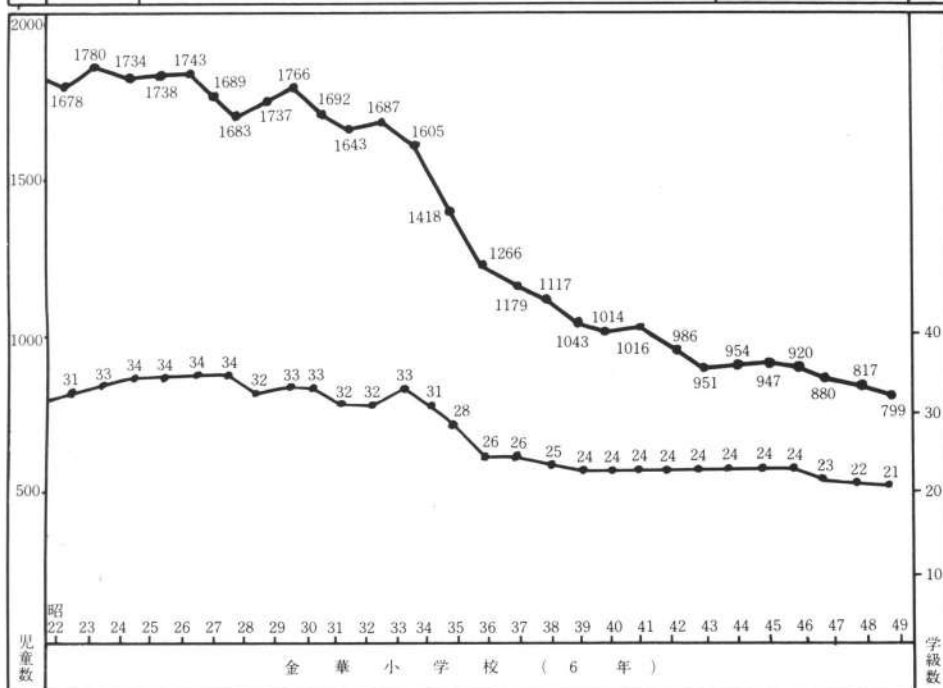
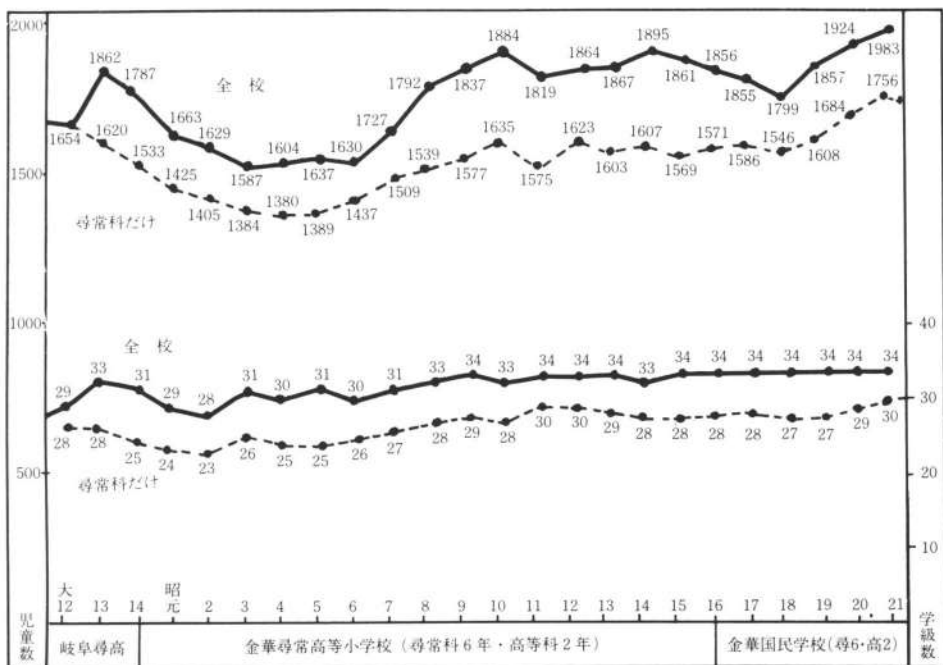
明治43年4月1日、岐阜尋常小学校に合併した。

大正 12	14	昭和 元	16	22	47
岐阜 尋高	金華尋常高等小学校	金華国民学校	金 華 小 学 校		

児童数・学級数

本校の児童数は明治時代500人から700人位の間を前後していた。義務教育が6ヶ年に延長され、その上富茂登尋常小学校を合併し、大工町に移った明治43年には1000人を超えた。以後児童は次第に増加し大正の終りには1700人前後にもなった。大正12年高等科が併置されるや更に増加し、昭和9年からは毎年1800人を超え昭和21年には実に1983人にも達した。戦後高等科がなくなったが、戦災を免れた校下へ被災者が入り昭和30年までは1700人位であった。しかしそれ以後は急激に減少し、昭和42年には1000人を割り、更に減少しつつ現在に至っている。





校 印

学校には沢山の印が保存されているが、その中で終戦前に作られた学校印と学校長印とは次の6箇である。今この印にふれてみると、歴代の名校長やその時代の先生方の手のぬくもりが伝わってくるようで、何万人かの少年少女が卒業証書におされたこれらの印の下で巣立ったであろうことを思い合せると感慨深いものがある。

「富茂登学校」印

印材 柘

大きさ 縦・横とも3.6㍍ 高さ4㍍

富茂登学校（明治13年～18年）の時に使われたもので、印のいたみようから察し、よく使用されたらしい。



「岐阜尋常小学校校長稲垣知剛」印

印材 寿山（今の中華人民共和国福州）
（寿山産の石）

大きさ 縦・横とも1.9㍍ 高さ3.2㍍

稲垣知剛は旧名を稲垣鈴吉といい、明治25年2月13日知剛と改名した。この印はそれ以後、栄転される明治27年5月26日までの間に作られ使用された。印は小品ながら気品と風格に満ちている。



「岐阜県岐阜市立富茂登尋常小学校之印」印

印材 寿山

大きさ 縦・横とも4.6㍍ 高さ5.3㍍

印の横に「明治33年3月早洲刻」と彫ってあるからそれ以後、岐阜尋常小学校に合併した明治43年3月末日までの10年間使用された。

印は赤味を交えた白黒の色をしていて、大型でどっしりした感じがする。



「岐阜県岐阜市金華尋常高等小学校印」

印材 寿山

大きさ 縦・横とも4.6匁 高さ5.2匁

印の横に「明治20年3月上諭

竹堂 津田重胤篆」と彫ってある。普通は篆刻と彫るし、篆の下に余裕のないところから、この印は何度も改刻されたらしい。そうとすれば、この印は次のように考えられる。

明治20年3月岐阜尋常小学校の時作製
大正12年4月1日岐阜尋常高等小学校と校名改称に伴い、改刻。

大正14年10月1日金華尋常高等小学校と校名改称に伴い、改刻。

昭和16年4月1日金華国民学校と校名改称に伴い、廃印。

このように推察すれば、この印は濃尾震災にも厄をのがれ明治20年から昭和16年まで明治・大正・昭和と実に54年間、その重責を果してきたと思われる。



「岐阜市金華国民学校」印

印材 柘

大きさ 縦・横とも1.8匁 高さ6匁

昭和16年4月1日から昭和22年3月末日までの金華国民学校の時に使用したもので、戦時中らしく質素な木製で当時が偲ばれる。

「岐阜市金華小学校長」印

印材 寿山

大きさ 縦・横とも2匁 高さ3匁

印の横に「早洲刻」と彫ってある。早洲は左頁の富茂登の印を明治33年に彫っているから、この印も同時代に「岐阜尋常小学校長」というように彫ってあったのであろう。この印は高さがあまり低くなっていない所から何度も改刻せず戦後改刻されたのであろう。

(印材鑑定 船戸茂雄)



明治時代

明治6年2月、
大観舎並びに有道義校をそれぞれ創立する。
校舎を建て増しては校名を変える。
明治24年10月、
濃尾震災で校舎焼失、学校再建に力を尽す。
実地授業術の研究にとりくみ、
義務教育が4年となり、6年となって
明治43年、
2校が一つになり大工町へ移る。

鵜飼と富茂登尋常小学校

長良川北岸から対岸はるか富茂登の学校を臨む

明治30年頃



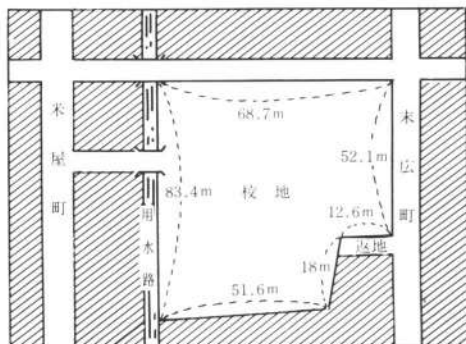
米屋町の校地

米屋町の校地は、末広町通りの西、間之町から東の稲荷神社へ通ずる道路の南、南北に流れる用水路の東、裁松寺の北にかこまれた区域である。下掲の明治22年市制を施行した当時の地図により、校地の位置を知ることができる。この校地は明治6年2月創立以来、明治44年3月18日、今の大工町へ移転するまでの間、使用した土地である。

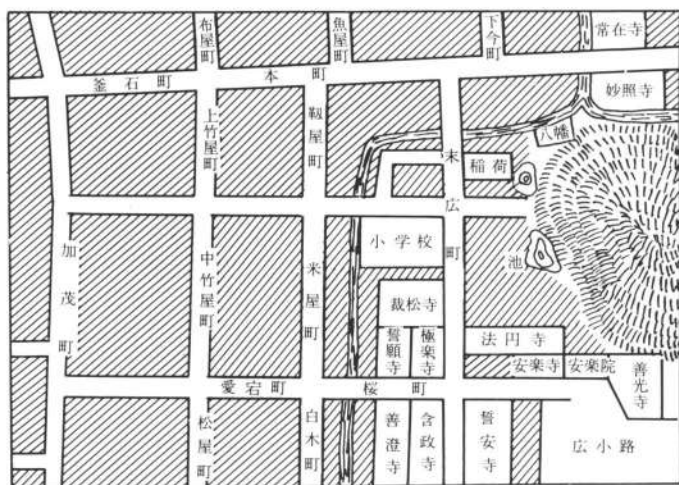
更に詳細な地図は右掲のもので、明治25年2月23日、市吏員が測量して作製したものである。

これは濃尾震災で全市が殆んど焦土と化してしまった時、校地の一部の借地（土蔵所在の東西7間・南北1間計7坪）を所有者の三浦千春氏の請求により返却する際に作製したものである。これによれば校地は、東西68.7米、南北83.4米のほぼ矩形で、東南部の一部が欠けている。

この地は元、旧尾州藩岐阜奉行所のあった所で、奉行所の敷地内に南北にあった馬場を末広町通りとし、奉行所の建物をそのまま仮校舎として、本校は開校した。



実測地図 明治25年2月23日作製



学校付近の地図
明治二十二年
市制施行の時

学校の門は東と西とにあった。濃尾震災で焼けてしまったので、明治26年11月11日、東西の門を154円50銭、西門の西の橋を36円90銭で落札し12月27日に竣工している。更に明治27年1月25日、校地の周囲の土居並びに木柵の建設に着手している。土居の地巾4尺、木柵の高さ4尺長さ157間である。校地の周囲の長さから算定すれば、土居は西門の隣り若干で、あとの校地の周囲全部に木柵を建てたのであろう。



学校のあったところ 今の末広町

正門は西門のことである。正門は米屋町より東へ入り、用水路をこした所にあった。正門は明治35年10月8日、当時の大金380円をかけて石柱とし、鉄扉をとりつけた。同月10日、堀口市長は服部助役を従えて正門の竣工検査のため来校されたが、これでいかに正門が立派であったか伺い知ることができる。

明治30年代の様子を古老に聞くと、校地の北側はからたちが植っていて、東側の末広町通り沿いは低い石垣の上にまっ黒にぬった低い板塀があったということである。学校日誌にも明治41年5月18日、校地の板囲を職工2人作業すとあるので、校地の周囲は木柵から、からたちや板囲に変っていったのであろう。

運動場の東北隅に国旗掲揚のため竹が立ててあった。明治32年7月18日午前11時40分、この旗竿に落雷し竹竿を寸々に破碎した。この日、学校では594名の児童が勉強していたが、激雷天地を震動し落雷したのには肝をつぶしたことであろう。後日譚として、落雷した竹の切れをかむと歯の痛みが治るといふ迷信がまことしやかに流れ、竹の切れが児童の間で大切にされたということである。

明治37年6月20日の学校日誌によると男子の食堂を13教室、女子の教室を12教室と定めたところがあるが、これによると教室の呼び名は番号によっていたことがわかる。井戸は「東の井戸」と学校日誌に記載されている所から、校地に井戸が2つ以上あったと思われる。東の井戸は運動場東北隅の旗竹の近くにあった。井戸浚えは人夫4名を備って毎年8月上旬に行っている。明治38年10月4日ポンプがとりつけられたが、それ以前はつるべ井戸であった。

便所は北舎の東に北便所、南舎の東に南便所があって、職員らも北便所を使用していた。全部汲みとりであったが、なにしろ大勢の児童であるからその糞尿も多量であったに違いない。明治35年12月26日の記録に、来年1年間の下肥代を32円で早田の松原善兵衛と契約し、その内金16円を本日受けとったとある。このように年末に翌年分を契約しているが、その額は当時の物価と比べなかなか大したもの、学校を経営する財源の一つであったであろう。

米屋町の校舎

明治6年、米屋町の校舎は仮校舎で発足し、翌年に増築をして一応学校の形態を整えた。その後生徒数の増加に伴い改築したが、明治24年の濃尾震災により全校舎焼失した。その後、新しく校舎を完成するのに多大の労苦と月日とを要した。明治43年に大工町へ移るまでの学校の推移は校舎の建設の歴史でもある。

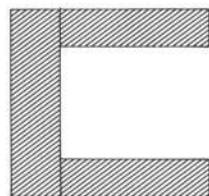
明治6年2月 大観舎の創立 旧尾州藩岐阜奉行所の建物を仮校舎として開校した。建物は平屋建である。



平屋建

明治7年4月 金華学校・伊奈波学校と改称 北舎・南舎を増築竣工した。中舎は遷喬学校（現岐阜高校）が使用した。

（中舎
遷喬学校）

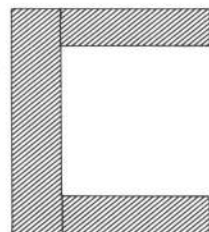


北舎（伊奈波学校・女子）2階建

南舎（金華学校・男子）2階建

明治11年7月 岐阜学校と改称 中舎を2階建に改築竣工した。それより前、明治10年5月19日遷喬学校は今泉村へ移転したので、中舎も使用することとなった。

（中舎
二階建に
改築する）

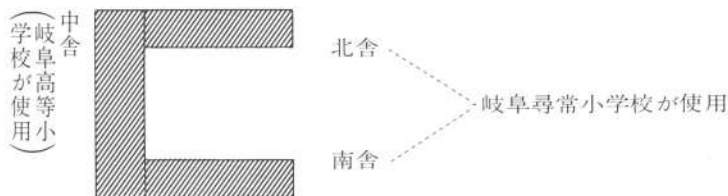


北舎

2階建3棟となる。

南舎

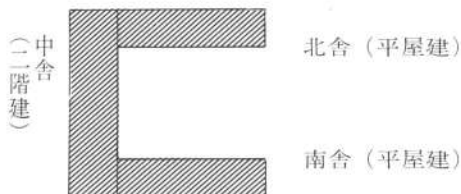
明治19年11月 岐阜尋常小学校と改称 岐阜学校は岐阜尋常小学校と岐阜高等小学校
(現京町小) とに分立した。



明治24年10月28日 濃尾震災により校舎焼失 (小熊町円龍寺を借りて授業を行う)

明治25年4月25日 北舎竣工 (平屋建5教室、間口19間・奥行4間)

明治26年9月28日 中舎・南舎竣工 中舎は2階建・南舎は平屋建である。同月岐阜
高等小学校は鶯谷へ移転し、米屋町は本校のみとなる。



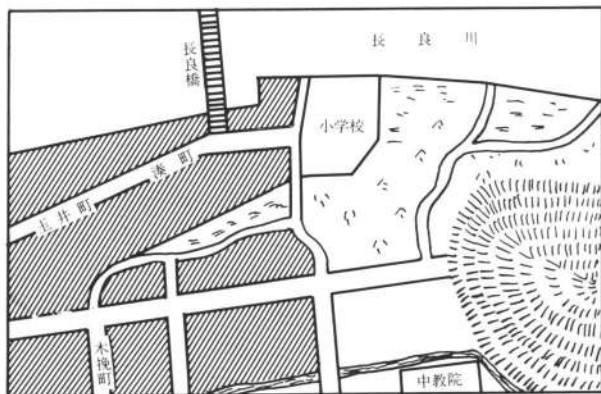
明治43年10月26日 3年以上大工町へ移転し、44年3月18日、1・2年大工町へ移転す。

岐阜尋常小学校全景
権現山より望む
明治四十二年



富茂登の学校

明治6年2月7月創立した有道義校は、明治13年富茂登学校と改称、更に明治19年、富茂登尋常小学校と改称した。富茂登と書かずに麓と卒業証書に書いていた年度もあるが、正式には富茂登と書いた。なんにしても金華山の麓にあるからフモトの学校といったのであろう。



学校付近の地図

明治22年

富茂登の校地は現在の港館の西、岐阜公園の中央から長良川へ抜ける道の東、新公園の北、長良橋南詰から今の納涼台に通ずる道の南にかこまれた区域である。その頃長良橋南詰から東へ向う道は、細い道で今の港館の東あたりでそこら一帯の竹藪の中へ消えていた。この細い道の北側はだらだらと下って長良川の河原に続き、長良の川舟が白い帆をはって川上へのぼって行くのが見えて絵のように美しい所だった。細い道の南側に面して2本の角柱の校門が立っている。校門には木製の格子扉がついていて、それが左右に開かれている。校門を南へ入ると小じんまりとした北庭である。北庭には老木はないが松の若木がまわりに立っている。北庭の西北隅には明治40年度卒業生が卒業記念に寄贈した鉄棒がある。

北庭を南へ行った突き当りが校舎の玄関である。校舎は一部2階の平屋建で東西に建っていて、校舎の東部は鍵の手に北へ出ている。校舎の東に便所がある。北へ鍵の手に出ている部分は元は別棟でしかも土台が低かったので大水のたびに水につかった。そしてとうとう明治26年8月22日の大水の時に流失してしまった。この時の大水は大変な大洪水で被害は富茂登学校だけでなく、各所に甚大な損害を与え、長良橋も忠節橋も落ちて流れ、河原の町でも3軒流失した。それからは大水の出るたびに大騒ぎをして学校を護った。

校舎の南側は一段と低くなって運動場となっていて、運動場の南も東も一面の竹藪で岐阜公園の堤や金華山の麓の林に続いていた。



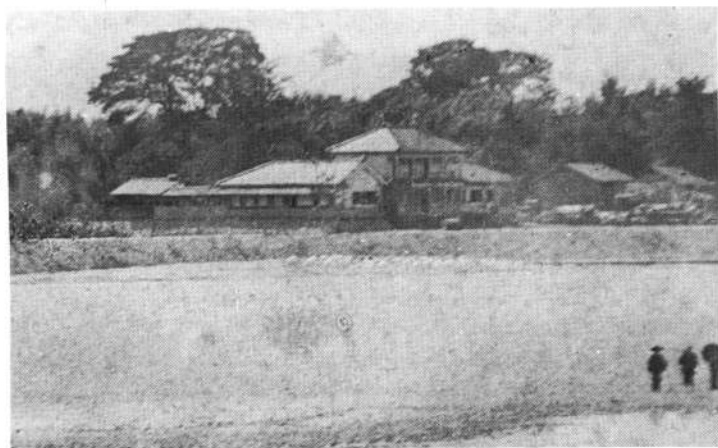
玄関の円柱やベランダ 明治36年度

校舎は当時としては珍しい洋風で、北向きの玄関にはギリシャの神殿を思わせる丸柱が5本ずらりと並んでいる。仰ぐとその上はベランダになって張り出していて、各所に洋風の曲線を描いた飾物がついている。丸柱もベランダも校舎の周囲の羽目板も、全部がねずみ色のペンキで美しく塗ってある。

丸柱の間をくぐりぬけて玄関に入る。玄関の突き当りは職員室で、職員室の東・西には教室が並んでいる。又玄関から2

階へ通ずる階段を昇ると音楽室である。音楽室は校下の寄り合いなどにも利用された。校舎の南や北の窓にはガラス戸があって、南窓だけはガラス戸の外に左右に開く錠戸がついている。これは台風の時などの強風に備えたり、直射日光を防ぐカーテンの代用もしていた。

このような洋風の校舎が何時建てられたか不明であるが、明治24年の濃尾地震にはどの家も倒れたので、おそらくそれ以後に建てられたのであろう。それにしても富茂登の校舎は小規模ながら素晴らしいもので、玄関の丸柱・ベランダ・その飾物・窓の錠戸・校舎のペンキ塗りなど、この頃の時代の尖端をいく最もモダンな洋式の学校建築である。ここに校下の中心であった河原や今町あたりの豪商たちが富茂登の学校を支えてきた心意気が伺えるようである。富茂登小学校が岐阜尋常小学校に合併した後、この校舎は鶯谷に移され商工会議所となり、その後こわされてしまって、今は昔を偲ぶ術もない。



富茂登の校舎
長良川からの全景
明治三十年頃

岐阜学校の頃

私は長良の生れで、長良の小学校で初等科（4ヶ年）を13歳の時に終って、岐阜学校の高等科（2ヶ年）に入り、明治18年15歳の時に卒業しました。

私の通った岐阜学校の校舎には、大きな昔風の玄関がついていましたし、庭には松や椎の大木が生えていました。この頃の岐阜学校へは岐阜県内からきた子たちで、私の組では岐阜市から3人、各郡市から9人、計12人の男坊主ばかりでした。

岐阜学校高等科で教えてもらった教科は、修身・読書・習字・算術・体操・地理・歴史・図画・代数・幾何でした。

教えてもらう内容は、とてもむずかしく、それぞれ専門の先生についてならったのです。読書ではよめるようになる、本のその所に紙をはり、わからないようにして、その本をもってそらで読んだものです。

地理では、どこにそんな国があろうとなかろうと、「地球上にはアジア洲、ヨーロッパ洲、アフリカ洲、北アメリカ洲、南アメリカ洲、太平洋の六つの大陸があって……」というようになんでもそらあんきたものです。

代数や幾何もやったものです。今のようにわかりやすく教えてもらえんのでよかったものです。

習字は帳面はずしをもっていって、それにべたべたまっ黒になるまでけいこをして書き、まっ黒になるとそれを太陽で乾かして、又まっ黒な紙の上に書いてけいこをしたものです。先生のおいでにならない時は、まだ書いてけいこができるのにべたべた塗ってしまい、乾かして貝の背中紙の上をなぜ、誰れがピカ・ピカになったかくらべっこをしたものです。昔でもなかなかいたずらをしたものです。

図画は今のような写生が全然ありませんでした。もっぱら用器画といって、コンパスや定規を使って、いろいろな図形を描きました。又透視画というようなものもかきました。教科の内容で図画ほど今と変っているものはありませんでした。

体操の時は、今のような洋服は着とらんのでみんな着物で困ったものでした。子どもは木綿の紺緋が立縞の着物に、袴をはいて登校しました。それで体操の時は袂が邪魔になるので、たすきをかけてやりました。そのうち先生の考案で、肩あげの下わからないところにボタンをつけ、それを袂の先にひっかけるようにしました。たすき

がいらなくて、便利なものだと喜んだものです。体操は大てい竹の棒をもったりしておどったもので、今から思えばおかしなものです。



この頃の服装 岐阜尋常小学校卒業生 明治23年度

授業は本当にきびしいものでした。先生は始終手に竹の根節をもって、一寸でも他所見をしているとピシャン、話をしたといってピシャンと

やられたものです。わるさをすると、時には立って腰掛けを持ち、その上に水がいっぱい入った茶碗をのせて、一寸でも茶碗の水がこぼれると又叱られたものです。又遅刻すると入口の廊下で30分も1時間も立たされたものです。当時は今のような口先だけの訓戒ではなく、本当に体罰でした。

試験はなかなかきびしく、そらんじた事を一語でもぬかすと点がもらえませんでした。そして点がとれない時は、どんどん落第したものです。

又年に一回位は、同じ学校の先生では本当の成績がわからんというので、近くの学校の先生がきて校長先生とで試験をやられました。この時は生徒はそうびくびくしなかったのですが、もし生徒の出来がわるいと先生の教え方がわるいという事になるので、この時ばかりは受持ちの先生の方がこちこちになってみえました。

私の受持ちの先生は矢島町の亀甲屋という菓子屋の息子で寺沢という方でした。寺沢先生は「五等訓導だ」といってなかなかいばってみえました。五等訓導というのは、校長・教頭という順に五等というのがあったそうです。

岐阜学校を出てから、私は師範学校を卒え、なつかしの母校へ教師として明治26年11月1日赴任しました。この頃は校名も岐阜尋常小学校とかわっていて、私たちの時のように決まった人だけでなく、一般の人の子も入っていました。

この頃は学区制にはなっていたのですが、岐阜尋常は質がよい学校だというので、他所から寄留して入っている子もいました。

それから私は、足かけ18年岐阜尋常小学校に勤め、明治43年8月9日退職したのでした。

金華80年誌より旧職員 正木義愛談

濃尾震災

10月28日 水曜日 雨後晴 午後疾風 (学校日誌より稲垣鈴吉校長記の訳)

前日より曇っていた空から雨が降りだし、東の空が次第に明るくなってきた午前6時37分大地震がおきた。激しく大きな上下動・水平動が1分38秒も続いた。そのため殆んどの家屋や塀は倒れ、樹木は傾き地面には大きな地割れができた。地震のおきた時刻には人々はまだ殆んど寝ていて、地震で驚いて戸外へ出ようとしたが震動のため立つことができず、はって難をのがれた。しかし倒れた家屋等の下敷きとなって、命を落した者、負傷した者は数しれぬ程であった。その中で哀れをとどめたのは下敷きとなって出るに不出られず助けを呼ぶ声、親兄弟など肉親の安否を探し求めて泣き叫ぶ声であった。この世の地獄とはこのようなことをいうのであろうか。地鳴りと震動とはその間も容赦なく襲ってくる。

そのうちに車町(今の本町6丁目)の辺からドッと火の手が揚がった。人々は地震におびえ、肉親を探し、家財を運びだすのに精いっぱい、火を消すどころではなかった。火災は北西風によって東へ南へと燃え広がった。午前中降っていた雨はあがったが、午後になると北西の強い風が吹きだし、火勢を更に強めて吹きまくった。火炎はみるみる拡がり全く手がつけられない状態となった。

学校へ駆けつけた稲垣校長・朝田幹事・土本・辻・渡辺訓導・栗田・宮部小使等が黒煙と震動の続く中で必死になって、舎内から書類や備品を運動場へ運び出した。火は本校並びに岐阜高等小学校の校舎に達し物凄い勢で燃えだした。運動場には学校が運び出した物と、広くて安全と思って市民が運び入れた家財道具でいっぱいだった。飛び火は運動場の荷物に燃え移り、一面の火原となって悉く燃えてしまった。かくし

てそれまで偉容を誇っていた校舎はなく折角運動場へ運び出した重要書類や備品もすべて灰燼に帰してしまった。

しかし聖上陛下・皇后陛下のご真影(岐阜高等小学校所蔵)は稲垣校長が、教育勅語は辻訓導がお護りしてお移してきたのは不幸中の幸いであった。本校職員の家で全焼した者が2名、半壊の者が4名、その他はすべて全壊であったが、死傷者は1人もなかった。生徒の死者7名、負傷者1名であった。



濃尾震災

伊奈波通り

10月29日 木曜日 晴天 震動は続いてやまない。

前日来の大火は四方に延焼して、午前10時になってようやく鎮火した。しかし土蔵の中は猶も燃えていて夜中になっても赤々と近くの道を照らしていた。

10月30日 金曜日 晴天 震動続く。

本校の全職員が稲葉社務所に集って学校の善後策を協議した。しかし不参加者が若干あったので再会を約して解散した。

10月31日 土曜日 晴天 震動続く。

午後1時より職員が稲葉に集合して、次の通りに決めた。

1. 西御坊を借り受けて仮校舎とする。 1. 職員の希望者に1週間の帰省を許す。

1. この機に市内一校論を主張する。 1. 職員一同は市内公共の事業を助ける。

市役所より救民のためのたきだしを始めたので、職員は公園・師範学校・濃陽館の3ヶ所へ出張して分配方に従事した。

11月1日 日曜日 晴天 震動続く。

本校構内に境杭を打ち縄張りをした。本校の仮事務所を稲葉社務所とした。

11月2日 月曜日 晴天

この日より震動回数が少くなり、1日に数回、2日おき位に強震があった。12月になると回数も更に少くなり弱震となった。それでも翌年2月末日までは1日に2～3回位の地震があった。

11月7日 本日より職員は3日目毎に施与する施米所へ行ってこれを助けた。

12月1日 火曜日 晴天 当日の内、小熊町円龍寺を借り受け仮授業を行う。

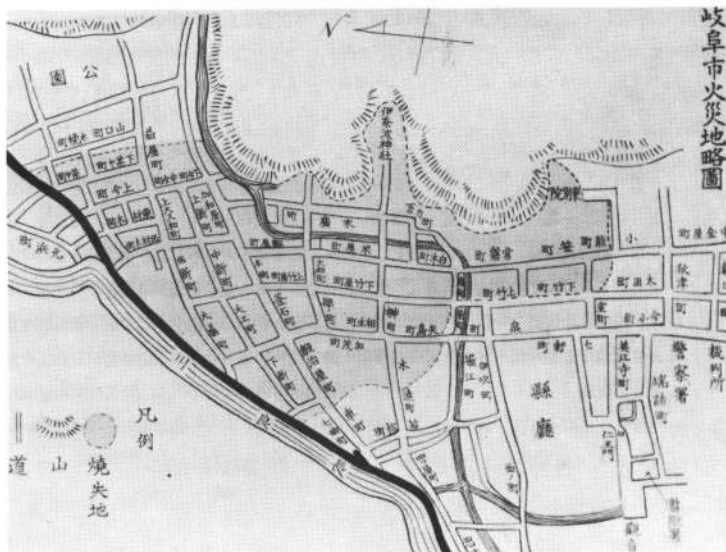
1. 当分生徒は器具を要せず。

1. 1・2年生は午前3時間、3・4年生は午後3時間とす。

1. 仮校中といえども奮って就学すべき旨を一般に通報する。

1. 当分は読書・算数・作文・修身とするが作文・修身は交互に授ける。習字は自宅自習とする

濃尾震災の焼失区域 岐阜市火災地略図



学 校 復 興

明治24年10月28日突如として起った濃尾地震と火災は瞬時に岐阜の町を焼土と化した。しかもその後、地鳴りと震動は絶え間なく続き、それにおびえながら人人は住むに家なく食うに食なく怪我し傷つき茫然としていた。その中において稲垣校長並びに職員は1日も早く学校を再開しようと、市内の傾きこわれた寺々を廻り仮校舎とする建物を探したり、借用方を寺院にお願いして歩いた。又生徒用机・腰掛がないので、坐って授業を受けられるよう机の代用とする寺院用飯台を借りるため、遠くの高富村の寺までお願いしたり市内の寺々の間を奔走して集めた。



濃尾震災 岐阜市七曲（今の本町6丁目）

かくして仮校舎は小熊町円龍寺、授業再開は明治24年12月1日と決めた。次は生徒集めである。焼け出されて生徒はどこにいるかもわからぬので、先づ辻々に掲示をし全職員が手分けして一々生徒の居所を探し求めて就学の勧告をして歩いた。かくして12月1日は来た。集まった生徒は男子316名、女子201名、計517名の多数にのぼり、全職員が市内をかけずり廻って施設を整え生徒をあつめた甲斐があった。仮校舎の円龍寺の本堂は生徒が坐るといっばいになった。

明治24年11月12日、市役所の命により仮校舎並びに教場・教具の設備予算を差し出している。これによりその内状と当時の物価とを知ることができる。

	単価	数量
生徒用の机・腰掛	1円30銭	200
黒板	3円	10
事務用机	1円50銭	10
事務用本箱	75銭	10
大火鉢	1円	12
小火鉢	30銭	3
小使室勝手道具	95円	
教科書	95円	
仮校舎（但板屋）	坪95円	171坪

生徒数は生活が落ち着くにつれて次第に増加し、12月末の在籍生徒数は834名、日々平均出席者数522名にも達した。従って円龍寺の本堂は生徒であふれ、膝と膝とがくっつき、肩と肩とがふれあうほどであった。しかし生徒は教科書も学習道具もなく手ぶらで登校し、黒板も教具もなくただ教師の話を聞いて帰るだけであった。これでは到底教育の効果をあげることはできない。

そこで明治24年11月26日、生徒並びに教師用書籍の寄贈方を東京の本屋（博文館・敬業社・東京市普及舎）に頼み、11月27日生徒の学習用具購求のための義捐金募集の文書を本県出身者へ出した。更に稲垣校長は堀口市助役と協議して、12月17日仮校舎新築金募集の文書を縁故者へ出した。

この義捐物資及び義捐金募集によって、日本全国各地から物資や金が続々と集まってきた。その中で主な義捐物資は書籍32冊（金港堂）374冊（東京の博文館）11冊（東京の敬業社）15冊（東京の集英堂）200冊（東京の文学社）習字帳21冊（東京の西田伝助）5冊（東京の目黒十郎）等で、学習用具として筆800本（京都の鳩居堂）石盤200枚（静岡県小学校職員）等である。

義捐金は生徒用器具並びに校舎新築費として、最高536円92銭1厘（徳川侯爵）を始め78円（基督教徒救済所）の高額や個人では20円・2円・1円・20銭と多数の方々から浄財を寄せていただいた。それらの方々は市内や県内は勿論、遠く東京・横浜・名古屋などからであった。又学校関係では県下の先生方を始め、静岡師範・山形師範・高等師範・女子高等師範の先生並びに学生の方々であった。おそれおおくも恩賜金もいただき、義捐金の総額は806円79銭4厘にも達した。

この義捐金によって読本736冊、石盤730個（単価2銭5厘…石筆を含む）硯700個、墨、算盤等を購入して生徒に与えた。又教授用大算盤2個も整えることができたのである。震災後の苦境のどん底にあった本校を、このように暖かく救って下さった方があったことを永久に忘れてはならない。

しかし試練は大震災だけではなく、次々と襲ってきた。明治25年4月1日夜、大風が吹いて仮校舎が倒壊してしまった。しかしそれにもひるまず明治25年4月25日北舎1棟を完成し、長い円龍寺の仮住居からなつかしい米屋町へ移った。

新校舎は間口19間、奥行4間、5教室であるから、狭く窮屈であったが自分たちの校舎が持てたという喜びは大きかった。同年5月25日から8時始業・2時半終業の5時間授業とした。やれ落ちついたと思うと次の試練がやってきた。明治25年9月13日暴風が吹き校舎南側の廊下屋根が北側の民家へ吹き飛んだ。そこで18日まで休業し修理を完成し、19日から平常に復した。

一方増築工事を急ぎ、明治26年3月1日、中舎・南舎の計232坪5合の地場工事を、131円50銭で古沢仁蔵が落札し、同月8日工事に着手した。次いで明治26年3月27日、中舎・南舎の校舎建築を3387円で篠田治七が落札し、明治26年9月28日竣工した。同月30日、12学級に編成かえし、ここに授業は完全に実施されることとなった。

御影奉戴式並校舎落成式

— 稲 垣 知 剛 —

明治24年10月28日の濃尾震災後は先ず授業再開に駆け廻り、次いで校舎再建に努力し、明治25年4月25日北舎が竣工、明治26年9月28日、中舎・南舎が完成した。

ついで明治26年12月27日、校門が完成、明治27年1月15日、校地の周囲の土居・垣柵の建設に着手してこれを完成し、ここに校地・校舎は全く整った。

又一方、御影並びに勅語は震災当日お移したままになっていて学校にはなかった。従ってその後の祝日は式をとりやめたり、行うようになっても質素を旨とし、できるだけ儉約して慶賀の式だけにとどめていた。しかし校地・校舎は前にもまして立派に完成し、御影も市より奉戴することになったので明治27年2月12日の紀元節の佳き日に本校としては未曾有の盛大な御影奉戴並びに校舎落成式を挙行した。その模様を学校日誌から拾って下記に記す。(2月11日は雨天のため2月12日に実施した)

明治27年2月12日 月曜日 晴天 (学校日誌より一稲垣知剛(旧名鈴吉)校長記)

○奉迎の順序

本校より生徒を2列になし1年生・2年生・3年生・4年生の順に男女を区別し制服を着したるもの2人真先に校旗を建て次に2人の嗽呟手、次に校長次に校下父兄職員、次に生徒700名徒歩して市役所に至り御影を奉迎す。

1. 午前8時半点鐘 生徒一同運動場に整列の上出發す。
1. 市役所門前に南北に4列に整列せしむ。
1. 御影御出門の時、嗽呟手吹奏歌 君が代。
1. 生徒一同兩陛下の万歳を三唱す、水谷訓導音頭をなす。

御影奉迎の途次は左の如し、

- | | | |
|------------|--------------|----------|
| 1. 校旗2流 2名 | 1. 警官 3名 | 1. 御輿 |
| 1. 嗽呟手 2名 | 1. 校長騎馬にて御先導 | 1. 職員・生徒 |

○式場の順

- | | | |
|--------------|-------------|---------------|
| 1. 午前10時点鐘整列 | 1. 職員一同参拝 | 1. 市内小学校長総代祝詞 |
| 1. 職員・生徒入場 | 1. 来賓及生徒最敬礼 | 1. 区民総代の祝詞 |
| 1. 来賓入場 | 1. 唱歌 君が代 | 1. 建築委員の祝詞 |
| 1. 校長挨拶 | 1. 校長勅語奉読 | 1. 校長の答辞 |
| 1. 一同起立 | 1. 市長の告辞 | 1. 職員総代の祝詞 |
| 1. 開扉 | 1. 知事の演説 | 1. 男生徒総代の祝詞 |
| 1. 校長御影に最敬礼 | 1. 師範中学校長祝詞 | 1. 女生徒総代の祝詞 |

- | | | |
|---------------|----------|------------|
| 1. 生徒参拝 | 1. 一同最敬礼 | 1. 来賓退場 |
| 1. 唱歌 奉戴式・落成式 | 1. 閉扉 | 1. 職員・生徒退場 |

本日の来賓は知事・書記官・警部長・労務課長・師範中学校職員一同・市内小学校職員一同・市会議員・区会議員・区長・区長代理者・町代・震災の際本校へ義捐したる者・市長・市書記・建築請負者、その他本校に関係ある者300名を招待す。午後2時式全く了り来賓を饗応するには4室の楼上に生花・軸物を装飾し立食の体に机を配置し焼香水を薫し折詰及菓子を供し酒を饗す。師範生徒には鯛及冷酒を饗応す。生徒には紅白に祝字を印したる梅菊形の菓子2個づつと割鯛及酒を饗す。本校職員及職員30余名（区会議員・区長・区長代理者）生徒は胸に毛糸の徽章を附し他校員と区別す。

此の日の余興には熱田より舞楽を招き遊歩場に台を築きて茲に舞わしめ舎内には生徒造物3室、教育品室、生花室を設けて来賓に縦覧せしめたり。夜は長良村真福寺の寄付になりたる烟火数百本を打揚げ、遊歩場には餅棚八十を架く。尽く寄付になる。其他各国旗と紅燈とを吊るし、樹木には花を付し、花門二つを立つ。校下各戸は国旗を掲げ、又紅燈を吊るし造物神楽土あり。消防夫二百余名は校前に列して非常を戒めたり。夜間の見物人幾万たるを知らず。

翌13日は舎内一般を衆人の縦覧に供せり。早朝より縦覧のため来るもの幾千人たるを知らず。各学校生徒を教員引率し来りて見る。

右につき校下及区外有志の物品を寄付するもの多く来賓の菓子・生花の如きものはなり。右費用181円19銭4厘にして校下にて負担す。

記念写真

明治26年



前列中央が本校校長稲垣知剛、その向って右が堀口市長、横山校長中尾校長である。稲垣校長より向って左が学務委員南谷・加藤・青木である。第2列中央が矢島校長その向って左が水谷校長である。第3列、向って右から3人目が正木義愛先生である。

この頃の運動会

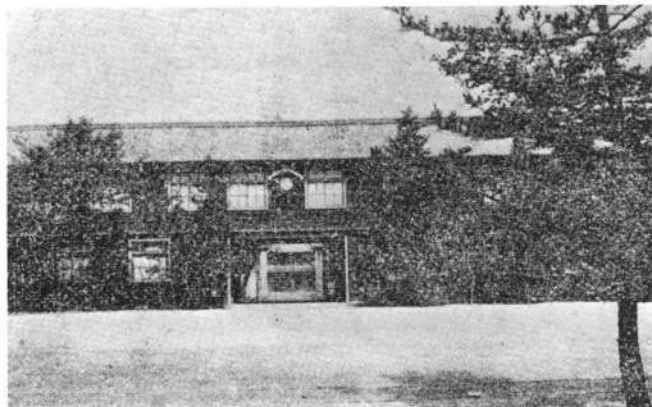
受持ちの先生は1年生から卒業する4年生までずっと堀晃先生でした。先生はそれは優しい方で大きな声を出されず物静かで、お叱りになるような事ありませんでした。

半鐘がカン・カンとなると授業が始まります。修身・読書・習字・算術・体操・唱歌を教えてもらいました。習字はみんな力を入れたもので、字を一生懸命かいたものです。唱歌でいろんな歌をなりましたが、日清戦争のあとなので軍歌を教えてもらって、力んでうたったのです。

こずかいは毎日5厘位もらいました。この頃、お金は1厘・2厘・5厘・1銭などとあって、葉書が1銭・封書が2銭の頃でしたから、毎日こずかいを5厘もらうのは上等でした。私は甘いものが好きで菓子を買って食べたり、又貯金もしました。

この頃、伊奈波通は今より狭い道で、米屋町との交差点の東北角に岐阜貯蓄銀行があって、その北隣りに米屋町に面して勧工場がありました。間口30米位もある大きな店で、中は今の百貨店のように日用品・雑貨・玩具などを売っていました。私はここでゴム毯などを買ってもらった覚えがあります。当時伊奈波は岐阜一番の盛り場で、芝居小屋など幾つもあってとても賑やかでした。今の柳ヶ瀬や岐阜駅付近は一面の田や畑などで淋しい所でした。

運動会は1年生の時（明治27年度）・3年生の時（明治29年度）は早田河原で、2年生の時（明治28年度）中学校運動場でした。そして何れも市内6小学校の連合運動会でした。



岐阜尋常小学校 運動場より西の中舎を望む 41年7月

4年生の時（明治30年度）は本校の運動場で本校だけの運動会でした。震災後初めての本格的運動会とあって、大勢の観客が詰めかけました。来賓には市長・市助役・市書記・市会議長・学務委員・区会議員・市内小学校校長並教員がおいでになり、その賑やかなことはお祭りのようでした。

明治30年10月24日午前8時点鐘ニテ開会一同君ガ代ヲ合唱ス		本校運動場ニテ	
午前 之 部	1 水持競走……………男第4学年	午後 之 部	25 変歩競走……………男第4学年
	2 同……………同		26 同……………同
	3 旗 戻……………女第4学年		27 文字書競走……………女第4学年
	4 二人三脚……………男第3学年		28 障碍物競走……………男第3学年
	5 曲取競走……………女第3学年		29 源平毬投……………女第3学年
	6 提灯競走……………男第2学年		30 フートボール……………男第2学年
	7 同……………同		31 毬 拾……………女第2学年
	8 源平毬投……………女第2学年		32 盲 旗 取……………同
	9 毬揚競走……………同		33 帽 子 奪……………男第1学年
	10 綱 引……………男第1学年		34 載のう競走……………女第1学年
	11 柿 拾……………女第1学年		35 陸上ボート……………男第4学年
	12 武装競走……………男第4学年		36 捧 脚……………同
	13 毬受競争……………女第4学年		37 毬突行進……………女第4学年
	14 擬馬戦争……………男第3学年		38 退却競走……………男第3学年
	15 旗 戻……………女第3学年		39 文字書競走……………女第3学年
	16 毬 煽……………男第2学年		40 毬 奪……………男第2学年
	17 同……………同		41 綱 引……………同
	18 毬 拾……………女第2学年		42 的 破……………女第2学年
	19 豆のう送り……………同		43 豆のう送り……………同
	20 旗 取……………男第1学年		44 綱 引……………男第3学年
	21 的 破り……………女第1学年		45 城 攻……………男3・4学年
	22 二百米競走……………男第4学年		46 軍 歌……………一同 合唱
	23 隊 列……………同		47 万歳斉唱
	24 軍 歌……………男3・4学年		48 閉 会 午後3時

明治30年度からは毎年学校の運動場で運動会が行われました。そして毎年錐の余地もない位大変な人出て賑わいました。校下の運動会に対する力の入れ方も大したもので賞品やその金額を寄付する申し出が多く、賞品が山と積まれていました。

特に明治32年10月14日の運動会には、午前7時40分に軽気球を揚げ、午前8時から開会しています。軽気球をあけてその下での運動会とは今でも想像がつかないことですが、華やかで勇ましく賑やかなものだったのです。

明治30年度 岐阜尋常小学校卒 久屋町 今井武次談

郵便切手貯金

「金華小百年」を編集している際、本校の学校日誌を丹念に調べているうちに明治33年4月24日に郵便切手貯金法を奨励し、同上台紙を各自に配布したとあるを見て、明治時代の富国強兵・勤儉節約の国策に沿ったもので、明治27・28戦役後は特にそうであろうと百年誌の主な出来事のらんに記載しておいたのである。しかし郵便切手貯金はどのようにして行われたのか又台紙はどんな物かは全く不明であった。

「金華小百年」が出版され創立百周年記念式典も盛大に済んだある日、東材木町の河合良信氏より百年誌の明治33年度に記載してある郵便切手貯金台紙が私の家にあると知らされ、驚くやら、よくもあったものだと感心するやらで早速実物を見せていただいた。

郵便切手貯金台紙は1枚の紙が2つ折になっていて、表の表紙には中央に「郵便切手貯金台紙」と書いてあって、その右に「まかぬたねははえぬ」又その左には「1粒万倍」と書いてある。バックの絵は田にもみをまき、田の草とり、脱穀、俵づめと米を作る段階である。お金も米作りと同じで少しづつでも貯めれば多額になるという意味合いであろう。表紙の裏は白紙になっているが、覚えであろうか、岐阜東材木町河合佐太郎方、河合精一殿と書いてある。河合精一という方は現在この台紙所有者の河合良信氏の父で河合佐太郎という方はその祖父である。河合精一氏は本校を明治31年3月卒業し明治33年は岐阜高等小学校3学年に在学中でこの台紙はその時の物である。

2つ折になっている台紙を左右に広げると写真の通り、右側には切手がはってある。切手が縦に4列貼ってあるが、その右2列は5厘切手で合計10枚その金額が5銭、その左2列は1銭切手で合計10枚その金額が10銭、切手20枚の総金額は15銭である。台紙の左側には郵便切手額面金拾五銭也とし、切手貯金受入日付印のスタンプが押してある。このスタンプは台紙右側の切手にも全部押してある。スタンプの日付は33年5月30日、岐阜本町郵便受取所とある。これはこの台紙に切手を全部貼って5月30日に本町郵便受取所に持参し、その金額15銭を貯金通帳に入れた訳である。

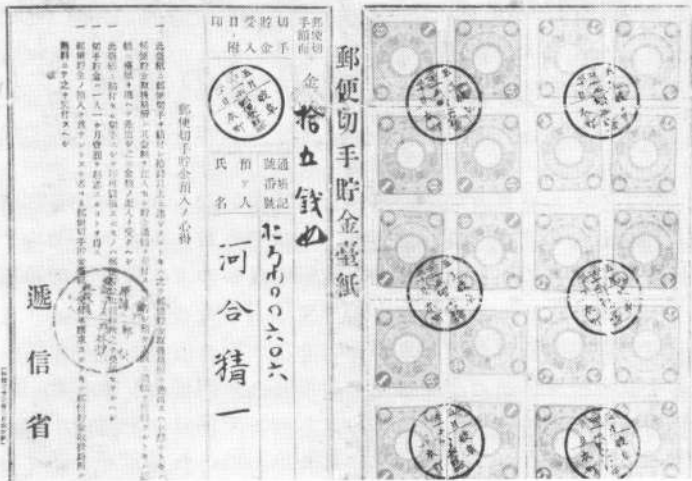


郵便切手貯金台紙

表紙

そして預け人河合精一の通帳記号番号がこの台紙の左側に記入してあって、間違いのないようにしてある。

郵便切手貯金の方は台紙の左側に詳細に明記してある。その文は下記の通りで簡潔で要を得ていて一読してその方法がわかる。



郵便切手貯金台紙の内側

郵便切手貯金預入の心得

- 1. 此台紙に郵便切手を貼付し拾銭以上に達したるときは之を郵便貯金取扱局所に差出すべし。然るときは郵便貯金取扱局所は其金額を記入せる貯金通帳を交付すべし。若し預け人既に通帳を所持するときは通帳に台紙を添へて差出し之に金額の記入を受くべし。
- 1. 此台紙に貼付せる切手にして汚損毀損するものは郵便貯金取扱局所之を受領せざるべし。
- 1. 切手貯金は1人1ヶ月1円を超過することを得ず。
- 1. 郵便貯金の預入を為さんとする者より郵便切手貯金台紙の交付を請求するときは郵便貯金取扱局所は無料にて之を交付すべし。



当時の服装 岐阜尋常小学校卒業生 明治33年度

この台紙は本校が明治33年4月24日に生徒に配布したものと同じである。当時子どものこづかいが5厘・1銭であったが、その零細な金をむだ使せず貯蓄するよう奨めたのである。

長良川の川舟

よく人から「貴方は明治時代の小学校に通ったんだから、きびしかったですよ」と尋ねられますが、富茂登の学校は組の人数も少なかったので家庭的でやさしく親身になって教えてもらいました。教科書はみんな木版刷りの和綴で、読み方の本なんか「ハ。ハト。マメ………」と大声で読んだものです。

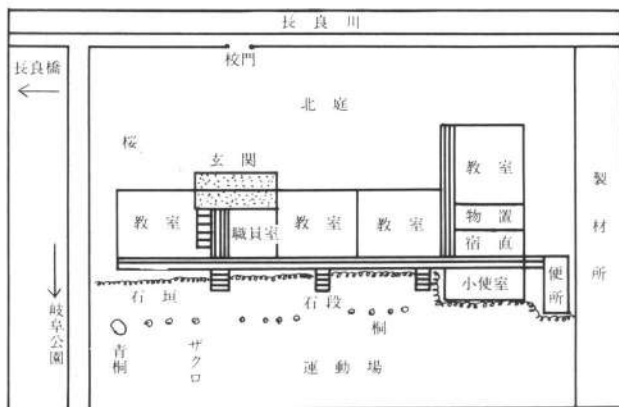
富茂登の学校は今の長良橋南詰を東へ行くと南へ岐阜公園へ抜けるT字路がありますが、そのT字路と今度建った白雲荘との間にありました。校舎は東西に建っていて東端は鍵の手に北へ少し出ていました。大部分が平屋ですが、東西校舎の中央部分だけが二階建になっていて、北に張り出しのベランダがついていました。校舎の南ふちは石垣になっていて、その南の運動場より1米以上も高くなっていました。今電々公社の宿泊所がT字路から少し南へ行った東側にあります。その宿泊所の北辺から北は急に高くなっていますが、ここに石垣があって石垣の上に校舎の南ふちがあったのです。校舎の中は南側に西から東まで廊下があって、その廊下の北側に西から順に教室・二階の音楽室へ昇る階段・職員室・教室・教室・教室と並んでいました。職員室の東の2教室はつづけて式場になりました。一番東の教室は北へ少し張り出し、廊下との間に物置や宿直室があったようです。校舎の東南部は少し南へ出ていて、ここに小使室があり、校舎の東に便所がありました。長良川の方は中央に校門がありました。校門は2本の角柱でその間に観音開きの木の格子扉がついていました。ここから入ると北庭で、その南はベランダの下が玄関です。玄関から入るのですが、子どもは南の運動場から石段をのぼって

廊下で履物をはきかえて教室に入りました。

北庭の西南隅には桜の若木があり、運動場の西北隅には一かかえ以上もある青桐の大木がありました。広い運動場の南や東は一面の藪でした。又学校の東隣りは製材所で木をきる鋸の景気いい音が勉強のあい間にきこえてにぎやかでした。

富茂登学校図

松井さんに聞いてかいたもの



長良川の川舟

子どもの頃、長良川を川舟が桑名からのぼってきました。瀬のところは流れが急で帆だけでは押し流されてしまいますから船頭さんが2人綱をつけて川岸で船をひっぱります。もう1人の船頭さんは船の上で舵をとります。3人の船頭さんが力を合わせて船に乗せた荷物を運んでくるのです。荷物は紙の原料の雁皮・三椏・楮です。

私の家は紙の原料を取引きしていました。紙の原料は全国各地から買うのですが、当時は島根県や高知県・栃木県・長野県・和歌山県が多かったのです。汽車がつくまでは桑名から川舟で岐阜まで運んだのですが、汽車が岐阜を通るようになってからは汽車でくるのが多くなりました。岐阜駅で荷をおろして馬車に乗せてくるのです。それでも私の小学校の頃、桑名からの川舟もまだまだありました。荷は雁皮が主で和歌山からの物が多かったようです。川舟は玉井町や元浜町などの川岸につけて荷を倉庫へ運び入れます。船頭さんは殆んど長良の人で、頑丈な体つきで赤銅色の肌をしていました。倉庫へ運び入れた紙の原料は美濃町辺の紙すきに売られて、馬車で運ばれていきました。

子どもの頃、郵便船があって乗ったことが三度程あります。美濃町を朝8時に出て岐阜へ下って、十八楼の少し川下の松井運送店の裏の川岸に着きます。午後2時に岐阜をたつて美濃町へ夕方に着きます。美濃町から岐阜へ1日1往復という定期便で美濃町の遠藤運送店が経営していました。郵便を運ぶためのものですから人も乗せてもらえて、まだ電車のない時ですから結構繁昌していました。大人片道20銭位でしたが景色のよい長良川を上り下りするのでお客も案外多く7人位は乗っていて、おしゃべりしたり、景色を見たり、賑やかでのんびりしたものでした。

川上からは筏が下ってきます。幾つも幾つもつないで2・3人の筏師がそれをあやつり、流れの急な長良川を下ってくるのです。見ていても胸のすくような眺めです。筏は丹羽さんや桑原さんの裏岸につながれますが、どうやらすると向う岸まで川幅いっぱいには筏がたまることがあります。そんな時は筏をつたって向う岸まで行けるので子どもは大喜びでその上で遊びました。特に夏は筏に乗ったり泳いだり魚をとったり、そこは子どもの天国でした。

子どもの頃、鵜飼見物の屋形船が5・6隻ありました。商用できたお客を地元の者が案内していたようで、遊船事務所も木造のが今の所がありました。

明治37年度 富茂登尋常小学校卒 今町1 松井三郎談



長良川の川船

お 習 字

私の家は元浜町で代々雑貨商を営んでいました。私の幼い頃、まわりの家は紙屋ばかりで皆盛大にやってみえました。私が1年生の頃は長良橋に近い上（かみ）の町から上級生の方が下（しも）の町の私の家まで連れに来て下さいました。数人でにぎやかに登校したものです。私が上級生になると反対に小さい子をさそってみんな仲よく学校へ通いました。その頃は自動車も通らず静かでのんびりした時代でした。

富茂登の校舎はペンキ塗りの小じんまりした美しい建物でした。学校へ着くと鞆を教室に置いて南の運動場で遊んでいました。運動場といっても名前ばかりの狭いものです。やがて小使さんが小使室の前に吊ってある半鐘をカーン、カーンとたたきます。始業の合図です。小使室は校舎の東端にあつて運動場と面したところに半鐘が吊ってあるので小使さんが半鐘をたたくのが運動場からよく見えます。1年生の頃は物珍しく小使さんが半鐘をたたくのをあかずに見ていたものです。鐘の音が金華山の林立の間に消えていくと全校朝礼です。校長先生のお話など聞いて、東に向つて天皇陛下に最敬礼をします。年中雨の降らないかぎり毎朝全校朝礼をしました。そして深々と頭を下げた最敬礼だけをよく覚えています。

それから教室に入って勉強です。修身・国語・算術・体操などを教えてもらったように思います。受持ちの先生は1年生の時が野原先生、2年生の時から奥村徳三郎先生でしたが、4年生になって奥村先生は故郷の可児郡へお帰りになったので、その後を森崎先生に教えてもらいました。この頃は4年で卒業でした。校長先生は矢島圭二先生で、校長先生はえらい人という事ですから幼い私たちにとってはこわくてこわくてなりません。校長先生は受持ちの組はなかったので、受持ちの先生が学校をお休みになった時など代りに教えに来て下さいました。私が1年生の時、校長先生に教えてもらった事があります。お習字の時間で「ナツ」と習っていました。私の机のそばへ廻つてこられた校長先生は私の白紙に、ご自分の右手の親指の爪で「ナツ」と書いて下さいました。私は感激して筆に墨をたっぷりふくませて、校長先生の爪のあとをなぞって「ナツ」と書きました。今もその「ナツ」は大切に保存していて時々出して見ては采だかすかに残る校長先生の爪のあとを見て矢島校長先生を偲んでいます。富茂登は職員の数が少なかったのでしょうか校長先生も宿直をしてみえました。私が卒業してしばらくたった明治39年2月14日午後5時、矢島校長先生は宿直中に職員室の自分のお机で事務をとっていてそのままうつぶせになって頓死されました。米屋町の岐阜尋常からは知らせをきいて加藤良次郎校長先生や久世五百太郎先生がかけつけられました。葬儀は2月16日午後2時より自宅で盛大に行われました。

私は習字が大好きでした。今も小学校の頃書いた習字を全部大切にしまっています。虫干しをかねて天気の良い日に出しては見ていますが、なつかしきでいっぱいです。1年生の時の片仮名、2年生の時の平仮名それに漢字、3年以上になると漢字も字数がぐんとふえて8字、10字となります。1年生のは左がわに名前を書くとその上に甲、乙と朱で先生がお書きになって先生の認印が野原と赤く押ししてあります。2年生以上は第何回、何月何日尋常科第3学年西松さんと書くとその上に九点とか十点と点を朱で入れて、先生の認印が奥村と赤く押ししてあります。清書する度に第何回がふえていくわけで第25回というのがありますが、年間25回お清書を学校で書いたということです。奥村先生はそれはそれは堅い先生でこんな所にも先生の人柄がにじみ出ています。清書は左側の点数の外に、何時もよりよくできると右側に「進歩」すぐれていると、「優等」の角印が朱で押され、更にその下に「やじま」と校長先生の認印が朱で押されます。特に「優等」は教室の廊下にはってもらえるのでみんな競争で心をこめて一生懸命書いたものです。

服装

学校へ行く時は肩から斜めに鞆やぞうり袋を掛け、手に毛糸で編んだ丸い袋をさげました。毛糸の袋の中には丸い形の木の弁当箱を入れたのです。弁当箱は茶色に塗ってあって可愛いものでした。ぞうり袋の中にはあき裏ぞうりが入っていて、学校へ着くとはいてきた下駄を下駄箱へ入れて、持ってきたぞうりにはきかえたのです。私はいつも下駄をはいていましたが、友達の方がいつも日より下駄をはいてみえますのでお尋ねすると「下駄は歯がかえれませんが日より下駄は歯がかえれますので値うちです」と答えられましたので、成る程の思い私も日より下駄をはこうかと思いましたが、ついに足になじめずはきませんでした。髪は桃割れにゆいました。お友達が

当時の服装

富茂登尋常小学校卒業生 明治37年度



明治37年度

富茂登尋常小学校卒業
元浜町

西松さん談

伊奈波の桜

遠足の時は全校の子どもが運動場に整列して、いつも閉じてある末広町側の裏門から一斉に「春の野の小草ふみわけて……」と歌いながら隊列を組んで威風堂々出発しました。運動会は走るのが主でしたが、オルガンを中心に円を作って「ひらいた」や「小さき砂の一粒も積れば富士の山となる…」をうたった遊戯もありました。運動会の人気番組「城攻」は3・4年男子が東西両軍に分かれて、先ず騎馬戦で帽子とりを行い、最後に突撃して敵の本拠にある綱を引いてパンと音が早くした方が勝ちです。これは綱を引くと薬品が入り交って爆発する仕掛けになっていて、それで事故があったとかで2年生の時から「城攻」はなくなり、3年生の時から運動会そのものもなくなりました。それは日露戦争で何事も儉約ということでした。その代り郊外へよく出かけました。

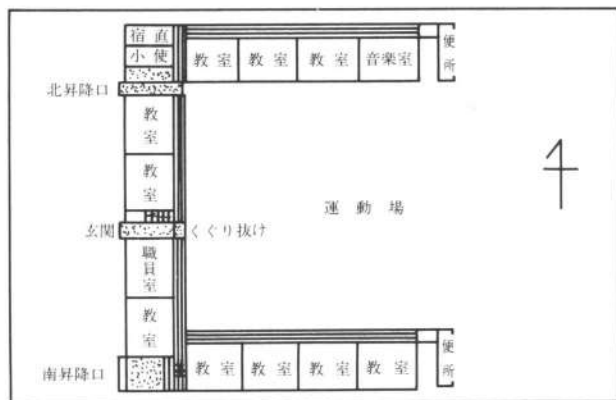
米屋町の校舎は堂々として立派なものでした。米屋町から橋を渡り、校門をくぐると2階建の中舎の玄関です。この玄関は下に煉瓦が敷きつめてあるくぐりぬけで運動場へ出られます。玄関の北は2階へ登る階段があって、階段下は体育倉庫になっていました。階段の北は教室で、その北は北昇降口です。

その北は北舎の西端にあたり、小使室があって夫婦者の小使さんが住みこんでいました。小使さんは何でも士族の出とかで頑固な方でした。小使室の東は教室が並んでいて、その東は音楽室でした。北舎の東の外に北便所がありました。

中舎の玄関の南に職員室や教室があって、その南の南昇降口には大きな庇が西へ出ていました。南昇降口から2階へ通ずる階段がありました。

南昇降口の裏は南舎の各教室が並んでいて、儀式の時は境の戸をはずして式場となりました。南舎の東には南便所があって、その南に梅の老木がありました。低学年は階下ですが、最上級生の4年生は中舎の2階を北から1部2部と使いました。

岐阜尋常小学校図 鷲見さんに聞いて書いたもの





今の伊奈波 建物は昔の岐阜貯蓄銀行
移転したのです。米や生糸を売った買ったといった一獲千金の夢の跡が、今は子ども
の壮志を育てる場所となったのですから不思議なものです。

伊奈波の桜

私が小学生の頃は伊奈波は岐阜市の政治・経済の中心であり又岐阜一番の歓楽街でもありました。岐阜市役所は今の白木町小公園から県営アパートにかけてあり、十六銀行本店は今の竹屋町支店でした。末広町から伊奈波にかけて料亭や芸妓置屋があって末広座や国貴座には歌舞伎がかりました。伊奈波通りと米屋町の4つ角の東北に勧工場があって小間物・雑貨・化粧品・玩具などを売っていて、いつも繁昌していましたし、その2階は寄席になっていて落語や講談で観客を笑わかしていました。夏の夜は今の伊奈波の忠魂碑（明治43年竣工）のあたりで愛宕神社の祭礼だというので仕掛け花火をやったり、前の広場の仮設ステージでは毎晩々々「チョンガレ」をやって見物客を沸かせていました。「チョンガレ」は後に浪花節と云われるようになったものです。伊奈波の広場や伊奈波通には夜店も出て夏の夕涼みは賑やかなものでした。岐阜祭にはいつも伊奈波の広場に小屋をたてて活動写真がきました。風景ばかりで劇はありませんでした。国豊座でも時々活動写真を見せました。ロンドンのテムズ河・ロンドンの大火・英国貴族の鹿狩り・西洋美人などでした。年中万力町の朝は早くから威勢のよい男たちの声で明けます。ここは岐阜市の台所を賄う魚市場があって元気な兄さんたちの働き場だったのです。しかしこの頃既に七軒町辺に県庁、裁判所（今の市役所）警察署（今の市役所）郵便局（今の岐阜信用金庫美江寺支店）勧工場（2階は寄席）があって市の中心は南へ移りつつあったのです。

濃尾震災前には伊奈波通りに桜並木があったそうですが私の子どもの頃は道幅が2間足らずの狭い小路で賑やかなものでした。大正元年道幅を8間に拡張し、桜並木を植え、伊奈波の桜として有名で特に雪洞に浮かび出る夜桜見物には大勢の人が押し寄せました。今はその桜に変わって柳が細い小枝を垂れ、今昔の感にうたれます。

明治37年度 岐阜尋常小学校卒 松屋町 鷺見吉兵衛談

護持舎と今の校地

お経を習いに護持舎へ通いました。護持舎は今の学校の銀杏のところにあった寺で、寺というより説教所のようなものでした。西本願寺のお経を習ったのですから、その宗派だったのでしょうか。今の金華小の所には米糸取引所（通称のべ場）があって人の出入りも多く賑やかなところでした。私が子どもの頃に米糸取引所が3番町へ引越して長い間草が生え荒れていましたが明治43年ここへ岐阜尋常小学校が

柳ヶ瀬繁昌記

4年生の受持ちは井深佳六先生でした。小柄な身体に似合わず大きな声で教えて下さいました。先生が遊びにこいよとおっしゃったので、若松町の家から1人で木造町の先生の下宿へ行きました。2階へあがって先生と話をしていると、道の向いの正興寺の本堂の落成で餅まきが始まりました。見ると同級生の啓運町の高木甚一君等が一生懸命餅を拾っていました。井深先生は嫉のきびしい先生でしたが反面心の優しい方で、このように幼くして母をなくした私を可愛がって下さったのです。そして明治38年3月25日、岐阜尋常小学校を卒業しました。

それから岐阜高等小学校へ進みましたが、父が亡くなり、私と弟は母の在所の柳ヶ瀬の雑貨店に引きとられました。店では紙・煙草・玩具・簪など日用品を商っていました関係で、私は名古屋の帳面屋へ奉公に行きました。私は酒も煙草も手にせず、堅い一方で律気に働いて2ヶ年勤めあげ、明治43年子のなかった柳ヶ瀬の母の在所の店「かぎ鉄」をつぎました。場所は今の金華劇場の向い（南側）で、家賃は月3円50銭でした。商う品物は今の店と同じようなものでしたが、当時は大福帳や当座帳がよく売れました。

この頃の柳ヶ瀬は新開地で場末でした。今の丸物の東北隅に間口4間半の勧工場がありました。入口が東と西の両方にあって店内を一巡できるようになっていて、中には小間物・化粧品・学用品・玩具などを沢山並べていました。客は好きな品物を手にとって選べるので評判がよく繁昌していました。その勧工場の西には旭座があって芝居を上演していましたが、客の入りも上々でした。それから西へは両側に店が並んでいましたが、今の丸万呉服店の向いに間口12間位の黒団があって、その中に岐阜憲兵屯所がありました。ここから西へ金津までは家もまばらで、2階建もなく粗末な平屋の家ばかりでした。

柳ヶ瀬通の北は一面の桑畑で弥八地藏まで続いていました。柳ヶ瀬通の南は、東に蓮池、西にキコクに囲まれた煙草専売局岐阜工場がありました。更に蓮池や工場の南は一面の畑や田で、その頃は金神社といわず小金堂といっていた小社の森が見え、そのはるか南を黒煙を吐いて汽車が西へ東へ走っているのがよく見えました。

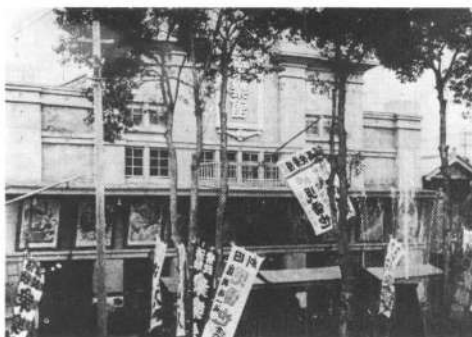
この頃の神田町通は通称8間道と呼ばれていましたが、道幅が8間あったからでした。道の両側には駅前から今の市役所前まで、柳の並木が植っていました。東京の銀座のようだと県庁のえらい様がいわれたとかいう話でした。夏の夕涼みをあてにして8間道には席をしいて20軒余りの夜店が出ました。

柳の木の下で金魚・西瓜・みたらしダンゴ・こうらい焼・おもちゃ・古道具などを

売っていましたが、変わったところでは蓄音機を1回2銭で聞かせてくれる店もありました。8間道も夏のうちは夜店が出て賑やかですが、秋風が吹くようになると、店の数が次第に少なくなり、木枯が吹き抜ける頃には夜店はなくなり淋しくなりました。

この名物の柳の並木は、市内電車を敷設するのに邪魔だと伐られました。夜店は柳ヶ瀬通りが引き受けて各商店の前の隅に出させました。これは夜店の救済と柳ヶ瀬発展の方策でもあったのでした。市内電車は駅前から今沢町の警察署前まで第1期工事が完成しチンチン電車が走り出しました。乗車賃は大人3銭でした。柳ヶ瀬は夏になるといろいろな夜店が出るようになり盆栽・茶碗売・古道具などぞくぞくふえてひやかしの客も日に日に多くなりました。こうして柳ヶ瀬繁栄の第一歩が築かれました。

柳ヶ瀬を岐阜一番の繁華街と決定的にしたその基は大正8年9月21日から50日間行った岐阜市制30年記念博覧会です。場所は柳ヶ瀬通りから南へ少し入った所から今の神室町にかけての一带の煙草専売局岐阜工場の跡地約6000坪です。ここは工場が大正



噴水と衆楽館



伊奈波から移築した岐阜劇場

の初め頃、名古屋へ移転してそのあとゴミの捨て場となり、近所の者も市役所も不衛生で困っていた所でした。ここに先覚者土屋禎一氏の発案で博覧会を開くことになったのです。博覧会の正門は柳ヶ瀬通りの中程から南へ少し入った所に作り、正門を入った所に噴水を作りました。博覧会は押すな押すなの大盛況でさしも広い会場も連日いっぱいでした。博覧会が済んだ翌年、記念として残した噴水の西に活動写真を上映する衆楽館ができ、又少し遅れて当時伊奈波にあった明治座を移築して岐阜劇場と名を改めました。又岐阜劇場の向いの北角に金華劇場という芝居小屋もできました。このようにして人々はどんどん柳ヶ瀬へ集まるようになりました。

大正10年柳ヶ瀬に楽天地を作ることになって私たちは立ちのくことになり私は神田町5丁目（東側）に移りました。楽天地ができ木馬館や人工の滝などありましたが長続きしませんでした。私が今の所へ越したのは昭和9年のことです。

明治37年度 岐阜尋常小学校卒 神田町3 中村浅吉談

法華寺裏の喧嘩

1・2年は小川格先生、3・4年は小島栄太郎先生に受持ってもらいました。小川先生は小柄で少しやせて優しい先生でしたが亡くなられて小島先生に変わったのです。小島先生は中柄でしたが骨太でいかつい身体つきをしてみえました。授業中横をむいていると竹の根節で、子どもの机の上をピシヤンとたたかれました。それで男子ばかりの組でしたが、先生のいつつけをよくきいたものです。

そんな先生を手こずらせた事もありました。この頃長良川で泳ぐのはきびしく止められていましたが、私は平気で一人で泳ぎに行きました。川では横着者が多ぜい泳いでいます。それをどこからか見ていて翌朝授業が始まると告げ口をする子がいました。それで私始め川へ行った子はみんな廊下に立たされました。立ち番は1時間で許されましたが、その日も学校から帰ると川へ行って泳ぎました。それで又立たされました。それが毎日の連続で、しまいには先生もうんざりされたでしょうが、こちらは叱られても平気で毎日立たされ、毎日川へ泳ぎに行きました。それを又私たちの泳ぐのを暑いのに毎日見に来て告げ口した子もご苦労さんな事だったのです。とにかく子どもの頃は減法暑かったように思えます。

運動会

米屋町の校舎は□の字形で、中の運動場を囲んで、北に東西の平屋建（西が小使室東の2教室分が職員室）西に南北の2階建（各教室）南に東西の平屋建（各教室）がありました。中の運動場の東は杉林で、その東は末広町通でした。

運動会はこの運動場で行われました。その最大の呼び物は4年男子の「陣とり」です。4年男子は赤白に分かれて、それぞれの陣地を十重二十重に守ります。陣地は末広町沿いの杉の木の前と、南舎中央の北に生えていたカリンの木の前でした。そして陣地の中央には赤白の旗が立てられます。先生の始めの合図で、両軍はときの声をあげ帽子のとり合いをし、機を見て敵の陣地へ突入し旗を倒します。旗が倒れると、旗に結んであった紐がひっぱられて、杉の木やカリンの木の上で「バン」と花火が大きな音をたてます。大歓声が両軍からも観衆からもあがって勇壮なものでした。

手伝いと仕事

学校から帰ると、おつかいに味噌を買いに行ったり、子守りをしたり、ランプのホヤの掃除をしたりしましたが、こずかいかせぎに近くの釣竿屋やマッチ製造工場へ行きました。釣竿屋では竹の節についている皮をとる仕事で、マッチ工場はマッチの軸木を並べる仕事でした。どちらも学校から帰って行くと1銭か2銭もらえます。小づかいがほしいから行ったので、友だちが誘いにくると遊んでしまいました。

2厘パンと団十郎めぐり

小づかいができると伊奈波へ行って、氷水や大垣の梨や2厘パンを買い、団十郎めぐりをしました。氷水は飴を水でといたようなもので竹のひしゃくに1杯5厘で冷えて甘くうまかったです。大垣の梨は大型で値も高く1個5銭もしましたが物凄くうまいので小づかいをためておいては食べました。

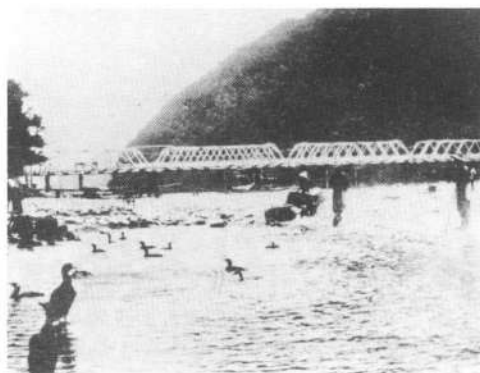
この頃2厘パンというのがありました。1個2厘という所からその名がついたのでしょう。偏平な直径10厘位の円形で、今のビスケットのように堅くて所々にへこみがあって茶色でした。安くて結構うまいのでよく売っていました。

団十郎めぐりというのは一種のクジで、厚紙の中央に団十郎の家紋が刷ってあってそのまわりに沢山の紙がたたんで貼ってあります。お店の人に5厘渡して、貼ってある好きな紙をはがして広げて中を見ると、最低5厘から最高5銭までの金額が書いてあります。そして当たった金額の品物を店の中から自分で選んだ訳です。5厘で2銭も5銭も当るので流行したものです。大きい景品には駄菓子をもらって食べていました。

遊び

子どもの頃はいろんな遊びをしました。パンパン・場とり・陣とり・石けり・ボール投げ・ベース・角力・水泳・魚とり・山遊び・椎の実拾い・高足・竹トンボ・凧あげ・こま廻し・縄とび・雪だるま・タガ廻し・兵隊ごっこなどです。

その中で一番面白かったのは兵隊ごっこでした。刀にする女竹をとりに木橋の



この頃の長良橋

木橋

長良橋を渡って今の総合運動場の辺まで行きました。刀身の代りに針金を入れて竹の刀を作り腰に紐で吊り下げました。私が大将になって近所の子を集めて一列に並ばせ「前へ進め」など号令をかけて遊び、又両軍に分かれて戦争ごっこをしました。

法華寺裏の喧嘩

この頃喧嘩もよくしました。こちらは法華寺裏（今の啓運町となる前の地名）の子どもで、相手は加茂町（今の矢島町1丁目）の子どもです。いつも事の起りはささいなことですが、敵は法華寺南の藪の中に立てこもって石を投げます。味方はデンチを頭の上からかぶって、当時一面の桑畑の中から奇襲をかけ竹の棒でなぐります。何度も喧嘩をしましたが勝ったり負けたりで、負けそうになると法華寺裏と同盟を結んでいた四ッ屋の子どもが勇ましくラッパを吹いてかけつけてくれました。両軍とも怪我人が出ましたが、武山医院へ行くと「名誉の負傷だ」と無料でなおして下さいました。

明治39年度 岐阜尋常小学校卒 啓運町 酒井伊兵衛談

お人形さん遊び

私は明治41年3月25日、義務教育4ヶ年の最終又米屋町最後の卒業生として卒業しました。私達以後は義務教育が6ヶ年になり、学校は大工町へ移りました。

米屋町の小学校では3年生の時からお針（今の裁縫）を福田きみよ先生に教えてもらいました。「指はめ」をはめて針をおして縫うことを丁寧に教えてもらったものです。それで卒業の頃には襦袢がぬえるようになって喜んだものでした。

服装

普通の日には学校へ、木綿のできた筒袖の着物を着ていきました。柄は立縞が多く、かすりの子もいました。木綿の着物は大きい家で織ったもので、私の家では母が織って下さったものです。上に兄姉のある家では、そのおさがりを着るのがあたり前で私も10歳年上の姉のお古を洗って仕立てなおして着せられました。儀式の日には木綿の黒の紋付の着物に、同じ羽織を着て、木綿のえび茶の袴をはきました。

お天気の日には下駄をはき、雨降りの日は日より下駄かぶくりをはきました。靴は母に縫ってもらった木綿の袋で、草履袋も同様でした。この頃は木綿と絹としかありませんから、みんな安い木綿それも各家で織った布で何もかも用立てたのです。そして家から出ていく金をできるだけ少なくして、つつましい生活をしていました。

食事

家での食事はどこの家でもわり飯でした。わり飯は麦をひいた「わり」と白米とを混ぜて炊くのです。わりを多くしたり、白米を多くしたりしますが、わりと米とを半々にして食べるのが普通でした。わり飯はわりにビタミンBがあって脚気の病気にかからんというので、軍隊では専らこのわり飯を戦前まで食べていました。しかしわり飯は見た目に黒く、冷えるとバサバサして食べにくいので、お弁当は白米だけを別に炊くこともありました。盆や正月には白飯をたいて食べました。

おかずは芋や大根など季節にとれる野菜が主でした。けれど豆腐や油揚げは、豆腐屋が私が知っているだけでも今町4丁目・上新町・下茶屋町にあってよく売っていましたから、みんな食べていたようです。生魚はめったに食べなかったもので、乾物の鰯を芋や大根と一緒に煮たのがご馳走でした。玉子は祭りや正月に茶碗むしに入れる位で、平常はあまり食べませんでした。

肉は煮ると家の中が臭くなるというので、どの家でも食べませんでした。いつの事でしたか、寒い冬の日根尾の山奥から鹿を売りに来ました。鹿はうまくて身体が暖まるというので近所の人がみんな買いました。私の家でも買って煮て、うまいうまいと家の人が食べましたが、私はその臭さに閉口してよう食べませんでした。

手伝い

学校から帰るとすぐ復習をして、家の仕事を手伝いました。これがこの頃どの家でもあたり前だったのです。私は3年生の時から糸のかせとりをしました。家で手伝う仕事のない子は、土間を掃いたり八百屋などへお使いに行ったり子守りをしたりしました。それでなかなか遊ばせてもらえなんなのです。

それでも家の手伝いがすむと、毎日こずかいが5厘もらえたので菓子を買いに走りました。この頃の菓子はせんべい・カンカン棒・金花糖のような駄菓子ばかりでしたが、子どもにとっては甘くてうまかったものです。駄菓子屋で玩具やクジを売ようになったのはその後大分たってからのことです。

遊び

普通の日には家の手伝いで遊ぶ暇など殆んどなかったのですが、祭や盆や正月は別です。この時は親のおゆるしを得て遊ばせてもらいました。

一番よく遊んだのはお人形さん遊びです。ありあわせの布で自分でお人形さんを作りました。その人形さんを抱いたり寝かせたり、あやしたりして遊んだものです。そのほかに、細かい小石を入れてお手玉を作ったり、糸屑を丸けて毬を作ったり、いつた唐豆でおはじきをしたりしました。どれもありあわせの物で遊んだもので、金のかからぬものばかりでした。ただ貝がらで作った真っ白なおはじきや羽子板や羽根は母にせがんで買ってもらいました。

秋になると椎の実拾いに金華山へ行き、林の中でさつまいもを食べ食べ椎の実を拾いましたが、その楽しさを今でも忘れることができません。女の子ですから川へ水泳ぎに行ったり、鶺鴒見に行ったことは一度もありませんでした。

暑い夏の日盛りに下掛け（今の毛布の役目をしたもので掛蒲団と敷蒲団との間に入れて使った。生地は木綿で大きさは蒲団と同じ）を家で洗って、洗った幾枚もの下掛けを大風呂敷で背おった母のお供をして、長良川へ行きすすいで川原で干すのです。その時の玉のような母の汗とその面影を今でもなつかしく思い出します。

明治40年度 岐阜尋常小学校卒 益屋町 山吉いと談



北庭から鉄棒・長良橋を臨む 富茂登小学校

明治の終りのくらし

私は明治42年3月に4年を修了しましたが、義務教育が6ヶ年にのびて初めて5年が設けられましたので5年に進み、明治43年3月5年を修了した時に初めて6年が設けられましたので6年に進み又米屋町から大工町へ移って、明治44年3月に修業年限6ヶ年・大工町での初めての卒業生として卒業しました。従って明治41・42年度は卒業生はありませんでした。

受持ちは4年生から6年生まで久世五百太郎先生でした。先生は中肉中背の40歳代の方で、それはやさしい方で丁寧に教えて下さいました。5年生の時に名古屋市共進会が鶴舞公園で開かれましたので見学に行き、6年生の時は修学旅行で熱田神宮から築港を見てきました。何しろ昔の事ですから岐阜から一步も出たことのない子どもばかりで、汽車も駅も共進会も何もかも珍しく、見るものすべて驚きばかりでありました。

服装

共進会や修学旅行の時の服装は、学生帽子をかぶり、かすりか立縞の木綿の着物を着て、立縞の袴をはきました。平素は袴ははきませんでした。足には、あさうらぞうりか、わらぞうり、わらじをはいていました。わらじは足がしまって歩くのに足が軽いので私はわらじをはいていきました。

腰には手拭をぶらさげ、肩から斜めに風呂敷を背おい、その中には日の丸弁当かあげずしなどの弁当を入れました。水筒なんて気のきいた物はありませんでした。

以上の通りですが、みんな身なりをきちんと整えだらない子は1人もなく、先生のいっつけをよく守って行動したものです。

建物

米屋町の岐阜尋常へ通っている時分に、米屋町から学校へ入る角に西洋建の建物が建ちました。勅使河原商店といって提灯屋さんでしたが、その頃まだ岐阜には洋館がなかった時代ですから、町の人たちは2階建の洋館のすばらしさにびっくりし「西洋建」と呼んでいました。岐阜に洋館ができたということで田舎なんかからは弁当持ちでこの「西洋建」を見に来たという話も伝わっています。



今に残る「西洋建」 昭和49年

照明

電燈はありましたが、まだ普通の家ではつけていませんでした。電燈はお金がかかるからです。私の家は旅館で幾つも部屋がありましたが、どの客間も台ランプを使い客が寝てしまうと、菜種油の行燈に切りかえました。帳場には吊りランプ、便所にはカンテラを使って、どの家でも少しでもお金のかからぬようにしたものです。明治の終りの頃は金廻りのよい店や家は電燈、一般の家はランプというふうでした。

炊事

今は蛇口をひねれば水が出て便利ですが、この頃はつるべ井戸か井戸に板で蓋をしその上にポンプを置いて水を汲み上げていました。しかしポンプを備えつけるには、金がかかるので一般の家はつるべ井戸が普通でした。鉄管を土へ打ちこむようになったのは大分後の事です。

この頃の煮たきは、くどの上に鍋をかけ下からたいたものです。たきつけに鉋屑、燃料に芝や割木を使いました。割木の残り火は火消し壺に入れて消し炭にしました。

風呂をわかすには薪物が沢山いって金がかかるので、家の中に風呂のある家は町内に1軒ある位でごく少なかったのです。それでみんな風呂屋へ行きました。銭湯といっって大人1銭・小人5厘で岐阜の街にはあちこちにあっってはやりました。葉書が1銭・封書が2銭の頃の話です。

ごみは今のようには沢山出ませんでした。どの家でも燃えるものは、くどでもやしてしまっって燃料の足しにしたからです。燃えない野菜屑のようなものだけごみ箱にすてました。ごみ箱はお戸口にあっって、普通石油箱を使い蓋をつけ、黒く塗っっていました。市からリンをふっって、ごみ集めに1週間に1度位まわっってきたようです。

暖房

この頃はまだ豆炭も煉炭もない時代で、暖房は専ら木炭でした。木炭は1俵の目方が13貫もあっって、大の男でないとかけぬ位重いものでした。冬の日の夕方など、各部屋の火鉢に炭をついだり、火種を配ったりしていそがしかったものです。

乗り物など

この頃、自動車は県庁にある位で、自転車も商売の荷物運搬用に使われていた位で一般の家にはまだ普及していませんでした。それで乗り物は人力車でした。人力車の帳場があちこちにあっって、近くでは本町1丁目（今の電車の曲り角の東北角）にあっって、はやりました。この頃の道には人力車・自転車・大八車・馬車がのんびりゆききしていました。その頃の子どもの小づかいは1日に5厘か1銭で、油ねじやカンカン玉など駄菓子を買っって食べ食べ道ばたで遊んだものです。

家の前の道路が3間半から今の8間に拡張したのは大正元年のことで、西側だけ西へ家を引いて下がったのです。道路分と移転費とはどちらも坪当り14円50銭、市から出ました。電車の開通したのは大正4年で大分あとの事です。

明治43年度卒 東材木町 箕浦庄吉談

大工町の校舎

明治43・44年度は岐阜尋常小学校に富茂登尋常小学校が合併し、大工町に校舎を建てて移転した大変な年でもあり又記念すべき年でもあった。

明治43年4月1日岐阜尋常小学校に富茂登尋常小学校が合併し、富茂登は分教場となり、校地を大工町に決めた。そして大工町に新校舎が1棟完成したので、明治43年10月25日午後、児童は米屋町から大工町へ諸道具を運び、翌日に米屋町の3年以上（11学級・670人）は大工町へ移った。

更に大工町に校舎1棟が出来上がったので、明治44年3月18日米屋町の1・2年及び富茂登分教場の児童は大工町へ移った。そして同月25日富茂登を合併して初めての卒業式を行った。卒業生は175名、修業生は1080名であった。

明治44年5月27日大工町に建った校舎落成式が頗る盛大に行われた。この日、午前10時から県知事代理の真野事務官初め多数の来賓の臨席の下に落成式が実に盛大に行われた。午後の余興には校庭で角力や餅なげがあり、裏の河原で宝探しや凧会があり、米屋町の旧校地では自転車会が行われた。この多彩な催し物にどっと人が出て大変な賑やかさであった。

この校舎は、その後数年たった大正4年5月17日火災のため燃えてしまったが、2階建2棟（南舎・北舎）が東西に平行して並び、千人以上の児童を収容していたのだから、学校はもとより市自慢の建物であったに違いない。

大正4年の児童作文「我が学校の火事」を読むと、南舎を新校舎と呼ぶのは当たり前だが、北舎を旧校舎というのはなぜだろうかという疑問が起ってくる。これを学校日誌から調べると次の通りである。

- ・ 43年8月11日 建築委員数名来校、移築校舎に付、審査をなす。
- ・ # 10月5日 学校長、新築校舎の検閲を係員と共になす。
- ・ # 10月20日 市長始め建築委員一同、新築校舎の精検をなす。
- ・ # 11月3日 全校児童、米屋町旧校内に集合、午前8時半御真影を大工町校舎に奉遷、旧校舎の宿直室の畳及夜具等を大工町へ運搬す。
旧校舎の取りこわしに着手す。
- ・ 44年2月16日 服部市長・伊藤・森瀬・子安の建築委員、工事を視る。

この文中の新築校舎とあるは大工町の南舎のことである。大工町の北舎を旧校舎と呼んだのは米屋町の校舎を移築したからであろう。そのため8月11日に移築可能か審査し11月3日取りこわしに着手し、2月16日移築して完成直前の状況を視ている。

岐阜城

明治43年度は本校にとっても岐阜市にとっても記念すべき年であった。先ず5月13日、伊奈波神社の社頭に明治37・8年戦役における岐阜県下戦病死者の忠魂碑の竣工式並びに招魂式が行われた。続いて5月15日金華山頂の模擬天守閣並びに古城址記念碑落成式が行われた。これを祝って5月15日から3日間祝賀会が市内で盛大に催された。初日の15日は五月晴れの日曜日とあって、お城のできた金華山へ、忠魂碑のたつた伊奈波へと近郷近在からどっと繰り出し大賑いで当日の人出は十万人といわれた。夜は徹明・白山の子どもたちの提灯行列などもあって、夜おそくまで人通りが絶えなかった。第2日目の5月16日はあいにくの雨で人出も少なかった。



岐阜城模擬天守閣

第3日目の5月17日は雨もからりと晴れあがり、お祝の最終日とあって又どつと人が出た。夜になると午後7時半から本校4年以上男子三百余名が提灯行列をして町中を練り歩いた。この頃の岐阜市は濃尾震災以後、七軒町・柳ヶ瀬の新開地が次第に賑やかになってきて市の中心が南へ向っていたとはいえ新開地の家数は少なく、市内で一番賑やかなのは伊奈波で商店・銀行は米屋町・白木町あたりにあった。そして岐阜市の家並みも旧岐阜町が大半であった。夜の提灯行列は市内で一番家がたてこんで賑やかな金華校下を廻ったのである。先ず本校を出て加和屋町・大宮町・港町へ行き、それより元浜町・東材木町・魚屋町・本町・矢島町・七軒町・白木町と廻って伊奈波の忠魂碑の前で岐阜市の万才を三唱して9時ごろ解散した。

金華山頂の古城址記念碑



この時建てた模擬天守閣は木造の粗末なものではあったが外観は美しく、大正から昭和へと金華山頂に聳えて朝夕市民から親しまれてきたが、太平洋戦争中の昭和18年焼失した。戦後観光岐阜のシンボルとして昭和31年7月再建されたのが現在の岐阜城天守閣である。

又この頃の岐阜公園には見るべき建物も施設もなく、あるのはただ林だけで、今の図書館や動物園のあたりは一面の竹藪であった。それで遊ぶ者も少なかったが、大正になって三重塔・板垣伯の銅像・名和昆虫博物館ができ次第に開けてきた。

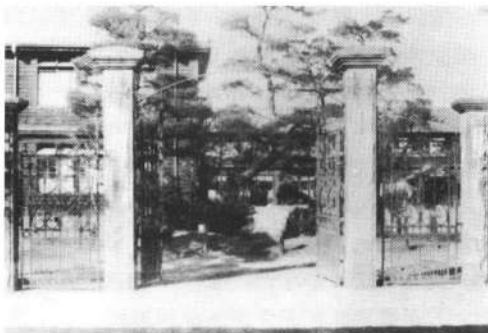
校門の話

明治43年度に米屋町から大工町へ移した時建設した校門の様子を、明治44年度や大正初年の写真で見ると、石柱が黒ずんで苔でもはえているようなのに気づく。どうもこの校門は新しく作ったのではなく、古いものを移築したのではなかろうかと思われる。

そこで当時の学校日誌によって調べると、明治44年3月20日庭師6人米校、その翌日庭師3人馬車廻りを築造、人夫1人移転運搬をなすとある。以上で学校日誌には校門を移築したということは勿論、校門についての記事は少しもない。しかし校門を建設したのは事実であるから、上記の期日の中か、その近くの日に校門を建設したことは推測できる。

そして校門が移築されたとするならば、富茂登の学校か米屋町の学校の何れかの校門を移したものと思われる。富茂登の学校の校門は古老の話によれば、四角の木柱であったので、これは大工町に建てた校門とは違う。

米屋町の校門の変遷を学校日誌で調べると、濃尾震災後、校舎の再建が終って最後に校門が明治26年12月27日完成している。その校門は東・西の門を154円50銭で伊吹町増田真太郎が落札したという金額からして立派な門であったに違いない。



校門

昭和4年度

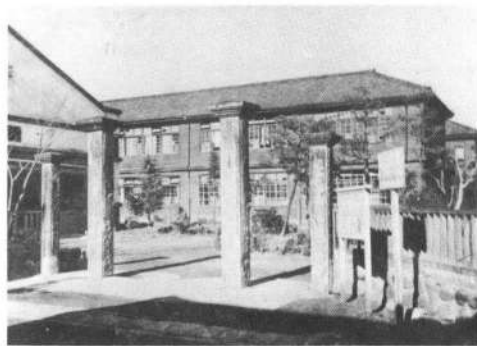


校門

明治44年4月1日

さらに明治35年10月8日「表門を石柱・鉄扉にて建築す、費用380円なり」とある。又10月15日「服部助役より表門脇の鉄柵40円、石積20円にて相渡す」とある。これから米屋町の表門（西門）は石柱・鉄扉で表門脇は石積でその上に鉄柵が設けられていたことがわかる。

それから8年余たった明治44年3月、大金を費して作った立派な校門・鉄扉並びに表門脇の鉄柵を米屋町より大工町へ移転したとみるのが順当であろう。



終戦後の校門

昭和27年度

明治44年に建てた校門は実に堂々として
いる。太くて長い四角柱の花崗岩の上
に笠台がのった柱が4本立ち並び、柱と
柱との間はすかし彫りを思わせるような
鉄扉ががっちりついている。明治時代の
官庁の門がそうであったように、そこには
人を寄せつけないような権威と尊厳と
を表わしている。

昭和4年度の写真を見ると、校門は更に
風格を増し、石柱や鉄扉にも十幾星霜
を経た重みと貫録をつけ、後ろの馬車廻

しの緑の木立や古びた校舎と調和して、いかにも文化を伝導する学府の門にふさわしく
なってきた。しかし校門にも栄枯盛衰はまぬがれなかった。わが国が総力を挙げて
戦った太平洋戦争が始まると、人の出入りを厳重にはばんできた校門の鉄扉は、他の
何物よりも早く、まっさきに門からはずされ、昭和17年2月4日献納された。

国破れて山河ありという言葉があるが、昭和27年度の写真を見るとその感が深い。
そこには重々しい鉄扉はなく、左右の石垣の上の鉄柵もない。あるのは立ち並ぶ石柱
と左右の石垣の上に取りつけられた木柵だけである。うらさびれた校門の姿の中には
明るい陽光の下に、子どもはもとより犬や猫も自由に出入りできる気安さだけがた
よっている。

昭和32年度から始まった校舎の鉄筋改築・プールの建設・グリーンベルトの築造等
一連の環境整備のしめくくりとして新しく校門が建てられた。古い校門の折れた柱や
敷石などを取り払い、その跡に新しく校門を作り昭和37年12月23日竣工した。うす黄
色の大谷石を積みあげた校門は高さを低くし、開口部を思いきり広くとってあって、
鉄筋校舎と調和のとれた直線的な近代感
覚の上に淡い色調により明るさと親しみ
易さを感じさせる。

その後、昭和47年9月体育館の建設が
始まるや、容易に大型車両が出入りでき
るよう、既に大谷石がゆるんだりはがれ
かけていた校門を一時解体した。今の校
門は昭和48年7月2日体育館竣工と同時
に復元したものである。但し校札だけは
新しく作り直し、校名の書は本校職員種
田信子先生の筆によるものです。



現在の校門

昭和49年6月

大 正 時 代

校舎が整い、落ち着いてこれからという時、
台風にあい、やれ復旧したと思ったのも束の間、
校舎炎上し、
不死鳥のように立ち上る。
教材の研究・授業法の研究に、
星移り年かわる。
角力・少年野球・陸上競技など運動に、
若い血潮を沸きたたせる。

校門より校舎を臨む

大正2年



昔の校歌

昭和48年1月もすぎで創立百周年記念式典の演出に悩んでいた。式典に集まられるのは在学児童を除けば年輩の方々で今の校歌はご存知ない。そこで思いついたのが昔の校歌を用いることである。しかし昔の校歌の楽譜はない。ただ残されているのは、昔の校歌を歌っていただいて採譜する方法だけである。

昔の校歌を歌える方を探しまわってみつけた。1人は百周年記念誌の印刷をして下さっている高田米吉さんともう1人は合渡小学校教頭の吉岡すみ子さんである。2月の終り頃、高田さんを招いて校長室で録音した。高田さんは威儀を正して背筋を伸ばし、大きく息を吸いこんで実に音吐朗々腸にしみ渡るように歌って下さった。その節まわしには長年歌いあげてきた者のみが持つ渋さとなつかしさとが味えるのであった。それから合渡小へ電話をかけ吉岡先生が電話で歌って下さるのを受話機に録音機をくっつけて録音した。吉岡先生の歌はすき透るような清らかな声で優にやさしく思い出でいっぱい風情であった。お二人の歌われたのをもとに採譜して右頁の楽譜ができた。楽譜を前にして、お二人の昔の校歌を卒業以来忘れず、ずっと歌い続けてきて生の声で歌って下さったことに厚く御礼申し上げたい。この楽譜は長年歌ってきたものから採譜したものであるから原曲と若干異なっているかもしれませんが。原曲をお持ちの方があればお教え願いたい。

この校歌の歌詞はいかにもすんなりとうたわれていて大変覚え易く心の中にしみ込むようである。殊に里ということばは3回もでてきてそこに住む人々の長い年月の結びつきとその中で生れた暖かさを感じさせる。そして里ということばで全体に優しさとうるおいを持たせている。その暖かさと優しさとうるおいをもった人々の心は金華山のようにけだかく高い心をもって、長良川のように清らかなげがれの心をもって、君に仕え国のために尽しましうと歌いあげている。

この歌曲の曲は初め長い音を使ってゆったりとのどかになっているが、第3段は音をこまかく刻んで4分の2拍子のような軽さと明快さに転じ、更らに第4段では又大らかにのびのびと元にもどし、終りに変化をもたせて微妙にゆれ動き最後にどっしりと何事にも動じない決意をみせて終結している。この昔の校歌はいつの頃から歌われたのか判然としないが、のびやかな歌詞とひなびた旋律から察するに相当古くから大正・昭和の戦争前まで歌われてきたものと思われる。

昭和48年3月25日創立百周年記念式典が始まる直前に、この昔の校歌をグランドミュージックとして式典会場内に放送した。式典に参列された年輩の方々はこのなつかしい校歌に耳を傾むけ感慨無量の態であった。

♩ = 104

や ま と か わ と は こ の さ と の
 ひ と の こ こ ろ を あ ら わ せ り
 わ が す む さ と に は や ま も あ り わ が す む さ と に は か わ も あ り
 や ま は き ん か ざ ん か わ は な が ら が わ
 こ の や ま の た か き こ こ ろ を こ の か わ の き よ き な が れ を
 こ こ ろ に て き み に つ か え ん く に に つ く さ ん

校 歌

山と川とはこの里の

人の心を表わせり

わがすみ里には山もあり

わがすみ里には川もあり

山は金華山

川は長良川

この山の高き心を

この川の清き流れを

心にて

君に仕えん

国につくさん

子守とお手玉

私は元浜町の白木商の家に生れ、そこから1年から3年まで富茂登尋常小学校へ通い、4年から大工町の岐阜尋常小学校へ通い大正3年3月25日卒業しました。

富茂登学校の合併で、富茂登から大工町まで机や腰掛を2人1組になって、つって運んだのは3年生の終りで、幼かったのですが今でも覚えています。多分大変なことであったのでえらかったし、又楽しかったからでしょう。6年生の担任は太田泰治郎先生でした。先生は中肉中背の口数の少ないやさしい方でした。4月25日、先生に連れられて赤坂へ行き、金生山に登ったり矢橋大理石工場を見学したりしました。矢橋大理石工場では大理石で文鎮を作っていました、みんなそのかけらをもらってニコニコしました。10月25日、修学旅行で彦根へ行き、彦根城を見ました。この頃、子どもが汽車に乗ることは殆んどありませんから、赤坂や彦根へ汽車で行った時は、みんな珍しがって大喜びしたものです。

服装

学校へは1年から3年まで、母に桃割れにゆってもらって通学しました。4年からは、前と後に分けてそれをそれぞれ3つ編みにして、頭の後で両方を合わせていました。又前と後で分けずに全部を頭の後で3つ編みにしてまるけていた事もありました。女の子は大いこの二通りの髪をしていましたが、前と後で分けていた子が若干多かったようです。

学校へ行く服装は、木綿のかすりか立縞の着物を着て、木綿の白足袋をはいて、母

当時の服装



6年3部

に縫ってもらった木綿の本袋と草履袋とを手に下げ、草履か下駄をはいて登校しました。草履袋の中にはあき裏草履が入っていて学校ではきかえるのです。雨天の時は日より下駄より歯の高い高ぶくりをはきました。

儀式の日は木綿の黒紋付きを着て、毛の少し入った木綿でえび茶色が紫色の袴をはきました。

食事

この頃の主食は、どこの家でも麦が3割から5割位入った麦飯でした。弁当は炊いた麦飯の下の方の麦の少ないところを選んで弁当箱に詰めました。お菜はその時期にとれた野菜が主で、大きな鍋にいっぱい大根や里芋などを煮ました。それに汁も野菜物を入れて大鍋にいっぱい作りました。又どこの家でも大根の漬物や梅干を大量に作りました。それで食事時には麦飯に野菜の煮つけ、味噌汁、大根漬などを満腹するまでたらふく食べて、力いっぱい働いたものです。

田舎では味噌も醤油も家々で作っていましたが、町では大い買っていました。魚は高いので仲々買わなかったものですが、商家では大勢の奉公人もいるので1日・15日などに鰯や秋刀魚や鯖などを買って食べさせていました。肉は私の家では好きでなかったので買いませんでしたが、他の家でも食べる家は少なかったようです。正月が近づくとどの家でも餅を沢山つくりました。そして正月には競争で腹がはぜられる位お餅を食べたものです。

手伝い

学校から帰ると、先ずおさらいをして、それからお手伝いをしたり遊んだりしました。4年生頃から妹と交代で母に調理を教えてもらいました。それで6年生を卒業する頃にはご飯やお汁位は1人で作れるようになりました。私は長女で下に弟や妹がいましたので、子守りをして遊んでやったり、おんぶしたりしましたが、家の外へ出て子守をすることはありませんでした。母はそれはそれは堅い方でしたので、きびしく躰をされました。この頃はどこの家でも、女の子がぶらぶら外で遊んだりすることは堅く禁じられていました。ましてや夜は女の子を家から出さないとというのが建前だったのです。ですから夏、川で水泳をしたり、夜友達と夕涼みに出かけるようなことはありませんでした。

遊び

遊ぶのは家の中ばかりで、お手玉をしてよく遊びました。お手玉の中へは小石を入れ、自分で縫って作りました。せいたくなのは小石の代りに小豆や大豆を入れました。そうすると夜の中にねずみがお手玉の中の小豆や大豆をかじって、お手玉がぼろぼろになり困ったものでした。

お手玉の他には、おはじき・あやとり・紙風船・百人一首で坊主めくり・羽根つき・縄とびなどをして遊びました。おはじきはガラス玉の中に模様の入ったのや、無地や色とりどりののを売っていました。紙風船は大小3個とか4個とかが1組になって売っていましたので、これを買って口でふくらませて、手をついたものです。

おこずかいは時々母にもらったもので一度に1銭位でした。おこずかいをもらってきつと何時に帰ってくるからと母に頼んでお許しをえて、お友達の家へ遊びに行く事がたまにはありました。そんな時はほんとに天にも上る気持ちだったのです。

大正2年度卒 上大久和町 岩井秋子談

マルMのゴムまり

6年生のある日のことです。父に買ってもらったばかりのマルMのゴムまりをもって運動場で遊んでいると、不意に受持ちの青木善吉先生が「まりに名前を書いておかなあかんど、すぐ持ってこい、書いてやるから」といわれました。新品のまりで嬉しくて夢中になっていて、先生のおいでになったのも気がつかず、びっくりしましたが、それよりびっくりしたのは、先生はこわいものとして授業の時以外口をきいたり遊んだりすることはなく、まして運動場で言葉をかけられたのですからなおさらでした。

おそろおそろ先生について職員室に入ると、先生は筆にたっぷり墨をつけ、ゴムまりに私の名前をていねいに書いて下さいました。私はその達筆の見事さに見とれて礼をいうのもそこそこに職員室を出ました。

当時ゴムまりは子どもにとって貴重なもので、中でもマルM印のゴムまりは高価なものでした。そのゴムまりに私の名前が上手に、しかも受持ちの青木先生が書いて下さったのですから、ゴムまりを使うのがおしくて宝物のように大切にしました。今でもゴムまりを見ると、勉強や躰にはきびしかったが心底やさしい青木先生の手のぬくもりが、まりから伝わってくるようで、懐かしく思い出されます。

服装

式の時は袴をはきましたが、平生はかすりの着物を着て、ぞうりをはいて学校へ通いました。体操の時は着物をきたままでやったのですから、今から思えば変な恰好だったことでしょう。それでも運動会だけはシャツにパンツにはだしてました。庇のない赤白の帽子をかぶって、6年の時は帽子とりなどを勇ましくやったものです。

子どもの楽しみは遠足でした。朝早くからお家の人におにぎりやまきずしやいなりずしなどを作ってもらって、それを風呂敷に包み、肩から斜めにかけて結び、わらじをはいて出かけました。そして遠足の名の通り、テク、テク歩いて行きましたが、それでも唱歌をうたったり、弁当を食べたりして、それはそれは楽しいものでした。

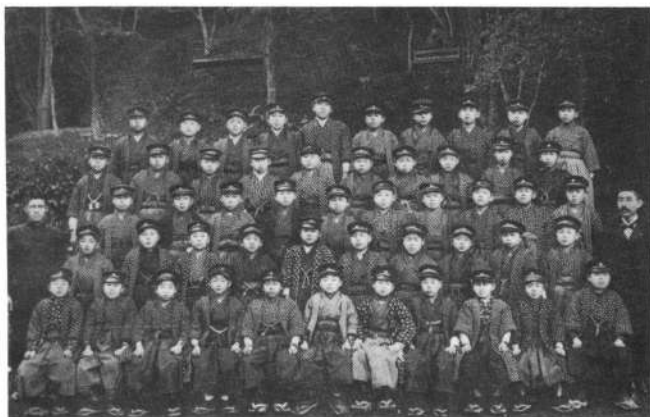
小使い

毎日1銭か5厘もらって駄菓子屋へ菓子を買いに走りました。近所の駄菓子屋ではねじん棒・せんべい・だんご・たいやきなどを売っていました。又くじもよくひいたものです。くじをひくと、象やライオンなど動物の形をした砂糖菓子（今でいうと生が糖のようなもの）が当たりました。そんな菓子をほおぼりながら夢中になって遊んだものです。

学校から帰ると、前の路や学校や伊奈波で遊びましたが、子どもの頃は若い生命にあふれ、何をやっても楽しく面白かったものです。

学校での遊び

この頃、学校にはブランコがありました。みんなとりあって乗ったものです。乗り手が多くて並んで順番を待つこともしばしばでしたが、そんな時に番が廻ってこないうちに授業が始ってしまっ、て、口惜しがったものです。ゴムまりでもよく遊びました。まりの受け合いが主でしたが、まりを



当時の服装

6年1部

ついて足や股をくぐらせたりもしました。又子どもが何人かて輪を作り、そのまん中に鬼になった子が立ってまりを輪になった子に投げてあてます。輪の子は鬼の子が投げたまりをよけるのですが、体をおかわしそこねて身体に当てられると、鬼になって輪のまん中に入ります。まり一つで大勢遊べるので流行したものです。

毎日のように放課後になると、1人の青年がフットボールを持ってきて運動場で遊んで下さいました。当時はまだ珍しいフットボールを蹴って遊べるのですから、みんな大喜びしたものです。それにしても奇様な青年の方があったものでした。

狐にばかされた話

学校から帰ると伊奈波へよく遊びに行きました。忠魂碑ができたばかりで、その碑のまわりをかこってある石柵の上を歩くのです。普通では落ちてしまうので、手を水平にしてバランスをとって落ちないようにします。一廻りできると見ていた子たちは拍手をし一廻りした子は得意がったものです。簡単にできそうですが、子どもにとってはむづかしいことで、私はとうとう一廻りできませんでした。

そんなある日のことです。いつものように子どもたち3人で遊んでいると、1人の男の人がやってきて、何かと話をし菓子まで下さいました。そして「よい物をやるから待ってなさい」といって町の方へ行きました。それでベンチに腰かけて待っていましたが仲々来ません。とうとうあたりはまっ暗になりました。3人の子どもの家では子どもが帰ってこんというので大騒ぎをして、手分けして探しにみえました。そしてみつけられました。父にそのわけをきかれて事の次第を話すと、父は「そうか、さては狐にばかされたな」とおっしゃいました。

夏は丹羽裏での水泳や軒下の縁台で夕涼み、秋は権現山の椎の実拾いやラッパを吹いて兵隊ごっこ、冬は独楽廻しや竹馬、どれをとっても楽しい思い出ばかりです。

大正3年度卒 伊奈波通3 高橋英吉談

校舎炎上

本校創設以来百年間の中で最大の災害は、明治24年の濃尾震災と大正4年の校舎炎上とである。大正4年5月17日午後7時30分出火し、全校舎と校具の大部分を焼失して午後9時鎮火した。火災の原因は警察の手により調べられたが、結局原因不明に終わった。当日の様子は当時の学校日誌に次の通り記載されていて、その状況を知ることができる。

5月17日 月曜日 (学校日誌より)

1. 昼直員 堀 文一	夜直員 杉山沢平	欠勤者 宗宮訓導 (病気)
1. 第1学年4部・第2学年全部	大掃除	
1. 本校焼失 損害見積高	26,140円	出火時刻 午後7時30分
・建物 (462坪)	21,000円	鎮火時刻 午後9時
・備品 (7,850点)	4,700円	出火場所 北校舎中央東寄教室
・消耗品	75円	(2年1部)
・児童学用品	365円	出火の原因 不明

顛末

夜直員杉山訓導は午後6時5分出校し、日直員堀訓導と交代し事務室に在りて執務し午後7時頃宿直室に至る。7時10分頃夜学担任者武藤訓導来校し宿直室に於て対談す。7時30分武藤訓導は南校舎西端なる夜学教室に臨まんとして宿直室を出づるや外部にて「火事だ」と呼ぶ者あり。

武藤訓導は南校舎西入口より、杉山訓導は南運動場に駆け出で玄関前にて火煙を認め驚愕直に教室の窓より飛入たれば北舎中央階下東寄教室(2年1部)の南窓硝子戸戸棧、柱の上部及天井板継目の所々は今や燃えつつあり。

急を叫ぶ火焰は猛烈の勢を以て忽ち燃え広まり到底防火の手段なきを見、直に玄関の戸を押し開き置き、南校舎階上の奉置所に駆け付け、暗中に高御座に進んで御真影並に勅語を奉持して御避難所なる伊奈波神社に奉遷するの手段を採り、直に事務室に入りて重要書類の持出をなし、時を移さず伊奈波神社に至りて無事奉遷せられたるを確かめ、帰って出校しある学校長に此旨を報じたり。

時に南北両校舎は全く火焰に包まれて全焼の災禍を被りつつあり。間もなく2訓導は岐阜警察署の刑事に同行せられ、翌18日午後5時まで同署に於て訊問を受けたり。杉山・武藤訓導2訓導は初めより全く単独の行動を採りしも其行動は一致して知らず知らず協同して事に当り居りしは後に至って分明せり。

学校長は居宅に在りて警鐘を聞くや、直に学校に駆付く。この時火焰は既に南校舎の階上階下全部に広まり居たり。依て今や延焼せんとする使丁室方面の防火の指揮をなす。その他の職員も皆全力を尽して備品の取出・消防の任に当る。鎮火後は学校長の指揮を受けて、或は御真影奉護の任に、或は取出したる備品処理の任に当る。午前2時学校長は職員に一時帰宅せしめ、松原・近藤2訓導と共に徹夜警備の任に当る。火災の原因に就ては授業後撒水して大掃除を行いたる教室にして尚又決して火気の存する場所に非ざれば全く不明なり。

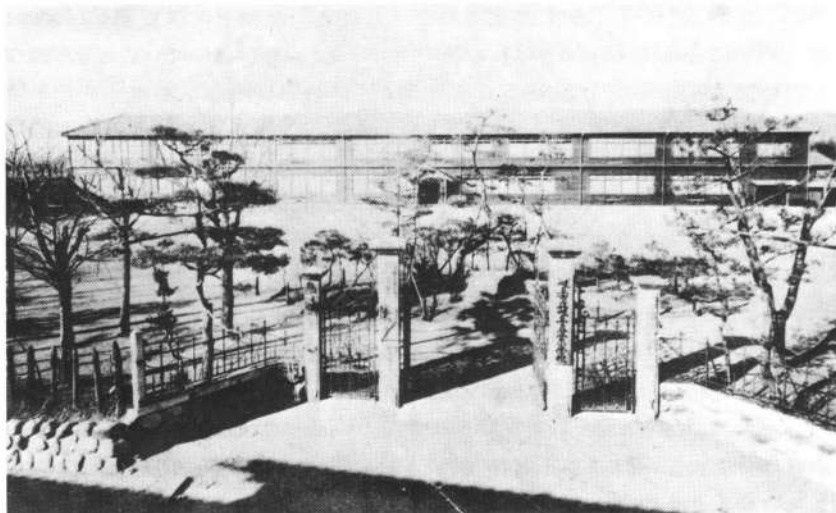
その後の話

5月18日は臨時休校し、5月19日午前8時全校児童を校庭に召集し、関谷校長が火災の顛末並びに1年生は焼け残った物置で、2・3年生は明德小学校で、4・5・6年生は岐阜尋常高等小学校（現京町小）で、明日より授業をする旨を話された。1年生は場所が狭いので隔日2部教授をしていたが、8月19日より岐阜公園の武徳殿を借り受けてそちらへ移った。

新校舎は6月27日地鎮祭を行い、先ず北校舎（12教室）が12月13日竣工したので、全校児童を収容し2部授業を行った。ついで南校舎が1月18日竣工したので、今までの2部授業をとりやめ、普通授業にもどった。

学校においては、その後3年は5月17日を火災記念日とし、職員一同が夜11時頃まで学校警備を行った。その後も満10周年になるまで、記念日の放課後に回想談の会を開いたり、消火器の実験をしたりした。それにしても本校の火事は、大正初めの大事件として、今も尚多くの人々の記憶に留め語り草となっている。

火災後再建された北舎
大正四年十二月十三日竣工



我が学校の火事

児童作文

大正4年5月17日は日曜日でしかも長良橋開通式の日である。長良橋が木橋から鉄橋に架けかわったというので、夜の余興の花火見物には市内はもとより近郷近在から大群衆が長良橋へと繰り出していた。花火が揚り出して間もない、夕方の7時半、突如として本校の大火事が起った。河原で花火を見ていた観衆、屋根や物干台で花火を見ていたり、夕飯を食べていたり、風呂へ入っていた校下の人達はいっせいに本校へ駆けつけてきた。その中で本校の子どもはどうしていただろうか、火事についてどう感じ、どう受けとめのだろうか。次に当時の在校児童の作文を掲げる。

題「我が学校の火事」

6年2部 宗宮鈴三郎

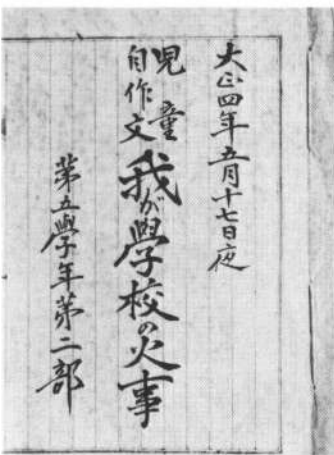
僕が5月17日夜学校で遊んでいると、なんだか裏の方が明るくなったので、鶴飼がきたかと思って堤へ行ってみれば我が学校ははや火の粉がたなびいていた。僕は驚いてすぐ小使室へ行って小使や宿直の先生にしらせ、ばけつに水をくみてでかけた時は早や火はもえ上りたので、もうあかんと思い、かどへでておもはず火事や火事やといっているま、学校はだんだん焼けていく。火の勢があまりつよいので早くだれぞこやよいと思っていると、ラッパをならしながらひけしが近よってきた。蒸気ポンプがすばらしい水のせいでやりだしたが火の勢がつよいとみへて火はしだいにもへていくのでどうなることかと心配して見ていた。しばらくたつと火はもとよりすこししずまった。朝学校を見ますればあはれなありさまとなってしまうが御真影は無事に出たので何よりけっこうであった。

6年2部 村瀬利市

5月17日の夜僕が親類の人と話をしていた時「チャンチャン」と早鐘が聞えたので附近の人にどこと聞いたら岐阜尋常だといったので早速学校へかけつけた。火は2年1部から出火し3年や2年の方へつちぼこりのやうに散らばった。ガラスはパチンパチンとわれかはらはをちてとうとう裏の校舎はどさんとばかりたはれてしまった。巡査は非常線を張り附近の通行をとめてしまった。それから火は表の校舎に燃えうつり、火の粉は焰々と黒煙を空へたなびかせ天は一面真赤となった。そこへ岐阜の1部2部3部を始め加納より消防がきて、こんざつであった。諸村から青年会員は提灯やばけつなどを持ってかけつけてバケツで水をはこんだ。この時杉山先生は御真影室へかけつけ御真影・勅語をまもり一先づ伊奈波の社務所へおうつし申された。消防夫は必死のかくごを以ていっしょうけんめいにふせぎとうとう9時半頃に鎮火した。

6年4部 田代初江

5月17日は私等の日々通学する学校の大火事でありました。その時私は学校の宿題をして居ましたら半鐘が「かんかん」と鳴りましたので、驚いて外へ出て見ると、はや煙が一ぱいでしたからどこかと心配して居りますと学校であると聞きましたから、宿題も其のままにして四ツ辻へ出て見ますと、早や1棟はまるで火に包まれて居るやうで、今にも新校舎へ燃えつかうとして居ました。けれども御真影や御勅語が出たと聞き一安心しました。長い間道に立って見て居りますと、火は段々おさまって来ましたから安心して家へ帰りました。翌朝学校へ来て見ると今まで立派に立って居った学校も今朝は燃えあとはかりになってただ物置・小使室が残って居ました。



児童作文の表紙

5年1部 野々村辰造

17日の夜兄さんと僕は花火を川原へ見に行った。美しい花火が2つ3つあがると、どうじにかねが「かんかん」となったので、僕は寺のかねだといっていたがやがて人が火事だ火事だとさわざだし学校が火事だときいて、学校へとんでいくと今にもむねがおちかけてゐた。火消がラッパをふいたりポンプをひいたりハシゴをかついだりしてとんできて火中へとびこみ、きょうしつの中に入りつくえをほりだしてゐる。家へかへって思ったには焼けたのはかなしいが、御真影や御勅語がぶじにいなば神社へおまつり申したことはうれしかった。そのばんはしんばいでねられなんだ。

5年2部 酒井正道

5月17日の晩ちかくのそらにまっくろなけむりが見えたので兄とともに見に行けば学校の火事であった。ひけしは一心に火のくろをあちらこちらときやしてゐた。近所の家々では屋根の上へあがって火のこに水をかぶせてゐる。火のこは花火のやうに散ってゐる。人のこゑ、ガラスのはぜるおとやら大そうおそろしかった。その時学校はどうなるかと思つてゐた。学校は全部やけてしまった。いかにも残念に思った。けれどもし方がない。御真影は出たときいた時は一先づ安心した。

5年3部 松井敏子

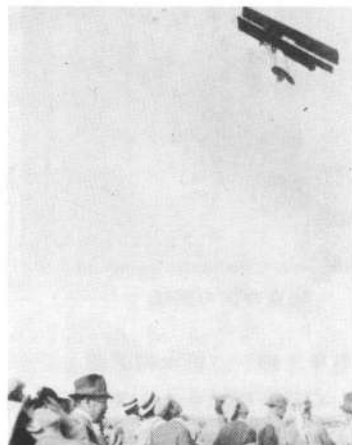
17日の晩は思いがけない大火事であつて私どもの学校は焼けてしまひました。その晩私はよそのこしかけにこしかけて伊藤さんと歌を歌つて遊んでゐました。すると弟が火事だといつてきました。どこだといつて外へ出て見れば早くも火は旧校舎の2階が焼けて居ました。新校舎の2階におまつりしてある御真影はどうか焼けねばよいかと思つてゐました。御真影は焼けずに無事にいなば様へ持って行きなされたと聞いて安心しました。その内に火はずんずんきえていきました。

スミスの飛行機

旧職員

杉村富美子

アート・スミス氏が来て飛行機に乗るといので岐阜市は勿論、近郷近在からそれを見ようと大変な騒ぎです。いよいよその日の5月20日が来ました。岐阜市の小学校の高学年は、長森の歩兵68連隊の練兵場へ大張り切りで集まります。大人たちもそろそろ集まります。そこへ行けない人達は山の上ならよく見えるだろうと権現山へくり出します。私はこの時、岐阜尋常の2年生だったので学校で勉強をしていましたが、スミスの飛行機が長森の練兵場から岐阜の町の上へ飛んでくると思うと勉強もウワの空です。飛んでくる予定の時間がくると、一時授業を停止して運動場へ出してもらいました。組によっては2階の窓から見ているところもあります。来ました来ました、竹トンボのような複葉の飛行機が飛んできました。ワットと揚る喚声、生れて初めて見る飛行機に手をたたき足をふんで大喝采をしました。そのスミス氏が豆自動車に乗ってきて、金華山の七曲り道を岩戸の堀割まで登っていったので、みんな大騒ぎして見に走ったということです。



スミスの宙返り大飛行

学芸会・お伽噺

遠足・運動会の楽しみは昔も今も変わらないものと思います。学芸会は学習の延長そのまま、朗読・談話・劇などをしましたが、照明もなく扮装もふだんのままの対話劇といったもので、時には絵のうまい子が黒板に色チョークで描く程度でした。

そんな時ですからお伽噺やお伽歌劇を見たり、聞いたりすることはうれしいことでした。こんな機会が年に2・3回はあったようです。大正5年には10月1日に3年生以上が岐阜公園の武徳殿でお伽噺をきき、11月8日に伊奈波の明治座で衛生劇を見ました。その他お伽噺を何回もききましたが、当時童話の第一人者であった久留島武彦先生がおいでになってお伽噺をして下さったこともあります。お伽噺劇では、メーテルリンク原作の「青い鳥」を見たのをよく覚えています。

また連鎖劇といって、芝居と芝居の間に映画を入れて一つの劇としたものもありました。映画はこの頃、活動写真といい勿論無声ですから弁士が説明をしたり、声色をつかったりし、音楽のところは楽士が数名いて、舞台の前のしきりの中でブカブカやっていました。

矢野動物園

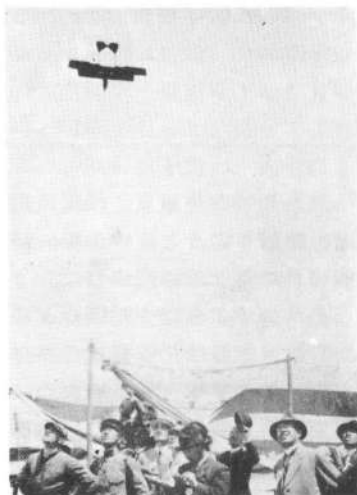
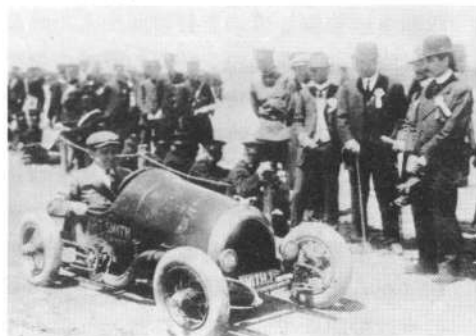
大正5年11月3日、皇太子におなりになった奉祝式が行われ、午後6時から4年以上男子の提灯行列が街中をねり歩き大変な賑わいでした。このお祝いに今小町に矢野動物園がきました。12月18日に学校から全校の子が見につれていってもらいました。象の大きいのにびっくりし、虎や針ねずみや大蛇など見るものすべて珍しいのに目を見張りました。でも何分にも動物がおりの中に入れられて、そのおりが並んでいるだけで、その臭いことといたらたえようがありませんでした。全くその臭さには参ってしまったことの方がよく覚えています。その近くの見世物小屋に、耳の大きな大黒様のようなものが出ていましたが、この方が動物園より印象的でした。その後になって大正8年10月の市制30周年の時にもお祝いに矢野動物園がきました。

月謝と賞状

大正4年までは月謝を納めていました。月謝は1人15銭、2人めからは7銭でした。毎月決まった日に市から吏員が2名学校へみえて月謝を受けとって行かれました。大正5年からは月謝はなくなり市からは集めにみえなくなりました。

この頃の成績の評価は知能学科は10点法、技能学科は上中下の3段階でした。成績がよいと学業優等・業務勤務・操行佳良という事由のついた褒状を1・2学期に、3学期には賞状と賞品とがもらえました。前記の事由項目が1つは3等賞、2つは2等賞、3つは1等賞又は特別賞でした。

豆自動車上のスミス



スミスの木の葉落し大飛行

迷信

この頃でもまだ迷信が一般の人々の間に根強く残っていました。大正7年秋に悪性感冒が全国的に流行しました。岐阜尋常でも10月29日から約2週間休校した程です。さてこの感冒は米騒動で配給になった外米（南京米）を食べたからだという噂がたちました。この予防にはニンニクやトウガラシを粉にして袋に入れ腰に下げるとよいと迷信が横行し、みんな腰からさげました。マスクの使用はこの時から奨励され始めたようです。

奉安殿の話

大正5年5月8日、校庭西南隅に奉安庫を建設しようとその工事に着手し、同年10月27日立派に完成した。

それまでご真影や勅語などは、校舎内に奉置所を設けて安置していた。しかし大正4年の学校火災は校舎内に安置しておく危険を教えてくれた。そこでご真影などを安置する独立の建物を建てることになって、奉安庫ができたのである。

大正5年にできた奉安庫は、普通の建物と異なり、火災に対して絶対に安全であるコンクリート構造である。建物の形は神社様式を取り入れ、荘厳さを増すために、建物の周囲には柵をめぐらしその中に松などを植え、正面には門並びに門扉がとりつけられている。奉安庫を造営した場所は火災・地震などの災害に最も安全な場所とあって、校舎・民家から離れた校庭の西南隅である。当時は体育館の前身の講堂もまだなかった頃で、今でいうと体育館の西端にあたる場所に東向きに建てた。



大正5年

校庭西南隅

奉安庫ができてから、全校朝礼の時に全校児童・職員うち揃って奉安庫に向い最敬礼をした。又登下校の時は、1人1人の子が校門の所で立ち止り、前かけの子は前かけをはずし三角に折って紐にとめ、奉安庫に向って頭が膝につく程、身体を折り曲げて最敬礼をした。



昭和3年

校庭西南隅

儀式の日は、奉安庫の前に全校児童が西向きに整列して式を行い、雨天の時などは中舎2階東端の3教室の隔ての帯戸などをとり払って式場とした。中舎2階東端の教室の東側には奉置所があって、式場では児童は東向きに並んで式を行った。式の前にはご真影などを奉安庫から、式場の奉置所へお移しし、式の後は奉置所から奉安庫へお移ししたが、この奉迎送は静粛な中にも荘厳に行われた。



昭和10年

校庭東南隅

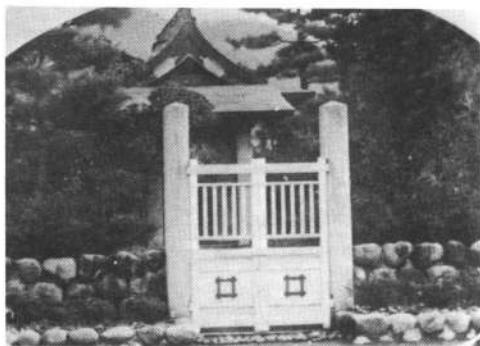
当時、ご真影並びに教育勅語に対する気持は、職員・児童は勿論、一般国民に至るまで、天皇陛下・皇后陛下ご自身に相対するのと同様であった。従ってご真影などの取扱いは鄭重を極め、火災による焼失や風水害による損失は許されなかった。学校火災の時、ご真影を運び出すことができず、自ら割腹して腹中に入れ自らの身体を焼いてもご真影を護り通したという他県の先生の話が美談として伝えられていた。

本校においても大正4年5月17日校舎炎上の際、杉山澤平先生は身を挺して奉置所からご真影などを伊奈波へお移し奉った。その際に受けた傷痕が後頭部に残った。授業中など先生が後向きになられると、学んでいた子どもたちは、その傷痕の工の字の形を見ては、「飛行機」とさ、やきあって、猛火にひるまなかった先生の勇気と責任に感嘆し先生を尊敬したという。

昭和8年、奉安庫のある校庭西南隅に新しく講堂を建設することとなった。そこで奉安庫を校庭東南隅へ移転することになり、同年9月8日工事に着工、同年10月10日完成した。奉安庫が移転した校庭東南隅は、金華の翠峰をうしろに控え、東京の宮城の方角に当り、誠に奉安庫を配する絶好の場所であった。そして奉安庫は学校における最も清浄な場所として、いつも掃き清められ、朝な夕な全校の職員・児童の礼拝する所となった。

昭和12年7月7日日支事変起り、昭和16年12月8日太平洋戦争に突入するや、奉安庫を中心に各行事が展開された。この頃から奉安殿と呼ぶようになった。戦争激化に伴い、奉安殿は皇国の戦捷を祈願し出征兵士の武運長久を祈る場となった。

昭和20年8月15日終戦となり、同年12月31日にご真影などを奉還した。そして21年7月23日奉安殿はとりこわされてしまった。かくして大正5年から30年間の長きにわたり、本校の教育のよりどころとなった奉安殿は、地上から姿を消したのである。



昭和18年

校庭東南隅

子どもの読み物

朝はめいめいばらばらに登行しました。特別の場合の外は全校朝会はなく、ベルの合図で第1時間の授業になりました。従って朝の体操もなく、校長先生のお話を聞く機会も儀式的の時か、先生の転任の時などの外はありませんでした。

教科は修身・読方・書方・算術・歴史・地理・理科・図画・手工・唱歌、それに女子の裁縫がありました。受持は1年から3年まで福田鹿之助先生、4年から5年中頃まで石川清流先生、5年中頃から6年が関谷広蔵先生でした。

石川先生は師範学校を卒業したばかりの文学青年タイプの方で、身体の弱かった私に「坊ちゃん」「滝口入道」などの本をくださって可愛がって下さいました。先生が学校を途中でおやめになって実業界へ入るため神戸の会社へ転任される時には、岐阜駅まで見送って涙をこぼしてお別れしました。それから文通していましたが戦争中途だえ、戦後文通を復活して交際をしていました。先生の影響は私の生涯を通じて大きなものがあります。

文庫部

石川先生のお教えもあって私は子どもの係活動に参加しました。この頃、学校には購買部と文庫部とがあって、そのどちらも私は委員をやりました。購買部は帳面や鉛筆などを売る係で、文庫部は今の図書館のように本を貸し出す係です。文庫部は始め階段下でしたが、後に普通教室を半分に区切って、半分は理科標本室、半分は文庫部になりました。この頃の文庫部は、今の図書館のように自由に本を手にはできなくて、文庫の前の廊

下に向けてある木札（本の名が書いてあって、黒字は在庫、木札の裏の赤字は貸し出し中）を見て、窓口から委員に本を借りるのでした。本の冊数はぶらさげてある木札の数だけでしたから、しれたものでした。又風紀当番がありました。みんなきまりをよく守り問題もなかったようです。

この頃の服装（他所行き）

6年2部



子どもの読み物

この頃の雑誌には、日本少年・少年倶楽部・少年世界がありました。その中で日本少年が一番売れゆきがよくて7割もありました。どの雑誌も漫画は少なく、読み物ばかりでした。中でも巖谷小波の小説は人気がよく、みんな夢中になって読んだものです。その巖谷小波先生が私達の学校へおい

でになって、お伽講演と銘うってお話をして下さいました。「一休さん」のお話でしたが、兎に角面白いお話でみんな大喜びでした。

進学準備

関谷先生はそれは堅い先生で、実に熱心に教えて下さいました。この頃、男子の進む学校は2校しかなくて岐阜中学と岐阜商業だけでした。ですから進学率は物凄くきびしくて岐阜中学は12人に1人、岐阜商業は15人に1人しか入れませんでした。又入学者の中、6年から直通で入学する者が7割位で、あとの3割位は6年卒で入れなくて、高等科1年修了とか2年卒業で入った者です。こんな状況ですから親も子も入学試験に一生懸命で、6年の2学期始めから準備教育をしてもらいました。学級の中の進学希望者は、放課後教室に残って2時間位読方・算術を教えてもらいました。テキストは試験問題集を使いました。おかげで私は岐阜商業へ入ることができました。共に喜んで下さった関谷先生はその後幾年もた、ずに他界され残念なことです。

服装

この頃の男子の服装は、丸刈りの頭に学生帽子（夏は白布をかぶせた）をかぶり、木綿のかすり（又は立縞）の着物を着て下駄をはきました。洋服や靴の子はなかったのです。式の時は袴をはきました。雨天の時は日和かぶくりの下駄をはいて奴傘をさしました。奴傘というのは番傘の小型のもので大い傘のふちに黒い輪がかいてありました。肩から斜めにズック（色は草色）の鞆をかけました。鞆の中には教科書、帳面、赤白帽子（底なし）、絵具（クレヨンはなかったので1年から3年は墨絵、4年以上は水彩画で絵具は陶器製の小皿に1つずつ塗ってある）を入れました。

女子の服装は木綿のかすり（又は立縞）の着物を着て、式の時は木綿の紋付に袴をはき、髪にはりボンをつけた子もいました。



この頃の服装（他所行き）

6年4部

大正7年度卒 本町3 市橋庄次郎談

大正のくらし

小学生の頃を思い出すと、まっ先にまぶたに浮ぶのは1年から6年まで6ヶ年間受け持っていた近藤卯三郎先生の事です。先生は中柄のでっぶりした身体つきでドジョーひげをはやしてみえました。授業中いたずらや他見をしていると、後ろからきていきなり子どもの頭を上から先生の5本の指でつかまれました。さすがの横着坊も頭を動かすことができず、そのまゝしばらく前を向いていたものです。今から想えばそんな事もつかしきでいっぱいです。

大正4年5月に学校が焼けて、私達2年生は明德小へ通いました。明德小では「焼け出され」といっていじめられました。そんなある朝、学校へ登校して忘れ物を思い出しあわて、走って家へとりに帰りました。母はおくれるから電車に乗りなさいといっって本町の電停まで送って下さいました。それでどうやら始業に間に合ったのですが、その日授業が終って家へ帰ると母が寝ています。どうしたのかと聞くと、母は私を本町の電停で見送って家へ帰る途中、道で転んで急に産気づき大騒ぎをしたということです。私はもう心配でたまりませんでした。幸に丈夫な男の子が産れました。子どもの頃を想えば、世話を下さった母の面影や仕草が今も臉に浮びます。

建物

この頃の家並みは殆んど木造で、その中で人目をひくのは西洋館と呼んでいた建物です。米屋町の勅使河原商店（現存）岐阜貯蓄銀行（現存）などで、大正8年10月25日に市庁舎ができました。これは市制30周年を記念して作られたもので、当時岐阜の偉観として自慢したものです。

照明

私の家では大正5年頃まで、ランプと電燈とを併用していました。その後は電燈だけになりました。どの家でも5燭か10燭の電球を1個か2個つけていただけでした。それでコードを長くしておいて1個の電球をあちこちの部屋へ持って行って使ったものです。料金は今のようないくらでなく、1燈いくらという定額料金でした。

炊事

井戸は土管が幾つも積んであって、前はつるべだったのですが、この頃は井戸に木の蓋をしポンプがのせてありました。炊事のくどや流しは、どこの家でも母屋の土間を通り抜けた母屋の裏の庇の下にありました。それで吹きさらしですから、雨の日や風の日は大変でした。風呂は大いの家にはなく、みんな風呂屋へ行きました。下水は長良や岩崎あたりから汲みとりに来てくれました。ごみは家の前の、石油の空箱で作ったごみ箱に入れておくと、市から箱車がきてもっていきました。



長良橋のかけかえ（木橋と鉄橋）大正4年

乗物

明治の終りから始まった道路の拡張や長良橋の架けかえや、市内電車の開通によって岐阜の町も近代的な市街へと脱皮しました。市内電車は3区（駅前―柳ヶ瀬―伊奈波―長良）になっていて、1区間が2銭でした。これは当時の物価に比べて高く大い歩いたものです。私は今の丸物の向いの国技館へ活動写真を見に行くのに、家で入場料5銭もらって喜び勇んで往復歩いたものでした。

この頃、今のタクシーの役目をしていたのは人力車で、その帳場が本町1丁目や魚屋町や伊奈波などにあって繁昌していました。中でも本町1丁目の帳場（電車の曲り角の東北角）は大きくて、その道ばたにポンプ井戸がありました。この井戸水は減法冷たくてうまいという評判で、帳場の人力車夫は勿論、道行く馬方や大八車をひく人夫達が足を止めて、ゴクゴクうまそうに飲んでいました。

自動車は官庁位にしかなく珍しいものでした。自転車は一般の家へも次第に普及し始めていました。今のトラックの役目をしていたのは、大八車や馬車でした。

岐阜公園

岐阜公園は明治43年山頂に模擬天守閣ができ、大正6年長良橋の廃材で三重塔、大正7年板垣伯銅像（今の噴水から東へ行った広場の東のはしに建ったが、戦争中供出し戦後今の所に再建した）大正8年名和昆虫博物館が次々と建設されました。しかしまだこの頃は人もなく、草は生え林や藪があちこちにあって淋しい所でした。そして普通の日は近所の子どもの遊び場で校下の人たちが椎の実拾いに行く位でした。

縁日

岐阜の盛り場は次第に伊奈波や七軒町から柳ヶ瀬へ移って、柳ヶ瀬には芝居小屋や活動写真の小屋が次々と建ちました。

又庶民の楽しみの一つは縁日でした。伊奈波のみそぎのはらい（6月30日）大仏のおせがき（7月15日）長良の川祭（7月16日）木挽町地藏祭（7月21日）材木町地藏祭（7月23日）万力町地藏祭（8月24日）以上は夜の縁日でカンテラやローソクをともした夜店がずらりと並びました。

昼間は美江寺祭（1月31日）と春秋のお彼岸でした。お彼岸には大仏・お西・お東のお寺を人々がお参りし、どうどうと流れるように3ヶ寺を廻りました。

どの縁日も子どもたちや奉公人が指折り数えて待ちました。縁日がやってくるど、2銭とか5銭もらって喜び勇んで出かけ駄菓子を買ったりしたものです。

大正8年度卒 松下町 堀田保男談

パンパン遊び

1・2年の時の受持は渡辺志な先生、それから紋結武一先生・遠藤清九郎先生で大変お世話になりました。6年生の修学旅行は彦根・多賀へ喜び勇んで行って楽しかった事や、運動会が10月28日で少し寒かったのでシャツとパンツで走りまくった事などを、今でもはっきり思い出します。

6年生の夏休みには受験準備のため、分厚い参考書を買って勉強をしました。9月からは当時「準備」と呼んでいた入試の準備が始まって、受験希望者は放課後残って1時間から2時間位、先生に教えてもらいました。当時の入試は今と較べて何倍もむづかしかったのですが、どの親も子どもに「勉強・勉強」と口やかましく云うことはなく、子どもは準備は当然と考えて少しも苦痛には思いませんでした。私は岐阜商業を受験し、入学志願者が560人もありましたが、首尾よく96名の合格者の中に入り、岐阜商業へ進んだのでした。

食事

この頃の食事はどこの家でも主食が麦飯でおかずは野菜でした。野菜は季節にとれた物を、煮たり汁の実にしたり漬け物にしたりしたのです。魚は鰯の丸干しやさくら干しなどの干物が多く、秋には季節のさんまが安く出廻りみんなそれを食べました。

私の家は父が食通で食べ物だけは普通の家よりぜいたくでした。父は麦飯がきらいだったので白米を食べ、おかずは野菜や魚の干物の外に、父の好物の生魚や肉も食べました。肉は牛肉が主で、この頃豚肉はなかったようで鶏肉は高値だったからです。お祭やお祝い事の時は、どの家でも白飯や赤飯を炊いてお祝いし、生魚や肉も添えて食べました。

年末には大てい家で正月の餅をつきましたが、私の家は年末いそがしいので、餅屋に頼んでついてもらっていました。どの家でも正月の餅を今より多く用意し、正月にはウンと食べたものです。よく食べる大人は、今より大きな切餅を1度に15個も20個も食べ、子どもでも7個・8個は食べました。そして正月の朝は食べた餅の数の多いのを自慢したものです。今は餅がなくなると、又餅をついて食べますが、この頃は年末に一度に沢山つきました。それで1月中旬になると餅にかびが生えます。そうすると水の中へつけておいて食べました。

又おやつ用に餅をうすく切ったり、細かく切って、へゲやアラレを家で作っておきました。私の子どもの頃は、学校から帰ると、このへゲやアラレを食べたり、1銭玉をもらって走って駄菓子屋へ行き、アメ玉やカンカン玉などの駄菓子を買って、それを食べては遊んだものです。

遊び

子どもの頃はいろいろの事をして遊んだものです。パンパン・ベースボール・ハンドテニス・ボール投げ・カッチン玉・陣とり・うつし絵、夏には花火・水泳ぎ、秋には山遊び・椎の実拾い・杉鉄砲・紙鉄砲・コンニャク玉遊び、冬には高足・竹トンボ・凧あげ・こま廻し・縄とび・雪だるま・坊主めくり・いろはカルタなどです。

上の遊びの中で一番よく遊んだのはパンパンです。私たちが使ったパンパンは形が小さな円形で大きさは今の百円硬貨位で、ボール紙の上に極彩色の絵が貼ってありました。テバに使うのは硬くて重くなるように、子どもはみんな工夫をこらしたものです。私はよく煮てどろどろになった蠟の中へ、パンパンを入れてすぐとり出し、蠟でパンパンにしました。

パンパンの遊び方は、子どもが同じ枚数のパンパンを出し合って、それを積みます、ジャンケンで勝った子が自分のテバで積みあげた一番上のを打ちます。打った時にひっくり返ったパンパンがあればそれは打った子の物になります。それから次の子、次の子と順番にやります。積んだパンパンがなくなれば1回の終りで、又始めからやる訳です。

勝ったり負けたりして、手持ちのパンパンが多くなったり、少なくなったりするので私たちはパンパンを箱に入れて大切にしていました。けれども学校では止められていましたので、学校へは持っていきませんでした。

パンパンの次によく遊んだのはベースボールで、この頃はベースと呼んでいました。球はゴムまりで、バットは使わず手で打ちました。ベースをする場所は家の前の道路で、ベースは道の東の電柱と西の電柱とホームとの3ヶ所で、三角ベースが普通でした。このベースに使うボールでハンドテニスもしました。ハンドテニスは地面に四角をかいておいて、その中で手で打ってテニスのまねをします。ボール1つあれば、ベースもできるし、ハンドテニスもボール投げもできるので、ボールは子どもにとって恰好な遊び道具でした。

権現山でもよく遊びました。伊奈波の忠魂碑から右へ登って鐘つき堂へ行く途中に大きな岩が2つありました。この2つの岩に私たちは名前をつけ、こゝを根拠地にして両軍に分かれて、山の中をかけずり廻り棒切れで木の幹や枝をたたいてはやし立て、戦争ごっこをしました。時にはこの気に入っている岩に登って腰かけ、友だちと何となく話をしていたこともあります。秋には椎の実拾いに、この岩の辺や伊奈波神社の北や東の辺へ出かけました。

杉鉄砲や紙鉄砲、竹トンボや高足は自分で作りました。高足は普通竹馬といっているもので、この頃はタカシと呼んでいました。私はそのタカシに乗って、自分の家の2階の庇に腰かけたことを覚えていますから、今から考えると随分高いタカシに乗ったのだと今更ながら驚いたり感心したりします。

大正9年度卒 米屋町 小坂井英司談

かくれんぼ

小学生の頃は、五島 静先生、渡辺隆徳先生、田中すゑ先生に受持ってもらって大変お世話になりました。6年生の時、岐阜劇場で東宮殿下のご渡御の活動写真を学校から見に行ったことや、秋の彼岸の終りの日に大風が吹いて学校の南舎が倒れたことなどを覚えています。

子どもの頃、私は発育がよく背が女子で一番高かったので、いつも陸上の選手に出されました。この頃の陸上は走る種目だけで、トラック1周とかりレーでした。市内の小学校対校陸上競技は岐阜中学や岐阜公園グラウンドなどで行われましたが、私は岐阜尋常のために奮闘し、いつも1等をとりました。

服装

この頃の女の子は髪をうしろに束ねてぐるぐる巻いていました。ハイカラな少数の子は髪を左右に分けて、それをそれぞれ三つ編みにし、それを頭の後ろでまとめてぐるぐる巻きにしていました。

着物は木綿か少数の子はモスリンで、柄はかすりか立縞で、筒袖か元禄袖にしていました。普通の日でも袴をはいてくる子がいました。袴は大い木綿のえび茶色でしたが、紫色や、生地が毛の子も若干いました。

学校ではきかえる上ばき用のあさうら草履を入れた草履袋を持って、下駄をはいて登校しました。雨降りの日は高ぶくりをはきました。儀式の日は、黒の木綿の紋付きを着て、袴をはいて身なりを整えました。

女の子はみんな着物の当時に私だけ洋服を着たことがあります。それは何とも恥づかしく顔をあげることもできん位でした。11月17日の修学旅行に日帰り、京都・桃山へ参りました。私が洋服を着たのはこの時のことです。それは当時、父は製紙の原料を取扱っていた関係で東京や大阪などへよく出かけ大都会の女の子の身なりを見てきていました。それで父は修学旅行位は都会の子に負けんように洋服を着なさいと有無をいわせず洋服屋に寸法を測らせて洋服を作らせて下さいました。

その洋服はウールの生地で色がグリーンのワンピースでした。それを着て、服と同じ布で作った帽子をかぶり、黒の木綿の靴下に黒の皮靴といういでたちですから誰の目にもすぐ止ります。みんなからジロジロ見られて恥づかしく、京都や桃山の見学どころではなく、背の高い身体を小さくしてやっとの思いで帰ってきました。修学旅行は父のいっつけで洋服を着ましたが、その後学校へは一度も洋服を着ていきませんでした。女の子が洋服を着だしたのは、その後数年もたない位で、10年後には珍しくもないあたりまえになってしまいました。

食事

この頃の食事はどこの家でも麦飯に野菜でした。ご飯にはどこの家でも大なり小なり麦を入れたものです。それは白米ばかりではお金もかゝるし、脚気の病気にかゝるからでした。おかずは野菜の煮物や汁の実や漬物でしたが、店の商いがうまくいく時には料理屋から魚の照焼きとか煮つけを取りよせて店の奉公人に振る舞いました。肉は殆んど食べませんでした。私の子どもの頃は店に奉公人が住込みで8人と女中が2人いて、それに家族と一緒に食べるのですから壮観な眺めでした。家族は1人づつお膳ですが、奉公人や女中は箱膳を使っていました。みんなが食べ放題食べて働くのですから、食物を沢山炊いても面白い位なくなります。それで年末には餅を12臼つき、秋には大根漬を20桶も漬けたものでした。

手伝い

店には人手があったので家業の手伝いはしませんでした。炊事など女の仕事を手の足りない時に手伝いました。ご飯はオカ粉で炊いていましたが、炊いている中にオカ粉が少なくなるとオカ粉を箕ですくってきて足してやりました。年中で女手の一番いるのは大根漬です。母も女中もみんな懸命です。私は大根の頭を切り落したり、大小に分けたりする仕事をして手伝ったものです。

この頃はもうランプは使わず電燈でした。私が入学前にはガス燈も使っていたのを覚えています。母は躰のきびしい方で、女の子がお金を持って菓子を買に行くものではありませんと云って、小づかいはもらえませんでした。その代りに家で作ったヘゲやアラレや、時々菓子屋が売りにきた駄菓子を買っておいて下さいました。

遊び

母は「女の子は家の外で遊ぶものではありません、家の中や屋敷の中で遊びなさい」といわれました。この頃はどこの家でも、女の子は夜外へ出さないのが建前だったのです。幸に私の家は屋敷も広く倉も4つあったので、仲のよい友だちがよってきては遊びました。

一番よく遊んだのは倉の中でかくれんぼをしたことです。倉の中は製紙の原料の雁皮や三極や楮や古紙が荷が入ると山のように積んであったり、荷が出ていくと空っぽになったりしました。ですからかくれんぼするにはうてつけの場所で、心ゆくまで思う存分遊んだものです。

土間でもよく遊びました。土間でまりつきなどをしていると、店の人が邪魔だよなどよく云われたものですが、子どもの事ですから少し借してねといっっては遊んでいました。今から思うと店の人の仕事の邪魔をしたもんだなと思ひ出します。

いろんな遊びをしました。前に出たかくれんぼ・まりつきの他に、おにごっこ・なわとび・チンチンガイコ・陣とり・羽子つき・花火線香・お手玉・あやとり・おはじき・坊主めくり・うつし絵・雪だるま、などで想い出しても楽しい遊びばかりです。

大正10年度卒 今町2 宮嶋政子談

少年野球の始め

私の小さい頃はボール遊びが盛んでした。ボールは今でいう庭球ボールですが、Mの字が赤色で印されていたので、赤Mと子どもたちは呼んでいました。この赤Mでベースや遠投ボールをしました。ベースは用具を何も使わず手で打って、四角ベースや三角ベースを遊ぶ人数に合わせて選んだのでした。又遠投ボールのことを私たちはボール投げと呼んでいました。2組に分れて、ボールを投げて相手の陣地をこしたら勝ちです。投げたボールが陣地に届かず、途中で相手が片手でボールを受けたら10歩前進して敵の方に投げ、両手でボールを受けたら5歩前進して敵の方に投げるのです。学校から帰ってもベースを盛んにやりました。町内対抗のベース・ボール大会もあって小学3年生の頃から私も仲間に入れてもらってやりました。これは子ども達だけが寄って企画してやるもので、大人は何の関係もなく、全く子ども達だけのものでした。会場は上茶屋町を北へ行って、堤防を越した草地でした。この頃は今の用水路はなく、草地の西と東に小さな池がありました。こゝへ上茶屋町・今町・木挽町・大宮町などの子どもが集まって、赤Mのボールを竹の棒で打ってベースをしました。それは誠に楽しい子ども達だけの世界でした。

大正10年以前に陸上大会が行われていましたので、本校にも陸上部(男・女)がありました。又大正10年以前に少年野球大会が公園グラウンドで行われて、私も見たことがあります。そこで大正10年度に入って、私が小学5年生の時、本校に野球部が創設されたのです。林貫治郎先生に軟式野球を教えてもらって、大正10年夏休みに公園グラウンドで行われた少年野球大会に出場しました。私は5年生でしたから補欠でしたが、途中から外野手をつとめました。しかし第1回戦で惜敗し涙をのみました。これがそもそも本校野球部ができて、公式戦の第1回でしかも敗けたのですから口惜しがるのも無理はありません。来年の捲土重来を期して練習に一段と熱を入れました。

公園グラウンドはこの頃、スポーツによく使われて何度も話に出てきますので少し説明をします。岐阜公園グラウンドの位置は今の県立図書館・動物園・板垣退助銅像あたり一帯でした。200米のトラックが楽にとれたので陸上会も行われましたし、軟式野球を行うにも適當の広さですから少年野球もよくこゝで開かれました。この公園グラウンドは元、私の家の所有地でその頃は藪でした。私は幼い頃、父につれられてこの藪へ行き、竹を切ってかついできて家の樋にして屋根にかけたのを覚えています。大正の始め頃、市の求めに応じて私の家がこの藪を市へ売りました。市はこの藪を切り開いてグラウンドを作ったのです。明治から大正の始めまでは淋しい藪が、グラウンドになり、今は大勢の老若男女が集う図書館や動物園などになるとは全く隔世の感がします。

大正11年度、私は6年生になり野球部のレギュラーとなりました。昨年は敗れて涙をのんだので、今年こそはとみんな懸命でした。林貫治郎先生の教えも力が入ってきびしいものでしたが、みんなはそれ以上によく頑張りました。今まで遊びで赤Mばかり使っていたのが軟式ボールで大分勝手がちがいます。それに今まで素手でやっていたのがグローブやミットを手にはめるので、これも勝手がちがいます。その上、今のグローブやミットと違って戦前のものは、手の形を大きくしただけで、しっかりボールをつかまないと弾んでとび出てしまいます。ボールを受けるには力を入れてつかまなければなりませんので、それになれるには苦労したものです。このようにボールの受け方は、それにボールの打ち方、軟式野球のルールなどは林貫治郎先生のお教えによって私たちは次第に身につけました。

毎日の練習は、運動場の西北隅をホーム・ベースにして行いました。子どもの事ですから力が少なくボールを運動場の外まで打つことはありませんでした。練習の時は体操の服装ですが、他校との試合や公式戦の時は、学校に備えつけのユニホームを着ました。それは大正13年の写真のと同じで、胸には桜の花びらの形の中に岐とかいたマークをつけ、ズックの運動靴をはきました。

公式戦の前に練習試合をして実地に覚えようと、当時強いといわれていた安八郡神戸小と7月2日、岐中校庭において練習試合を行いました。さていよいよ少年野球大会の日がきました。場所は公園グラウンド、暑い真夏の日ざしの下で熱戦

をくり展げ、第1回戦、第2回戦と勝ち進み、遂に優勝戦に臨みました。相手は当時球歴が古く強豪といわれた明徳小でした。粘りに粘り、押しに押ししたのですが、我に利あらず遂に惜しくも敗れました。その時はほんとに残念でたまりませんでした。考えてみれば野球部を作って二年目に優勝戦まで勝ち進んだのですから、大した事だったのです。私たちの望みは翌12年・13年と続けて果たして岐阜地区野球大会に優勝し、更らに14年には寝屋川・昭和2年には美吉野・3年には明治神宮球場・4年には藤井寺・5年には京都岡崎球場と何れも全国大会に駒を進め、金華小の名を天下に広めたのであります。

私は岐阜尋常小学校において少年野球を始めたわけですが、岐阜商業においても岐商野球の草分けとなりました。幼い頃、身体が弱くよく欠席した私が小学校の高学年から欠席せず現在益々健康なものも野球で身体を鍛えたおかげだと思います。



野 球 部

大正13年度

大正11年度卒 上茶屋町 吉田清吉談

おきゃんなクラス

旧職員 内木たまゑ

私は大正10年12月5日から岐阜尋常小学校に勤め、11年度は4年3部（女子）12年度は持ち上って5年3部を受持ちました。しかし12年8月末父をなくしましたので13年3月末、学校から職を退いて家庭に入りました。想えば2年4ヶ月の短かい年月でしたが、今でも当時のことを鮮やかになつかしく思い出します。

私の受け持ったクラスは至っておきゃんな子が多い女子組でした。お隣の女子組は東京でいうなら上の手育ち、私の組は下町育ちというところで、ハイカラな子が揃っていました。そして女の子の常として他の組との間が兎角解け合わず、争いの絶え間がありませんでした。これが私の頭痛の種でした。

休み時間でも子ども達と一緒に居て、いざこざが起きると、双方のいう事を聞いて行司をとるのに汗だくでした。従って職員室に居ることは少なく、どうすればよいか、何時になったら仲よくなるかと、それのみを考え案じていました。ですから翌日の教案をかいて家に帰るのはいつも8時すぎになります。ある時、忘れ物をして職員室に行くと、たまたまいられた関谷校長先生が、私の顔をしげしげと御覧になって「頼むぞ、おきゃんな組だからな」とおっしゃいました。私はその温情に感激し、思わず涙をポタポタ落しました。

それでも半年位で友達との争いが少なくなり、その代り学業の争いになり、クラス全体の成績が面白い程上ってきました。おかげで校長先生からはお褒めの言葉を頂くようになりました。私は前任校の美濃小や芥見小の頃からアンダ式教授法が好きで、おかげで地方から参観者があると必ず私の教室を参観して下さいようになりました。それが又私や子どもの励みにもなり大いにハッスルしたものです。

私の組は至ってハイカラで昔の芸者屋の子が多いせいもあって、同じ着物を着ても、下駄から草履に至るまで粹な意気向きを好みました。普通の子の髪はクルクル巻きか目がね髪でしたが、私の組には短かく断髪した子が数名もいました。当時としては今のようなオカっぱ、その頃は断髪といっていましたハイカラだったのです。

体操の時は着物をぬいで、シャツを着て、短いスカートをつけてやりましたが、当時としては流行の尖端をゆく恰好をしていました。この頃から次第にお遊戯が盛んになりました。

関谷校長は学校の子どもの1人、1人の成績までよく知ってみえました。その上、子どもの父母のことまでご存じで、学籍簿などなかなか印を押して返してもらえず、この子がこんな成績の筈がないと云われたものでした。

子どもの読み物

この頃の子どもの読み物は、譚海・少年倶楽部・少女倶楽部などがありました。しかし他の物にくらべて高価なので持っている子は少数でした。それで持っていない子は持っている子に借りては読んだものでした。この頃本屋や夜店やお彼岸などには、月おくれの雑誌の新作や読み古した古雑誌を売っていましたが、子どもたちが何人もたかってよく買っていました。この頃の雑誌は子どもにとって貴重なもので、それはそれは大事にしたものです。

先生の服装

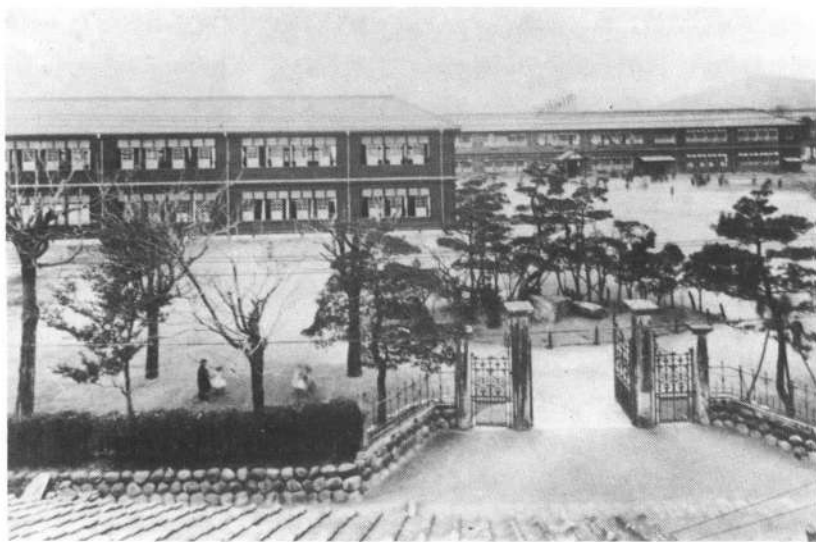
普通の日、校長先生始め男子の先生方は肩など羊かん色にあせた服を召してみえました。それも殆んどが詰襟の服でした。背広などはワイシャツやネクタイなどにお金がかかるので、質素を旨としていられたからです。この頃の世の中では男子の先生の服装は羊かん色の詰襟服が普通だったのです。しかし儀式の日や何か改った時などにはフロックコートや背広を着用されました。

女子の先生方は 203 高地の髪をゆい、木綿の縞か緋の筒袖の着物をきて、えび茶色の袴をはき、日和下駄をはいて登校しました。舎内では草履をはきました。儀式の日には木綿の紋付を着て、えび茶色の袴をはいたのでした。

女子の先生が一番困ったのは体操の時の服装でした。それで色々工夫しました。私たちの頃は、男子の袴と同じように前が割れている袴をはき、袴の裾に輪状にゴム紐を入れておきました。さあ体操の時間という時には、袴の裾を膝上まであげるとゴム紐の弾力でしまって落ちません。これで女子の先生も思う存分とびはねて指導ができました。それにしても女子の先生の服装も又地味で質素なものでした。

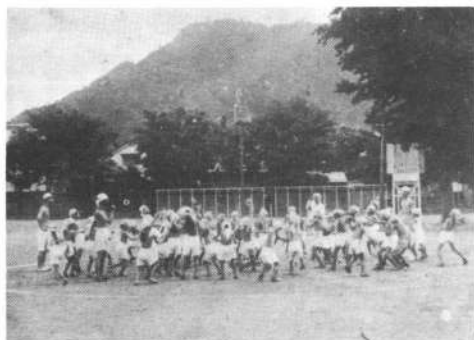
中舎竣工

大正十三年二月十四日



銀 杏 の 木

大正13年9月8日運動場の東並びに南東にあった民家に立ちのいていただき、校地を350坪拡張した。その拡張した中に银杏の木は生えていたのである。银杏の木は護持舎という寺の門のわきに立っていた。護持舎は大工町通りから北へ露地を少し入るとそこに門があって、その門のわきに银杏の木が立っていて、門をくゞりぬけるとこじんまりとした本堂があった。護持舎も両側の民家と共に移転し银杏だけが残ったのである。



夏季学校聚落 遊戯 昭和2年

その頃の银杏の木の様子を高崎甚一先生（大正14～昭和5）に聞くと次のようである。私が着任した頃の银杏の木はまだ細くて若木であった。それから50年たった今は大木になっているのに驚いた。その頃银杏の木の下付近には砂利が敷いてあった。ほこりおさえに衛生上砂利をしておくのだというわけで、砂利をとり除くことは関谷校長から固く禁じられていた。それを関谷校長が遠くへ出張なさると運動の邪魔になるというので運動関係の先生で砂利を少しづつ取り除いて知らん顔をしていた。秋になり黄色に実が熟した頃、スパイクで駆けのぼって実をおとした。翌朝職員朝礼で関谷校長が、近頃先生の中にスパイクで银杏の木にのぼって実をおとするものがいるが银杏の木をいためてしまうから大変よくないと叱られた。関谷校長は私の名前をいわれなかったが、私が真っ赤な顔をしていたので誰の目にも私の仕業だということがわかってしまった。この頃スパイクでのぼれたのだから银杏の幹の太さはまだ細木だったとはい、ながら大体直径が50糎位はあったであろう。

昭和2年の夏季学校聚落の写真に银杏の木が写っている。これを見て子どもの身体と银杏の木の幹の太さを比べると、上記の高崎先生のお話とが合致する。幹の太さもさる事ながら银杏の木の葉の繁り具合は、こんもりとして木全体が伸び盛りの若々しさを感じさせる。

次に伊藤一郎先生（昭和7～13）に伺うと、その頃银杏の木には沢山の実がなっていた。その頃は学校のならわしで他校から転動してきた男子の先生が银杏の木にのぼって長い竹棒で银杏の実をたたき落した。他校から転動してきた女子の先生は木の下で落ちてきた実を拾って俵につめた。これは面白そうであるがやってみると仲々大変な

仕事である。先づのぼるのにひと苦勞、ようやく登ってみると大げさにいえば目の廻るような高さでしかも竹竿を振り廻すのだから大変である。竹竿を振り下してスカをくっては冷汗を何度もかく始末である。

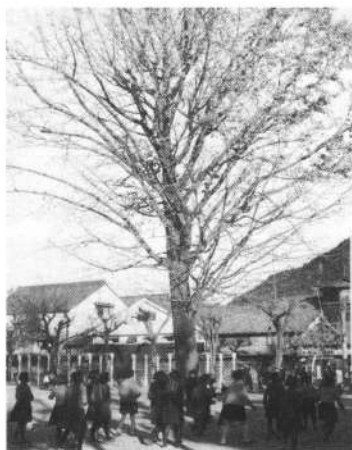
さらに松原英子先生（昭和4～17）も次の銀杏の木にまつわる話をされた。関谷校長は全校朝会で全校児童に「皆さんは銀杏の実を拾わなくてもよろしい。私の方で始末します」と云われた。そして新任の男子の先生は銀杏の木にのぼって竿で実を落とし、新任の女子の先生は銀杏の木の下で落ちた実を拾うことが例であった。私は新任の時に銀杏の実を拾ったのですが果皮の汁がついてかぶれてしまい、かゆくてたまらずその晩風呂に入ったのがいけなかったのでしょう、かぶれは更らにひどくなり大変なめにあった。

以上のお二人の先生の話からこの頃銀杏の実には新任の男女の先生で始末することになっていたのである。だから他校では金華へ転任することはい、が銀杏の実をとらねばならぬぞ、大変だぞ、などと金華へ転任していく先生をおどしていたとかいう話もある位だった。しかしこのならわしも何年かたつと新任の先生だけにまかせず他の元気な先生も好意的に木にのぼったり拾ったりして手助けしていたようである。

昭和15年の写真をみると銀杏の木は幹の太さも木の高さも一段と伸びている。特に大空に向った枝々は若くたくましく、みずみずしく伸び切っている。その姿には青年の意気と潑刺さを感じさせる。



銀杏の木の下で 昭和34年



銀杏の葉拾い 昭和15年

昭和34年になると四方に伸びた枝々は幾年かの風雪に耐えかねて途中からポキリと折れ、折れた所から細い若枝が出ている。これは既に壮年をすぎ老いてきたことを示すものである。

そして現在は帯を何本も上下左右に束ねて1本の柱の上にく、りつけたようになってしまっていて、すっかり老いこんでいる。想えば校地に入ってから今までの50年間、若木から青年に又壮年になり今は老木になるまでの間、本校のシンボルツリーとして、その年々に学んだ何千何万の子どもや先生の心の糧となってきたのである。卒業生に何かを聞けば、必ず開口一番その頃の銀杏の木はと話に出る銀杏は、いつまでも健在であってほしい。

夏季学校聚落

加野史郎

私は大正14年4月、岐阜尋常高等小学校へ入学しました。私は山登りや、セミ取りはすきでなかったのです。ちょうどその頃、体の弱い子どもを集めて夏季学校聚落といって学校で、2・3・4年の男女を120人位訓練して体を丈夫にする会があったのです。私は今のように太ってなくて目方も20キロ位しかなく、体も弱くその上偏食があったので、校医であった私の父にすゝめられて、大正15年の2年生の時と昭和2年の3年生の時に、そこへ入ったのです。

聚落はシャツとパンツの姿で朝八時に登校します。学年別に3教室に分かれて入り、先生が各学年に1人づつおられて朝の勉強が2時間あり、その間に日記（今の夏の友のようなもの）をつけたり、夏休みの勉強をやってしまうのです。勉強がすむと10時のおやつが出ます。そして朝の体温を看護婦さんに計っていただくのです。看護婦さんは三輪先生といって、それはやさしい方でした。検温によって熱のある子をしらべ終ると、天気の日にはパンツ一つになって外で体操や競技をやったりして日光浴をしながら体をきたえました。11時半になるとお昼の食事になります。私達の小学校時代は給食がなかったもので、偏食の子が大変多くいました。私もその1人で、お昼になると



玄関前で記念撮影

昭和2年



運動場で元気に体操

昭和3年

今日はきれいなものが出るのじゃないかといやな気持ちになります。いやなものをかまずに呑みこんで、当時の関谷校長先生にみつかって注意された事をよくおぼえております。聚落は今の給食と同様に何でも食べれるようにするために献立を工夫され、偏食を直す指導をしていただいたものです。

お昼のご飯がすむとみんないっしょに毎日、先生が童話を話して下さったのです。それは大変楽しい時間でした。



廊下でみんな昼寝 昭和3年

1時から2時までは昼寝の時間で、涼しい校舎の廊下で、一列になってみんな昼寝をします。すぐぬる子、いびきをかく子などいろいろでした。私はその頃は昼寝が少しもできず、せみのなく声だけがする静かな校舎でどうしても寝られず、この時間が一番きらいな時間でした。そしてとうとう1日も昼寝をせずに過ぎてしまったのです。

昼寝がすむと水泳で、裏の長良川へみんな一緒に行って泳ぐのです。浮袋などみんな持っていません。しらすしらすのうちに泳げるようになり、だんだん上手になっていったものです。帰ると午後のおやつ時間がまっています。おやつを食べお話し合いをしながら午後の検温でした。それから牛乳をのんで簡単な掃除のあと家へ帰るのです。

こうした行事の間に電車で、犬山や谷汲山へ一日がかりで遠足に行ったり、又はだかのまま岐阜公園や伊奈波神社へ行って宝さがしをやったり、写生をしたり、又運動会をやってほうびをもらったりしたものです。七夕まつりもやって、きれいに飾った後でスイカを切って食べたりした事もありました。又一日中殆んどはだかで暮らすので、黒ん坊大会もありました。色の黒くなった子が1等になるのです。

こうした夏季学校聚落の生活が第1学期の終業式の日の翌日である7月26日頃から8月24日頃まであって、その間に2回位身体検査があって、夏やせの子、反対によく太った子、又病気の有無などで聚落の成績をみるのです。夏季学校聚落は中々楽しいものでした。そして友達同志の間に、喧嘩は1度もなかったようにおぼえています。私の子どもの頃はこんなふうに夏休みがすぎていったもので、平凡な小学生の夏休みであったわけです。（筆者は現、学校医）

付記 市が大正10年より市内各小学校の虚弱児童を集めて、岐阜公園で行った林間聚落は好評で、希望者が多くなったので大正14年より各小学校毎に夏季学校聚落を行った。この行事は本校においては長く続き、昭和12年の記録も残っているそれにしても大正10年から第2次世界大戦前までの長期にわたって、かゝる行事が行われたことは特筆に値する。



長良川で水泳

昭和3年

栄光の少年野球

大正の終りから昭和の始めにかけて、県下に覇を称え全国大会にも幾度も出場した本校の少年野球史は、全職員と紅顔の少年たちとが、若き日の情熱を傾け燃ゆる血潮をたぎらせ汗と涙とで打ちたたえた金字塔である。こゝにその主な戦績と選手の名を掲げ記録とする。

註 下記の表は多くの方のご援助により完成したものである。先ず御礼を申し上げる。又この表は尋常科で作られている。進学先の記入してない者は本校高等科へ進み高等科で活躍している。

中等学校へ進んだ者はその学校の野球部を支え、特に岐商へ進んだ者の中には甲子園等に出場して名選手とうたわれ、今も語り草となっている方が数多い。

この頃の少年野球全国大会は、3つの主催があつてそれぞれ使用ボールを異にし、岐阜県においては下の如く3つのルートがあつた。第1、第2のルートは岐阜地区大会で優勝すると全国大会へ出場できたが、第3ルートは岐阜地区大会で優勝すると尾張地区優勝校と試合をし勝つと全国大会（京都岡崎公園）へ出場することができた。この頃京都岡崎公園で開かれる全国大会は少年野球の最高のものとされていた。しかし岐阜からこれに出場するには当時野球の頗る盛んで強大であつた一宮各小学校と対戦せねばならず、これは至難の業であつた。全国大会は昭和7年からなくなった。

- ① 大垣の岐阜大会で優勝すると大阪の全国大会に出場（寝屋川・美吉野等）
- ② 笠松 " 東京 " （明治神宮）
- ③ 岐阜 " 尾張地区勝者と対戦し勝つと全国大会に出場（京都岡崎公園）

年	月日	戦	績	選手名	守備	当時の住所	進路
大正10		野球部創設					
11	7・	大日本少年野球協会岐阜大会(岐阜公園) 優勝戦 明德 — 本校(敗退)		吉田 清吉		上茶屋町	岐商
12	6・10 7・8	大日本少年野球協会岐阜大会(岐阜公園) 優勝 本校5A-1 明德 同上東海大会に出場					

年	月日	戦	績	選手名	守備	当時の住所	進路
大 正 13	6・15	大日本少年野球協会岐阜大会		村山 元		松屋町	岐阜
	6・22	同 上 本校優勝					
	7・20	同 上 東海大会に出場					
14	6・21	全日本少年野球協会岐阜大会（大垣）		近藤寿八郎	投	伊奈波 2	岐阜
	7・22	同 上 本校優勝		松井 政吉	捕	港町	
	8・5	同 上 全国大会（大阪寝屋川）		北村幸四郎		矢島町高2から	岐阜
	5日	午前7時48分 岐阜駅発		山田 秀雄		本町 4	岐阜
	7日	午後8時 帰岐		藤井鉦二郎	遊	中新町	岐阜
	引卒	近藤・高野・柳原・野中・今川・翠 林・桜井・山田・高崎・鶴飼・加野		矢島 憲三		魚屋町	岐中
塚原 利男					伊奈波 1		
昭 和 元	6・20	大日本少年野球協会岐阜大会（本校）		島崎 勇	投	矢島町	
	6・27	同 上 金華優勝		宇留野由一	捕	元浜町	
	7・11	同 上 岐阜・尾張大会（一宮）		加藤 清	1	松ヶ枝	
		一宮第4小一金華 惜敗		森 幾太郎		魚屋町	岐中
		後に一宮第4小は京都岡崎公園の 全国大会で優勝		藤塚 寅雄		蜂屋町	
				野々村秀雄	遊	今町 4	
				谷川 鉄男		上新町	岐阜
				林 市太郎	外	本町 4	
			日比野政光	外	上新町	岐阜	
2	6・	全日本学童野球連盟岐阜大会（大垣）		横山 貞夫	投	中竹屋	一工
	7・	同 上 金華優勝		市原 秀雄	捕	吉津町 3	
	8・4	同 上 全国大会（奈良美吉野）		吉田 一	1	今町 2	
	4日	出発		神谷利一郎	2	本町 4	岐中
	7日	帰岐		市橋清一郎	3	本町 4	
	引卒	高野・柳原・渡辺・沢田		村瀬 保夫	遊	（5年生）	
	第1回戦	惜敗		北川 晶一	外	下新町	岐阜
		北陸の小13—12金華		市原 利次	外	春日町	岐中
				久保 弘二	外	中大桑	岐阜

年	月日	戦	績	選手名	守備	当時の住所	進路
昭和3	7	全国学童野球協会岐阜大会（笠松）	金華優勝	村瀬 保夫	投	湊町	岐商
	8・18	同 上全国大会（明治神宮）		加藤 春雄	捕	末広町高2から	岐商
		18日 午前6時 岐阜駅発		加野 和彦	1	上新町	岐中
		23日 午前9時10分 帰岐		稲葉 信一	2	大宮町	岐中
		引卒 高野・赤塚・野中・林・河合・加野		杉山 辰夫	3	東材木町	
		第1回戦 勝		藤井本三郎	遊	中新町	岐商
		第2回戦 勝		近藤栄太郎	外	下新町	
	9・8	第3回戦 和歌山西巻小1—0金華 （この大会で西巻小優勝）		岡田 昌二	外	玉井町	
		岐中主催県下少年野球大会		永井 忠雄	外	東材木町	岐商
			優勝 金華尋2A—1明德				
		優勝 金華高5A—0笠松					
4	7・14	全日本学童野球連盟岐阜大会（大垣）		飯沼 武信	投	松下町	岐中
	7・15	同 上 金華優勝		村瀬 竹夫	捕	本町1高2から	師範
	8・3	同 上全国大会（大阪藤井寺）		井上 貞一	1	本町2	二中
		3日 午前9時11分 岐阜駅発		永井 豊治	2	松ヶ枝	岐中
		7日 午後8時 帰岐		阿曾 幸郎	3投	中大桑	岐商
		引卒 高野・加野・林・野中・沢田・西村		松井 忠雄	遊	（5年生）	
		第1回戦 金華3—2奈良郡山		神村 悦司	外	伊奈波1	岐中
		第2回戦 金華12—7豊橋花田		井上 勇	外	伊奈波2	
	9・	第3回戦 堺南旅籠4—1金華		山田八十八	外	（5年生）	
		岐中主催県下少年野球大会					
		優勝 金華4—0明德					
5	6・	大日本少年野球協会岐阜大会（美江寺）	金華優勝	奥住 定雄	投	上新町	岐商
	7・	同 上岐阜・尾張大会（一宮）		古川宗治郎	捕	伊奈波1	
		金華優勝		早川 精一	1	玉井町	岐商
	8・5	同 上全国大会（京都岡崎公園）		西川 清	2	本町5	岐商
		5日 午前8時44分 岐阜駅発		山田八十八	3	矢島町2	
		10日 午後7時27分 帰岐		松井 忠雄	遊	上茶屋	岐中
		引卒 高野・高崎・林		日比野勘平	外	上茶屋	
		第1回戦 金華7—0徳島寺島		萩野 栄治	外	上新町	岐商
		第2回戦 金華5A—4三重有絹		近藤 五朗	外	伊奈波2	
	9・	第3回戦 兵庫精道1—0金華		酒井 武男	補	大宮町1	
岐中主催県下少年野球大会							
		金華優勝					

年	月日	戦	績	選手名	守備	当時の住所	進路
6	4・26	岐阜日日新聞社野球大会に出場		加藤 三郎	投	末広町高2から	岐阜商
	7・	大日本少年野球協会岐阜大会 金華優勝		井上 幸平	捕	大和町	岐阜中
	7・19	同上岐阜・尾張大会(一宮) 一宮第3小1-0金華 (高1へ松井栄造転入、高1修了し岐阜へ)		森 三治郎	1	西材木	岐阜商
7	9・18	市小学校体育連盟野球リーグ戦 高等科優勝		近藤 昇次	2	下新町	
				竹腰	3		
				吉田 末夫	遊	上茶屋	
9	7・11	市小学校体育連盟野球大会(美江寺) 準優勝戦 金華5-1明德		村山 守弘	外	靱屋町	岐阜商
				後藤平八郎	外	山口町	
				伊藤 利夫	投	御手洗	岐阜中
9	7・17	同上 優勝戦 京町1-0金華		天野 武司	捕	西材木	岐阜商
				川瀬 三好	1	松屋町	岐阜商
				安田 義郎	2	中新町	岐阜中
9	10	岐阜日日新聞社野球大会(美江寺) 優勝戦 金華2-0明德 コーチ・白井、引卒 鶴飼・林・市川 (高2在学 西松定一・中野健一・森武雄、岐阜へ)		大野 鋼一	3	今町2	
				清水 豊	遊	中大乗	岐阜商
				加藤 政一	外	末広高2から	岐阜商
11	9・23	岐阜日日新聞社野球大会(京町小) 優勝戦 金華1-0明德		佐治 正夫	外	伊奈波2	
				豊田 善三	外	港町	岐阜商
				13	9・25	岐阜日日新聞社野球大会 金華優勝 金華 一 大垣南	

昭和元年度 選手



昭和9年度 選手



昭和前期

(終戦まで)

少年野球・陸上競技、
角力・籠球・剣道など、
すべての運動に大活躍をし、覇を争う。
映画教育・科学教育・習字・珠算など
教育のすべての分野で時代の尖端をいく。
昭和12年 戦いに突入し、
銃後の教育として
公民教育・労作教育・総合教育を展開し、
金華の名 天下にひびく。

碧空にはためく日章旗

昭和19年度



伊 吹 登 山

旧職員 赤塚重次郎

この頃の伊吹登山は汽車に乗って、それから歩いて伊吹山に登って、汽車に乗って帰ってくるのですから大変なことでした。

当時、汽車に乗るのは一生のうちで修学旅行位のもので、そのほかには汽車に乗ることもなく死んでいったのでした。その上、山に登ることは一般の者には全然なかった時代でした。そんな時に1000米をこす伊吹山に登ろうというのですから、前評判は大したものでした。5年生以上の希望者はぞくぞくと申し出て、128名にも達しました。登山の前夜、参加する子どもの家では父母から激励され、喜びと興奮で眠れぬ一夜を送った子もあったほどでした。

いよいよ登山の日、7月24日の朝がきました。みんな歩いて岐阜駅へ集まりました。汽車に乗りこむと、汽車はシュツ、シュツ、ポッポと走ります。汽車の窓からは、のどかな田園風景が次から次へと移り変わります。関ヶ原をすぎ近江長岡駅へつきました。こゝで下車して伊吹山の麓の伊吹まで歩くのです。暑い真夏の行進ですが、この頃の子どもは歩くことは平気です。伊吹について谷川のほとりの涼しい所でねころんで休憩します。

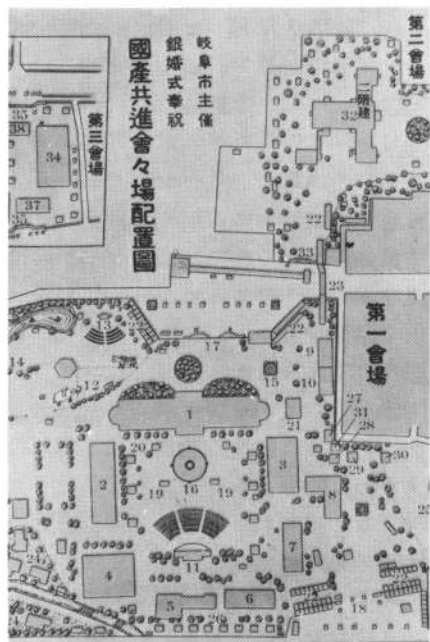
夜中の12時頃から登り始めます。右や左へ曲りくねって急な斜面を登ります。日の出前までに頂上へ登るのです。頂上へ着いて休んでいると日の出です。いよいよ日の出です。東の空、雲海の上に太陽が静々と昇ってくるのを拝むと、何ともいえない荘厳な気持ちになります。誠にすがすがしいよい気分です。涼しい風が吹いてきます。日の丸弁当をひろげ、みんなと話をしながら食べるのは格別楽しいものです。すっかり明るくなって、四方の見はらしがきくようになりました。あれが琵琶湖か、金華山かなどと眺めて、登山の楽しさを充分味わいます。

帰りはもと来た道をたどって帰るのです。山をぼつぼつくだると、きれいな草花がいっぱい咲いています。そこで休んだりして伊吹へ下山しました。伊吹からは近江長岡駅まで歩いて、そこから汽車に乗って岐阜駅で下車して解散しました。子どもたちは岐阜駅から歩いて、それぞれの家へ帰りました。

考えてみると汽車に乗ったほかは、みんな歩いたのです。歩くことは当り前の事でもよくも歩いたものだと思う程です。岐阜の市内だけでも電車に乗ればよいに思うかもしれませんが、当時はそれ位お金を大切にし節約したものです。それにしても、この頃の伊吹登山は子どもの冒険と夢とをそだてる大きな役目をしています。

国産共進会

大正14年9月15日から10月31日まで岐阜市主催で国産共進会が開かれました。場所は美江寺観音の南で、以前刑務所があった跡地約2万坪です。正門は今の美江寺観音東南の十字路のあたりで南へ入ると正面に本館（写真番号1）があってその南には第2本館（2）機械館（3）演芸館（4）朝鮮満蒙館（5）名古屋館（6）九州館（7）東京館（8）などが整然と並んでいます。どの建物も大きくやたらにペンキで黄・赤・青などケバケバしくぬってあります。各館の中には各地の特産物が所狭しと並べてあって、田舎からできたお爺さんなど大きな口をあけてびっくりして見えています。どの館も満員で、景気をおおりたため蓄音機の音がかなりたて、います。中央の広場には水晶塔（16）があって、くたびれた人々が休んだり弁当を食べています。あちこちの売店では大声で口上をのべお客を呼んでいます。その中で即席吸物はおぼろ昆布に桜の花びらなどを入れお湯を注いですぐできます。1口飲んで「こりやうまい」と買って行く人が沢山いました。子どもや学生に人気のあったのは東郷堂カメラでまっ黒な箱に穴のあいたボックス型カメラが珍しかったのです。国産共進会がすんでその跡地はオートバイ競走に使ったり、野球場になったりしましたが、今はその真ん中を平和通が貫き市民会館・中警察署・中部配電・裁判所になっています。



会場配置図

正門 向うに本館が見える



向って右から演芸館・朝鮮館・名古屋館



着物から洋服へ

旧職員 山田義三郎

第1次世界大戦の影響で好景気な大正の時もあったが、その反動として不景気が次第に押し寄せてきた。昭和の始めはそういう時で、人々の生活は苦しく小学生の服装も質素なものであった。破れたら縫い、穴があいたら他の布でふさいだ。

平素は多くの子が木綿の立稿の着物を着ていた。一部分の子はかすりの着物を着ていた。写真でも撮ったり、他所へ行く時はかすりの着物を着ている子がふえた。そして大部分の子が腰から下に、いわゆる「前かけ」をぶらさげていた。特に女子の「前かけ」はいろいろの色物で美しかった。着物を汚さぬようにとの心づかいと、女子にふさわしい優しさと美しさを添えるものであった。ですから「前かけ」は身なりの一部でもあったわけである。冬は着物の上に羽織を着る。羽織の紐のつけている子も、つけていない子もいた。女子は「ひふ」を着物の上に着ている子もいた。

式の時

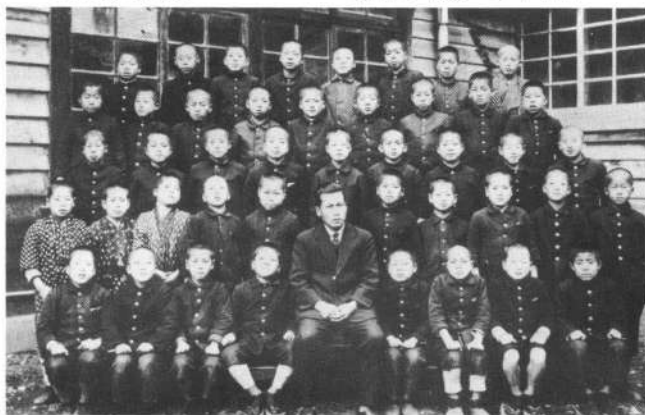
式の時など改まった時には、男子はかすりの着物を着て、折り目正しい縦縞の袴をはいた。女子は紋付を着て、海老茶の袴をはき、白足袋を着用した。ただしこの服装をする子は組で2割位で、大部分の子は平素よりましな恰好をしていた。男子も女子も平素から袴をつけている子が少数はいた。

洋服

洋服は大正の終りから急激に普及し始め、この頃は男子は7割位が着用していた。そして昭和6年頃には男子は全員が洋服を着るようになった。男子の洋服は木綿の小倉服で、殆んど折襟であった。

この頃の服装

昭和3年度 6年1部



女子の洋服の普及は男子より少しおくれ、この頃組で2人か3人が平素洋服だった。セーラー服を着、ストッキングに靴をはいてリボンでもつけていれば校内で人目をひいた。これが先導的存在となって、昭和10年頃にはセーラー服を主体とした洋服を全員が着た。



この頃の服装

昭和3年度 6年5部

履物

履物は着物の子は下駄か草履であった。女の子は赤い鼻緒の日和もはいていた。洋服の子は靴をはいたが、着物の子も靴をはいた。靴の方が運動に便利だからである。靴といっても、まだズック靴はなかったのでゴム靴が大部分で、中にはまれに皮靴をはいていた。ゴム靴は黒色の普通のゴム

靴もあったが、茶黒色の半透明なアメゴム靴が流行しだした。

ゴム靴は雨が降っても足がぬれず、運動にも都合よく、下駄や草履に較べて耐久力もあり重宝がられていた。しかし平素は素足でゴム靴をはくので、長時間はいていると足の汗とほこりとが入り交って、足先に真っ黒な垢がよれよれにつく。ゴム靴をぬぐと何とも云えぬ不快な臭気を発散する。特に汗の出る夏などの臭気は大変なもので、ゴム靴をぬぐと、すぐ足を洗ったものだ。ズック靴（アサヒ靴）がこの短所にこたえて普及しはじめたのは、大分あとの話である。

運動の時

この頃は運動が頗る盛んな時で、体操の時間にも運動を盛んに行った。洋服の子はよいが、着物の子はできるだけ軽装になるよう羽織をぬがせたりなどした。草履の子もいれば靴ばきもいれば、下駄をぬいで素足の子もいた。多くの子が着物をきて、アメゴム靴をはいた珍妙な恰好で体操をやったのである。今から思えば不便・不合理でも、その当時はおかしくもない当り前のことだった。

運動会の時は、白シャツに白パンツになった。そして真新しい運動タビを買ってもらってはいた。運動タビというのは、普通の足袋の形をしていて、ちがっているのは、真白い木綿で作ってあって、底にもう1枚厚い布がぬいつけてあって、足首にゴムが入っていた。運動タビをはくと足首のゴムでしまっけて脱げないようにできていた。又足先が親指だけ分れているので走るのに力が入り走りよかった。

私が担任した組の出来事である。ある子が自分の腰掛に坐蒲団をくゝりつけた。ところが他の子が中に何が入っているのか気づいたらしい。その坐蒲団をあたりかまわずたゝきつけて中の物を出そうとした。これが休み時間の出来事で、私が授業のため教室に入ると、組の子がみんなくしゃみをし、中には涙を出していた。中に何が入っていたかお察しいただきたい。親が子への愛情は今も昔も変りないものである。

女子陸上に活躍

旧職員 鶴飼由己

この頃岐阜市の小学校では一口でいうと体格作りを中心にした各種の運動競技がとても盛んで活気に満ちあふれていました。それにひきかえ田舎の学校では火の消えたような感じでした。

陸上競技では岐阜日日新聞社・岐阜市体育連盟・京町小学校オリンピック大会・富田女学校・竹鼻小学校・笠松青年会等の主催で9月から10月いっぱいにかけて大会が催され、それぞれの大会に出場したものです。

本校では年度始め学校の経営方針・事務分掌などをきめスタートしますが夫々責任を果たし、研究授業・父兄懇談会が開かれます。特に父兄懇談会は父兄方の出席率が90%~98%で極めて良好でした。夏休が終って2学期に入るともう落ちついてはいられません。競技練習が始まり毎日放課後は運動場に出て指導します。それに運動会の練習を放課後にする時もあり又職員野球の練習もあって日々をいそがしきで送り、次第に充実していきます。

この頃本校の運動部の内容は野球部・陸上競技部・相撲部・籠球部でした。運動部長には高野先生があたり全体をひきまわされました。野球部は県下一の名門校で高野先生・林先生・加納先生・白井先生などがあたられました。陸上競技部では永田先生・高崎先生が全体の指導にあたられ、その下に各学年・学級の担任がつかしました。尚他に本校職員の中でテングクラブを組織し、市内小学校の職員対抗野球リーグ戦に出場しました。

市内の小学校で陸上競技の強いのは徹明と白山です。色が黒く頑丈な身体つきでよく走る子が揃っていました。金華は何となく上品でお坊ちゃんお嬢さん育ちの感じがありましたが、絶ゆまない練習によって実力をつけ堂々と戦いました。本校の運動場には1周200米のトラックが正確に作られ、又直線100米のコースもできていました。100米のスタートは東門入口西側でゴールは南舎南側のテニスコートでした。

陸上競技の練習は放課後選手が学校より支給のユニフォームに着がえて始まります。半袖・パンツは男女とも赤線入りが金華のしるしです。出席点呼、水まき、ライン引き、準備運動をしてトラックを並んで走ります。次はスタート練習です。クラウチングスタート法でオンユアーマーク・ゲット・セット・発砲です。手のつき方、上体のかがめ方について理論的に指導します。バトン練習は徹底的に行います。一度手にしたバトンはたたかれても絶対に落さぬよう固く握りしめて前後に正しくふって走ります。タイムの測定をしてマークします。

京町小主催オリンピック大会で優勝

昭和3年には尋女・高女ともにトラック・フィールド競技に自信のもてるきびきびした生徒がいましたので、この分なら宿敵を破ることができるのではないかと期待していました。10月13日、さあ大会の前日となりました。この日は軽い練習にと、バトンタッチだけは丹念に練習をしました。練習が終ると選手を集めて、次のような話をしました。いよいよ明日は日頃練習に励んできた目あての競技大会の日であります。皆さん方は学校の名誉のためベストを尽して下さることを信じています。お家へ帰ったら、お母さんによく話してごちそうをしてもらい、お湯をすまして早く休んで下さい。明日、学校へ集合するのは8時です。

10月14日、いよいよ大会の日です。出席確認異常なし。開会式をすまし所定の控席に落ちつき進行を待ちました。午前中予選でしたが無事通過しました。午後より各種目の決勝が進みましたが、がぜん1点差の大接戦となり、優勝の行方はリレーの優勝にかかることになりました。

リレーの採点は1着6点、2着4点、3着2点です。金華が1着とれば総合優勝、もし2着になれば1点差で総合優勝ならずの瀬戸際です。出場校、金華・徹明・白山・長良と呼ばれました。

今はもう祈りあるのみです。スタートしました。マークした相手校と金華は並んで手に汗にぎる大接戦です。かたずをのんで見守ること1分3秒。最終ランナーがよくがんばり僅か1米の差で1着、ゴールイン。リレーに優勝し、総合で優勝しました。かくして尋女・高女ともに優勝したのです。校長室の隣りの優勝旗置場に又2本ふえて十数本になりました。今当時をふりかえると感慨無量です。私たち職員は若さでぶつかりましたし、子どもたちもよくその期待にこたえてくれたのでした。

野球に陸上に優勝を勝ちとった運動部



児童文集「金華」

昭和3年度から毎年、本校の綴方研究部が児童文集「金華」を発行した。昭和3年度は前期2冊（尋4以下・尋5以下）後期2冊（尋4以下・尋5以上）としたが、昭和4年度からは尋4以上・尋5以上の2冊とした。何れも120頁位、活版刷りのもので、それぞれ百人位の綴方を収め、1編づつに短い評がついている。これによって作文指導がいかにか熱心に行われたかが伺える。こゝにはその中からその頃の生活がにじみでているものを掲げる。

夜店 6年 加藤龍三 昭和3年度

ジリジリとしたやにこい汗を、行水でサッパリと流して涼しい風に吹かれながら、伊奈波通りの夜店を見に行った。

人が大分出ている。通る人が皆、夜店の方を見て行くので、顔が皆電燈に照らされる。玩具店の福助の噴水はチョイ、チョイとえらそうに腹の太鼓をた、いている。水なぶりの玩具がたくさん出している、小さい子が7人位ほしうに見ている。大人の人がたくさん立ちどまっているのは茶碗の早売である。何だかおかしい事をしゃべっては人を笑はせている。バナナを売る人がしきりにしゃべっているが買う人が少ない。かぼちゃ、なす、きうり、いもなどの野菜の店の前には女の人が立っている。僕は学用品の投売の店で5銭のノートが3冊く、ってあるのを10銭で買って伊奈波様へお参りして帰った。

評 夜店の有様がよく書けている。

夜 6年 川村鈴子 昭和3年度

向側の金物屋の戸は、とうに締っている。角の交番の赤い電燈が火の玉のように薄はんやりと、ともっている。

店の帳場にはお父さんが今月の掛取の整理をして見える。私は中の中で勉強をしているが時々眠気がさして来るのでうっとりする。あゝ、そうだ、こんな時眠ってしまったら勉強がお留守になってしまう。昔の人で錐で膝を突いては眠りをこらえた人があったのを思い出して鉛筆で膝を突いて見たが其時たゞ痛みをかんだだけでやはりねむくなる。夜は刻一刻と更けて行く。表通りも大分人通りが少なくなった。やがて静けさを破って按摩の笛の音がかすかに聞えて来る。それにつれて権現山の鐘がごーん、ごーんと十時を知らせた。もう一問題と元気を出して算術をやりにかゝった。

評 感心感心、そこが即ち忍耐である。

日の丸の旗 6年 佐藤富治 昭和4年度

いなばから帰って自分の室に入った。弟が僕の机で一心に書いている。そっとのぞくと僕の新しい絵具を皿に置いて半紙にぬりたくって日の丸の旗をこしらえているのだ。「だれにことはって絵具を使った」といって絵具をひたくった。その拍子に絵具皿があかって旗は目茶苦茶になってしまった。

「前へ進めっ、おいちに」近所の子供が兵隊ごっこをしている。僕は本をふせて表のかうしの間から見た。鉄夫君が木刀をさげて木鉄砲をかついで大將きどりで号令をかけている。その後から小さい兵隊さんが日の丸の旗をかついで真面目について行く。僕はふき出したが僕の目の木のかげでしょんぼり立ってうらめしそうに見ている弟の姿を見た時はと思った。「旗がないから。そうだ。旗がないから仲間はずれにされたのだ」僕はおもはず目からなみだが出た。

その夜はは早くねた。その可愛らしい寝顔を見て僕はたまらなくなつた。すぐ机に向って真赤な絵具をといて二枚の日の丸の旗をつくって、弟のまくらもとにおいた。明日は、これでおもしろく遊んでくれと心の中でいのつた。

評 弟を思う情が表はれてよい。文もしっかりしている。

綴方の時間 6年 宮島康治 昭和5年度

僕は今机に向って居る。どの教室も静まった。唯6年2部の教室だけが八釜しい。今は綴方の時間だ。先生は見えない。それだから八釜しいのである。

山田君などは変な声を出して長唄の真似をして居る。堂々と演説をやっているものもある。後を向いて話をして居る者もある。十人十色だ。だがだまって書いて居る者もある。武藤君は船戸君の綴方を見て居る。奥村君と西村君とは喧嘩をして居る。野々村君と河合君はマッチの事をしゃべりながら書いて居る。

一しきり静かになったがまだここそしゃべって居る。これから無言の行をやろうと言って居る者もある。鼻に紙でせんをしているのは村瀬君だ「トンチンカン」「アホウ」と言いあいをして居る。まじめに書いているのは6人位だ。運動場で消防が水まきの演習をし出したので皆は窓のところへ飛んで行った。取締に制せられて机にもどったが演習のひひようが一しきりつづいた。まだ小声で喧嘩をして居る。取締がちっとも呼ばないので古川君がかんかんに怒って居る。市橋君が手をたゝき出した。あつ八釜しい。一以下略一

評 これだけ書こうとする君は一時間中まじめでいたに相違ない。文も達者だ。



児童文集「金華」の表紙

神宮・藤井寺の決戦

昭和3年度、尋常科野球部は5月10日名古屋市高岳小など各地へ遠征して腕を磨いた。そして笠松で行われた岐阜地区大会に優勝した。その時の投手は往年の名投手村瀬保夫である。若き日の苦心の投球ぶりを当時の作文から伺う。



神宮球場で活躍した尋常科チーム

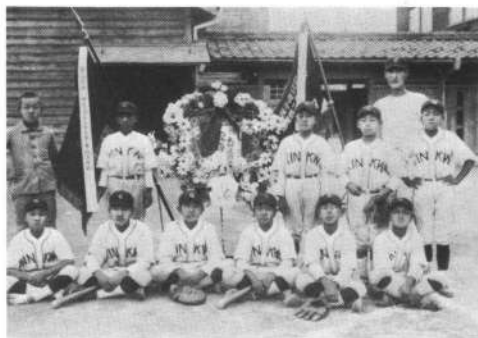
野球 尋六 村瀬保夫

試合は始まった。心ゆくばかり晴々しい大空を背におって我等は元気よく守備についた。僕の投げた球は「ストライキ

と審判の力の声かけられた。僕等の心は勇み立った。又もや「ストライキ」。三度目はバットを振ったがあたらない、三振だ。次は二番打者だ。用心せなければならぬぞと心の中で思いながら力いっぱい投げた。「ハウルボール」球はバットに当たったがファストの横へとんだ。第二球は「ボール」第三球は「カーブ」で「ツーストライキ」最後は「ボール」を出したがあやまって振って又三振。味方はますます元氣だ。味方の外野の太田君が時々はげましてくる。よしと第一球は「直球」で「ストライキワン」第二球はゆるい「カーブ」を出した。打者は思いきりバットを振ったが当たらない。第三球は「ボール」を出したが打たれてセカンドの稲葉君が美事うけとめた。第一回は無事に守ることができた。味方の応援団からはしきりに拍手が聞えてくる。

昭和3年8月18日(土)午前6時岐阜駅発の汽車で尋常科チーム11名は高野・赤塚野中・林・河合・加野の6先生に引率されて勇躍上京、神宮球場で行われた第9回全国学童野球大会に出場した。そして全国からより抜きの強豪ぞろいが激突し熱戦が展開された。その中で我がチームは第1回戦、第2回戦と勝ち進み、第3回の準優勝戦は和歌山県西巻小と対戦した。我方は善戦したがチャンスをもものにすることができず9回裏まで0対0で延長戦に入った。しかし球運に恵まれず敵の打ったレフトフライをとろうとして走ったレフトの近藤栄太郎が、他の試合の外野手にぶつかって転倒しホームランとなって遂に負けた。相手の西巻小はこの大会で全国優勝をした。悲涙をのんだもの、立派な戦績をあげて8月23日朝9時10分帰岐した。このチームのうち4人は既に亡く、村瀬・加野・稲葉・近藤・岡田などの諸君は健在である。

昭和4年度は前年度神宮球場で惜敗したので陣容を立て直して猛練習に励んだ。その甲斐あって7月14・15日の両日に行われた学童野球第1・第2予選に優勝した。そして昭和4年8月3日(土)午前9時11分岐阜駅発の汽車で尋常科チーム11名は高野・野中・林・加野・沢田・西村の6先生に引率されて大阪・藤井寺球場で行われた全日本学童野球連盟主催・第5回選手権大会に出場した。当時の対戦模様を選手の神山鋭司の作文から伺う。



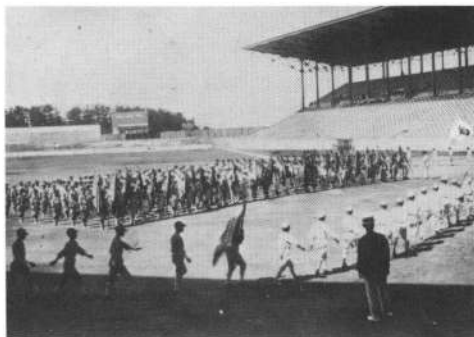
藤井寺球場で健闘した尋常科チーム

藤井寺遠征

尋六 神山鋭司

8月3日父兄方後援者の人々に激励されて岐阜駅を出発した。大阪駅へ着いたのが午後3時頃、休む間もなく、城東練兵場へ練習に出かけた。翌4日は午前8時から藤井寺球場で入場式が行われた。全国各地から集った数十の精鋭チームは各優勝旗を先頭にして並んだ。勇壮厳しゆくとても筆や口にはつくされない程である。第1回戦は夕立のため予定が変更されて翌日となった。

翌5日郡山校と試合をやった。郡山校の投手は身長が大人にも勝る程でそれに次ぐ選手も意気すごく応援又すこぶる多く到底こちらは勝算はなかった。試合中は先生も必死になって「バッター3番」などといって励まして下さったり、僕等のピッチャーがストライクをだすと先生等はいちいち手をうって励まして下さる。かくして神のお助けと選手の必死の努力は遂に3対2のスコアで勝つことができた。試合の半頃から僕等は白はちまきをした。その時スタンドにいる観衆の人等は「白はちまきがんばれ」等といって励まして下さった。6日は8時半から第2回戦で豊橋の花田校とやった。



堂々入場する本校チーム

藤井寺球場で

僕は2番目にバッタボックスに立った。第1球は遠めのボール。第2球はちかめのストライク「しまった」と思ったが今度こそはと思って球のくるのを待ちうけた。球はきた。こゝぞと思ってバットをふれば球は心持よい音をたて、ショート越えの2塁打であった。このようにして12対7のスコアで勝った。

午後の第3回戦で南旅籠校とやったが4対1でとうとう惜敗した。そして7日午後8時頃岐阜駅へ帰った。

陸上競技

旧職員 高崎甚一

近代オリンピックが始まったのが1896年（明治29年）で第1回オリンピックがアテネ（ギリシャ）で開かれた。日本が初めて出場したのは第5回1912年（大正5年）ストックホルム（スウェーデン）で2名が参加した。しかもマラソン競技に出場したのである。その頃の服装は上着は手首にセメをはめ、下着はズボン下のように足首を紐で結び、田舎の野良仕事に出かけるようないでたちであった。このような服装は昭和の始めまで続いたのである。そして陸上競技といえば、ただ走るだけで稽古は道路を走ることだけであった。

1913年（大正2年）に第1回極東オリンピックがマニラ（フィリッピン）で開かれた。1917年（大正6年）に第3回極東オリンピックが東京で開催された。この頃になると、今までの長距離の競走だけではなく、走る・跳ぶ・投げるなど各種の種目が行われるようになってきた。

私は大正9年岐阜師範学校に入学し、徒歩部というクラブ活動に入部した。部員は先輩について校門を出て長い道路を毎日走るのが練習であった。大正10年2年生になった時、運動場にトラックを作り、フィールド競技の練習も始めた。そこで私は長距離用の足袋では物足りないとしてスパイクを大阪の美津濃から取りよせた。スパイクは当時のお金で5円もしたもので靴の裏の針が珍しく寮の私の部屋へみんながスパイクを見に押しよせたものであった。

東海地方でもおおい東海地区大会が開かれるようになったが、レベルが低いので東京などからも選手権獲得にきていた。この頃は一般と学生と一緒に競技を行った。大正12年の東海地区大会に出場した師範4年生の私は5種競技に優勝した。

私は岐阜師範学校時代に指導者として心得うべきことを次の如く決めて実行することが大切だと主張し続けてきた。

- 1 指導するだけの實力を持つこと
誰にも負けないだけの技術を持つよう努力をすること
- 2 1日もサボらないこと
技術があってもズル休みをしては指導はできない。

以上の気持で私自身精進を重ねてきたが今もこの気持は変っていない。

大正13年3月岐阜師範学校を卒業し、岐阜尋常高等小学校への辞令をいただいたが1年現役のため歩兵岐阜68連隊に入隊した。しかしこの間も時折ひまをみつけては、

小学校へ指導に来た。大正末期から昭和の始めには国際的大会や国内競技会も数多く行われるようになり、学校でも体育の授業の中に陸上競技が取り入れられるようになった。又各学校の運動会にも紅白学年別選手りレーが運動会の最後を飾る種目になってきて陸上競技が重要視されるに至ったのである。

大正14年4月1日私は岐阜尋常高等小学校へ赴任した。そして私は児童の体力の振興と健康の増進という体育の指導の研究を昭和3年と体操科の文検に合格した昭和4年との2ヶ年間続けた。その研究の成果を昭和5年7月7日河合先生の映画教育とともに研究発表会に発表した。この体操科と映画教育の研究発表会は幸にも大盛況で成功したが、この発表会が開催できたのも学校全体の理解と協力の賜で、全校同一歩調で研究ができたことは素晴らしいことであった。

昭和の始め本校の各運動部が盛んに活躍した体育振興期を次のように私は反省している。人間生活の最たる幸は健康である。体育教育の正しい指導は体力を作ること、人間の基礎を作ることである。1人1人の体力を作ればそのチームは勝つことができる。競技に勝つことだけを考えたり優勝旗の数の多いことだけを目標にしてはならない。勝つことだけを目標にすれば無理をし身体をこわす結果を招く。

昭和5年度尋常科卒業の野球部は特記すべきチームであった。金華の野球部は県下でも有名であったが一宮第四小野球部にはなかなか勝てなかった。当時の野球部長高野憲治先生はなんとかして一宮第四小を負かしたい一念だったでしょう。高野先生が1年生から順次持ちあがられて4年担任になった時、私は同じ4年1部の担任となった。そこで2人で力を合わせ4年から野球の指導に火の玉となり、5年・6年と持ちあがって岐阜・尾張地区大会で宿敵一宮第四小を倒したのである。そして京都岡崎公園で行われた全国大会に出場し善戦したのであった。



各大会に出場し
優勝を飾った運動部

甲 判

旧職員 松原英子

教室の後ろの壁面に習字や図画をはるのは当時も今も変わりありませんが、この頃点の甲の上に校長先生の関谷という私印が押してあるのがありました。これは習字や図画の作品ができあがると、受持の先生は甲乙内……と採点し、同じ甲でも最優秀と思う作品を一番上にして成績順にして、校長先生に見てもらったのです。校長先生はごらんになって、甲の価値のあるものだけ甲の上方に関谷という私印を押して返して下さるのでした。

この印を押甲とって実に権威のある絶対的なものでした。ですから教室に甲判がある作品が何枚はってあるかが先生方の関心の的でした。ましてや受持が上位の甲と思ったのに甲判でなくて、下位の甲と思ったのに甲判を押して一番上にのせ、校長先生がお呼びになって物静かに「もっと勉強なさい」とおさとしなさる時などは、受持の先生は身のおき所もなく赤面し恐懼感激したものでした。それで全職員が習字や図画に懸命の努力をしたものです。

この甲判をいただく子どもも父兄も熱心になり、前々から習字が盛んであった金華校下はいやが上にも習字が盛んになって、金華の学校のお家芸とまで進んだのであります。

考查

今でいうテストをこの頃は考查とって、それは厳しいものでした。毎月1回は読方と算術の考查が行われました。問題は学年どの組も同じで、考查の監督も採点も担任が自分の受持ちの組をするのではなく学年の中で入れかわって行いました。ですから学年内での成績の良否ははっきりし、担任は受持ちの組の成績に一喜一憂し、子どもを一生懸命教えたものです。この頃公私立の中学校・女学校へ進学する子は組の二分の一から多くて三分の二位でした。

映画と体操の批判会

7月7日に「映画利用並びに体操指導の批判会」があって、他校から250名もの参観会があり頗る盛況でした。映画は県下映画教育に先鞭をおつけになった河合佐治先生が中心になられ、体操は主任の高野憲治先生、体操の中等教員有資格者の高崎甚一先生、音楽に堪能で垢ぬけした遊戯指導をなさいます野田ひで先生など定評のある先生方が活躍なさいました。

8月7日から大日本少年野球協会主催の全国少年野球大会が京都岡崎公園グラウンドで開かれ、金華小尋常科チームが岐阜・尾張の代表として出場しました。私たち職員は勿論の事父兄も見送ったり出迎えたり、市内でも大評判でした。

合併祝賀運動会

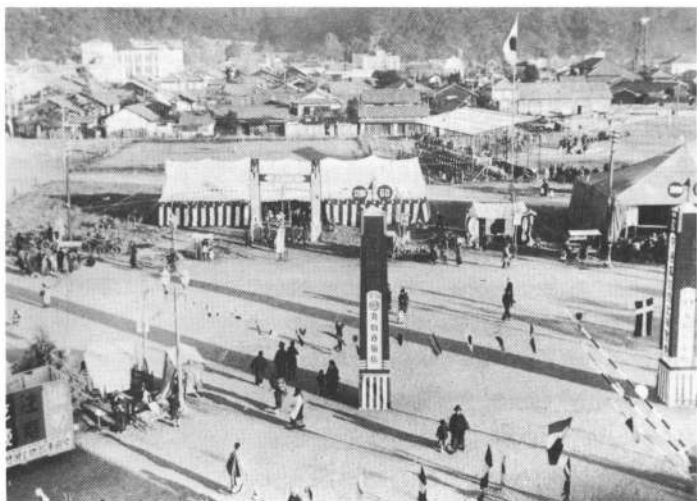
岐阜市は明治22年7月1日市制をしいてから長い間市域が変わらなかったのですが、昭和になって周辺を次々と合併しました。先ず昭和6年に本荘・日野、7年に長良、9年に島、10年に三里・鷺山……と合併したのです。

それで昭和6年4月1日に本荘・日野両村を合併したことは大変な出来事で、5月2日には午前9時から市内児童の祝賀旗行列、午後6時半から祝賀提灯行列が行われました。翌3日午前9時半から合併祝賀運動会が美江寺運動場で行われました。本校出演の団体種目は尋5女以上メリーダンス、尋5男以上の連盟体操でした。個人種目は5女・6女の50米・800米継走、高女の100米・400米継走、5男・6男の100米・800米継走、高男の200米・800米継走でした。会場の美江寺運動場は、元の刑務所跡で、今の市民会館・裁判所・中警察署・中部配電のあたりでした。

尋5男以上の体操は沢田三鶴先生が指揮をなさったように覚えています。尋5女以上のメリーダンスは私が指揮をとることになりました。何しろ4月に出演が決まったので、練習期間が1ヶ月足らずしかありませんから大変でした。メリーダンスは前年の秋の運動会に5女がやりましたから、その中の優秀な子たちをリーダーにして教室で徹底的に稽古をしました。今ののびのびと自分で工夫する遊戯とは正反対に、手の挙げ方・体の曲線・脚のあげ方・足首の線・目の使い方・指先にこもる力などをやかましくいったものです。個人の動作ができると、団体の動き、つまり前後左右斜と放列に練習をかけました。

当日は白の上着に紺のスカートで服装を揃え、和紙で作った八重牡丹の紅白大輪を両手中指にかざして踊りぬきました。拡声器のない時代ですから、諸先生方の楽隊が伴奏して下さいました。おかげで校長先生や皆さんからほめてもらいました。

美江寺運動場



今の市民会館の所から東を望む。前に広場があり右手に球場が見え、遠く左手に市役所・商工会議所が見える。

昭和六年十一月二十日撮
写真は公会堂にて交通
事故防止展覧会開催中

C Kからラジオ放送

旧職員 野田ひで

この頃の流行の先端はラジオと蓄音機と映画でした。テレビはまだなく、ラジオも始まったばかりのまだ珍しい頃で金持の家にあっただけでした。映画はこの頃「活動」といって、あちこちにある活動小屋で白黒の無声映画を写し、解説の弁士が黄色い声を張りあげていました。活動を見るにはお金がいらしますので、お金のない若者や子どもたちは、この頃できだしたラジオ兼蓄音機屋の流す流行歌に吸いよせられて店の前をウロ、ウロし店先に積んである流行歌の広告をもらってきたものです。そしてその広告の歌の文句をたよりに店先で覚えたメロディと併せて流行歌を口ずさんで友達に得意がり、はやり歌は口から口へと広がっていきました。

ラジオは主にニュースや歌や浪花節などを放送していましたので、流行歌は専らしコード盤に吹き込まれ、蓄音機がその役目をになっていました。蓄音機といっても今の形ではなく横長の四角い箱の上に朝顔形の大きなラッパがのっていました。そんな時学校が買ったのは珍しく新式で、朝顔形ではなくラッパはありませんでした。今は電動式ですが、当時のものはどれもハンドルを手で廻してゼンマイを巻く手動式でした。ですから歌っている途中にゼンマイがゆるんでくると回転がおそくなり音が低くゆっくりになって、ゼンマイがゆるんでしまうと回転が止ってしまいます。それで音が下がりだすとあわて、ゼンマイを巻く始末でした。

私は1学期の全校研究授業に唱歌の指導をしました。今は音楽といいますが当時は歌を唱うだけでしたから唱歌といいました。教材は文部省唱歌「花火」で授業の前半は歌唱、後半は鑑賞です。鑑賞は蓄音機を使ってレコードをかけました。子どもたちにとって蓄音機によるレコード鑑賞は初めての経験でしたから歓声をあげてみんなが喜びました。曲は小鳥屋の店で沢山の小鳥がチチと囀り、朝の静けさ、爽やかさを思わせるもので曲の終りに犬の鳴き声がきこえるものです。私は曲の大意を話し「さあよく聞いてね、犬の鳴き声がきこえたら手をあげましょう」といって静かにレコードをかけました。私はゼンマイがゆるんだらどうしよう。止ってしまったらどうしようと心配でたまりません。けれど子どもたちは静かに手拍子などとり乍ら一生懸命聞いています。そしてレコードの終る頃、犬のワンワンという鳴き声をきくとほっとしたように一斉に手を挙げました。私はほっとして涙の出る位嬉しかったのです。想えば歌を唱うだけがやっとの唱歌の時間に蓄音機を使ってレコード鑑賞という大冒険をやったのけた若い日の情熱が今もなつかしく思い出され、幼い子どもたちの童顔が次から次へと浮かんできます。

昭和6年7月20日、放送局の依頼で唱歌の放送をすることになりました。当時はまだラジオの始まるの時ですから、ラジオで放送するとなると大変です。どうしてやるのやら、何が何だかさっぱり見当が付きません。とにかく子どもが歌をうたえばラジオで聞えるように放送して下さるだろうと考えてはみるものの、放送の事を考えるとおっかなびっくりで放送する前から胸がドキドキする位です。今なら岐阜のNHKからでも放送できるし、現場へ移動中継車が来て録音することもできますが、この頃は名古屋まで出かけて行って演奏しなければならなかったのです。当時NHKとはいわず名古屋放送局、JOCKとっていました。JOCKは名古屋城の外濠から入ったすぐ左にあったのでした。

午後6時から放送というので昼すぎに学校へ集まりました。子ども8名と私と高木須摩子先生と河合佐治先生の総勢11名です。私と高木先生とでは心もとないというので、放送にくわしい河合先生に特にお願ひして引率をお願いしました。学校を出発して市内電車に乗り、岐阜駅から汽車ポッポに乗り名古屋駅に着きました。名古屋駅から又市内電車に乗って名古屋城前で降り、ようやくJOCKにたどりつきました。この頃名古屋へ行くことは子どもたちにはめったにない事で、ちょっとした旅ですから楽しい筈ですが、子どもたちも私たちも放送の前で緊張していて、それどころではありませんでした。さあ、いよいよ放送です。生放送ですからやり直しがき、ません。マイクの前に子どもたちはきちんと並びました。私は手がふるえ胸は早鐘のようにうちます。指揮者はありませんので、ピアノ伴奏でうたうのをリードしていくのです。私は夢中でピアノを弾き始めました。

曲目は吉田文子さんの独唱、次は全員で「ほたる」の斉唱・部分二部合唱でした。終りに清水弘二君の独唱「しゃぼん玉」この伴奏は高木先生でした。あっという間に終わりました。学校へ帰ると諸先生方やご父兄の方々から上手だった、よかったとほめていただきました。そしてやっとよかったなあと思いました。今その時放送した子どもたちの写真を見ると4年生（吉田さんだけは6年生）としては発育もよく、服装も

JOCKで歌った子たち



今とかわらなかつたと思います。左から清水弘二・武山邦子・井上政子・鷺見綾子・松原春生・藤沢千代子・吉田文・後藤あさ子さんです。その頃の幼な子も今はみんな成人して、立派になってみえます。

そしてみんなよれば話はラジオ放送の事になり、暑い夏の夕方のJOCKの白っぽい建物と音波と共に消えていったピアノの音色を想い出し「ほたる」の歌を声をそろえてうたうのでした。

儀 式

旧職員 伊藤一郎

その頃の校舎は、今の建物とはすっかり様式のちがう木造2階建の古い校舎でした。当時は、尋常科6年で27学級、児童1509名、高等科2年で4学級、児童218名の学び舎として、りっぱなものでした。

当時の子どもの服装は、男子はほとんど全部が金ボタンの学生服、女子はセーラー服が大部分で自由な服の姿もかなりあったようです。みんななどの子も、温和で上品で落着きのあるよい子ばかりで勉強も熱心でした。

昭和20年8月の終戦を境として、今のような自由な民主社会になりました。しかしその頃の日本は、大日本帝国とその名もいかめしく、封建的で帝国主義、軍国主義の国がらでした。上下の差、階級の差がはなはだしくて、上司・上官の命令はほとんど絶対的なもので、服従とか従順とかいったことがよく使われたものでした。その頃の学校での年間行事は、いろいろありましたがその多くは、身体のとんれんと精神力の養成に重点がおかれ、体育行事がたくさん組まれていました。6年生や高等科の男子が、当時稲葉郡の北長森村にあった歩兵第六十八連隊の軍旗祭に参列した一事をみても、当時の学校教育のありかたがうかがえることと思います。

こんな社会情勢の中で、学校での儀式は今では想像もできないほど厳粛そのものでした。当時国の祝日は4大節とって、学校としては一番大切な儀式でした。

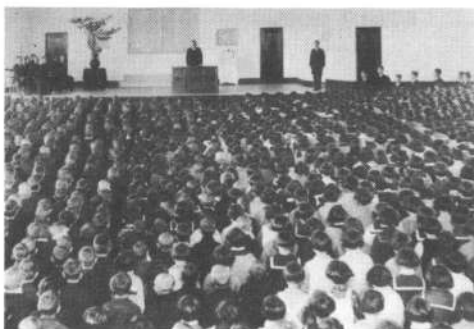
- | | |
|-------|-----------------------------|
| 4月29日 | 天長節……………今上天皇のご誕生日 |
| 11月3日 | 明治節……………明治天皇のご誕生日 |
| 1月1日 | 新年拝賀式……………天皇ご一家と国家の繁栄と隆昌を祝う |
| 2月11日 | 紀元節……………日本の建国を祝う |

当時は、日本中どこの学校にも天皇、皇后両陛下のご真影（お写真）がご下賜になっており、奉安庫に収められて大切にされていました。日本人は天皇を生き神様と仰ぎ、天皇は国の元首として国政を行い、陸海軍を統率しておられました。この頃の4大節の儀式を、学校としては手おちのないように気をつけて厳粛に行ったことは、当然のことといえましょう。

儀式の当日は、職員も児童もふだん着ではなく、できるだけ儀式用の晴れ着の服装で登校しました。校長と教頭はフロックコートかモーニング、他の職員も大体式服でした。児童の男子は手入れした学生服、女子はセーラー服が大部分で、身なりをきちんと整えたものです。

この頃、式場は中舎2階の普通教室をいくつかぶち抜いて作りました。翌年の昭和8年には新講堂が竣工しましたので、こゝが式場に当てられました。

式の始まる前に、校長は教頭を従えて奉安庫からご真影と勅語を奉持して運び、式場ステージ正面のご真影奉安所に掲げます。この時は全校放送により全校児童は各教室の自分の席で起立し、水を打ったような静かな中で行われます。



新講堂の中で卒業式 昭和8年度

やがて式の始まる時刻が近づくと、全校児童は担任の指図で各教室の廊下に整列し、式場でのいろいろな注意を聞きます。

- 1 前もって便所へ行っておくこと
- 1 鼻汁をかんでおくこと
- 1 式場では絶対に話をしないこと
- 1 わき見をしたり、手足を動かさないこと
- 1 気をつけの姿勢をくずさないこと
- 1 式が長くても途中で出入りをしないこと

そこで一番音を使うのは低学年の担任でした。4月始めに1年生に入学したばかりの子どもが、4月29日の天長節にこんなに厳しい命令されていたことは思いもしないことと思います。

式場に入って一同が整列すると、学校長はフロックコートに白の手袋を着用し、ピカピカに磨いた靴をならして壇上に現われて、えび錠をはずし、うやうやしくご真影奉安所の扉を左右に開きます。その間一同は敬肅といって頭を軽くさげております。次に最敬礼の号令で、ご真影に向かって一同ゆっくりと頭を深く深くさげた敬礼を行います。君が代の斉唱、教育勅語の奉読、校長訓話など式は長々と続き、終りに最敬礼をして、学校長が奉安所の扉を閉じて式は終了します。児童は教室に帰ると間もなく全校放送により静肅のうちに、ご真影と勅語が式場から奉安庫へ移されます。

儀式の前日から子どもの親は、当日着ていくもの、持っていくハンカチ、鼻紙などを取り揃え、それはそれは気を使ったものです。現代には現代のよさがあり、当時の日本にはその時代のよさがありました。しかしいつの時代にも反面短所があります。私達はお互に心して、その時代の長所を大切にしていかにのびし、欠点を補い正して、平和で住みよい国づくり、社会づくりに努力していきたいと思ひます。

陸上・サンマーパーク

私は陸上の選手でした。5年生からスパイクをはいて走り、6年生・高等科と何度も対校試合に出ました。選手は掃除が免除されていたから授業が終るとすぐ運動場に出てそれから2時間みっちり練習をしました。練習は200米のトラックを何回も走る、スタートの稽古、バトンタッチの練習、100米のタイムを計る、の4つが主でした。尋常科の時は中島貞雄先生、高等科の時は田中 桂先生や山田義三郎先生に指導していただきましたが、毎日毎日が規律正しくきちんきちんと段階をふんで教えてもらいました。それでタイムもよくなり走る自信もついてきて毎日がそれは充実したものです。練習が終って汲み上げポンプの冷たい水で汗とほこりの顔を洗い、のどをうるおすと正に甘露で、その水のおいしいことといったら今も忘れることはできません。対校試合には学校支給のユニフォームを着ました。白シャツ（胸のポケットの上に金華の金の字のマーク）にショートパンツ（横に縦の赤線1本）それに赤色の鉢巻（学校によって色が決まっています金華は赤色）です。秋になると市内の各小学校や岐中・岐高女・富田高女・佐々木高女の運動会によばれて各小学校が競走するのです。遠く竹鼻小や大日本紡績へ出かけて走ったこともあります。ですがめあては今の裁判所あたりにあった市営運動場で行われる市陸上競技大会と各務原の県営グラウンドで行われる大会でした。どの対抗試合にもよい成績を取めて私も賞品の筆箱や裁縫箱を幾つももらい、それを大切にしていたものです。

遊び

学校では休み時間にいろいろして遊びました。まりつき、ドッチボール、縄とび、石けり、陣とりなどです。この頃流行したのが直径20㎝以上もある大きな茶色のゴムまりです。地球儀を作る時のように幾つかのゴム片がはりつけてあって北極にあたる場所に太いゴム管が外て出ていました。空気を入れる時はこのゴム管を口にくわえていきを吹きこんで、まりをふくらませ、ふくらむと手早くゴム管を曲げて結んで空気の出ないようにするのです。このゴムまりで、まりつきやドッチボールをしてあそびました。このまりは高価なので大事にしたものです。

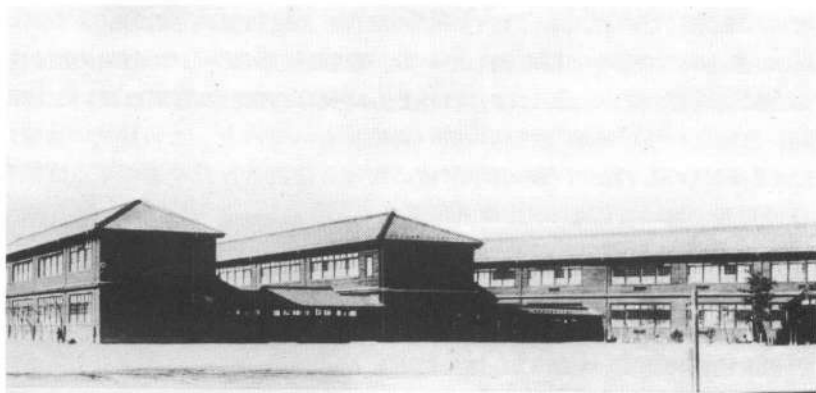
縄とびは自転車のチューブを細かく切ったのや輪ゴムをつないでやりました。夏休みは長良川で思いきり泳いだり、秋になると日曜日は陸上の練習がお休みなので、金華山へ椎の実を拾いに行ったり、冬には百人一首をしたりかるたをとったりしました。日曜日の朝は浄安寺さんへ行って、お経を習ったり法話をきいたりしました。小学校の頃は何をしても楽しく何をしても面白く、愉快な毎日を幸せにすごしたことを今でもなつかしく思い出します。

サンマーパーク

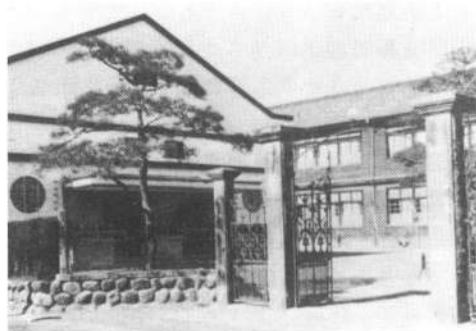
私は小学校の頃、家の人や友だちとサンマー・パークへ行きました。私の子どもの頃は夏の期間中サンマー・パークがありました。場所は長良橋南詰から上流の港館へ行く途中の空地です。暑い夏の日が西の山にかたむくと、町の人たちは川涼みに長良橋へくり出します。長良橋から見るとあたりは黒々としていて、わずかに長良川北岸の旅館や鶴飼見物の船の灯が川面に映ってゆらめいています。そうした中でサンマー・パークのところが明るいのです。高い一点から四方に吊った赤・青・白の電球がともったりついたりしています。夕涼みの人たちはその明るさに吸いよせられるように集まってきます。夜店があちこちに出ています。仮設の舞台があって、時々ショーをやります。漫才や「今日もコロッケ、明日もコロッケ」とおもしろおかしく寸劇をやっていたのを見ました。みんなはそれを見てゲラゲラ笑いながら、ミカン水やラムネを飲んでいました。鶴飼が川上から下ってくると、鶴飼を見に河原や長良橋の上へと散っていきます。静かな夏の夕涼みに華やかさと楽しさをそえるサンマー・パークでした。

時には花火大会がありました。打上げ場所は長良橋北詰から下流へ行ったところで今の女子短大や長良中学のあたりの一面の河原です。花火だということで市内は勿論、近郷近在から歩いたり、自転車に乗ったりして集まってきます。花火の打上げは今とちがってのんびりしたもので1発あげては、しばらく休み、次の1発をあげて休むという具合です。時には2尺玉の大花火をあげることがあります。その時には、その前にラッパをトテトターと吹いて合図をし、観衆が固唾を吞んで待ち受けるとドカンとあげるという具合でした。 昭和7年度尋常科卒 東材木町 野村かつ子談

運動場より校舎を望む
右より北舎・中舎・南舎



講堂の話



校門より講堂・南舎を望む 昭和12年度

昭和8年12月28日講堂が竣工した。それまで儀式は中舎二階の東端の普通教室をふち抜いて行った。儀式の前日の準備は大変なもので、教室の境の板戸を外したり、黒板や児童の机・腰掛を運び出した。儀式が済めば後始末として、板戸をはめ黒板や児童の机・腰掛を運び入れて教室を作った。講堂ができてこの不便は解消し、全校児童が集まる場ができ、その喜びは大きかった。

講堂の建物の大きさは、東西36米、南北19米、面積684平方米で、木造平屋建のどっしりしたいかにも重厚な感じを与えた。東の正面玄関から西を向いて建物に入ると、広い床が広がりその上に木製の4人掛けの長椅子が整然と並んでいる。天井は中央から左・右へと斜めに低く張ってあってさらに幾つかのひだのような梁が垂れ下がり、天井を区切っている。建物の正面には門口いっぱいステージがあって、中央部だけはさらに1・8米へこんで広がっている。ステージの正面の壁面には御真影奉遷所があって、儀式の時には御真影を奉安殿からこゝへ奉遷したのである。ステージの左右と中央凹部の左右の計4ヶ所に扉があって、ステージ裏の控室や通路に通じている。建物は、ステージの背面の壁が白に近い薄い紫色になっているのを除けば、内外ともに壁は白色、木質部は濃いこげ茶色の2色に統一されていて、荘厳な格調の高い風格をもっていた。この様式の講堂は本校だけでなく、同型のものが市内の各小学校に次々と建設されたがその多くは昭和20年7月9日の空襲で焼けてしまった。

この講堂は儀式は勿論、学芸会・音楽会・展覧会などに使われた。体躯堂々とした加藤気作校長の気合いの入った訓話、小柄で物静かにじゅんじゅんと長話をされる梅沢英造校長の訓話、いかにも紳士然とした後藤弥三校長の訓話など、各名校長の話が講堂の壁にしみこみ、講堂は年とともに益々貫録を備えていった。終戦後は焼け残った数少ない講堂の一つとして大いに活用され、特に全市的な各種研究会や諸行事に使われ、昭和25年11月26日にはC Kのど自慢大会が行われるなど、市中心部の学校の集会場として広範囲に利用されその役目を果してきた。

戦後間もない頃の暗いとげとげした世相の中で、この講堂内では子どもたちの可愛い黄色い声が聞え、ステージの上ではこの頃特に盛んであった子どもたちの劇がくり展げられ、それを見ている全校児童の大喝采がこだまし、こゝだけは明るくなごやかな別世界があった。音楽に堪能な鷺見臣一郎校長が赴任されると、講堂は合唱を練りあげる場となった。そして唱歌ラジオコンクールで活躍し、県代表となり、東海北陸地区で1位となっ



P T A 総会

昭和47年 5月

ていった。それに大いに役立ったのは講堂にあったグランドピアノである。このピアノは講堂が建設されて間もない昭和11年6月27日渡辺甚吉・桑原善吉両氏が寄贈されたものである。このピアノはコンサート用のすばらしいもので毎年の式歌の伴奏をし、戦後行われた七夕祭音楽会にはなくてはならぬ脇役として、子どもたちに美しい音色を聞かせて呉れたのである。昭和11年から38年もたっても健在で、今は音楽室にデンと座り相変わらず金華のよい子たちの相手をしている。

講堂で行われた大行事に昭和28年3月1日の創立80周年記念式典・昭和38年11月16日の創立90周年記念式典がある。共に校下あげての大盛事だった。昭和32年度から昭和36年度にかけ木造校舎を鉄筋校舎に改築が行われた。このため昭和32年8月19日講堂内の間じきりが完成し、鉄筋校舎建設中、講堂は普通教室や職員室に転用した。この頃は講堂の東の正面玄関から入ると、廊下がまっすぐ西へ延び、その左右にベニヤ板でかこった教室が並んでいて教室毎の天井はなかった。隣りの教室で本を読む子ども



取りこわし直前の姿

昭和47年 9月

の中はそれはにぎやかなものだった。鉄筋校舎の改築が終った後、東の2教室分が金華公民館として使われたが、北隣りに昭和46年12月13日公民館が完成し引越して行った。あとに残った講堂は柱や土台があちこちで腐り、床はさゝくれ、うす暗くしめっぽくよどんだ空気がつまっていた。金華の歴史と共に歩み栄光に満ちた講堂は、新しい体育館建設のために昭和47年9月14日取りこわしにかゝり39年間の使命を終ったのである。

昭和の始めの暮らし

夏になると学校帰りに長良川へいき、鞆をほり出しシャツもパンツも脱いで丸ハダカで泳ぎました。水の流れにのって川下へ行ったり、抜手を切って向う岸へ行ったりしました。身体が気持ちよく冷えてくると川原に寝そべて甲羅を干します。川は子どもでにぎやかでした。

この7月に学校にプールができて、小さい子は喜びましたが6年生の私たちには、広々とした川の方が面白かったのです。それに受持の沢田三鶴先生も両親も何も云われませんでした。たゞ夏休みなどに「川へ行ってくるよ」というと母が「3時までには帰っておいで」といわれただけでした。

みんな川で思う存分泳ぎました。犬かきあり、抜手あり、それぞれ自我流で自然に身につけた泳ぎ方をしていました。それでも川の危険についてはお互いに気をつけ合っていて、まい込み（渦）や見えない水中の杭のありかを教えあったり、四屋の水門はあふないから行くななどと云って注意しあっていました。

土曜日の午後や日曜日には友達と誘い合って、志段見や雄総へ沢がにを捕えに行ったり、今の護国神社あたりにあったニッキの木の根を堀ってかじったものです。

鉄筋の建物

この頃の家は殆んど木造でしたが、煉瓦造や鉄筋の建物もふえてきました。煉瓦造では元市役所・名古屋銀行（若宮町と神田町との角）などで、鉄筋は元県庁・元商工会議所（現岐阜信用金庫美江寺支店）元県農協（岐阜日日新聞社北隣）・丸物などがありました。電燈は1軒に1灯つけているのと、メートルの2通りあって、つけている割合は半々位でした。

ラジオ普及

私が1年生の昭和3年頃にはラジオは珍しく、台の上に朝顔型のラッパのついたラジオは町内に1軒か2軒位しかありませんでした。それが昭和8年、岐阜商業が甲子園で春の優勝をした時には、大ていの家が各家庭でこの放送をきいて応援していました。又町にできてきたラジオ屋の前では通りすがりの人達が大勢たかって、野球の実況放送を聞いていました。

上水道の普及

この頃は、昔からの堀り抜き井戸あり、打ちこみポンプあり、それに昭和4年頃引けた上水道もありました。それで大ていの家が、夏冷たい水を飲む時や西瓜を冷やす時や冬洗濯する時などにはポンプで水を汲んでいました。しかし普通の時はずいぶん水道の水を使っていました。

炊事・暖房

この頃の炊事や暖房は大正の頃と少しも変わっていませんでした。炊事は窯に鍋をのせ薪や割木で煮炊きをしていました。ごみは家の軒下に出してあるごみ箱に入れておくと、市の清掃夫人が馬車で廻ってきて持って行ってくれました。溝溝は石垣にしてあって、その上に鉄板か石の蓋がしてありました。下水は長良や鷺山あたりから、汲みとりに来てくれました。暖房は木炭を火鉢に入れたり、コタツに入れました。

看板びつ

私の家は紙屋ですが、紙屋だけは屋根に看板を出さないのがしきたりで、その代りに家の軒下の縁台の上に看板びつを置きました。看板びつというのは、石油箱位の大きさで周囲に紙を張り、屋号を横腹にかいて上から漆を塗ったものです。道行く人は軒下の縁台の上の看板びつの屋号を見て、紙屋の何々商店と知った訳です。この看板びつの出ている紙関係の店は、港町・玉井町・元浜町・東材木町・今町に通称100軒といわれていて盛大なものでした。この看板びつの中へは紙屑をほりこんで、いっぱいになると奥へしまい、年末にはまとめて製紙へ送りました。

道路と馬車

港町から玉井町・元浜町・東材木町・今町と往来する馬車はひっきりなしでした。各店々の前では馬車が止まって荷の積みおろしをしていました。よく父母から馬のうしろは通るなよ、馬のうしろを通ると蹴とばされて死ぬぞ、又まぐさ桶のそばは通るなよ、まぐさ桶のそばを通ると馬に食いつかれるぞ、と注意されたものです。

馬車の往来が多く、落していく馬糞も大した量でした。どの家でも朝晩は勿論の事気がつくと馬糞を掃いてはごみ箱へ捨てます。それでごみ箱の大部分は馬糞でした。

乗物

人力車は本町1丁目の電車の曲り角の東北角に数台あり、タクシーも長良橋南詰や伊奈波電停前にそれぞれ1台か2台ありました。しかしこれは嫁入りなどに使ったもので、市民の足は自転車と電車でした。自転車は大ていの家にあって乗ったり、小荷物の運搬に使われていて、それだけに大事にして何時もピカピカに手入れをしたものです。

電車は材木町から伊奈波まで3銭、伊奈波から柳ヶ瀬まで3銭です。柳ヶ瀬へ買物に行く時は伊奈波と柳ヶ瀬の区間だけ電車に乗って、あとは歩いて節約したものです。この頃の葉書が1銭5厘、封書が3銭、岐阜駅から名古屋駅まで49銭の時代です。

今のトラックの役目をしていたのは大八車や馬車で、業者や一般商店が使っていました。

この頃、伊奈波には松竹座（芝居）と松竹館（映画）とがあって、夜も人通りが多く賑やかでした。7月23日は西材木町の地藏祭の日です。夕涼みがてら浴衣がけて出かけると、縄を張って提灯を沢山ぶらさげ夜店も出て賑やかでした。

昭和8年度尋常科卒 東材木町 松原清吉談

二つの銅像



関谷校長胸像竣工

昭和2年11月3日

本校には銅像が2つありました。1つは関谷校長の胸像で、1つは二宮尊徳の銅像です。しかし今はその2つともありません。

関谷校長は明治40年6月3日本校の校長として着任以来、明治・大正・昭和の3代にわたり昭和6年3月末日まで実に24年間おつとめになったのです。この間には富茂登尋常小学校を合併し米屋町から現在の大工町に移転、大正4年の校舎焼失とその再建、大正10年の台風による大被害など本校史上の大仕事を次々と克服し、県下随一の名門校として光輝ある伝統を築き上げられたのです。

関谷校長は見ていなくても何でも知っておられて先生の一言が先生にはきびしくひびきました。

文検を受ける職員があるときと校長室に呼んで、既に先生が自分で整えておいた文検用願書を渡し、言葉少なに激励されたということです。向うをむいていても人の奥底まで見抜かれた方で、背中で教育するとはこういう方のことをいうのでしょうか。

金華を育て上げて下さった関谷校長の徳をたゞえ永く後世に残そうと、昭和2年4月27日簡野佳石氏に先生の胸像の製作を依頼したのです。昭和2年11月3日胸像は完成し盛大な除幕式が行われました。余興には餅まきがありました。棚の上には十数枚につめた白餅を次から次へとまきます。

下では子どもは勿論、聞きつけて集まった中学生や大人でいっぱい、上からまかれる餅を拾いました。後になって胸像は北舎中央玄関の西に移されましたが戦争苛烈になって、昭和18年7月22日供出されたのです。この日は朝から晴れ上り赤だすきをかけた胸像が車に移され静々と壮行の途につきました。これを見送る関谷校長始め梅沢校長、約30名にのぼる来賓の方々が別れをおしました。



北舎前の関谷校長胸像

昭和16年



二宮尊徳竣工 昭和9年10月16日
向って右から2人目が中村浅吉さん

明治37年度岐阜尋常小学校（本校の前身）を卒業した中村浅吉さんは小学校のときいた二宮金次郎さんを手本にして成功したので母校へ二宮金次郎の銅像を寄附されました。昭和9年10月16日正門を入った所の馬車廻しの築山の中に二宮金次郎の銅像を立て盛大に除幕式が行われました。そして朝な夕な正門を通る子どもたちに無言の感化をしていたのです。

けれど戦争がきびしくなってお国のために供出することになりました。昭和18年1月21日、よく晴れ上った寒い朝、二宮

金次郎さんの銅像は赤だすきをかけ、厳粛な告別式が行われました。

この頃は戦争に勝つために金物は大切なものでも供出したのです。本校では昭和16年2月4日に正門の鉄扉を供出しました。この二宮金次郎の銅像も前の話の関谷校長の胸像も供出したのです。昭和18年の記録を見ると、金属供出車4台とか5台とか書かれています。校下の各家で大事にしていた火鉢や置物などが続々供出されたのです。これら供出した金物は作り直されて、大砲や弾丸や軍艦などになりました。昭和18年11月5日二宮金次郎銅像の代替品が供出の代りとしてもらえました。これは陶器製のものでしたが前の銅像に代って戦争中の働きぶりや敗戦後立ち直ってきた本校の様子をじっと見つめ、少しも休まず立って今まできたのです。

今図書館の前の石柱の台座の上に二宮金次郎像が立っています。この石柱の台座は北舎中央玄関西にあって、その上に関谷校長の胸像がのっていたのです。戦争中関谷校長の胸像を供出したので台座だけが残りました。二宮金次郎の銅像も供出したが、その代替品がきたので、それを関谷校長の石柱の台座の上にのせたのです。そして戦後もずっとこのまゝで北舎中央玄関西にあったのですが、鉄筋校舎に改築する時に今の図書館の前に移されました。

今その前に立てば、石柱のくぼんだ所に関谷校長の名が刻まれた銅版があったことを思い、仰げば陶器製の二宮金次郎像の中に関谷校長の面影を偲ぶことができるような想いがして、図書館へ出入りする子ども達を励まして下さいます。



現在の二宮尊徳像

小学校のくらし

私が小学校へ通っていた頃は、まだ戦時色が少しもなく、ゆったりした時代でした。朝学校はサイレンの合図で始まります。中舎の東の庇の下に取つけてあったサイレンがブーとなると全校児童に運動場に並びます。毎朝、朝礼があるのです。朝礼は校長先生や先生方のお話でしたが、高学年になってラジオ体操をやるようになったと覚えています。

全校朝礼がすむと各教室に入って勉強が始まります。教科は呼び名も中味も今と大分ちがっていました。修身・読み方・書き方・算術・地理・歴史・理科・唱歌・手工・図画・体操を勉強しました。私は6年の時1部で担任は鶴飼由己先生でした。1部は男子組で6年生では一番元気のよい組で、時には破目を外すこともあったようですが、先生は実に温厚な方で、そんな時は厳しくさとされるだけでした。今から想えばファイトのあるまとまったよい組でした。二学期の中頃から補習授業が始まりました。補習授業は進学希望者だけが、放課後自分の教室に残って受験勉強をするのですがこれは先生の好意でやられたものらしく、各組思い思いにやっていたようです。私の組は約2時間位教えてもらったので、冬になると教室の電気をつけたのでした。

3月の受験がせまってくると先生も子どもも熱を入れて一生懸命でした。中学校や女学校の合格の成否は今の高校入試と較べて非常にきびしく、それだけに親や先生方の力の入れ方も大変なもので、幼い子どもの胸をはずませたものです。

教科書は国定教科書で全国共通のものですから、何処へ住所を変わろうが使え、何年も変わりませんでした。それで兄や姉のある家では、弟や妹は兄姉のをもらって使いました。それが当たり前でしたから本が古いからといって友だちからいじめられたり、ひげ目を感じたりするようなことは少しもなかったのです。教室では新しい本や名前をかきかえた古い本を平気で使って、みんな仲よく元気に勉強したものです。

1年生へ入って1学期間位は石板を使って読み方や算術をおぼえました。石板は木の枠にはまった板のような黒い石からできていて、この石板に石筆でかきました。石筆は白いろう石のようなもので石板にかいても布でふけば消えるし便利なもので、絵などもかいて遊んだものです。体操の時は男子は赤白の帽子をかぶりました。赤白帽子は庇がなく、1方が赤でひっくりかえせば白になりました。女子は赤白の鉢巻をしめました。鞆は1年生に入ると皮製のランドセルを使った子もありますが、大部分の子が肩から斜めにかける布製のカバンを使いました。4年生以上になると布製の手さげカバンを使いました。

弁当

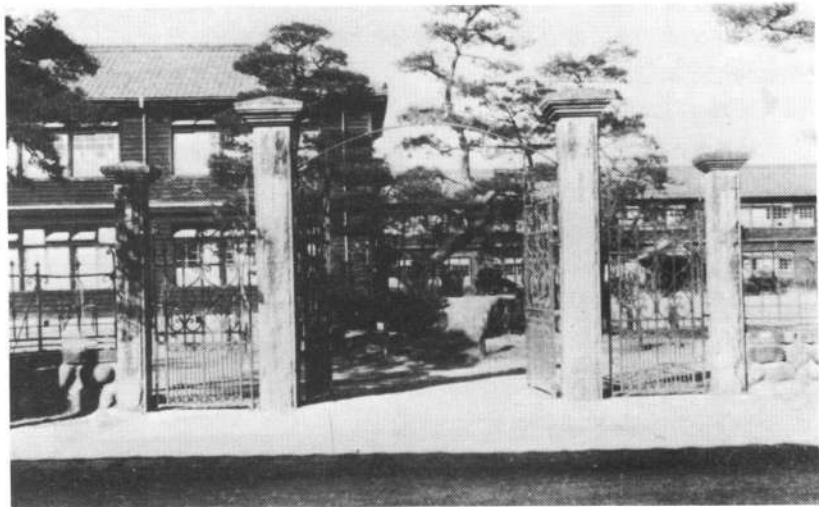
お昼は学校で弁当を食べる子、家へ行って食べる子といろいろでした。私の組では15、6人が弁当でした。おかずは芋や大根など野菜の煮たものが主で、玉子焼や魚などは上等でした。肉を持ってくる子は勿論1人もありませんでした。冬の寒いうちは保温器があって弁当をあたためました。保温器は箱型で内も外もブリキが張ってあって、一番下に炭火を入れ、その上に幾段かの棚があって、その棚へ弁当箱をのせました。下の段の方が熱く、上の方はぬるいので下の方へ順番が廻ってくるのが楽しみでした。保温器は各校舎とも廊下の突き当りにあったようで、毎朝小使さんが炭火を入れて廻って下さるのを覚えています。お茶当番はみんなで順にやって、小使室へお茶をとりに行ったのです。

服装

男子は襟のついた小倉の黒い服を着ていました。低学年は半ズボンをはいていましたが高学年は長ズボンをはいていました。6月1日から9月末日までは霜降りの夏服をきました。帽子は年中学生帽をかぶっていて、夏だからといって帽子の上に白布をかぶせるようなことはありませんでした。まして今のように無帽はなく、学生帽は必ずかぶるものとされていました。女子はセーラー服や毛糸の服などを着ていてまちまちでした。男子も女子も同じ服装で1日中通し、家へ帰って着替えるようなことはありませんでした。学校から帰るとそのまゝの服装で遊んでいたものです。低学年の頃はアメ靴をはいていました。アメ靴は半透明で茶色をしていて、汗がこもると足が臭くなりました。4年生頃からアサヒ靴が流行しました。アサヒ靴はズック製で足も汗臭くならず、これは便利だとみんなはいたものです。

昭和9年度尋常科卒 松ヶ枝町 河合慶太郎談

厳肅で壮重な校門



ベースボール

学校から家に帰ると鞆をほりこんで、一目散に法華寺へ走ります。ベースボールをするのです。この頃は野球の盛んな時代で中等野球の甲子園は若人のめざすメッカでした。金華の学校でも野球が盛んに行われ、校長室には野球や陸上・籠球などの優勝旗が林立していました。放課後などには校庭で野球の練習が華々しく行われていて、それを見て子どもたちは若い血潮をおどらせ、遊びといえは先ずベースでした。

ベースに使う球はイボのついてない軟かいゴム毬で、バットは子ども用の小型のを売っていましたからそれを使用しました。ゴム毬ですからグローブはなしで手づかみです。近くの法華寺はベースをするのに、うってつけの場所でした。毬はよく飛んでお寺やまわりの家の屋根にとまったり、木の枝にひっかかったりしましたが、そんな時は屋根へのぼったり、竹で木の枝をたゝいたりしました。今から想えば、お寺にはご迷惑をかけたことでしょうか、その頃は子どもの事ですからワァ、ワァはやしたて面白おかしく日の暮れるのも忘れて遊んでいました。

ベースに使うゴム毬でテニスもよくしました。地面に4角をかくて、その又まん中に線をかくて、2人でやったり、2人が1組になって前衛・後衛に分かれて計4人でやったりしました。ゴム毬をはずませて手のひらで打って相手のコートに入れるのです。女の子もやっていたようですが、男子は男子ばかり、女子は女子ばかりで遊んでいて一緒に遊ぶようなことはありませんでした。

校長室に林立する優勝旗



釘さしもよくやって遊びました。ゲームは2人で行うもので、相手が釘を投げつけて地面に突きさし、そのつきさした点を結んでいきます。此方も同様にしていきます。そしてどちらかが、相手をかこんでしまえば勝となります。

釘を手にもってふり上げてふりおろし、交代で釘を地面につきさすので危いようですが、そのため怪我をしたことは一度もありませんでした。この遊びは狭い所で地面さえあればできるので、危いといわれながらみんな遊んでいました。

4年生の頃、カッチン玉が流行したことがありました。カッチン玉はラムネの瓶の中に入っている玉のことです。このゲームも2人で行い、先ず斜めにおいた板の真上から2人同時に玉を落します。玉は斜めの板の上からコロコロと転がり落ちて止まります。その時、遠くまで転がった方がその玉を拾いあげて、近くまでしか転がらなかった玉めがけて投げつけます。カッチンという音がして玉にあたれば、その玉がもらえる訳です。そんなところからカッチン玉といったのでしょうか。カッチン玉を洋服のポケットにいっぱい詰めこんで、ジャラ・ジャラいわせて遊んだのを覚えていますが、高学年になってはあまりやりませんでした。

夏は長良川についていました。水中めがねをかけて学校裏から川へ入って、流れにまかせて川下へ鮎をひっかけながら、忠節橋まで下っていきます。忠節橋で岸へあがって学校裏まで川岸を歩いて、又学校裏から川へ入り鮎をひっかけながら下っていくのです。私は上手な方ではありませんが、それでも1日に5匹位は鮎をとりました。上手な子は1日に20匹位とっていました。真夏の暑い盛りに、清流の長良川へ飛びこんで川を下っていく壮快さと鮎をひっかける面白さとは、やってみた者でなければわからないでしょう。

秋になって流行したのがポプラの軸の角力でした。それはポプラの葉の元にある軸を拾ってきて、学校の休み時間に相手の軸とを十字に組み合わせて折り曲げ、お互に引っぱるのです。そうするとどちらかが、ちぎれて負となり、ちぎれなかった方が勝となります。こんな他愛ない遊びにみんな夢中になり、私なんか今の岐高あたりまでポプラの軸を拾いに出かけたり、拾ってきた軸を丈夫にするんだと、軸を塩水につけたりしたものです。

正月にはこまを廻したり、親類の子たちとカルタや百人一首をしたりして家族ぐるみで遊んだものでした。おこずかいには1日に1銭か2銭もらって、それを貯めて野球のゴム毬やバットやこまを買ったり1銭洋食を食べたりしました。正月などにはお年玉や親類の人におこずかいを5銭とか10銭もらって喜んだものです。

作業園の除雪

6年2部



6年生の終りの2月1日に大雪が降りました。家の前の電車道は人が踏みかためて通るので、電車は不通になりました。それを線路工夫がするはしで割って駅の方からやってきて、どうやら電車を通るようになりました。こんな大雪は後にも先にもありませんでした。

昭和10年度尋常科卒

矢島町1 松野憲三談

魚とり・躍進博

この頃、長良川には魚がいっぱいいました。東材木町から北へ行ったみどり橋の辺は、大水が出ると長良川の本流の魚が流れのゆるやかなみどり橋の辺へ集まってきて、魚のたまり場でした。それで大水が出ると、みんな川岸で魚をすくっていました。大水が引いても本流の流れはきついで、魚だけは残って澄んだ川底に群れていて、みどり橋の上からよく見えました。

大人の方は投網で魚をとったり、釣ったりしていましたが、子どもは学校から帰ると、草笥を持って走って行きました。水の中へ足を入れると、ドボ・ドボと足が泥の中へ入ります。草笥を川岸や水草の底にあてがいすくいあげると、草笥の中で魚がはねています。ハエやフナが主ですが、時には大きな鯉や鰻が入ることがあります。そうなると嬉しくて夢中です。日の暮れるのも忘れて魚とりに熱中したものです。

又夜鶴飼の終る頃を見はからって友だちと出かけました。目あては鶴飼でとれた雑魚です。長良橋の川上の岸へ行くと、鶴匠さんが私たちのかぶっていた赤白帽子にいっぱい魚を下さいました。この頃はほんとに信じられない位魚がいて、たくさんとれたものです。

馬車

電車道は高富街道に通じていて、自動車は少なかったが大八車や馬車はよく通りました。山奥からは材木や薪物を山のように積んで出てきたし、山奥へは日用雑貨を積んでのぼって行きました。時には空荷の馬車が通りました。きっと積荷をおろしての帰り路なのでしょう、馬子は手綱を持って空馬車の先端に腰かけ、のんびりゴト・ゴトゆられていきます。こんな馬車が通ると子どもたちのいたずらが始まります。子どもたちは馬車の後ろについていき、こっそり馬車に飛び乗って腰かけるのです。馬子に見つかるのと叱られるのですが、見つからぬように乗るそのスリルを味わったり、又友だちに得意になって話したものです。まことに他愛ないのんびりした時代でした。

自転車

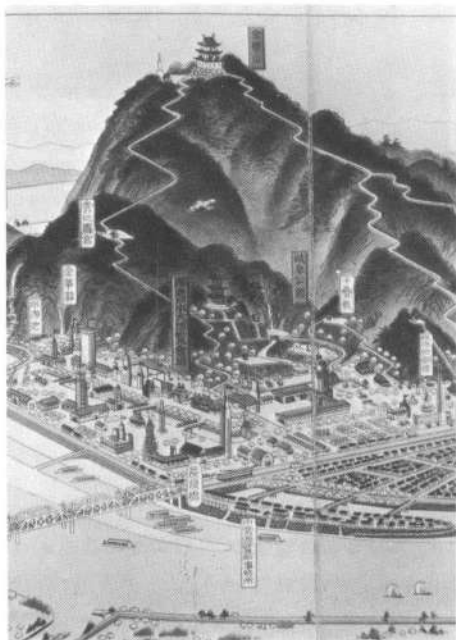
近所に自転車の横に荷物をのせる車のついたのがありました。これを借りて、今のロープウェイ乗車駅へ登っていく板の上から、その自転車に乗って坂を走りおりました。何しろその自転車に運転する子と荷物台に5人の子どもが乗っていたのですから大変です。坂はどうやらおりましたが、子ども6人の重みで坂の下の平地を右へ行ったり左へ行ったり、みんなワァーと叫んだが止まらず忠節用水ヘドボンと落ちてしまいました。運転していた子は手を骨折するし、私も右の額に大きなコブを作り、みんな怪我をしました。子どもの頃はこんな無鉄砲な遊びをしたものです。

日本躍進博覧会

昭和11年3月25日より5月15日まで岐阜公園で日本躍進博覧会が開かれました。4月18日学校から躍進博を見学に行き、父が躍進博のポスター募集に応募して佳作に入選して、うちわ5本の賞品と何枚かの入場券をもらったので、家からもつれて行ってもらいました。

躍進博の正門は今の岐阜公園の入口にあって南側に高い塔がついていて立派なものでした。会場は今の岐阜公園とその北の新公園から護国神社までの広大な地域で、その中には郷土館、岐阜県館、岐阜市館、愛知名古屋館、各府県館、朝鮮館、台湾館等の建物が立ち並んでそれはそれは見事でした。各館内にはその特産物や写真やパノラマなどがぎっしりと展示してありました。

驚いたのはテレビジョンです。白黒で鮮明ではないのですが現物がそのまゝ写って動くのですから肝をつぶしたのです。これが私のテレビの見始めです。又驚いたのは人間大砲です。ドイツ人の何とかいう人ですが、大砲の筒の先から入り、ドカンという音と共に頭から飛び出し45度位の射角で高くあがり、下に張ってある網の上へ落ちます。人間大砲は人気の的で、いつも見物人でいっぱいでした。金華小学校からは先生方が作られた牛と蟻の全骨骼標本が出品してあって見事なでき栄えてました。



会場全景図

昭和11年度尋常科卒 東材木町 河合良信談



郷土館



岐阜県館・岐阜市館

兵隊さんの見送り



兵隊さんのお迎え 日の丸の旗をもって

アジアの風雲は急を上げ、遂に7月7日、北支蘆溝橋で日支軍が衝突し、8月には岐阜の歩兵68連隊が出動して上海で敵前上陸をしました。

校下の家々には続々と応召がきて、男たちは相ついで出征していきました。市内の小学校には出征兵士を見送る日時や場所が割り当てられました。本校では5年生以上の高学年が交代で兵隊さんの見送りに行きました。

本校が見送る場所は美殿町です。郷土部隊が出動する日には、学校からテクテク歩いて柳ヶ瀬の東の美殿町へ行って、こゝでキチンと整列して出征兵士を見送るのです。この頃、美濃町・関町方面行きの電車は、柳ヶ瀬から東へ美殿町・殿町と走っていました。長森の兵営から出発した出征部隊は、東から電車道沿いに西進して来て、美殿町から柳ヶ瀬へ来て、こゝで南へ行き岐阜駅で汽車に乗るのです。それで柳ヶ瀬付近は人のよりつきがよく、いつも見送る人々でいっぱいでした。その人々の最前列に並んで本校の児童は送ったのでした。

東の方からラッパの音が近づいてきます。バンザイの声が沸き上がってきます。出動部隊が近づいてくるのです。そのうちラッパやバンザイの声に交じって、ザク、ザクという軍靴の響きが伝わってきます。そうすると身が引きしまり胸が高なってきます。まん前を兵隊さんが鉄砲かついで、次から次へと通ります。陽にやけた黒い顔、胸をはったたくましい身体、この兵隊さんたちはこれから遠い戦地へ行かれるのです。思わず、バンザイ、バンザイと叫び、手に持った日の丸の旗を力の限りふります。

兵隊さんを見送ると、又もときた道を兵隊さんに負けないように、大きな声で「勝ってくるぞと勇ましく……」などと軍歌をうたいながら帰校します。学校へ着くと、日の丸の旗を学級毎にまとめて大切に保管します。日の丸の旗は子どもたちのお手製のものでした。

郷土部隊が東京や豊橋などに集結して、出動の際岐阜駅を通過する時は、学校から岐阜駅まで往復歩いて見送りに行きました。歩くことは当り前の事だったのでした。

全校朝会

毎朝、全校朝会を行ってラジオ体操をしたり、梅沢校長先生のお話をききました。梅沢校長先生の話は長いので有名でした。その間、不動の姿勢をくずしたり目の玉一つ動かしても叱られるので緊張したものです。

愛国行進曲が新しく作られ全国に広まりました。本校では13年1月25日から全校朝会で毎朝うたいました。1800人余りが声を揃えて歌うのは勇ましいものでした。

戦争がはげしくなるとラジオ体操をとりやめて、毎朝分列行進をするようになりましたが、これはしばらく後のことです。



兵隊さんの見送り 昭和15年

子どもは国の子

梅沢校長先生はいつも口ぐせのように、子どもは国の子、陛下の子であるから身体を丈夫にしてお国のために役立つようにせよといわれました。それで身体の弱い子を鍛える夏季学校聚落や保健室の経営に力を入れられました。そして昭和12年10月26日には紫外線浴室を完成し使用を開始しました。この施設は珍しいもので評判でした。校舎内外の清掃は徹底的に行い、隅々まできれいでした。

夜の自宅学習

私は後になって5年担任となり、その翌年同じ組を持ちあがって6年担任となりました。この2ヶ年間、学級の子を3人か4人づつ毎晩菅原町の自宅へ呼びました。そのめあては昼間学校での動的学習に対して夜間自宅で静的学習を行うことでした。それは学校では教科学習・訓練とびはねるのですが、自宅では靴のぬぎ方・戸や障子の開けしめ、坐り方など行儀作法や1人勉強を身につけさせることでした。子どもは夕食をすましてから歩いて菅原町へきました。自習をして、そのあとわからんことを質問しました。子どもたちは8時半か9時頃に家へ歩いて帰っていきました。最近当時のことをきくと、先生の家から退出して家の外でこらえていた小便を音高らかに放出した時の爽快さは格別でしたと述懐しています。菅原町で静的学習を行った頃は新婚ホヤホヤの時で、若い日のよい思い出となっています。

旧職員 中村又一談

夏季学校聚落

長良川で水泳



女子の薙刀

旧職員 川上千歳

昭和13年度、私は6年4部（女子組）の担任でした。このクラスは私が昭和10年1月始め、2年生の時から持ち上ってきて、途中で男女別の組に編成替えはしたものの、ずっと受けもった女の子もいました。それで気心もよく知れよくなつていました。

低学年の頃は遠足というによく鷺山へつれて行きました。長良橋を渡って崇福寺におまいりし、お寺の前のぼうぼうの堤の上の細い小道を鷺山へ向って歩いて行きました。鷺山の山上には小学校があって、ボールがころがったら山の上から山の下まで拾いに行くのかななどと子どもたちと話をしたものです。鷺山の山頂で昼食にすると、食べ終わった子どもたちは遊びにかゝります。男の子はまっ先にみんな木登りです。枝ぶりのよい松の木がいっぱい生えているので遊ぶには事かきません。みんな木の枝に腰かけて得意そうです。女の子は持ってきた縄とびで遊びます。この頃の縄とびの縄は自転車のチューブを細かく輪切りにしたのをつないだものです。鷺山の山頂は松の木が生えているだけで草は生えておらず、清掃された公園のようにきれいです。明るい日射しの中で一しきり遊びの音が揚がると帰路につきます。このあたりは見渡すばかりの桑畑でその間を小道が右へ左へうねうねと続いています。桑畑の葉が茂っている時など背丈よりも高く、一度迷いこんだらどこへ行くのかわかりません。ですから鷺山からの帰りは前の組の後にぴったりついて離れないよう気を配ります。そして長良橋まできてホッとしたものです。今とは雲泥の差で今はよく開けたものです。

6年になって受験準備を始めました。放課後希望者を集めてガリ版で刷って用意しておいたプリントを渡し勉強させます。放課後といっても女の子ばかりですから明るいうちに帰宅させねばなりません。それでは時間が少いので弁当を持ってこさせて昼休みにも行いました。準備の子はクラスの半数近くいましたが、残りの半数の受験しない子たちの事を考えて、裁縫の時間にフランス刺繍を教えました。丸い木枠に布をはめて刺繍をするのですが、その布に花や蝶などを刺ってやって、余暇にもするようすすめました。昼休みなど準備の子が勉強していると、同じ教室の中で準備をしない子は刺繍を楽しんでやっていました。

子どもたちにとって昼休みも勉強、放課後も勉強でしたから、私は子どもの健康に常に留意し、体操の時間を重視して明るくのびのびと楽しくやらせました。徒手体操が主な時代でしたが、先ず徒手体操で身体の筋肉を正常に働かせると次は砂場で巾跳びをしたり、飛び箱をとんだり、肋木を越してくる競争やダンスなどをして面白くやったものです。この体操の他に薙刀も行いましたが、これを欠かさずやったおかげでしようかみんな元気に仲よく育ちました。



女子の勇しい薙刀

各務原にて

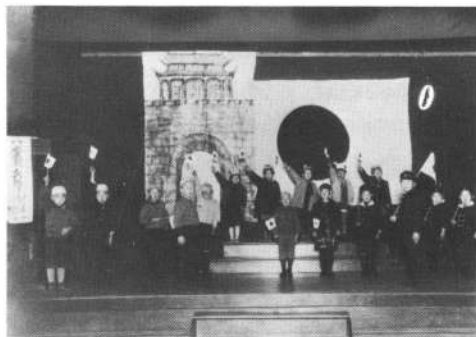
昭和13年5月16日から5男以上に剣道・柔道、5女以上に薙刀を課外に教えることになりました。しかし私は勿論の事教師の中に薙刀を教えられる人はいませんでした。それで剣道のできる者が講習を受けてきてそれを私たちに伝達して下さいました。

体操の時間や放課後に子どもを連れて講堂へ行きました。講堂の床はひんやりと素足に心地よく身心が引きしまります。子どもたちは体操の服装に鉢巻をしめ講

堂の壁にかけてある薙刀を持って、二人づつ向きあって並びます。礼に始まって礼に終る薙刀の型を「エイ」「ヤー」と気合いを入れてやります。暑い夏などすぐ汗びっしょりになります。厳寒の頃でも少し型をやると身体中がポカ、ポカと暖かくなります。夏休みのある登校日に、私が袴姿も勇ましく、子どもたちと講堂で暑さも忘れて薙刀の猛練習をしていますと、いつのまにか梅沢校長先生が立っていらっしやって、じつと励ましの瞳で見られて、感激したこともありました。

この薙刀について、子どもたちは「心がしゃんとする」「体操より面白い」などといっていたし、父兄からも「子どもが落ち着いてきた」「姿勢がよくなった」などといわれ薙刀の評判は上々でした。その頃、滋賀県彦根のある小学校がとても薙刀が盛んだというので、本校の野田 満先生、山本すゞ子先生とご一緒にはるばるその学校へ視察に行ったことがありました。帰ってきて更らに身を入れて薙刀の教授に励んだものです。この頃テレビで昔の袴姿がよくでてきますが、そのたび当時の事が想い出されます。その頃受け持った子どもは今立派に成人していますが、教え子たちの方が案外ははっきりと薙刀の事を覚えていて、昔話をきかせてくれるのです。

昭和14年3月、5ヶ年余り受け持った子供を卒業させてホッと安堵し、その4月に1年生を担当しました。日支事変の最中ですべてが軍国調でした。その年の学芸会には1年3・4・5部で唱歌劇「兵隊さん」をやりました。右の写真で見ると可愛い、兵隊さんです。バックの城壁とその上の門は私が描いた苦心の作です。この1年生を持ち上げて2年生の担任となり又1年生を担当して、昭和17年8月末日退職いたしました。



唱歌劇「兵隊さん」

昭和15年2月14日

お話し会と縄とび

小学校の頃を想うと、まっ先に頭に浮んでくるのはお話し会の事です。中学年の頃は盛んにお話し会をしました。雨が降った体操の時間とか、雨で写生ができなくなった時とかには先生にせがんでお話し会をしました。子どもがかわり番に教壇に立って童話やお伽噺やずかせもの（今のクイズ）をしました。

そんな3年生のある日、長良の男子師範で行われたお話し大会に、私が出たことがあります。会場では市内の各小学校の代表の子が、みんな上手に童話や体験談を話します。私も「片一方は犬の目玉」という童話を一生懸命話しました。その話は、片目が見えなくなったお百姓さんがなおしてもらいにお医者さんへ行きます。お医者さんは見えない目玉をくりぬいて日に乾しておく、トンビがその目玉をくわえてとんでいったので、あわてたお医者さんは犬のめだまをくりぬいてお百姓さんの目玉へ入れた……という話です。あとで付添って下さった受持の池田志げこ先生が面白くお話ができてよかったねとほめて下さいました。それから何かという組でみんなからお話をせがまれました。右の写真はその頃の七夕祭のものです。



当時の服装 七夕祭(3年生)昭和10年

6年生になって、私達女子は薙刀を教えてもらったり、伊奈波神社へ奉納する石を志段見まで拾いに行ったり、空襲避難訓練をしたり、兵隊さんに慰問文をかわいたりしました。しかし6年生の一番の思い出は受験準備です。受験希望の子は放課後教室に残ってガリ版刷りの問題を懸命にやりました。それを提出すると受持の大野隆先生が採点して翌日返して下さいます。それが年中毎日で、今から思えばほんとはよく面倒をみて下さったと頭の下がる思いが致します。

服装

この頃の服装は今と殆んど変わっていません。髪はオカッパで、セーラー服や毛糸の服を着て、スカートをはいていました。肌色の長靴下にズックの運動靴（メーカーの名をとって、アサヒ靴とっていました）をはきました。雨降りには洋傘をさして、ゴムの長靴をはきました。学校で式がある日は、よそ行きの服をきた程度で特別に変った身なりはしませんでした。

食事

6年生になってお昼休みに準備が始まったので弁当を持っていきました。アルミニウムの弁当箱にご飯をつめ、おかずは玉子焼や鮭や鰹のけずったので、時には天ぷらでした。家での食事は飯台を囲んでいただきました。おばあさんが脚気で少し悪かったので白米に麦を少し入れたご飯にしていました。おばあさんが魚や肉が好きでしたから魚や肉をよく食べましたが、肉料理といってもカレーライスに肉を入れる位で、今のように料理法が各家庭に行き渡っておらず、トンカツなどはお客様のあった時に近くの店からとって出したものです。

お手伝いとこずかい

この頃、野菜は車に積んで売りによく来ましたのでそれを買っていました。それでおつかいはカレーライスに入れる肉やお客用用の餅菓子等を伊奈波や白木町へ買いに行く事でした。お風呂の水汲みも時々しましたが、ポンプを押して水を風呂桶にいっぱいにする事は子どもの私にとって大変なことでした。

こずかいは毎日1銭か2銭でお彼岸やお祭には10銭もらいました。こずかいはクジを引いたり、遊び道具を買ったりしました。クジは台紙に紙を小さく畳んであるのがびっしり貼ってあります。1銭お店の人に渡して、その貼ってある紙を台紙からはがして、畳んである紙の中にかいてあるのがもらえるのです。当るのはおもちゃもあれば菓子もあって子どもの人気の的でした。

遊び

一番遊んだのは縄とびです。2人で廻している縄へとびこむのを夢中でやったものです。又2人で引っぱっている縄をとびこえ、だんだん高くするのもしました。縄とびは流行して、みんなしました。縄は自転車のチューブを輪切りしたのや、輪ゴムをつないで作ったのでした。中学年の頃は人形のきせかえ遊びをよくしました。お店から1枚の厚紙に人形の顔・胴体と何枚も着物が色刷になっているのを買ってきて、それを切って紙の人形に紙の着物を着せたり、他の着物にきせかえたりして遊びました。高学年になっては人形さんを買ってきて遊びました。

字かくしもよくしました。地面に釘か小枝で字をほって、その上に土や砂をかぶせて何の字かわからぬようにします。相手はかぶせた土や砂をはらいのけながら字をなせて当てるのです。夏には学校のプールで泳ぎましたが、夏休みには長良橋の上流で開かれた水泳学校へ通って水泳を習いました。無地の色物の水泳着にゴムの帽子をかぶりゴムの浮袋も使いました。冬にはおしくらまんじゅうをよくしました。円をかいた中にみんな入って、「おしくらまんじゅう、押されて泣くな」といって背中やお尻で押し合いをするのです。そして押されて円から出たら駄目で一番あとまで円の中に残った子が勝となります。冬の寒い時にはうってつけの遊びでした。その他、お手玉、おはじき、あやとり、まりつき、石けり、羽根つきなどして遊びました。

昭和13年度尋常科卒 末広町 国島幹名子談

師の涙に誓う

朝は元気にラジオ体操をし、海沢校長先生のお話をきいて、学校の1日が始まります。梅沢校長先生は銀杏の葉のこと、堆肥のこと、戦争のことなど、それは丁寧にお話なさいました。

受持は1年から6年まで6ヶ年間、富田幸治先生でした。私たちの組は3部で男女組でした。低学年の時はどの組も男女組ですが、高学年になる時1・2部が男子組、4・5部が女子組に編成替えになって受持も変わったのですが、3部だけは編成替えせず従って受持も変らなかった訳でした。私たちが入学当初鼻汁をたらし小便をもらった時から6年卒業するまでお世話になったのですから、今臉をとちて小学生の頃を想い出すと、先ず浮んでくるのは富田先生の温顔です。富田先生はほんとに親身になってお世話をし教えて下さいました。

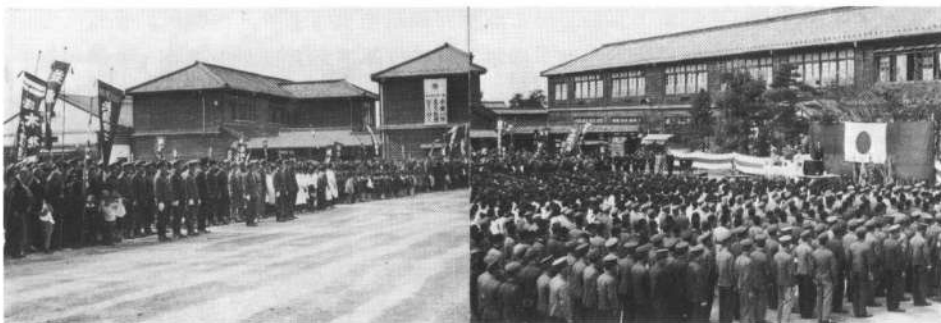
6年生になったある日、授業中にいたずらをした子がいました。それをいましめるために諄々とさとされ、果ては涙をこぼして話されました。先生の話聞き、先生の涙のこぼれおちるのを見て、いたずらをした子は勿論の事、男子は拳を握って涙をほらい、女子は肩ふるわせてオーオーと泣きました。そして強く正しく明るく生きることを誓い合ったのでした。この声涙ともに下る先生のご訓戒は身にしみて、私の人生の生きる背骨となっています。

服装

この頃は日支事変の最中で持ち物・服装などすべて節約したものです。教科書も兄妹や近所の子のお古を大分使っていました。靴はまちまちで入学当初のランドセルを大事に使っている子もズックの肩かけ、手さげ、風呂敷の子もいました。男子は大部分が折襟の小倉の上着に小倉の半ズボンでしたが、毛糸で編んだシャツの子もいました。夏は霜降りの上着に半ズボンでした。靴はズックのアサヒ靴で雨天の時はゴム長靴でした。女子の頭髪はオカッパで、セーラー服や毛糸の服などまちまちでした。

夏季聚落

私は幼い頃、やせて身体が弱かったので毎年のように学校の夏季聚落に参加しました。夏季聚落というのは、各学校で身体の弱い子を集めて指導して下さる行事で期間は夏休みの始めから8月20日頃まで毎日でした。夏季聚落は楽しいものでした。朝学校へ行って、お話・体操・紫外線浴などをして昼食、午後は昼寝・水浴・おやつをもらって家へ帰ります。中でも酒向先生のお話は、お化けの話でこわくて面白かったです。真夏の盛りを、あけ広げた教室や運動場・長良川で遊ぶのですから、夏季聚落の終りには、みんなまっ黒に日焼けして丈夫になったものです。



皇紀2600年奉祝式・小学生・在郷軍人・警防団・婦人会など 昭和15年2月14日

夏休み金華山登山

夏休みには毎朝、金華山へ登りました。朝早く登ることをみんなと競争したもので夜明け前の小暗いうちから登りはじめ、頂上で出席カードに印を押してもらって七曲りを往復しました。金華の学校だけの行事ではなかったようで、京町や明德など他校の子とも一緒でした。それで山へ登る子どもが大勢で、山も朝早くからにぎやかなものでした。

金華山へ登ってから朝食ですから、腹もすいてうまかったです。それから町内のラジオ体操に出て、夏季聚落に出席するため学校へ行くのが夏休みの日課でした。

修学旅行・紀元2600年

6年生の時の修学旅行は1泊2日で伊勢へ行きました。内宮や外宮の広くて立派なのにびっくりし、杉の大木にどぎもをぬかれました。二見ヶ浦では生れて始めて海を見て、みんな歓声をあげました。土産には絵はがきを買って大事に持ち帰り、家中の者に見せびらかして自慢話をしたものです。

6年の終りに紀元2600年の奉祝式が運動場で行われました。これは校下挙げてのお祝い、私たち小学生の他に在郷軍人・警防団・婦人会など大勢がずらりと並んで、とても盛大な式典でした。私たちは「紀元は2600年……」と声高らかに歌ったことを覚えています。

受験準備

6年生になるとすぐ受験準備が始まり、テキストを買って放課後先生に教えてもらいました。1学期の終り頃になって、来年度の入試は筆記試験はやめて口答試問と体力検査だけという発表がありました。それで放課後の受験準備はなくなりました。そして入学試験の当日は、口答試問と心配していた体力検査も身長・体重等を測って運動場を走った位で、無事通り、岐阜中学へ進みました。

想えば小学生の頃、それは師や父母にはぐくまれた夢多き時代でした。

昭和14年度尋常科卒 松ヶ枝町 藤吉正光談

寒 中 修 錬

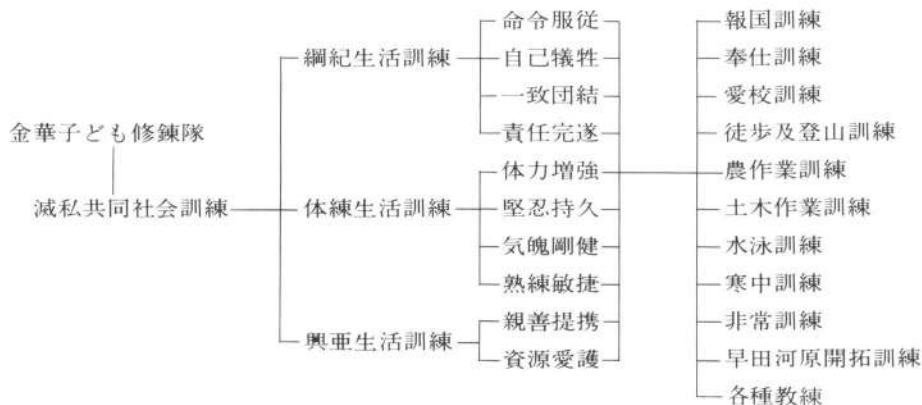
旧職員 中村又一

寒中修錬というのは、現在警察学校などでやっている、いわゆる「寒げいこ」のことである。それを修錬と名づけたのは、当時は戦時下で金華の児童はすべて「金華子ども修錬隊」と名づけられ、金華の子どもは時代の尖兵であるといわれていた。つまり働きつ、学び、身体をきたえつ、学ぶ子のことを尖兵であり、修錬隊員だといわれていた。寒げいこも単なるけいこでなく、身心を修錬するのだ、金華子ども修錬隊の一環として行動するのだとされていたのである。

寒中修錬は全校行事として1月15日頃から2月上旬の寒明けまでの約3週間行った。高学年児童は太陽の昇らぬ前に終ることが原則で、大体午前7時から8時までの1時間である。高等科は凍てついた校庭や講堂で、男子は剣道、女子は薙刀の刀振りを何十回も何百回も行った。

尋常科5・6年生は金華山登山や学校裏の堤防を遠く今の岐阜高校あたりまで駄足や伊奈波神社の清掃などをした。高学年児童は8時に寒中修錬を終って、朝食のため帰宅し、9時からその日の授業を受けた。4年生以下は8時半から30分間行った。

次の表は、金華子ども修錬隊のねらいを表にしたものである。



紙すき 原料を煮る

次の記録は当時の5年生が寒中修練に伊奈波神社付近の清掃を行ったものである。午前6時半、5年生全児童は寒風について校庭に整列、国旗掲揚、遙拝、黙禱、訓話、農具体操など早天行事が終ると「駈足行進」の学年隊長の号令で伊奈波神社まで整然と駈足をする。よいしょ、よいしょのかけ声が金華山にこだまする。神社に着くと学年隊長の首頭で「神前の誓」をする。

誓い

- 1つ、君を尊び、神を敬います
- 1つ、世のため、国のためにつくします
- 1つ、金華修練隊の名誉を重んじます

隊の中央には大修練旗が、各分団右翼には各学級分団旗がはためいている。男子部隊は十字鋏、小円匙、鋏などの農具を片手にし、女子部隊はモンペをはき竹箒をになっている。誠にさっそうとしている。そこで学年隊長の命令がくだる。「第1分団神社清掃」「第2分団どぶ掃除」……各分団は分担区域の奉仕作業にとりかゝる。

次に当時の作文の1端をのせる。(兵隊さんへの慰問文)

子ども修練隊

5年3部 齋藤 博

兵隊さん。たゞ今岐阜では美しかった桜の花も散って、金華山を始め伊奈波の山々も、青葉若葉につままれて、日に日に緑の景色となりました。今に河鹿の鳴きだす夏となり、楽しい水泳も許されることと待っています。でも兵隊さんを苦しめる夏は来ない方がいいと思います。

兵隊さん。私たちは、私たちのことを「子ども修練隊」といっています。これは戦地で働いてみえる兵隊さんをお手本にして、作業や勉強と戦うということなのです。鉛筆は鉄砲で、消しゴムは鉄砲の玉だといって、何か苦しい時には「タンク式でがんばって」とお互いにはげまし合っているのです。

兵隊さん、今私たちは「全校食糧報国隊」を作って、さつまいもや麦などを一生懸命で作っています。でも早田河原はあまりにも広いので、つかれて動けなくなると、みんなで「タンク式、タンク式」といい合ってがんばっています。その他、町内清掃、灰作り、炭焼きなども私たちの手でやっています。



紙すき

紙をすく

早田磧の開拓と堆肥作り

旧職員 大野 隆

今日も日の丸の鉢巻をしめ、鍬や備中をかついだ金華の子が爽壮と行く。早田磧の開拓に行くのである。早田磧というのは学校の川向うの「長良川のしめ切り記念碑」から西の方一帯である。その中でもよもぎや川原萩やすすきの生え茂っている所は、土がたまっている所で小石も少く畑にするによい所だった。

5月27日鍬入れ式を行い、さあ開墾である。よさそうな所を選んで学級の区画をきめ、雑草を堀りとる。先づ鎌でいばらやよもぎなどを刈る子、その跡を鍬や備中で堀る子、へこんだ所へ高い所から草箕で土を運んで平らにする子、先生が一番えらそうな仕事をする。汗はポタポタ流れ落ちる。休んでは仕事を交代しながら頑張りつづける。1時間位作業をすると次は青空勉強である。

「土地を拓く」という単元で勉強をする。開墾をしたばかりの土の上で、先生を中心に輪をかいて坐る。実物を前にして算数・歴史・理科・地理などを勉強する。先生の用意したグラフや表や、子どもの研究した資料をもとに勉強する。そして子どもは今汗を流してやったことをもとにして、考えたり、見たり、ふれたり、話し合ったり、しっかり身につく勉強が進められる。こうした一つの作業や勉強を通してこれから一生



今日も早田磧へ金華の子は行く

の間、力強く生きていくためのものとなる勉強（全人教育）を懸命に行ったのである。

早田磧の広い河原のあちこちに石で囲まれた学級園ができ上がり、それが年々広げられ立派な畑となっていく。そしてその中心に日輪兵舎も建ち、金華の子らの修練道場ができ上がったのである。今はもうその跡もなく、長良中・女子短大・総合運動場などに変ったが、汗を吸った土は今もそこにある。



開墾前の早田磧

今のプールより望む

堆肥作り

ランドセルを背負った可愛いオカッパの女の子が、くりくり坊主の男の子が、大根の葉っぱや黄色味をおびた野菜のくずなどを、細い縄でゆわえ手に下げて登校して来る。そして東門を入った右手の置場に、山のように置いていく。こんなことが毎朝・毎朝と続く。こんな登校風景は金華独得のもので、その頃どこにもなかった。

又ある時は全校生徒が炭俵を背に負い、金華山の堆肥の葉拾いに出かけ、学校に持ち帰ったこともあった。又町内の清掃で出たドブ土を、全部学校がもらって校庭の一角に山のように積んだ。こんなものが皆堆肥のもとになった。

堆肥を作る方法は、2米四角の木枠の中へ、上記の土と野菜屑とを順々に積み、上からふみ込んで高さ150糎～160糎に積み上げる。この堆肥の山には1米位の青竹の節を抜いたものが斜めに差ししておく。これは堆肥が熱を出すので、それを測定するためである。堆肥内の温度の変化はグラフや表にまとめられ、又日がたつにつれて堆肥の山は小さくなっていく。この体積の変化も記録され、算数の勉強に生かされていった。二度、三度積み替えると、立派な堆肥ができあがる。

でき上がった堆肥は学級に順次配給され学級園に入れられる。早田の畠にも入れられた。どの学年学級園もよく肥えた作物が青々と育っていた。

花壇で作られたきれいな花は、教室を飾ったり隣の学級へも送り物として仲よくお互いに交換しあい、図画の写生材料となって生かされた。枯れた草花は、又集められて堆肥場へ運ばれる。

堆肥作りにはこんな話がある。昭和16年12月5日、6年生は伊勢参宮修練旅行に出かけた。この時の修学旅行には各学級各班で、いろいろな仕事の分担をしていった。ある班は学習班で沿線の歴史を研究し、汽車の中で発表会を開いた。又ある班ではスケッチした作品の展示をその場で開いたり、歌唱の指導や、いろいろ考えた班がたくさんでき楽しい旅行だった。清掃班は全部ホーキを持って車中・宿泊地を清掃し、そのゴミを持ち帰って堆肥に入れた。内宮の参拝をおえての帰り道、境内にパラパラと木の葉が散っていた。その木の葉を集め学校へお土産として持ち帰った。伊奈波神社の神主さんをよんで「堆肥入魂祭」を行った。それ以来お土産の葉を少しずつ堆肥に入れ、四方をしめ縄で囲って大切にした。それからは汚なかった堆肥の所が一番清潔な所となった。



次々と堆肥の山を作る

職員滑空隊

私は昭和8年4月から昭和20年3月まで12年間本校に勤務しました。その中で一番の思い出は始め3年間位高学年の四日市海水浴に応援に出かけたことです。担任でない若い職員である大野 隆・白井敏彦・野田 茂・宮崎定一・私と5人が自主的に相談し、自転車に乗って四日市まで出かけ海岸でキャンプをして、昼間は子どもの海水浴の手助けをしたのです。若い者ばかりで気持ちのとけあい無銭旅行のような態でしたが面白く実に痛快でした。今でも若い独身時代の思い出として残っています。

昭和12年日支事変が起り、昭和16年太平洋戦争に突入、世は戦時色に包まれてしまいました。昭和16年12月5日の修学旅行には伊勢神宮に参拝し、神宮内の落葉を持参した袋に入れて持ち帰り、同月17日その神社の落葉を学校の堆肥に入れる「秋葉奉積堆肥入魂式」を行ったのでした。翌17年にも修学旅行はありましたが、これが修学旅行の終りで、昭和18年からは修学旅行は行けませんでした。

戦火が内地にまで拡がってくるにつれて職員も実戦に役立つよう服装なども変わってきました。昭和17年度頃から男子職員は軍服や国民服を着る者がふえてきました。私は昭和17年に長い頭髪をきって5分刈りにしました。他の先生方も同様でした。そして作業や行事の時には戦斗帽をかぶり、ゲートルをつけたものです。しかし男子職員も次第に応召し昭和19年頃には女子職員が目立ってふえてきて、低学年は女子職員で固めていました。

私は防空主任でした。それは若いということと、家が近くてすぐ学校へかけつけられるからだでしょう。防空訓練を年間何回も行って待避・消火・救急などを真剣にやったものです。ある真夜中に警戒警報が発令になったので自転車にとび乗って学校へかけつけました。学校には梅沢校長先生が1人みえて、大声で敵機襲来といわれたのでびっくりして空を仰ぐと流れ星が長く尾を引いて流れました。真剣な中での笑えぬ笑話です。防空壕を終戦前までに7個も作りました。殆んど高等科男子が作ったのですが、町の子が壕の穴を掘ったり杭を打ったり、よくやったものだと思います。



模型飛行機を飛ばす

早田 磧



職員滑空隊

早田 碩

太平洋戦争の特長は飛行機が艦船によってかわったことだといえます。県では航空思想の普及のため児童には図工の時間に模型飛行機を作ること、職員には滑空隊を創設し訓練することを奨めました。本校でも男子児童は模型飛行機作りに熱をあげ、飛行の時間と距離・高さを競い合ったものでした。

岐阜市では教職員に滑空隊の入隊をすすめました。本校では川島敏郎・各務勉野津 晶・大野 隆・後藤繁雄・朝居稚

夫・私の7人が希望し参加しました。昭和17年7月7日市教職員滑空隊創設並機体命名式が早田碩で行われ、高等科男子はこれを見学しました。滑空機（グライダー）の訓練場所は早田碩でした。当時の早田碩は川原や荒地や松林などが続いている、今の野球場の西から保険局の西一帯は平らな草原になっていました。この草原が滑空場だったので。笠松の四季の里へ出かけてグライダーを揚げたこともあります。

訓練の時間は授業に支障のない土曜日の午後とか日曜日それに夏休みで、夏休みには崇福寺で2泊位合宿しました。訓練はすべて軍隊式で動作などキビキビしたものでしたが、教官は軍人ではなく同じ先生仲間の沢田鉄男さんで、集まったのが教員ばかり40人余りの若い者で、私のようにスリルと冒険を求めて楽しいスポーツの積りで参加した者も多く、それは楽しいものでした。

訓練は先づ戦闘帽をかぶり足にゲートルをつけるなど服装を整えて9人が1組になって行きます。1人はグライダーに乗って操縦桿を握り、グライダーを引っ張る2本の綱に4人づつがつかまります。合図で綱の8人は声を揃えて「ヨイショ」「ヨイショ」と前進し綱を引っばります。綱はゴム製ですからのびてピーンとなると、合図でグライダーの後の杭に止めてある綱を切ります。グライダーは前の綱の弾力にひばられて前進し、操縦桿により揚ったり降ったりします。普通松林の高さ位（10米～15米）揚り、100米位の距離を飛びます。フワッと揚った時の気持は何ともいえない壮快なものです。グライダーには複雑な機械は1つもなく、ただ操縦桿だけですがこれが又実に微妙なもので操縦桿にふれる小指の力の入れ方一つで揚ったり降ったりするので大変精神修養になったと思っています。このグライダー場で昭和18年1月4日から4日間、馬事訓練が行われました。教員が戦争に欠かせぬ馬の取扱いや乗ることの稽古をするのです。先生が交代で馬の口輪をとって歩かせたり、馬に乗ったりするのですが、何しろ相手が生き物の馬ですから思うようにうごかず、思わぬ方に行ったり、馬から落ちそうになったりする面白い場面もありました。けれどみんな真剣でした。

旧職員 野田 満談

戦争中の遊び

いつも農場からの帰り校門にさしか、ると隊列を整え校門を入る時は歩調をとって堂々と円匙（小スコップ）・十字（小トンスリ）をかつぎ草箕をもって歩きます。種まきの時などは肥桶をかついでいくこともあります。帰ると道具は水できれいに洗い円匙や十字は油ぶきして大切にしました。何かの時には全校の分列式がありました。隊の編成は1ヶ学年が中隊編成で1学級が小隊編成です。中隊長・小隊長は級長で指揮旗を持って隊の先頭に立ち、高学年の各小隊は男子組も女子組も円匙（約10個）・十字（約10個）をかつぎ、次に草箕（残り全員）を持ち、後尾に肥桶（約5個）を2人ずつでになって続きます。中学年・低学年は隊長が指揮旗を持ち他は素手です。いよいよ全校児童による分列式です。校長先生始め全部の先生方の前を、日の丸の鉢巻

をしめた各隊が次々とラッパ隊の吹奏する曲に合わせて足音高く行進し、「カシラー、右」をしながら通りすぎます。私たちはこれを「コエタゴ分列式」といって自慢にしたものです。梅沢校長先生は「床が光れば心も光る」とおっしゃったので全校どの組も床を固くしぼった雑布のあとからぶきし、きれいでした。

服装

男子の頭髪は丸刈りで学生帽は持っていましたが大いにかぶらず、何かする時は日の丸の鉢巻をしめました。冬は折襟

つきの小倉の上衣に半ズボンで長ズボンをはきませんでした。雪が降っても靴下をはかず素足で、上ばきもはかず教室や廊下を歩きました。履物はアサヒ靴をはき、雨天の時はゴム長靴をはきました。女子の頭髪はオカッパで毛糸の上衣を着てモンペをはき足にはアサヒ靴をはきました。胸には名札をぬいつけました。

食事

弁当は麦飯に野菜（時期のもので芋・大豆・蓮根など）や漬物・ちそのふりかけなどで、魚は少く玉子は病人の食べる物として肉とともにまれました。毎月8日の大詔奉戴日には児童は麦飯の日の丸弁当を持っていき受持の検査を受けました。家の食事も弁当のようですから、時に獲れるさんま・いわし・さば・寒ふななどは安くて食べていましたし、冬にはすき焼をする事もありました。餅はたくさんつきました。



コエタゴ分列式 カシラー(頭)右

こずかい

おこずかいは毎日1銭づつももらいました。それで駄菓子屋でパンパン・カッチン玉などを買い、菓子は家に用意してあるドリコ飴などを食べました。おつかいや正月などにももらったお金は少しも使わず、国策の線にそって全部貯金しました。

遊び

戦争中でも子どもはひまをみつけてよく遊んだものです。年中是水駆(スイクチ)・パンパン・カッチン玉・ヨーヨー・釘さし・陣とり・輪まわし・天下おとし・肉弾・まるとび、夏は魚とり・水あび・花火線香、秋はドングリゴマ・杉鉄砲・こんにやく玉遊び・兵隊ごっこ・椎の実拾い、冬はみかんつり・ごま廻し・竹馬・竹とんぼ・縄とび・ゴム管・吹矢・凧あげ・雪だるま・雪合戦・坊主めくり・双六・いろはカルタ・トランプなどです。

年中一番よく遊んだのは水駆です。学校帰りなど友達と相談して「スイクチやろ、学生帽子かぶってこいよ」などいって別れ学校や黙山の辺でやりました。赤白帽子は庇がないから水駆はできないのです。水駆は学生帽子の庇の前向き、横向き、後向き



炭俵をせおい簾をかっいで落葉集め

によって王さま、水雷艇、駆逐艦の印として多数の子どもが分かります。王さまを中にして水雷艇・駆逐艦が護って対陣します。さあ戦いとなって水雷艇や駆逐艦は出撃しますが、それぞれ相手によって勝ち負けが決めているので、帽子の庇を見て勝つ相手であれば捕え、負ける相手であれば逃げます。護っている水雷艇や駆逐艦が少なくなるのを待って突撃し王さまを負かした方が勝となります。スイクチのような遊びが流行したのも、戦争のせいだったからでしょう。

夏は長良川の玉井町裏へ行って「アンマ」や「流し」をして魚をとりました。「アンマ」は家の竹箒の竹の小枝を1本抜いて、その先に木綿糸を結び、木綿糸の先に釣り針をつけます。餌は瀬虫です。釣り方は川の瀬に川下に向かって立って、釣り糸を流し絶えず竹の小枝を川下から川上へひっぱります。瀬をさかのぼってくる白ハエやドンコが食いつきます。「流し」は碇子に木綿糸を結んでその先に釣り針をつけ瀬虫をつけて川の流れにほりこんでおくとう魚がくいつきます。夏の昼前は魚をつり、昼からは水あびをしていると午後3時頃きまって夕立がきますので家へ帰りました。

正月はよくみかん釣りをしました。木綿糸をつけた木綿針を、皮をむいてお盆に盛ってあるみかんに離れた所からつきさして釣りあげて面白がったものです。

昭和17年度尋常科卒 今町2 木村富造談

いも堀り・雪合戦・冷水まさつ

旧職員 川瀬知勝

午前8時「5年生集合」の合図で防空壕の間に残された狭い校庭に集まる。児童は小銃の代りにスコップ、つるはし、備中、平鍬、だちきり等をめいめいにかつぎ、輸送係はびくを棒でかつぎ、最後のグループは荷車という編成である。部隊長は学年主任の朝居稚夫先生、副部隊長は安田精一先生である。目的地は早田河原（現在の県営グランド）の金華小報国園である。



職員会を現地で開き開墾計画をねる

「前へ進め」の号令で紅顔の少年達は少年兵の心そのもので目的地に突進、30分後には現地に到着した。直ちにさつまいも堀りにとりかゝる。10月下旬の秋深い朝はうすら寒い空気とともにひとしお戦意（作業意気）を燃えたたせる。代用食やいもがゆ朝食の児童が多いとは思えぬ程に作業能率は上り、豊年で思ったより大きなさつまいもがごろごろ出てくる。堀りとったさつまいもの一部を河原で石やきにして食べる。腹はへって焼きいものうまいことといたら口ではいえない。代用食といえども大切な食糧である。みんなの腹は三分の一程度しか満たされないが、子どもたちはよくわきまえている。いよいよ凱旋（帰校）である。今度は運搬車を先頭に、軍歌を高らかに歌い足どりも軽く行進する。校門入りお迎えの梅沢英造校長先生、富田幸治教頭先生から慰労、激励のこぼしを賜わり時局の推移に少国民の決意を新たにしたい。こんな時にも、いつ空襲警報が出てもすばやく対処できる心構えと訓練は完璧であった。

雪合戦

戦争ごつこと言えば遊びごとのように思われるが、戦時下の学校体育は「校門は管門に通ずる」という言葉そのものであった。昭和19年1月末、まっ白に一面降り積もった雪は堤の上の道路を埋めつくし、殆んど人通りは絶えている。（現在の交通事情からは思いもよらぬ情景である）この好機を逃さず5年男子の合同訓練（体育）が行われた。それは雪中行軍、雪中戦闘訓練（雪合戦）である。1部、2部、3部の男子を東西二軍に分け、小銃を型どった木銃をかつぎ強行軍によって東西の両陣地に集結した。それより長良川堤防を東軍は東より、西軍は西より順次進撃を開始した。両軍からは尖兵が出てそれぞれ敵状を査察して本隊に知らせる。敵前近くなれば、雪中をほ

ふく前進をする。いよいよ間近くなれば弾丸のうち合いとなる。これは勿論雪中戦である。最後の突撃による白兵戦の頃は全員手足をまっ赤にして無我夢中である。この頃の児童は寒中でも足袋なし、手袋なし、こたつなし、えり巻なしの耐寒訓練を実行しており今の子どもには想像もつかぬことである。



雪の校庭 大雪の時は児童が除雪をした

先日も金華小学校裏の堤防を通ったが昔の事がなつかしく、このあたりで雪中の激戦をやったのだなどと思ひ出され、

あの頃のあどけない少年戦士（児童）の姿を思い出し感慨一しおである。現在は40歳を越え社会の中堅として大いに活躍しておられる諸君に幸多かれと心から祈る次第である。

冷水まさつ

「強いからだと強い心」をモットーにした5年3部は体力に応じた体力の増進に精進した。4月の新学期が始まると同時に乾布まさつから冷水まさつの実行である。登校すると先ず手拭を持って校舎裏のプールサイドに行き、手・首・背・胸の順に冷水まさつを行う。最初は弱くだんだん強くまさつするのである。児童の上半身は順次紅潮してくる。プールサイドに集まった子どもの姿は力強くもあり神々しくもあり「一億火の玉、うちてしやまん」の心意気がうかがわれた。

このようにして始まった冷水まさつは春から夏、夏から秋へとたゆまず続けられ、プールの北の堤の道を行く馬車馬のはく息が白く見えるような厳寒やこつこと降る雪を尻目に雄々しくたんれんするまでに至った。そして遂には寒中の水泳にまで到達したのである。冷水まさつで体調をトレーニングした児童の中には寒中といえども悠々とプールにとびこんで水泳をするまでになり、それを見る者をしてアッと驚かせたのである。そしてそれは全校の賞讃の的ともなった。段階を経た日々のトレーニングと鍛錬とによって養われた精神力の威大さにつくづく驚かされる。「精神一到何事かならざらん」「なせばなるならぬは人のなさぬなりけり」この格言を戦時下の子どもたちは実践によって証明してくれた。日々の生活がすべて勝つために張りつめていた。



職員勤労日 肥桶かついで増産にはげむ

戦時下のくらし

「88種」「54種」みんなが水深を竹棹で測ってきて次々と報告します。僕は大声で「2米32種」と報告すると走って行って焚火にあたります。こゝは玉井町裏の学校水泳場、時は10月30日勅語奉読式が終ってからのことで、見廻すと金華山も紅葉し秋風が身にしみます。例年長良川の学校水泳場の幾ヶ所かの水深を測定して記録するのが6年1部の役目でした。6年の思い出というものは案外こんなことをよく覚えていて、その時の水の冷たさとふるえていた友だちの顔を思い出すものです。

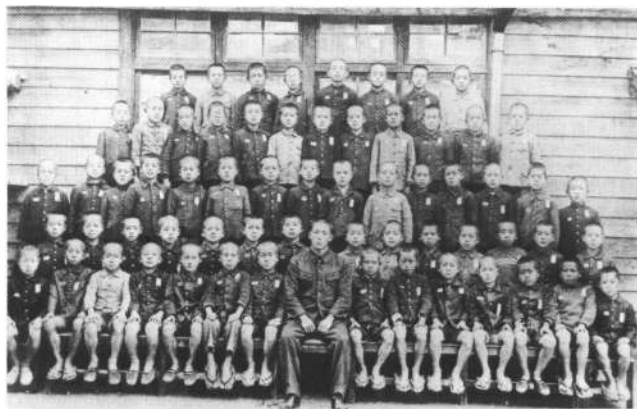
戦時下のくらしは「ほしがりません勝つまでは」を合言葉に衣食住仕事などすべて苦しさに耐え総力を戦いに勝つことに結集したのです。大人も子どもも老人も防空頭巾を紐で肩からかけていました。空襲に備えたのです。電燈には防空カバーといって円筒形で下だけ空いている布製のものをかぶせ空襲警報が出ると消燈しました。ラジオは大ていの家にあつて戦争や空襲のニュースを放送していました。上水道は校下に行きわたりましたが前からのポンプと両方使っていました。下水道は大分できましたがまだ汲みとりの所も残っていました。炊事・洗濯・暖房などは10年前と変わっていませんがどんな物でも大事にしました。街頭のタバコ屋などの店先には、資源再生箱が置いてあつてみんなで廃物の紙屑や金属類を入れました。

食事

戦前は食糧が配給で窮屈でした。配給は米・麦・酒・煙草などです。配給米はよくついてないので色が黒く、食べるとバサバサします。それで大ていの家では配給米を1升瓶に入れて木の棒で

上からついたものです。ご飯はどこの家でも麦飯を食べていましたが、それでも米が足らなくて困りました。みんなが学校へ持ってきた弁当も麦飯に梅干や甘藷の煮つけが多く魚や佃煮はご馳走でした。しかしこの頃は終戦後の食糧難の時に比べればまだまだ楽なものでした。

当時の服装 左胸に少年団員章、右胸に名前 6年1部





当時の服装 モンペにアサヒ靴や藁草履 6年3部

乗物

自転車はどこの家にもあって、乗ったり荷物を運んだりしました。タクシーは伊奈波に1台ありましたが嫁入りなど特別の時にしか使わず、市民の足は電車でした。

大きな荷物は大八車や馬車で運びました。馬車はゴト・ゴトとのんびり舗装してない砂利道を行き、時々大きな馬糞を落し

ます。その馬糞をみんな競って拾い、子どもは学校へ持って行って堆肥にし、町の人は空地という空地を耕していた畑の肥料にしました。

リヤカーも数は少ないが使われていて、オート三輪やトラックも新しい運送機関として使われていました。しかし戦争がはげしくなるとガソリンが不足し、代用燃料として木炭となりトラックの後部に円筒形の罐をつけた木炭車が出現しました。ある朝遊船事務所の前の広場に木炭トラックが3台も並んで、出力が出ないのかやたらに煙をモクモク出していて煙たかったことを覚えています。

この頃、長良川では筏を流してきて遊船事務所の裏から川下へ筏がつかないでありました。ある日私はいつものようにボートを漕いでいると風に吹きつけられた筏にはさまれて動けなくなり大声で助けを呼びました。運よく遊船事務所にいた福田さんがききつけてとんできて助けてもらいました。この頃材木は筏で流されてきたのです。

防火訓練と防空壕

町内では総出で防火訓練を行いました。藁や麻で縄をなつて火たたきを作り、それで火元をたたいて消す消火訓練や、一列に並んでバケツをリレーし最終の人が水をかける訓練をしました。又高さ2米以上の所に直経50糎位の穴があけてある板を立て4米位の距離から穴めがけて水をかける訓練もありました。

どの家でも防空壕を掘りました。私の家のは父と私とで作ったもので、母屋から離れへ通ずる土間に掘りました。長さ2間・巾1間位で中はかがんでいられる位の高さでした。家族の大人3人と子ども4人の計7人が防空壕へ逃げこむ稽古もしました。そして何時でも空襲来れと待ちかまえて準備をしていたのですが、昭和20年岐阜空襲のあとで中庭の防空壕に避難した者は全部焼死したときいて、もしわが家の辺にも焼夷弾が落ちていたらどんなだっただろうと、背筋の寒くなる思いをしました。

昭和18年度尋常科卒 万力町 清水 保談

学徒勤労働員と地震

旧職員 加藤 勉

じゃがいものこと

「ゆうべは当番でいきましたが、異常ありませんでした」

「小野木君と2人でいきましたが、10時ごろからは淋しかったが、がまんしてがんばり、家に帰ったら12時すぎでした」

これは、じゃがいも畑の夜番をした子の報告である。

食糧増産の至上命令により、早田畑の開墾ではまだ足らなくて、空地を探して開墾した。19年度は護国神社前の用水の

北側を開墾して、じゃがいもを植えた。6月中旬頃収穫したが、すばらしい大粒で大きいのは15匁×10匁ぐらいのおぼけじゃがいもが大量にとれたものである。5月下旬頃から夜間盗まれるようで、所々掘り返してあるので、子ども達は希望者で当番をきめて、夜番をしたのである。

このように世にも珍しい大収穫があったのは、当時講堂に召集兵が宿泊し、その大小便が学校の便所に溜っていたからである。勿論、当時の学校の便所は水洗式でなく汲み取りであったのだが、農家も人手不足で汲み取りには来てくれない。そこで溜った糞尿を高等科の子どもが汲みとって、じゃがいも畑の肥料として、ぶちあけるように施したのである。



登校時に持参した野菜屑を置いていく



見事な推肥の山

勤労奉仕といっていたのはこの頃までで、これ以後は「国家総動員法」に基づく学徒勤労働員ということで、高等科第2学年は下記のように軍需工場へ動員され、そこで働いたのである。

- | | | |
|----|--------|----------|
| 1部 | 熊田鉄工所 | 11月10日入所 |
| | | (長住町) |
| 2部 | 美濃航空工業 | 11月9日入所 |
| 3部 | 高安工場 | (加納) |

地震のこと

6年1部の子をひきつれて、長住町の熊田鉄工所へ入所した。それから1ヶ月位たった12月7日午後1時40分のことである。

昼食を終わって、子どもたちは仕事にかゝり、私は事務をとっていた。工場の中はいつもと変わらず機械の燥音が一定のリズムを作って聞えてくる。

と頭がフラフラするようで、字が書きにくい。首すじなどをピタ、ピタとたたいてみる。ガラス戸がかすかにカタ、カタゆれ、体もゆれるようだ。おかしいなと思っていると、急にドーンという遠雷のような響きの後に、ガタガタときた。地震だ！。事務室をとび出して、

「地震だ、金華報国隊は待避せよ」

100平方米ぐらいの小工場であるが、機械の騒音で聞えないのか、子ども達はもち場から離れない。

「たいひ」

と再び叫ぶと同時に、ドドーンというごう音とともに、壁土がドドーンと落ち、土煙がたちこめる。機械の騒音がバツと止む。停電？。何かにつかまらねば歩けない。

「地震だ。地震だ」

と叫び乍ら、工員の人達も、子どもも、出入口の方へ向って逃げだした。又しても壁土が落ちる。土煙があがる。

油のしみこんだよれよれの作業服や、支給された紙製の戦闘帽や黒い作業用の前かけに、壁土がふりかゝる。防空づきんをかぶりながら、又ある者は肩からけさがけにかけたま、機敏に出る。

「金華報国隊は集合、点呼せよ」 「第1班集合、番号……」

「第2班集合、番号……」 「……………」 「異常ありません」

「前の鍛造部へ行っている者はいないか」 「今日は行っていません」

「よし、全員無事集合か」 よかった

「このまゝで待機せよ、余震があるかもしれないから」と皆を見渡す。

学校へ連絡しなければならぬ。家はどうなっているだろうか、妊娠中の妻、2歳になった子は無事だろうか、などふと思われる。が今は、この子ども達を守らねばならない。狭いながらも安全と思われる場所へ移動し、状況を話しあう。

時々弱い余震があり、ビリビリ、ビリビリとする。しばらくして学校へ連絡をする。以後、作業は中止、後始末や器材の整理を午後4時まで行い、やっと帰途につく。

後にこの地震は東南海地震と名づけられた。翌年1月13日午前3時、雪が積もって月の光が明るい夜半に地震があつて人々を驚ろかした。これは三河地震と名づけられた。これらの地震によって（戦後わかつたことであるが）東海地方の軍需工場は殆んどやられ、敗戦への道をたどつたようである。

戦争中の学校

戦局は不利を伝え戦争は益々苛烈になってきました。私たちは「撃ちてし止まむ」とばかり勉強に作業にうちこみました。そうすることが勝つことだったのです。毎朝野菜の残滓をもって町内から並んで登校しました。たとえ大根の葉一つでもよいから持ってきて堆肥の材料にせよといわれていました。又ある時は全校朝会で川島敏郎先生から「さつまいもの皮をむいて食うとは何事だ、皮も食べれるではないか」と食糧不足のきびしさと物の大切さをお話なさいました。ですから食べれる物は勿論、何でも大切にしましたものです。

帳面を文房具店へ買いに行くとはんど売り切れで、あっても中は白紙でした。帳面の配給がありましたがおんのわずかでした。靴も店になく学級で3足位づつ配給がありました。クジでアサヒ靴が当たった子は大喜びでした。昼食は家へ食べに行きました。配給の魚や肉の缶詰があると1個を数人で分け家から持ってきた麦飯にそえて食べました。6年生の頃は配給の缶詰も少なくなり麦飯を持ってこれずに缶詰だけ食べる子もありました。冬場は学校で作った堆肥と交換した甘藷や大根をみにした味噌汁が出ました。ですから先生から缶詰や味噌汁の給食があるときくと皆喜びました。靴はめいめい思い思いで風呂敷や手さげ袋や肩かけの袋などを作ってもらって使っていました。校舎の中は年中素足で、冬だけは藁草履をはきました。

草笛班

誰が始めたのかしれませんが、子どもたちの間で草笛が流行しだしました。草笛というのは、木の若い軟かい葉を唇に当て、メロディーを吹くのです。先生方はこれは良いというので、各組から数人づつ選ばれて草笛班を作られました。草笛班は全校朝会や分列式の時、ラッパと共に朝礼台の横に並んで、「君が代」「海ゆかば」や軍歌などを吹いて、全校児童の歌うのを伴奏したりしました。

草笛班に入って全校の子の前で草笛を吹くことは誠に晴れがましいことで、みんな競って草笛の練習をしました。草笛には南天の葉がよいとか、否〇〇の葉がよいとか、乾くと駄目だから湿らかしておくにはなどと、みんな考えたものです。この草笛は授業の唱歌の時も使い、きびしい戦時下の楽しい思い出となっています。

東南海地震

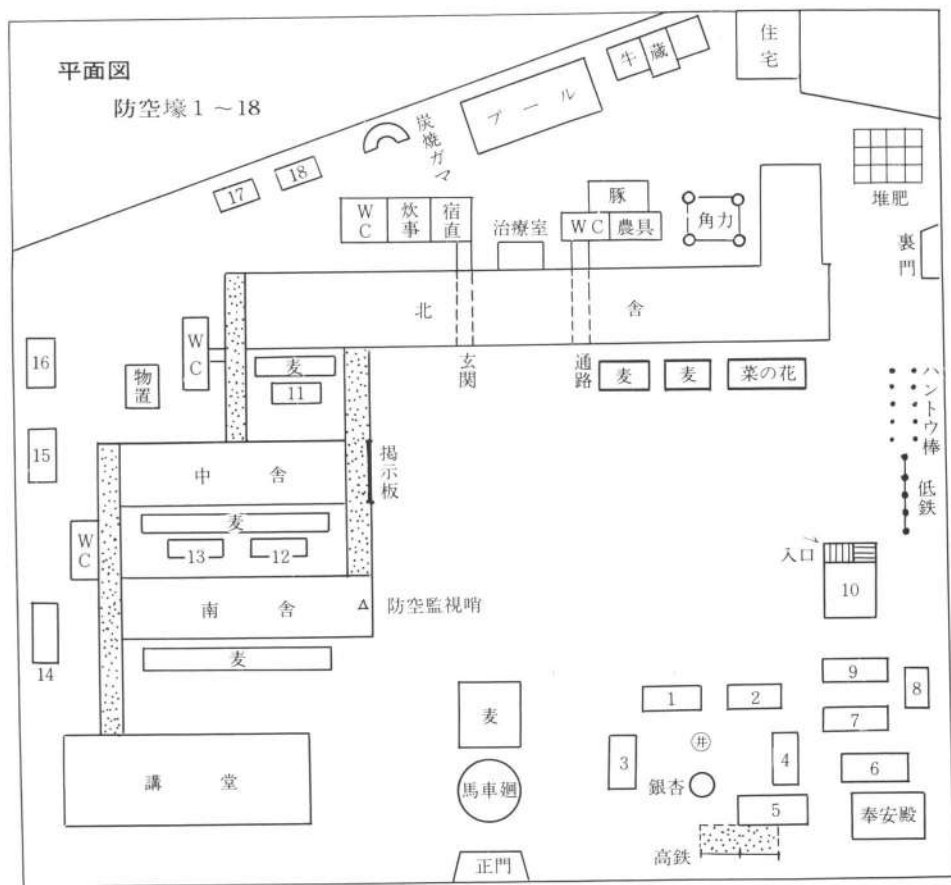
12月7日午後1時40分、第5時間目の授業中、グラ、グラとゆれました。みんな地震だと叫んで教室の出入口へ殺到しました。受持の川瀬知勝先生が「落ちつけ、早く運動場へ」とどなられました。みんなはなだれのように北舎2階の階段をかけおりて運動場へ無事出ました。大きな地震でしたが、これが東南海地震でした。

防空壕

敵機の来襲に備えて運動場や校舎の間に大小さまざまな防空壕が次々と構築されました。そしてその防空壕の上には南瓜又は甘藷のつるをはわせ、一見畑のようでした。校舎の南の花壇も巾広く掘り起して麦やじゃがいも又は菜の花が植えられました。このようにして運動場の南北の距離の約半分は防空壕と畑になりました。そして万一に備え防空壕への待避訓練が時々行われました。

18年頃、銀杏の北に防空壕を掘っていたら地下から古井戸が出てきたので、それは埋めてその北の東西に(1・2)を作りました。19年に今までより大きい防空壕(5)を作り、20年度には間引疎開の廃材を使って巾2間・長さ3間もある大防空壕(10)を高1の2が作りました。壕の中は大人で立つ事ができ、御真影と重要書類を入れるため奉安殿と校舎との中間に作られたのです。この図の外、終戦直前には防空壕が掘られています。

昭和19年度尋常科卒 栄扇町 加藤重光談



終戦前と雑炊の味

旧職員 寺町百助

戦争ははげしくなってくると東京・大阪など大都市は勿論、地方の都市も次々と空襲をうけて焼けていきました。1昨日はどこが焼けた、昨日はどこが空襲をうけた、今度は岐阜の番だろうかなどと岐阜の者は思いました。そして空襲を受けた名古屋などの様子を聞いて落ち着きません。東京・大阪などでは学校全体や学年全体で遠い山の中のお寺や学校などへ集団疎開していきました。岐阜の子も田舎の親類を頼って転校していきました。空襲で焼けては大変だということで大切な家財道具を、岐阜から遠く離れた田舎の親類や知人にあずけるようになりました。田舎へのガタガタ道を家財道具をいっぱい積んだ大八車や馬車が砂けむりを立てて行くのを毎日見かけました。そうして岐阜市内には子どもや老人がめっきりへり、家々の中もガランとしてきました。

そして岐阜市では間引疎開が始まりました。空襲を受けた時に延焼を防いで大火災にならぬようにしようというので、家をこわして道路を広くしたり空地を作ろうというのです。家こわしの手伝いに小学校の高学年（主として高等科）の子どもが動員されました。5月7日から1週間、高等科男子が今小町辺の電車通りの家こわしをしました。建具をとりはらい壁土をおとしてから、柱や梁に長いロープをかけ遠い所から綱引きのように「ヨイショ、ヨイショ」とみんなで引っばります。家はみるみる傾き倒れていきます。後にはロープを引っばった子どもの鼻の頭やほっぺたに、こわれた家の埃やすすがついていました。

学校では堆肥を作り灰を集めて肥料とし、さつまいもを作り恵利蛭を飼ひ勉強が進められました。その中で受持の高等科2年男子46名は4月から勤労働員の命をうけて市内入舟町の松尾木工で働きました。戦争に勝つためには学校での勉強をやめて作業をしたのです。会社からもらった定期券で長住町まで市電に乗りそこから歩くのです。昼食の弁当に水筒、防空頭巾をもって学校ではなく松尾木工へ出勤しました。作業の内容は輸送用の木箱作り、軍艦の錆おとし用の木の棒作り、鋸の目立て、手箱作りなどです。輸送用の木箱作りはまだ水をふくんだ分厚い松板で1米立方位の木の箱を作るのです。毎日釘打ちばかりで手に豆を幾つもつくった子もいました。軍艦の錆おとし用の木の棒作りは、かんなでけずってペーパーで磨いてリレーのバンドを少し長く太くした棒を作るのです。「こんなもので軍艦の錆がおちるやろか」といいながら懸命にけずってみがきました。鋸の目立ては技術を要するが、この業を覚えておくと役に立つということで伊藤君などはこの仕事を希望して進んでやりました。工員たちは海軍の兵隊さんが使う手箱（日用品を入れるもの）を作っていたので、その手伝いもして動員が終わった時みんなこの手箱をもらって帰りました。

戦争末期でしたので毎日のように敵機がやってきました。空襲警報のサイレンが鳴り終ると4つのエンジンをもったB29爆撃機の編隊が高い碧空を白い飛行機雲の尾をひいて飛んできます。その度に工場から梅林の山へ待避しました。

7月9日午後10時とうとう岐阜市は空襲されました。本巣郡の家においてこの事を知り自転車にとび乗って駆けつけました。学校も校下の大部分も焼けていないので、ほっと安心しました。松尾木工へ行こうと電車を南へ行くと、伊奈波から南は一面の焼野原であたりはまだくすぶって煙の中です。焼けた家の材木が炭火のように赤々としています。道路の地面は焼けて熱く、歩けない所もあります。焼けた電線が蜘蛛の巣のように垂れ下がっていたり、電車が無残にも焼けたのもありました。ようやく松尾木工にたどりついてみると、幸いにも焼けていませんでした。けれど勤労働員はそれきりになりました。



南舎屋上の防空監視哨

雑炊の味

8月15日終戦になって、みんなが虚脱感とともに生活特に食べ物が窮屈になりました。お米の配給がますます少なくなって、どの家でも白いお米のご飯なんかとても口に入らない毎日でした。かぼちゃやさつまいもが主食となり、お米はお粥のように量をふやして雑炊としてはいただきました。

K君のお母さんは丸物の食堂に勤めていました。でK君は毎日の昼のお弁当を丸物の食堂まで雑炊を食べにいきました。昼前の4時間目の授業が終るや否や先生の許しを得て丸物へ走るのです。井に一杯の雑炊ですが、みんな食べようと押しかけるので毎日並んで順番のくるのを待ちました。

S君はK君が羨ましくてなりません。一度丸物の雑炊を食べてみたいと思いました。S君の家も毎日雑炊で大勢の家族が飢をしのいでいるのです。お腹いっぱいいただくこともなく食べ盛りのS君もおなかの空く毎日です。一度でいいからK君について丸物へ雑炊を食べに行きたいといつも心の中で思っていました。

たまらなくなったS君はお母さんにねだって説きおとし、10銭いただき鬼の首でもとった気持でK君について丸物へ走りました。ところがどうでしょう。その丸物の雑炊といったら、白いお米は数えるほどしか入っていません。それを30人も50人も並んで順番を待っていただくことができたのです。S君の家の雑炊の方がまだまだましだとS君は思いしらされました。今でもあの丸物の雑炊のお粗末さを思い出し、一度だけせがんで食べに行ったことを、S君のお母さんは今では笑って話せる一口ばなしにしてくれるのです。

丹羽訓導の殉職

図書館へ入る右手に、鉄柵をめぐらしてその中に土を盛り芝生を張りつめ石・松・さつきを配しその上に碑が立っている。これが丹羽流一先生の顕彰碑である。丹羽先生はどういう方なのであろう。どうしてこゝに顕彰碑が建っているのであろう。

丹羽流一、生年は明治38年11月15日、生地は恵那郡中津川市、原籍は山県郡高富町高富1882番地の1、岐阜師範を昭和2年3月卒業、土岐郡土岐小に4年・恵那郡加子母小に4年・恵那郡落合小に3年・郡上郡和良小に6年・郡上郡弥富小に1年奉職し昭和20年4月1日金華国民学校へ赴任された。その間、昭和18年9月文検予備試験西洋画に合格し、先生が洋画の才能に秀で大変な努力家であったことが伺われる。

丹羽先生は2年1部の担任である。昭和20年度に入ると戦局は益々激しさを加え、岐阜へも毎日のように敵機が飛んできた。そして遂に7月9日午後10時岐阜市は大空襲を受け焼野原となった。金華校下は幸いに戦災をまぬがれたが、その後も敵機は飛んできた。その度に退避をしたり授業をしたり農場の作物の手入れをした。

昭和20年8月9日(木) この日も連日の炎天で朝から暑かった。学年主任の丹羽先生は2年全部の子どもと先生方と、学校裏の堤防のさつまいもに長良川から水を汲んできては水をかけた。午前11時作業を終って子どもたちや先生方は長良川の川岸で手を洗い流れる汗をふいていた。

その時である。2年1部の山村有八君が足をすべらして深みにおちこんだ。子どもたちの叫び声を聞いて直ちに丹羽先生は足にゲートルをつけたまま編上靴をはいたまま大川へとびこんだ。丹羽先生は前の郡上郡弥富小の時も激流に飛び込んで人命救助をした経験があり、きっと自信を持って飛びこまれたことであろう。しかし天は先生に味方せず、いったんは教え子に泳ぎつき、かかえて岸に向われたが力つきて師弟ともに波間に沈んでしまわれた。急をきいて駆けつけた人々の必死の人工呼吸の甲斐もなく、先生も子どもも遂に生き返らなかつた。翌8月10日、丹羽先生の自宅で校葬がしめやかにとり行われた。

当時の学校日誌には簡潔に次の如く誌してある。

- 8月9日(木) 丹羽訓導、長良川にて殉職す。初2の1山村有八、長良川にて溺死
 8月10日(金) 丹羽訓導校葬 於長良若葉町自宅 自午後3時至4時 全職員参列
 知事(代理)市長 市教育課長及視学 師範同窓会 市校長会



丹羽流一先生顕彰碑

図書館前

昭和47年秋、学校へ一通の分厚い封書が届いた。差出人は、大韓民国、京畿道披世郡臨津面仙遊一里、金億岩とある。中をひらいて読むと、私は山村有八の兄で金華小在学中は山村億岩とっていた。木挽町5番地に住んでいて私は尋常科を昭和20年3月24日卒業した。戦後故郷に戻って日々平和に暮らしているが思い出すのは弟有八の事や助けようとしてともに亡くなられた丹羽先生のこと、なつかしい校舎や友だちの事などと綿々と達筆

でかいてある。早速返書をとと思いながら百年誌の編集などでいそがしく、百周年式典も終わった昭和48年4月学校の近況や丹羽先生顕彰碑の話綴り、校舎や顕彰碑などの写真を添えて送ったのである。

昭和48年秋、1人の紳士が来校された。名刺には上田彰、自宅は中津川市落合 851とある。話を伺うと私は丹羽流一先生の教え子の1人である。岐阜へ来たので顕彰碑のまわりの掃除でもと思って立ち寄ったと云って、碑を建てた話をされた。それによると上田さん達落合小の教え子が発起して、恵那・郡上などの教え子に呼びかけ、浄財を集めた。図書館の前の土地は岐阜市から借りた。そして碑は勿論、盛土・石・樹木など一切を丹羽先生ゆかりの地である恵那郡落合で整え、そこからトラック5台で終焉の地である本校へ運んだ。顕彰碑築造には金華小PTAも勤労奉仕に加わって、こゝに顕彰碑はでき上り、41年11月20日除幕式が盛大に行われたのである。又これを記念して本校図書館に丹羽記念文庫を寄贈された。

丹羽先生と恵那の子たちや有八君たちの出あい、師弟の愛情を今に残しそれを取りまく人々をも浄化し、顕彰碑は今も清らかに建っている。その碑文に日く、

丹羽流一先生 顕彰碑

昭和20年8月9日 先生は亡くされました。

必死の人工呼吸も空しく 41歳の若さで

金華小学校2年生の教え子の手をしっかりと握りしめながら

先生は最後のその日まで どんな力にも屈せず

教え子と共に生き抜いてこられました。

先生 私たちは今こんなに大きくなりました

先生の教えは私たちの心の中に いつまでも生きつづけています

長良川の水も今は静かに流れています

先生 安らかに眠って下さい 教え子たち

(裏面に)

昭和41年11月吉日建立

昭和後期 (終戦以後)

終戦後の混乱から
いち早く脱し、
健康教育・生産教育へと力強く立ちあがる。
図書館教育に、
全国唱歌ラジオコンクールに大活躍する。
鉄筋校舎・プールを建設して面目を一新し、
体育館の建設により、
学校の陣容すべて整う。

校舎全景

昭和31年度



戦後の学校

戦火の中をくぐりぬけ九死に一生を得て奇跡的に命拾いをしたのは忘れもしない昭和20年7月のことです。その頃戦局は益々我方に不利になり敵軍の本土上陸も間近いといわれていた時ですから、応召中の父に一目逢いたいと岐阜から九州の都城へ行きました。母と妹と私の3人は父に逢っての帰り路、汽車はライトをつけたま、熊本駅へ着きました。汽車が止ったなと思った時、敵機が頭上から焼夷弾を落します。汽車はあわててライトを消して、駅前や熊本市内から火の手がパッと燃えあがるのを見ながらめくら減法走り出しました。紅蓮の炎と化した熊本から遠ざかり、まっ暗な闇の中へ入ってやれ助かったと思いました。そして岐阜へ着いて2度びっくり、岐阜も焼けて岐阜駅のプラットホームから長良川の堤防が間近に見えました。

8月15日終戦を迎え、11月4日疎開先の三輪から岐阜へ戻り金華国民学校5年3部に転入しました。受持は5・6年とも野々村稔先生です。5年生の時は、先生の指図に従って教科書の中の戦争に関係のあるところなどに墨をぬりました。算数の本はままだしも国語の本は墨がぬってあるところが多く、何が書いてあるのかわからんくらいです。子どもは横着をしました。先生も含めて大人は敗戦の衝撃で茫然自失していました。それでも授業だけはキチンと行われました。そして昭和21年4月、私は6年生に進みました。教科書は新聞の用紙に刷ってあるのをもらって、家で母が切って頁を揃え、ありあわせの紙を表紙につけ和綴にして下さいました。帳面は市販のものがなかったので、手に入った更半紙を切って母に手伝ってもらって自分で作ったのでした。

この頃の服装

卒業時の6年3部



私は幸いにも家業の関係で表紙にする紙や更半紙が手に入ったのですが、友達の多くは教科書の表紙もなく、帳面すらなかったのです。帳面のない子は使い古した紙の裏やペラペラの広告の裏に書いていました。私の鞆は古くてホロになったので、帯しんのような白布で手さげ袋を母が縫って下さいました。

戦後は食糧が不足し食糧の確保にみんな懸命でした。学校の昼食の時間にはみんな走って家に帰り、雑炊やさつまいもを食べて、学校へ弁当を持ってくるところではなかったのです。ましてや服装は二の次でありあわせの物を着たり、ありあわせの布で服を作って着ました。頭は丸刈りで帽子はなしが多く学校へ学帽をかぶってくる子は数える位しかありませんでした。冬の上衣は小倉の折襟つきの着古しを大事に着ていて戦前はつけていた胸の名札もとりました。夏のシャツは母が浴衣の古で作ってくれたのを着ていました。夏の半ズボンも母の手作りで何かのお古だったのです。履物は足にひっかけられるものは何でもはきました。下駄は勿論大人のゴム長靴をお天気がよいのに引きづってはいたり、軍隊用の皮の長靴をはいて学校へ行った事もあります。家では鼻緒に柄物の布を入れて藁草履を作ってはいた事もありました。雨降りは大人の番傘をさし、下駄かゴム長靴で学校へ行きました。

物資は欠乏し世情は暗く今後どうなるかわからない不安の世の中で、学校の授業だけは整然と行われていました。ただ戦前まで行われた毎朝の全校朝会やラジオ体操はなく授業だけでした。受験準備も補習もありませんでしたが、受持の野々村先生は試験に次ぐ試験を授業中にして下さいました。ガリ版で刷ったり板書をしたりして、1週間に2回乃至3回位各教科の試験がありました。その出題は教科書からではなく私たちの知らない別の参考書から出されるので、私たちには予想もできず面くらったものです。先生は解答はされず只試験をするばかりでしたが恐らく入学試験に馴れさせるつもりだったのでしょう。私たちは友達同志答案を見せ合って解答を研究しました。試験の点数も友達同志はわかるのでお互に友より負けまいと頑張って勉強しました。この頃競い合って負けん気で勉強した友は2人いました。その2人はそれぞれの道を突き進んで今幸せに暮らしています。それにしても先生は1年間うまずたゆまずよくもまあ試験をして下さったものです。今にして想えば敗戦直後の混乱の中で勉強できたのも先生のお蔭だと思つづく思います。

学校の畑は方々にあったのですが、私たちがよく出かけたのは桃林でした。今の女子短大の少し西の辺で南に松林があり、広さは学校の運動場の三分の一もあってしょうか。ここに甘藷を作りました。甘藷の葉の枯れたのを見つけるとそれを野々村先生に差し上げました。休憩時になると先生は松の根元に腰かけて、子どもにももらった甘藷の枯葉を手でもんで煙管につめ、ブカー、ブカーと煙草を吸われます。その煙草の煙の行方を見上げて子どもたちはワァー、ワァーとはやしたてます。少し長めの顔の筋肉がゆるんで眼鏡の奥の目が更らに細くなり、気の長いのんびりした顔が余計親しみ易く暖か味を増します。私たちは先生のこの顔が大好きでした。畑から帰る時には甘藷の葉をとって学校へ持って帰り、空箱や空缶に入れて大切にしました。蔭干しにした甘藷の葉ができると先生に差し上げます。先生は休み時間になると喜んで甘藷の葉を煙管につめて吸ってみえます。私たちは先生の事をオッサンと呼んでいました。

昭和21年度尋常科卒 啓運町 山村知之談

虱とさつまいもと給食

旧職員 酒向敏子

虱退治

敗戦のどさくさ時には、家といわず学校といわず不潔なものであった。校下のどの家でも風呂の設備はあったが薪不足で風呂がわかせなかった。又石けん不足で洗濯も思うようにできなかった。そんなある日、授業をしていると、子どもの頭から首にかけて虱が這っているではないか。耳の後ろの毛をあげて見ると、幾つも幾つも銀色に光った虱の卵がついている。子どもが無意識に手でゴシ、ゴシかゆいから髪をかいている。洋服の襟首をあげて見ると、そこには衣虱がついていた。毛虱と衣虱との区別を知ったのもこの頃である。他の子はどうだろうと調べてみると、やっぱり虱の卵をつけている子が幾人もいた。

早速そういう子を集めて、衛生室へ連れていった。その頃、D・D・Tは虱によく効くと云われ、今のように恐ろしい薬害があることなど知らず、よい薬ができたのだと感謝して、頭も着物もまっ白になる程ふりかけてやったのである。子どもも先生も、このよく効く白い粉にむせびながらの作業であった。

時には虱の卵が髪の奥深くくっついているので、鋏で髪の毛を、じょき、じょき、切りとってやったり、時にはどこからか、石けんを手に入れて子どもの頭をゴシ、ゴシ洗ってやったこともあった。虱など見たくても見れない今から思えば想像もできないことである。この頃の毎日は、子どもも先生も、その日、その日、授業以外のことに追われて生きることで精いっぱいであった。

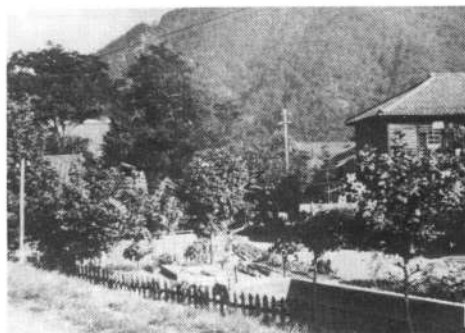
さつまいも

敗戦後の食糧不足はそれはひどいものであった。食べれるものは、なんでも食べた。さつまいものつるも食べた。田の間の溝に生えているせりなど、みんなとり合って食べた。谷川のかにも食べた。いなごも食べた。そんな時なので学校の運動場の大半は畑にして、さつまいもを植えた。学校裏の堤防も耕して、さつまいもを作った。さつまいものできばえは肥料によるので、肥料にする堆肥作りにはみんな一生懸命であった。



敗戦のわびしい校門

25年度



堤防から学校裏を望む

毎朝、登校前に馬車の落していった馬糞を拾っては学校へ持ってきた。中には馬車が通る音をききつけると、それとホーキとごみとりを持って駆けつけ、馬車の後からついていって、馬が落すポカ・ポカの馬糞を拾ったのである。馬糞は堆肥の上等の原料であった。

家から残菜を持ってきたり、木の葉を拾ってきたりして堆肥を作った。土作り、植付け、とり入れまで学年に応じたさつまいも作りをしたのである。

下手ながらも自然の恵みは秋の収穫となって、秋日和のよい日に一日楽しい芋掘りをした。うず高く積まれたさつまいもは、家庭科の実習用として、細かく切りメリケン粉とあわせてふかし、芋ウイロを作ったこともある。とれた一部分は供出し、一部分は子ども達の家へわけてやった。わけてやった分は 500瓦だと記憶している。大きな台秤にのせてはかっていると、しまいには目分量で 500瓦がわかるようになった。たった 500瓦のさつまいもに、子どもも学校も大喜びしたものである。

学校給食

ミルクが飲める！。アメリカからミルクを送ってくるそうだ。学校給食が始まるそうだ。学校でミルクが飲めると、腹をへらした子どもらは大喜びで待っていた。

ミルクの粉はララ物資とって、戦争に負けた国の食糧事情を救うためのもので、ドラム缶位の大きさのダンボールの中に入れて学校へ配られてきた。それを校務室の大きなハソリに入れて沸かすのである。そのまま入れるとミルクがままこになるので、今から思うとナント不衛生な所で、それは職員便所へ行く渡り廊下にすり鉢を並べて、その日の当番の先生が、ミルクに少しづつ水を入れてとき、それをハソリに移して沸かしたのである。

勿論そのミルクには砂糖なんて入ってもいなかった。時にはミルクのかたまりがハソリの底にこげついて、こげくさい茶色をしたミルクを木の手桶に入れて各教室へ配って飲んだのである。そんなミルクでも冬の寒い時には、あったかくおいしかったのである。

その状況を視察に、昭和22年1月23日県軍政官が来校された。当番にあたった女子の先生は朝から大変で授業どころではなかった。授業ができないので、なんとかならないかということで、昭和23年度から人を備い始めた。それが今の調理員の始まりである。その頃になると、ミルクのほかに干バナナ・ジャム・果物の缶詰なども送られてくるようになり、その甘味にどれ程喜んだものかしれなかった。

豚と配給と映画

旧職員 山本春子

昭和22年度から6・3制が実施になって、4月1日に校名が金華国民学校から金華小学校と改称しました。従って高等科は新制中学となり、前年の国民学校の時は男女別学で1・2部が男子、3部が男女、4・5部が女子の学級でしたが、小学校となった本年度からはどの学級も男女学級となりました。私は昭和20年に本校に赴任して、4年5部・5年5部・6年6部と持ちあがりましたが、4年・5年は女子組で6年は男女組になりました。高学年の男子を教えるのは始めてで随分戸惑いましたが、受持ちの男子はおとなしく、よく言うことを聞いてくれました。

豚当番

この頃で一番印象に残っていることはクラスの子らと豚を飼ったことです。前年度までは高等科が飼っていましたが、この年から最上級生となった6年生が豚の世話をすることになりました。それで6年生の6学級がまわりもちで豚を飼うことになり、私の受持学級に当番がまわってきました。男の子が豚をねかせて水をかけ、腹や背中などをタワシで洗ってやるのです。一口に云えばこれだけのことですが、狭い小屋の中で、大きな豚をつかまえてねかせるのは大変なことです。豚は大きな図体をして、プー・プー小屋の中を逃げ廻ります。それをおっかけてつかまえるのです。ところが当時のことですから餌もあまり充分でありませんので、豚は小屋から出たがります。そんなある日、どうしたことか小屋の鍵が外れていて、豚が小屋からとび出して一目散に逃げます。そして豚は堆肥のあたりをさまよって餌をあさる始末、当番の男の子は赤い顔をして豚を小屋へ追いこむ大声とそれを応援する女の子たちの歓声と豚に追われて逃げる女の子たちの叫声とが入り交って大騒ぎでした。やっと豚を小屋へおい込みましたがこの時ほど男の子を頼もしく思ったことはありませんでした。

配給

戦後の物のない時で食糧も不足し随分ひもじい思いをしました。子どもの品物も店頭にはなく自由に買えませんでした。そして学校へ僅かばかりの運動靴や長靴・体操シャツ・クレヨンなどの現物がきました。それを各学級へ割当て学級でそれを分けるのです。くじなどで順番をきめておいて当たった子にお金と引きかえに渡すのです。これを配給とっていましたが、配給に当たった子の嬉しそうな顔を今も忘れることができません。

ほんとうに物のない時でした。教室の窓はガラスがあちらもこちらも割れていました。けれどガラスの補給がありませんから、割れたままでした。桜の花の咲く頃には教室の窓から桜の花びらが舞いこんできて風情もありましたが、冬になると北風が身

にしみます。仕方がないのでありあわせの紙を貼ります。けれどすぐ破れてしまいます。貼っては破れ、破れては貼り、北風が吹きこむと破れた紙がピー・ピーと音をたてます。そのすき間から吹きこんだ粉雪が机の上につつすらと積もります。

ガラスなき窓より

入る雪風に、こごる指先、子らはすべなむ

当時こんな短歌を詠みました。戦時中素足で通うことを奨励された子どもたちでしたから、寒さにふるえていても我慢強いものでしたが、その我慢強さが却ってふびんでなりませんでした。

終戦の20年・21年・22年この頃が物のないドン底でした。教室の窓ガラスを始め、学校の物はすべて昔からあったものをこわさないように、ていねいに使っていました。本校は戦災をうけなかったので、まだ教材道具などがあって助かりました。子どもたちは教科書と帳面に鉛筆位を持ってくるのがやっとで、それを大事に使っていたのです。

映画

戦いに敗れ食物は少なく物も手に入らず世相は暗い時でしたから、人々は明るさと笑いを求めて映画館がはやりいつも満員でした。終戦後、焼野ヶ原の中に先ず復興したのが映画館でした。あたり一面に焼けた柳ヶ瀬界限では、土の上に棒杭を打ちその上に板を渡してうちつけたベンチの急造の映画館があちこちにできました。

市内小学校では前年度から1学期間に1回位映画館へ連れて行って映画を見せました。一般のお客の入る前、即ち午前中に見せたのです。朝学校で集まって全校の子が歩いて行くのです。今のように車が沢山通りませんから車の心配はありません。テレビのない時代ですから映画観覧の予告をうけた日から子どもたちは待っています。映画館で映画を見て又歩いて帰校します。学校へ帰ると昼です。午後は映画について話し合ったり、映画の感想文をかかせたりしました。その頃白木町に光会館という映画館があってよく行きましたし、柳ヶ瀬の小劇場や満映等にも行きました。時には長良小劇場へも行きました。映画の内容は劇映画・文化映画、そえ物の漫画・ニュースといったものでした。文化映画の「魚の一生」は今でも覚えています。劇映画では「手をつなぐ子ら」を見たのがこの頃だったと思います。



この頃の服装

卒業時の6年4部

育友会の発達

昭和22年11月30日金華小学校育友会が白木町光会館において設立された。当面の目標は終戦後の荒れはてた校舎・校地の整備と備品の充実とにあった。育友会は順調に進んだが、そのうち創立80周年並びに鉄筋校舎に改築という大事業に当るため組織の強化をはかり、昭和27年度役員の中に総務数名を加えそれまでの委員会を部会とした。鉄筋校舎改築が目鼻のついた昭和34年度従来の部会を委員会とし、昭和36年度総務を廃止して委員会の充実に努め、次第に近代的育友会へと脱皮していった。

年度	会長	役員	委員会とその活動	その他
22 23 24 25	浅野久蔵 " 松井太郎 "			会員年1口120円(町内委員集金) 決算282,224円
26	浅野久蔵	会長 1 副会長 2 書記 2 会計 2 監査 3	プログラム委員会 予算 " 財政 " 教養 " 福祉 " 学級 "	町内委員(賛助会費の集金) 会員を正と賛助とに分ける 正会員は月20円、子ども2人30円 賛助会員は年1口120 予算408,000円
27	桑原善吉	会長 1 副会長 2 総務 6 書記 2 会計 2 監査 2	企画部 財務 " 教養 " 副社 " 保健 "	町内委員(地区別懇談会、6地区) (会報を27年8月15日創刊、B4版年1回発行) (運動会バザー4,454円で紅白幕購入) (創立80周年式典挙行政28年3月1日)
28	"	"	"	(運動会バザー6,644円で校旗寄贈) (図書館落成 28年4月2日)

年度	会 長	役 員	委員会 と その活動	その他
29	中川好太郎	”	”	(運動会バザー 9,005円で校旗の刺しゅう代) 図書部新設
30	”	”	”	”
31	”	”	”	”
32	”	”	”	(鉄筋校舎の改築始まる) 給食部新設 (第1期工事 33年2月21日完成)
33	”	”	”	(運動会バザー15,670円国旗掲揚塔基金) (廃品回収 85,195円ストーブ施設とす)
34	”	”	企画委員会 学級委員 (年8回学級PTA実施) 財務 ” 町内委員 教養 ” (会報発行、35年3月1日よりB5版とす) 福祉 ” (運動会バザー) 保健 ” (毎月1回健康相談日・ポスター作製) 図書 ” 正会員1口40円 給食 ” 予算1083,678円	
35	”	”	”	(運動会バザー9,100円運動器具購入) ” (教養委員会で良親学級開設36年1月19日) (母親文庫開設 36年3月1日)
36	”	会長 1 副会長 2 書記 2 会計 2 監査 3	” 母親委員会新設 (母親文庫) 映画 ”	決算1083,382円 (鉄筋校舎に改築完了 37年3月20日)

自作劇

旧職員 西村君子

前年の昭和22年度から国民学校が小学校となり、男女共学になりました。しかし長い習慣で必要な事以外は男女の間で口をきくことが少なく、掃除やグループで男女いっしょにやっても心の中は男女別々でとけ合わず困ってしまいました。学校中がこうした傾向であったし、又敗戦後の物資缺乏の時で何となく子どもの



この頃の服装

卒業時の6年5部

心も暗く沈みがちでしたので、男女いっしょになって劇をさせよう、それも子どもたちの自主性を引き出すために劇を作らせようということになりました。

それで私の組は幾つかのグループに分かれて、各グループで劇の稽古を始めました。劇のストーリーは決めておいて、各自の台詞は子どもが自分で考えて作ってはしゃべるのでした。つまったり、とちったり、その度に男女共通の笑い声が起き男女間の話し合いも次第にできるようになりました。

あるグループは「安寿と厨子王」を劇にしました。お母さん役は宇佐見さんで安寿は丹羽さんでした。学校だけの練習だけでは物足らず、丹羽さんの家へみんなよって稽古をしました。安寿は夏なのに家から裕せの着物をひっぱり出して着て汗だくだくで、それでもおしとやかに厨子王を励ましました。母が姉弟を励まして次の宿へ急がせる台詞や悪者のために別れ別れに船に乗せられていく台詞など随分長い台詞もありましたが、とても上手で劇の発表の時には大拍手でした。

大坪君や矢島さんのグループは面白い劇をしました。お母さん役の矢島さんに「道くさせずに橋は気をつけて通るんですよ」といわれた大坪君が、やっぱり道くさして橋に見たてた平均台から落ちてしまいました。その時の大坪君の珍妙な顔はみんなを沸かせました。この面白がらせた劇も大坪君や矢島さんが考えなものでした。その他、安藤君たちは傘地蔵の劇、小川さんたちは長谷観音の朗読をしました。このようにして自作劇は、子どもの自主性にも男女の話し合いにも役立ちました。

地震さわぎ

「今度はお母さん方に劇を見てもらうことになりましたが、どんなふうに行いましょうね」と私が教室で子どもたちに話をしていました。その時「ドドドー」という音が突然押しよせてきました。さては地震と学級の子らは半分位立ちかけました。しかしその音はお隣の学級の子が一斉に立ち上って教室から出かける音でした。それに気がついて「地震じゃないよ」と大声にいつて落ち着かせようと思いました。そしてよく見ると前の一列位の子どもがいません。地震とまちがえてあわてて教室からとび出したのです。

この時受持の6年5部の教室は、新制中学が南舎に同居していて教室不足なので、北舎の東端から北へ突き出た1階の元図工室でした。早速入口まで走って行って、地震と思ってとびだした子どもたちを呼び戻しました。だが一番小さい船木圭子さんだけは、先生の呼び止めるのも振り切って1目散に走り、豚舎の前を走りすぎたところで転んでしまいました。

私はびっくりして駆けつけ、だき起してみますと気を失っています。保健室へかつきこんで、松井校医さんと呼ぶやら船木さんのお家へ電話するやら大騒ぎでした。校医さんも船木さんのお母さんもすぐかけつけて下さいました。船木さんのお母さんは長い数珠を手につけて、じゃら、じゃらと音をたてて何か唱えてみえました。やがて船木さんが正気づいたので私はほっと安堵の胸をなでおろしました。このでき事は福井地震のあった直後のことで、まだその余震も時々あり子どもたちも落ち着きを失っていたからだったのでしょうか。今から思えばなつかしい思い出ですが、その時はほんとうに二度もびっくりしたのです。

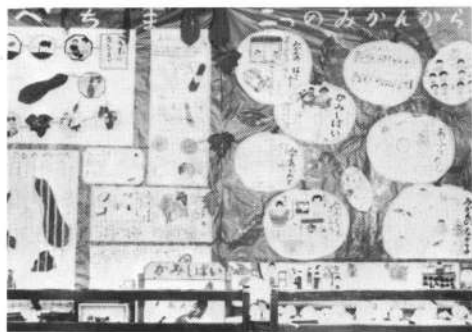
北舎と桜

二十五年
度



展 覧 会

旧職員 堀口すゑの



展覧会

24年3月14・15日

昭和24年3月14・15日の両日講堂で展覧会を開いた。この展覧会は児童の図画・習字・工作等の作品展ではなく、そうしたものは現在と同じように夏休み作品展として9月始めに各学級の教室で開いていた。この展覧会というのは、当時コアカリキュラム全盛時代であったので、本校の目標である生産教育につながるものをコアにした学習の成果の発表である。従って展覧会の発表物の多くは、豚とか、銀杏とかさつまいものようなものが多か

った。私は2年2部の担任であったので、大単元を「へちま」に決め、年度始めに長期学習計画をたてた。先づ立派なへちまを育てるためには、土作りが大切である。4月には花壇を深く耕して堆肥を沢山入れた。共に作業をする児童たちも「でっかい、へちまを作ろう」と楽しい目標をもって、みんなで力を合せて、いっしょうけんめいがんばった。

5月1日へちまの種まきをした。これは成長の日数を数えて記録をとるのに都合がよかった。その日から当番を決めて、世話をすることにした。当番日記も書き始めた。10日目にやっと発芽した。いよいよ成長の記録がそのまま展覧会へと発展するのかと思うと、記録のとり方にも熱が入った。

「へちま」で理科の学習をした。二葉から本葉へ、本葉の数と茎の伸び方の関係、つるの巻き方とへちまの手の必要性を知り、やがて雄花と雌花との関係と昆虫との助け合いに気づく。秋にはへちまの実が成長して、へちまの実の収穫をよろこんだ。そのあとへちまの水とりから、根の働きを知った。又へちまの茎の伸び方は、気温に深いつながりのあることを、グラフにまとめた。

「へちま」で国語の学習をした。へちまの観察日記をかくことによって、細かく見つめる態度が養われた。そのうちに飛んでくる蝶を見つめて、花と蝶の可愛らしい童話を作ったり、当番活動からさまざまな生活文が生まれた。

「へちま」で算数の学習をした。茎の長さを測定することによって、長さの単位を生活の中で学習したり、へちま水をとってそれを測ることによって量の単位を学習したのである。


「へちま」で社会科の学習をした。へちまコロンがへちま水からできることや、靴の底の敷物や、へちまのたわしがへちまの実からできることを知って、それらを子どもなりに工夫して作ったりして、楽しい工作へと発展した。

展示会場の講堂内部は幾つかに仕切り、その壁面やその前に並べた講堂の長椅子の上に展示した。私の受持学級の割当てられた壁面は縦2米で横も2米位であった。この面積を有効に使って、上部にへちまの棚を作り、壁面に観察記録を展示し、前の上椅子の上には観察日記、童話、作文、へちまの製品を並べた。隣りの1年4部の酒向敏子先生の学級では「みかん」をテーマに力作が展示してあった。全校どの学級も、それぞれの大単元にとり組んで全力をあげて競い合うのだから、素晴らしい展示会であった。

このように生産教育につながるものをコアにした展示会は昭和22年度から始まり、年々盛大に行われた。展示会はいつも2日間行われ、その期間中に学級PTAが開かれて、展示会場は押すな押すなの盛況であった。それだけに、子どもや先生方の力の入れ方も大したもので、展示会が近づくと夜おそくまで講堂で働いている先生の姿が見られた。

衛生袋

この頃は全校どの子どもも衛生袋を肩にかけていた。衛生袋は袋も肩かけも全部白の無地である。まっ白な衛生袋を肩にかけて登校し、授業中もかけて勉強し、休み時間もかけて遊び、放課後もかけて遊び、下校の時もかけていた。便所へ行く時もかけていたし、遠足の時もかけていた。つまり1日中衛生袋をかけていた訳で、肩からはずすのは体操の時位のものである。



衛生袋を肩にかけた1年6部 25年度

衛生袋の中にはハンカチ、鼻紙、マスク、頭おおいの白い三角布が入っていた。便所で用便をすませると手を洗い、衛生袋の中からハンカチを出して手をふいた。掃除の時に埃を吸わないように親に白い布で作ってもらったマスクをかけ、頭に埃をかぶらぬように親に白い布で作ってもらった三角布で頭を包んだ。衛生袋も親が白い布で縫って作ったものである。

子どもが新1年に入学すると親に衛生袋を用意するよう伝えた。白い無地と学校が指定したのは、汚れが目立つよう、よごれたらすぐ家で洗濯するようにしたからである。当時は戦後でトラホーム患者や頭髪に虱のわいている子が多く、学校では健康教育を重視し、具体的には衛生袋となった。昭和24年頃から衛生袋をかけ出し、子どもの身体が清潔になるまでの数ヶ年間、衛生袋は子どもの肩にかけられていた。

子 供 郵 便 局

昭和24年秋に、金華小学校子供銀行を設立した。そして5銭・10銭のおこづかいでもむだづかいせず貯金させようというのである。子供銀行は6年生の手で運営してきたが、お金のことであるので、昭和26年1月からは郵便局の方に出張してもらって、貯金事務をしてもらうことになり、名称も金華小学校子供郵便局と改めた。

子供銀行及び第1回子供郵便局（26年1月19日分）の貯金額は次の通りである。

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	計(円)
旧子供銀行分	207	435	483	547	405	458	2535
1月19日の分	163	168	198	215	180	206	1130

子供郵便局の第1回貯金日は1月19日であったが、お正月のお小使をためて子供郵便局へという呼びかけが行き届いて多額の金が貯金された。26年2月からは、毎月1日・15日を貯金日と定めた。その日には決まって郵便局から出張してもらったが、郵便局では小額の集金で勘定するのに手間がかかり、その日は夜8時や9時まで通帳の整理をして下さったのである。

運動会

10月17日、秋季大運動会が行われた。朝から走る、踊る、又走るなど終日盛大に運動絵巻がくり展げられた。好天に恵まれて運動場はあふれんばかりの観衆で、演技の

たびに、ドッと歓声が揚がっていた。特にリレーや下記の各学年の団体演技に人気が集中した。



運動会

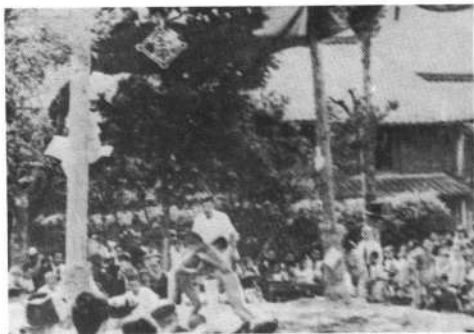
自治会リレー

- 1年……………さよなら街角
- 2年……………まりととのさま
- 3年……………緑の丘
- 4年……………可愛いマーチ
- 5年……………タンプリング
- 6年……………朝日は昇る
- 自治会……自治会リレー
- 婦人会……おけき踊り

角力場完成

健康教育の充実の一環として角力場が完成した。これについては校下各種団体の多大のご支援を得、ことに安田梅吉・桜井太市・後藤喜八・丹羽清二・野村組・伊藤為一・西垣秀吉・豊田貫一・柿内与吉の諸氏よりは資材その他で多大のお力添えをいただいた。

9月24日、校庭の東南隅（奉安殿跡）に新装なった角力場が完成し、岐阜市長さんも検査役となって四本柱に座るなど豆力士の敢斗がくりひろげられた。



土俵開き角力大会

ブランコ完成

終戦後、ないないづくしの学校であったが、よい遊びは子どもにとって何よりも大切と、今度ブランコができた。これは育友会のお力によるものである。4つのブランコは終日、よい子をのせていそがしい。

放送スタジオ完備

金華小放送局のスタジオが完備した。窓はピンクのカーテン、床は防音のじゅうたん、壁は真白、機械はスーパーの3段アングル、電蓄マイク同時演奏、3線放送である。全校の各教室にはダイナミックスピーカーが取り付けられた。

放送室の広さは、わずか4坪だが狭い乍らも完備した放送室である。毎朝元気なアナウンサーの声が流れると、今まで眠っていたような学校は、急に生き生きとして活動し始める。レシーバーをかけた小森先生の指が動くたびに、次々と放送は変っていく。校長室専用マイクからは、後藤校長先生のすき透った声が校内に流れ、1800名の耳に心地よく響いていく。

水洗便所に改良

この頃、学校の便所は扱みとりであった。扱みとりは衛生的でないというので、育友会の方々のお骨折りで市が水洗にして下さった。

25年10月14日北舎の水洗工事が始まり25年10月25日完成、続いて中舎・南舎の便所の水洗工事にかかり25年度内に全部完成した。これで校内の便所は全部水洗となったので、その使用方法をこまかに全校児童に指導した。



運動会

6女「朝日は昇る」

完全給食始まる

本校は昭和23年9月1日より、米国放出の缶詰や菜食など副食だけの学校給食を行ってきた。昭和25年になって我が国の8大都市では米国の好意により完全給食を実施したが、1年間の結果好評であったので、小麦だけは無償で全国の市制施行地に広げて完全給食を実施することとなった。

本校においても昭和26年2月中旬から完全給食を実施した。完全給食にふみきるについては、事前に学校給食の意義・目標を明らかにし、給食の献立などを研究し、又一方においては児童の各家庭へ給食に対する家庭の心得を知らせた。

従来の給食と完全給食との相違点の主なものは次の通りである。

1. 今までの給食は偏食の矯正と栄養の補給程度であったが、完全給食は完全栄養食を献立表により与えるものである。
2. 今までは弁当を持ってきて副食だけの給食であったが、完全給食は主食・副食ともに給食するので家から弁当を持参する必要はない。
3. 今までは副食費だけであるから月70円であったが、完全給食は1日約9円、月20日分として月180円位かかる。

完全給食は親が子の昼食の心配をしなくてもよいという単純なことではない。完全給食の効果として、家庭では不足勝ちな蛋白質が必要量とれ、食品に偏らないこと、家庭では偏食の子も学校では割合平気で食べられること、同じ献立であるから恥かしがって食物をかくする必要もなく、みんな楽しく食べられることである。

食器は煮沸消毒をするといいが、未だ学校にその設備が整っていないので、家庭で熱湯で消毒し完全に水気をとってから給食袋に入れて学校へ持参するよう各家庭にお願いした。

このようにして完全給食が行われたが、肝心の給食室がないので不便であった。それで新給食室の建設を市当局に要望してきた。市当局もこれを了とし遂に新給食室の建設に着手した。かくして昭和26年8月26日待望の新給食室は完成した。工費は25万円である。新給食室の竣工により完全給食はようやく軌道に乗ったのである。



炊事のおばさんたち

岐阜地区小学校研究会

10月3・4・5日の3日間、岐阜地区小学校研究会が本校に於て開かれた。本年度県下最初の地区研究会であったので、岐阜地区の先生方は勿論の事、県下の各地から大勢の先生が参加された。3日間続けて来校された先生の数は次の通りである。

市内の校長	24人	市内の先生	200人	市教育委員会主事	11人
県内の校長	12人	県内の先生	100人	県教育委員会主事	6人

本校では各学年とも毎日1時間1学級づつ公開授業を行い、3日間で18学級が公開され、県下の先生方の研究の対象となった。午前中はそれぞれの学年に分かれて参観した授業をもとに、12研究会が行われた。昼休みには、金華小の児童の劇や音楽があった。午後は各班毎に分科会を開いて研究された。

金華小の児童新聞社では、この好機をのかさず、豆記者22人を総動員しめざましく活躍した。そして毎日、金華タイムス号外を発行し、参会の先生方へ配布した。又参会の先生方にインタビューして、金華小学校の感想をきいたが、どの先生も口を揃えて、金華の子どもは上品だが元気がない、素直である、服装がよい、一生懸命やっている、すみずみまで掃除が行き届いている、などといわれた。

運動会

10月25日、秋季大運動会が行われた。朝から雲が若干出ていたが、暑からず寒からず、絶好の運動会日和に恵まれた。お天気が幸いし、場内は黒山のような大観衆ではちきれんばかりであった。

終日、元気な演技がくり展げられたが、特に遊戯は各学年とも好評であった。

1年	はとぼっぼ	1年生らしいかわいいゆうぎ
2年	日の丸ふって	全員が旗をサッサッとふって勇ましい
3年	青い風	赤旗・白旗をふって、とても元気
4年	楽しい歌声	見ていると楽しくなる
5年	菊の花ワルツ	軽々とした動き、手にした白菊の大輪が見事
6年	平和の鐘	1番お姉さんらしい美しい動作
その他、呼び物として		
職員	ダルマ競走	平生、勤勉な先生方がダルマをかぶって実に愉快
婦人会	音感競走	ひょっとことおたふくの面をかぶっておもしろい

運動会の華はマラソンである。1500米のコースを走りぬいて、モールを首にかけた走者が次から次へと校庭に入ってくると、その度に大歓声が揚がった。1着は5年生の田中君で記録は7分51秒である。それは6年の1着より6秒早かった。

戸棚1本から図書館作り

旧職員 林 公子

「図書を購入して、図書室を設けていただけませんか」

「終戦後で、図書を購入する費用が出ませんからとても無理です」

「これからは読書教育が是非必要です。本を買うお金がないのなら、父兄にたのんで古本を寄付してもらったらどうでしょうか」

「林さん、それができますか。それなら図書係になってやってみて下さい」

これは終戦後1年あまりたった昭和22年度始めの職員会の席上で、私の提案に対して後藤校長先生のお答であります。別に他の先生方から反対意見もなく、かえって私は図書の係となつて一役かうことになってしまいました。

これがそもそもの発端で、昭和32年3月末金華小を退職するまで10年間、私と図書係とは切っても切れない結びつきとなつてしまいました。そしてその頃は独立図書館にまで発展するなどとは夢にも思いませんでした。

終戦直後の昭和20年10月1日、私は本郷小からなつかしの母校である金華小へ転任しました。それは母校で教えられるという感激と喜びとでいっぱいでした。そしてそれは子どもの指導に全力を注ぐことになりました。今眼ふたを合わせると色々の事が思い出されます。日々の授業のハブニング、終戦後間近い運動会で



赤坂金生山へ化石採集

フォークダンスをやろうとして男児と女児とが手をつなぐことだけはとめられたこと、学級のどの子も出してやろうとして学芸会や七夕祭の脚本を自分で作って上演したこと、昭和26年の秋晴れの日、尾藤英彦先生が子どもの希望者をつれて赤坂の金生山へ化石採集においてになったのに参加したことなど楽しい思い出が走馬燈のように頭の中をかすめていきます。そしてその中でも一番忘れられないのはやはり図書館活動のことです。

赴任してたえず考えていた事は、母校のために自分でできる何かをしたいということでした。そんなある日、日直当番で見廻っていると北倉西階段の踊場に、裁縫教材の戸棚があって、その中に古ばけた本が数冊あるのを見つけました。「これだ」と心に決め、冒頭の職員会の話となったのです。

早速児童の各家庭に趣意書を配布して古本集めから始めました。第一回は表紙のとれてないものや、綴ち糸が切れてばらばらのものなど、修理ができないものも多く、どうにか使える本が10冊位でした。これは戦後間もなく、新刊書は少なく、あっても高価な時でしたから、古本といえば戦争前のものですから無理もありませんでした。それでも第二回、第三回と重ねて古本集めをしているうちに、こちらの趣旨もわかっていただき、読める古本が数多く集まるようになりました。始めは北舎西階段の踊場の裁縫戸棚をそのまま借用して始めたのですが、貸し出し専門で子どもたちの借り手が多く、毎日放課後は中々の繁昌ぶりでした。それをごらんになった育友会の方が、戸棚一本新調して下さり、その上育友会の予算に図書費を25年度に3万円、26年度に4万4千円計上して下さいました。学校の職員組織にも図書会ができ私1人の係から次第に充実しました。

昭和26年度は図書館充実の飛躍的な年でした。前からあった職員の図書委員会の外に児童会活動の一環として、児童の図書館が、他の放送局、保健所、美術館などと同時に発足しました。そして図書館は北舎西階段の踊場から裁縫室へ移りました。裁縫室の三分の一を書庫とし、三分の二の畳の部屋が閲覧室になりました。この時はもう私1人が放課後、走って行って本を貸した時とは違います。他の先生もやって下さいますし、それに図書委員の子どもたちもいます。図書の貸し出し、整理など楽になりました。私は図書委員の子どもたちに「親切にお世話しましょう」と指導しました。これは私が金華小にいる間中、続けたことでした。図書館の評判は上々で閲覧者が入りきれないので、月曜日は1部・2部、火曜日は3部・4部、金曜日は5部・6部、開館時間は3時40分～4時40分としました。

昭和27年度に入って、児童会の各委員会名が改称して、図書館はこども図書館となりました。入館者が益々ふえたので貸し出し日を月曜日から水曜日までを1～3部、木曜日から土曜日までを4～6部と変更いたしました。それに合わせ図書の充実が必要なので、本年度から児童から図書費1ヶ月、5円を徴集することになりました。戦後の教育は、コア・カリキュラムなどが入ってきて、戦前の教える教育から、子どもが自分で学ぶスタイルに切り変わりました。子どもが自分で学ぶためには、その資料が必要であります。その資料センターとして学校の図書館は是非必要であります。このような教育思潮の中で本校では独立図書館の建設を創立80周年記念事業として遂行して下さいました。そして図書及び施設費の471,922円で、書架・雑誌架・絵葉書棚・指頭消毒器を備えつけ、児童図書2500冊を購入したのであります。又学校では大観舎運営方針・図書館指導の基礎・児童の読書きまりを作りました。

昭和28年4月2日、独立図書館「大観舎」は立派に完成し、すべては整って発足しました。この年、11月から徴集金が月10円となり、図書の充実は順調に進みました。そして学校図書館コンクールでは昭和29年5位、昭和30年3位に入賞しました。想えば戸棚1本から今日の立派な図書館が始まったのでした。

創立八十周年

昭和28年2月は本校が創立してより満80年になるので、創立80周年記念事業実行委員会（実行委員長 桑原善吉）を結成し、育友会が中心となり校下各種団体・同窓会等校下挙げて、下記の行事並びに事業を行った。

同窓会結成総会 1月25日

卒業生三百余名が講堂に集まり、会長に桑原善吉氏始め役員を決め、盛大な結成総会を開いた。

校歌制定記念発表式 2月26日

新しく校歌を制定し、講堂に作曲者の河野信一氏を招いて盛大な発表式を行った。

校内記念式典 2月28日

校内だけで記念式典を行い、全校児童並びに職員が参列した。

記念式典並びに記念植樹・記念誌発刊 3月1日

午前9時より正門の東側に記念植樹としてヒマラヤ杉を植えた。午前9時30分より講堂に来賓・校下の父兄・旧職員・学級代表児童2名づつが集まり、創立80周年記念式典を行った。午前11時より来賓・同窓会員・育友会員らで盛大な記念祝賀式が行われた。この佳き日に創立以来80年の歩みを約百頁に収めた記念誌を発刊した。

記念講演 3月2日

東京から玉川学園長小原国芳先生を招き、午前9時より校下父兄並びに市内育友会幹部を対象に、午後1時より市内教職員を対象に記念講演を行った。会場の講堂は午前・午後ともに満員であった。

合同慰霊祭・奇術と映画会 3月3日

午前10時より職員遺族・一般遺族を招き育友会・同窓会で合同慰霊祭を行い、午後は児童に奇術と映画を見せた。

記念展覧会 2月28日～3月3日

本校・全国の児童作品を展覧した。



記念植樹

28年3月1日

記念展覧会

中舎・南舎にて



図書館の建設

創立80周年記念事業として、本校に全国にも稀な独立図書館が市当局のご理解により建設された。その概略は次の通りである。

終戦後の新教育は児童の個性に応じた自主的学習の態度をつくることである。その場として昭和22年から林 公子先生のお骨折で戸棚1本の図書文庫を開き、ついで裁縫室の一部を図書室とした。しかし図書室は狭くて全校児童の図書閲覧に応じきれないので職員会・育友会の役員会で話し合い、遂に26年12月独立図書館の設立を市当局へ要望するに至った。

当時未だ戦災校のバラックが残っていて復興予算の苦しい中から、非常に理解ある措置がとられ、市教育委員会において27年度予算として50万円を計上し、27年3月市議会において可決した。27年5月より職員会・育友会の役員会を何回も開いて建築場所を協議し、腐朽甚だしい校長住宅を撤去して、その跡地に建てることに決めた。

昭和27年12月17日、地鎮祭を行い、それより工事の請負主である鷹見町中石組が鋭意工事を進めた。しかし寒中のことで季節に恵まれず3月1日の創立80周年記念式典には間に合わず、3月下旬完成し4月2日落成式を挙行了したのである。

図書館の建設については、中村教育委員を始め森瀬・毛利・松倉の3市議会議員には格別のご尽力を頂いた。館内の諸設備並びに沢山の書籍購入の資金を得るためには、桑原育友会長が自分の家の図書館を作る気持で懸命にお骨折りをいただき、栗本・斉場副会長、桜井・中川両委員長始め育友会役員の方々、同窓会の方々が、雪しぶきのする寒い日など並々ならぬご尽力をいただき、でき上がったのである。

図書館を大観舎と名づけたのは、明治6年本校創立の時、大観舎と称していたゆかりにもよるが、大観とは全局を観察するという意味もあって図書館にふさわしいからである。

図書館の正面には一世の文豪、91歳の徳富蘇峰先生筆「大観」の額をかかげ、その印に「日本男児」とかかれて「我は日本人也」という先生の信念がはっきり現われていてすばらしい。

図書館備品 28年6月1日現在

書架	8	蔵書冊数	2100冊
雑誌架	1	机・腰掛	70人分
書棚	1	花台	1
カード箱	1	額	4
時計	1	カウンター	1

図書館落成

28年4月2日



今 の 校 歌

創立80周年を記念して今の校歌ができた。歌詞は岐阜大学の各務虎雄先生、曲は同じく岐阜大学の河野信一先生である。昭和28年2月26日河野先生を招いて講堂で校歌披露式を行った。作詞者・作曲者の意図するものは何か、又どのように苦心が払われたのか、校歌をうたう者が知りたいこれらの点を、当時の育友会報第2号（昭和28年3月1日付）より抜粋して記す。

歌詞について

作詞者の各務先生は「この校歌の1番は学校に対する誇りを、2番は郷土のために社会人となって役に立つという気持ちを養いたいと大変苦心して作りました」と語られました。又各節各行の気持ちが同じであること、七五調のこの歌詞の各節各行の音数を同じにすること、例えば1節の1行、朝風わたると、2節の1行、夕雲はゆるは共に4・3の音数であるように、作曲者の立場を考えて気をつけられ、かつ国語教育の立場からアクセントの面にも考慮をはらわれ、当用漢字の範囲内でのということにも注意された由であります。歌詞の意味は次のようです。

1番 すがすがしい朝風の吹いていく金華山の松のこずえは昔から少しも変らない、若々しいみどり色です。金華山が若々しさを失わないで栄えていくように、その金華山の名前をもっている金華小学校は長い歴史を持ち沢山の立派な人達を育ててきました。その世間に広く知られた金華小学校の高いさをおも私達は金華山を仰ぐように仰いで私達の誇りとし卒業生の人達に負けないよう、しっかりと勉強しましょう。

2番 夕方の雲が美しくうつつている長良川の清い流れは若鮎のいのちをやさしく養っています。金華校下は長良川のおかげで岐阜の町の文化のもととして発達してきました。その美しい文化の花を、これから先も長く毎日新しく咲かせるために、私達金華の子どもはしっかりと励んでいきましょう。

1番の松のこずえの若みどりと、2番の若鮎のいのちとは、どれも若々しいはつらつとした金華の子をさします。2番の文化というのは、文学・美術など精神文化の面はもとより産業的・経済的なものも含めていう作詞者のお考えです。

曲について

校歌の曲は常に新鮮な魅力をもたねばならぬという河野先生のご持論通りの明るい新鮮な曲です。寒い飛騨の山奥へ出張中もこの曲を作るために折角の知人の訪問も断って面会謝絶で想をねられました。「全体を明るく、さわやかに歌って下さい。曲の中心は高いさおですから、特に表情をこめて強く」と先生は語られました。

校 歌

各務 虎雄 作詞
河野 信一 作曲

♩ = 88 あかるく、さわやかに

あゆ さう かぐ ぜも わは た る きな がら さが んわ
 まき つよ のき こな すが えれ のは わお かか みど りの
 ちい よの のち みや ささ おし のく ろし ふな かえ しり
 やか まわ のの なめ をぐ おみ うに まさ なか びえ やき のし れきん
 しか はの はの がな くを ー ー よす にえ にと おお うく たび
 かび きに いさら おた をに わお れら あさ おか がせ んん

校 歌

一、朝風わたる金華山

松のこずゑの若みどり
 千代のみさおの色深し
 山の名を負う学びやの
 歴史は長く世におう
 高きいさおを
 われら 仰がん

二、夕雲はゆる 長良川

清き流は若あゆの
 命やさしく養えり
 川の恵みに 栄え来し
 文化の花を末遠く
 日々に新たに
 われら 咲かせん

全国唱歌ラジオコンクール

旧職員 渡辺政枝

昭和28年以前は、私はコンクールに参加せず、専ら予選、本選の美しい合唱を聴くのを楽しみにしていました。昭和28年にNHKからコンクールの参加規定をもらって、今年コンクールに参加しようと考え、合唱クラブを発足させました。

さいわいに、この年に鷺見臣一郎先生が学校長として赴任され、合唱クラブの指導は直接校長先生がなさってくださることになり、私は音楽部の先生と一緒に、深く広く、緻密な音楽の勉強をすることができたのであります。それから5年間は、校長先生のご指導で、毎年コンクールに参加し、下記のような成績を収めました。

年度	課題曲	随意曲		
28 〃	明るい笑顔	泉のほとり	東海北陸大会で	2位
29 〃	峠路	いたずら時計	〃	1
30 〃	花のまわりで	ゆめよぶ春	〃	2
31 〃	わかいおじさん	羊	〃	2
32 〃	花で鳥で歌で	いたずら時計	〃	1

中でも昭和29年度・32年度は全国大会に出演し、2回とも入賞して、金華小合唱クラブは日本中に大変有名になりました。そして出場の際は仙台の南材木町小学校、北海道の旭川の小学校、熊本の碩台小学校などと肩を並べて、何時もマークされておりました。

クラブの練習は、最初は毎日放課後1時間、講堂で行いました。講堂の正面には川合玉堂先生の「富士」の額がかかっており、広いステージには桑原善吉さんと渡辺甚吉さんが寄贈された猫足型（チッペンディール）のグランドピアノが置いてありました。唱い方は今から考えると、始めのうちは幼稚なものでしたが鷺見校長先生のきびしく、優しい、歌の心を歌うご指導で、どんなに子どもたちの音楽的感覚を育て、表現する力を太らせ、



放送記念

29年11月3日

伸ばしたことでしよう。先生は学校長という立場で随分お忙しい身でありながら、つとめて練習にでて下さいました。放課後お暇がとりにくくなってからは、朝始業前30分のお稽古になりましたが殆んどお休みになりませんでした。子どもたちにも、練習はきちんとしなければ駄目、一人おくれでも合唱のバランスが崩れ、練習の行程が不揃いになるから、また前にもどってしなければならぬということをよくわからせ、お互に十分責任を感じて努めるよう指導されました。練習は楽しい中にも、非常にきびしく、すこしでもリズムの乱れ、音程のくずれ、発音の不正確さがあれば、決して見逃すことなく、何べんもやり直し正しくなるまでひとりひとり練習させられました。



放送記念
東海北陸大会

31年10月14日

伴奏についても、私たち先生は、いつも一人で弾きながら教えていて、子どもの歌をリードし指揮するような癖がついているので、指揮者がいて合唱する時には伴奏者として指揮通り、伴奏をするようにと言われました。

毎年、地区予選が10月4日、県大会が10月11日、東海北陸大会が10月18日、全国大会が11月3日頃で、2ヶ月間も同じ歌を歌いつづけるのですから大変でした。地区代表になれば県大会は比較的楽でしたが、県代表になると名古屋のJ O C Kへ録音に行きます。第一スタジオで録音をするのですが、スタインウエーのピアノで、まるきり歌う環境が違うので、いつもの調子をだすことは大変でした。気持ちをとほぐして、なれた歌を歌ったりなどして、さて録音となりますと、プロデューサーのサインで、アナウンスがあり、真空状態のように物音一つしないところで歌うのですから、みんな緊張して固くなってしまいますのです。

そんな中で鷺見校長先生は、いつもの通りの服装で、いつもの通りのネクタイで、いつもの通りのやわらかい態度表情で振舞って下さいましたので、子どもたちも割に早く安定した調子で歌えるようなふんいきになって、録音することができました。次の全国大会の録音の時は、二度目で慣れていきますので、あまり上ることなく、のびのびと歌えたようでした。

ご父兄の方々もよく協力して下さいました。子どもが合唱クラブに入っている、いないにかかわらず沢山の方が心から応援し励まして下さいました。これも大きな心の支えとなって音楽に精進することができました。

生産人の育成

旧職員 土田 勇

本校下は岐阜町発祥の地であって旧家、老舗が多く、全般的に生活も安定していて教養にとみ富裕な家庭が多いようであるが、反面市内において比較的封建的な地として目されている。参観者などに児童の感想を聞くと、上品であって落ちついた感じがするが積極性が少ないといわれる。これは自主性に欠け行動的でないということにはかならない。

これを補うために児童の自主的学習態度を身につけさせ児童会の奉仕活動を強化することはいうまでもないが、労作を通して生活させる生産教育をうちたて、勤労と責任を重んじ精励な、よく働く子どもに育てたい。その実践分野は下記の通りである。

- 1 動物飼育（豚・山羊・鶏・魚・昆虫）
- 2 植物栽培（花壇の手入・生垣の手入・草木の継続観察）
- 3 学校工場（遊び場作り・砂場の排水作業・お池作り・足洗い場作り）
- 4 工業生産（お土産物作り・うちわ作り・買物かご作り・玩具作り・箒作り）
- 5 農耕生産（甘藷・あぶらな）
- 6 塵芥処理（紙や芥を焼いたり埋めたりする・土砂で埋め運動場整地）

花壇作り

教室の南側約3坪程が学級園として割当てられた。陽光の降りそそぐ4月、カンナ・菊・日まわり・コスモス・松葉ボタンなどの播種、植付けを行い、堆肥を山程運んで基肥にやった。7月頃より花が咲き始め教室には、いつも生き生きとした自分たちの花が美しい色と匂いを漂わせてくれた。今まで大てい当番の気のきく子が10円程度の花を買ってきて花瓶にさしておいてくれたものだった。それが、今年は子どもたちが丹精こめて作った花があらゆる花瓶にさされ、教室に新しい息吹きを感じさせてくれる。

観察道づくり

鳥小屋へ毎日通う子どもや熱心に観察をする子どものために、もっと便利にしたらという声が起こり、すぐ隣の図書館へ通ずる道も開館以来の懸案になっていたので、両者を考えあわせ観察道を作る事になった。その上でできればプールにもはだして行けるようにしたいというので設計をした。6年生全員で河原から小石を運ぶ子、水繩に沿ってふち石を並べる先生、通路に石を敷きつめる子など、それぞれ分担作業で仕事はどんどんはかどり、僅か放課後2日を費しただけで立派に完成した。そして校長先生からもお褒めをいただいた。この石ころ道はその後、最も便利ながら楽しい道として全校の子どもから喜ばれたのである。

蠅とりコンクール

5月の末ごろから図書館・給食室付近に蠅が沢山いて実にうるさい、困ったという声が子どもからも先生の間からもでてきた。

そこで生産教育の一環として全校的に蠅の発生場所の調査・殺虫剤の撒布・根源的なほく滅を計ると同時に蠅の駆除を目標として蠅とりコンクールが行われ、一方蠅について理科的観察を続けた。

子どもたちは工作の時間に蠅たたきの製作にとりかかった。材料・形は工夫をこらして各種各様である。そのできあがった蠅たたきで、休み時間といわず放課後といわず校内・家庭で蠅をたたいた。そして私の受持ち学級の6年6部は全校蠅とりコンクールで6・7・9の3ヶ月も第1位で10月は第2位だった。

児童作文

はえとり

6年6部 青木啓子

今日は日曜日です。朝おきると下でお母さんが、お勝手をしていらっしゃるの降りにいきました。お魚のにおいはえをおびきだしたのでしょうか。はえがいっぱいたかって来ました。私ははえとりコンクールのことを思い出して、はえたたきを持ちだして、おくどにいるはえをころしました。朝ごはんをすまして後片づけをしてはえたたきを作りました。さっそくはえをさがして3びきころしました。4びき目にえがぬけてしまいました。今度は針金でえをがんじょうにしばって、もう一ぺんやってみたら今度はうまくころせたので、ピンセットでガラスびんに入れて、今度は二階へ行って見ましたが二階にはあまりいませんでした。数えて見るとはえは18びきつかまりました。私がかこれだけはえをころすと、それだけ岐阜の町が、いや日本中のはえが少しでもへるのです。それが金華小学校の子どもみんなが力を合わせてころせば衛生的な町になり、病気もなくなるし、美しい町にすることができると考えるとはえとりも楽しくなります。家の中のはえは一びきのこらずとりました。今日の夕ごはんは、はえがないのでおいしく食べられました。

思い出の教室（卒業文集より）

ガラス戸はゆがみ、らんまはひっくりかえってどうにも仕方がない。カーテンはやぶれてはつぎ、やぶれてはついで。よく気をつく女の子がついでくれたのだ。前の壁はひびが入っていて、片すみに夏の水泳大会の優勝旗がななめに張ってある。その右には蠅とりコンクールの賞状が4枚並んでいる。子どもたちはよく頑張った。

教室のうしろを見ると努力ホームラン競争の学習成績がいつも張ってあって、みんながいがいような顔つきでながめていた。教室のうしろの物入れは展覧会前になるとアトリエになって卵のからでいっぱいだった。日比野君の長良橋の模型は実によくできていた。暑い夏の日は何べんも長良橋を実測して作ったということだ。卒業記念にということで、学級全員が思い思いのこけし人形を作り私に贈ってくれたのも、この部屋から生れたのであった。

蠅とり・遊び

毎年5月末頃になると、蠅の発生が多くなって飛びまわり、教室での勉強を邪魔をしたり、危険なバイ菌をまき散らす。それで毎年6月1日より蠅とりコンクールを行い、校内は勿論、お家でも近所でも蠅を見つけ次第たたき殺した。その成果は次の通りである。個人最高は昭和29年6月に5年4部桑原孝司が14,000匹蠅をとった。

年度	月	1ヶ年間	1ヶ月間	1位(クラス)	2位(クラス)	3位(クラス)
28		442,238				
29	6	1232,902	832,192	98,762(6の6)	73,377(5の3)	68,151(5の4)
	7			50,707(6の6)	20,285(5の3)	18,451(3の4)
	9			48,835(6の6)	17,783(6の3)	11,495(5の3)
	10			16,197(6の3)	5,822(6の6)	5,736(5の4)
30	6		548,101	46,672(3の5)	45,386(6の2)	35,817(4の1)
	7			379,522	(6の2)	(3の2)
31	6		334,590			

ただ蠅をとるだけでなく、蠅の生態を研究し、叩く方法を考えて蠅叩きを作り、蠅の発生を未然に防ぐなど、蠅に関連のあるいろいろな学習をした。

畜舎清掃部……豚・あひる・が鳥などの舎を清掃し、蠅の発生を未然に防ぐ。

堆肥切替部……堆肥を何べんも切替えてよく腐らし、蠅の発生を未然に防ぐ。

薬品部……殺虫剤を研究して、発生した幼虫・卵にふりかけ研究する。

器具部……永持ちして、よくたたける蠅叩きを工夫し製作する。

生態研究部……蠅1匹に8万の細菌がついているというが、バイ菌の培養実験。

何時よく飛ぶか、どんな色や香を好むか。卵からの飼育研究。

ごみ焼窯構築部……古い窯を壊して、耐久力・火の廻り方を研究し、ごみが完全

にもえる窯を作った。ごみの処理がよければ蠅の発生を防げる。

文学研究部……蠅に関した俳句、歌を集めたり、蠅の歌や紙芝居を作る。

本校の子どもの遊び

子どもの遊びの中には、戦前からあるものと終戦後から流行しだしたものがあるが、悪貨は良貨を駆逐するのとえ通り、よい遊びはわるい遊びに押され勝ちである。本校では子どもに新しい遊びを創造させようと、11月26日第3時に6年生全員が運動場を集まって、かねてから自分らで考え工夫してきたものを発表した。その中、主なものは次の通りで、おにご遊びの類が一番多かった。

円おにご・橋おにご・四島おにご・宝とり・三角とり・魚鳥木・申せ申せ・電報競争・物まわし・鉛筆野球

県下の子どもの遊び

岐阜県教育団体連合では、岐阜県教育の実態という教育白書をだした。その中に、下記の通り遊びがのつている。

●不健康な遊び

ギャングごっこ・ターザンごっこ・から手チョップ・どろぼうごっこ・西部げき
ゴムかん・ふき矢・杉鉄砲・釘さし・マッチ飛ばし・カッチン玉・物かくし

●健康な遊びの番づけ

西		蒙 御 免	東	
張 出 横 綱 お 手 玉	<p>前小関大横 頭結脇関綱</p> <p>布輪竹馬かおおグ一銀山鬼 おまのとく店はラ寸行遊ご とわはびれごじイとごびつ ししり んつき夕びつ こ ほこ ー こ</p>	行 司	<p>前小関大横 頭結脇関綱</p> <p>猫木うかまま紐飛な学山陣 とのさんまりあ行わ校登と ねぼぎげごつみ機とごりり ずりとりとき 落びつ み び し こ</p>	張 出 横 綱 ま り 投 げ
	<p>前 頭</p> <p>あ山五かト色押王で四つテ んの目るラ紙し様ん角かマ た子なたン遊出おでとま跳 ど ら プびしとんびりび こ べ し こ</p>		<p>羽ジこ 根ヤマ つんま きケわ んし</p> <p>前 頭</p> <p>お囲し百双庄ち通天ま助石 く碁よ人六屋より下るけけ わ うー あんやおと鬼り さ ぎ首 そまんとび ま び せし</p>	

金華児童愛護会

愛護会はさあ作りましょうといっただけのものではなく自然にできあがったものです。昭和30年6月学校で逢った宮部貞一さんと私は連れだって自転車に乗って話をしながら帰りました。話は交通当番の子のことです。旗を前へパッと出して車を止めているが信号機もないし万一車がつっこんできたら大変だ、自分たちも交通整理をしようといっただけその日は別れました。それからすぐ実行に移し児童の登校日は毎朝、宮部さんが本町、私が材木町に立ちました。そこには当時子どもの交通当番が立っていました。それは28年東京へ出張された驚見校長が朝の登校時に赤坂離宮の前で学習院初等科6年生が交通整理をしているのを見て感動し、29年度始めから本校でも6年生が腕章をつけ旗をふって交通整理をしていたのです。

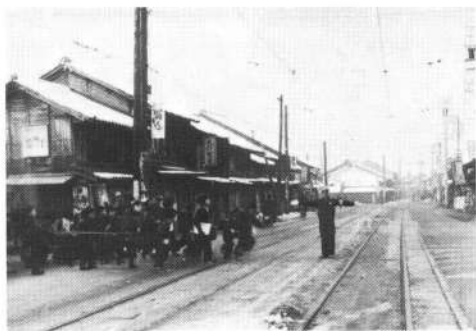
宮部さんと私とが子どもと交通整理をしているのを見て、昭和30年秋には富成沢治さん、中村貞三さん、棚橋 治さん、武藤隆光さんが次々と加って下さいました。2人で始めたことが6人になったので気勢も揚がり白い手袋(軍手)と笛とを自前で揃えました。交通当番は今迄通り本町は宮部さん、材木町は私で、他の方々は伊奈波電停、本町1、上新町電車道、公園前などに随意立って見廻りました。この頃は通学道路は指定してなかったの子どもは好き勝手に歩いていました。それで学校から子どもや父兄へ交通整理をしている所で道を横断するよう呼びかけてもらいました。

6人で交通整理をしていてしばらくたって、山田正巳さんと後藤文治郎さんが加って下さって8人にふえました。この頃は会の名称も組織も何もなかったのでお互いに名前を呼び合っていました。さて車は急にふえ始め交通状況は悪くなる一方で、児童だけに交通当番をまかせていた学校では、先生方も交替で31年7月1日から交通整理に立たれるようになりました。

そこで私達も相談して、8人が発起人となり仲間を勧誘しようということになりました。これには驚見校長も賛意を表され、汲田教頭は私たちと一緒に勧誘に廻られました。

「子弟を安全に登校させることは親の責任である。この仕事を我々の手で完全に奉仕しよう」又「子どもが校門をくぐるまでは私たちの手でしっかり守り、先生には只教育に専念してもらいましょう」これが私の初志であり発起人8人の気持でした。これは綿々と今に引き継がれている愛護会精神であります。これを説いて廻った甲斐があって、31年9月にはどっとふえ32年3月には20人近くになりました。そこで交通当番は本町・材木町に2人ずつ立ち、その中の1人が伊奈波電停や上新町・松ヶ枝町をそれぞれ見廻りました。その後、会員は次第にふえ33年度35名、39年度44名、40年度42名、41年度42名、42年度43名、43年度46名となりました。

昭和31年9月下旬、会の名称をきめることになりました。みんながいろいろの案を出しましたが、結局鷺見校長の出された「金華児童愛護会」という案に決めました。会員パッチも鷺見校長に図案を一任してこの頃できました。それから毎月1回定例の会を図書館で開き、全会員で連絡協議をしてきました。愛護会と名称が決まってから市から補助金が出ました。それで帽子・腕章・黄色の合羽の上衣などを整え使用しました。通学道路も



雪の朝の交通指導（本町） 32年1月

指定しました。愛護会の活動は活発になりましたが、未だ組織はありませんでした。ただ電車道の北・南から2名ずつ入選して、その4名の者が当番表を作り新会員の勧誘をしていました。みんなはこの4名を世話人と呼んでいました。そのうちに一番古くて年長の宮部さんを会長と自然に呼ぶようになり、それが又当り前になったのです。

愛護会は渡道橋を建設しようと地域の方を説いて廻りましたがきいてもらえず、やむをえず学童横断信号灯を建てようと一基三十数万円もする信号灯2基分の寄付に奔走しました。その結果車関係の会社や個人の方々から多大の寄付を受け、昭和36年本町並びに材木町に押しボタン式のを設置しました。その後38年に県警察に寄付をして自動式になりました。又松ヶ枝町は一方通行になる時、県警察に対して交換条件として押しボタン式を設置してもらいました。これもその後、自動式になりました。

愛護会はこのように自発的にみんなの善意と信念から生れ、どしゃ降りの中で又寒風膚をさす冬の早朝に十字路に立ち、年中子どもを安全に渡してきました。このような美しいことは他には類がなく幾度も表彰の榮譽を受けました。その主なものをあげると次の通りです。

32年5月15日県警察本部長

38年1月17日全日本交通安全協会会長

33年10月22日県交通安全協会会長

41年5月14日県知事

34年6月11日県警察本部長

昭和44年度になって金華児童愛護会は金華小PTAに合併しました。そしてPTA活動の強力な一翼を担ってきました。昭和44年度から交通巡査によく似た制服を制定し着用しました。交通指導の場所も従来の3ヶ所（本町・材木町・松ヶ枝町）から次々とふやし現在は6ヶ所（みどり橋・梶川町・靱屋町を加えた）になりました。その他、スクールゾーンの指導、子どもの自転車の乗り方指導など交通安全に巾広い活動を展開しています。会員も昭和49年度には95名の多数になりました。想えば既に故人となられた宮部さんと2人でまいた種がこのように育ち感慨無量です。

発起人 末広町 森 正夫談

いちょうの実文集

児童文集は作文教育の振興と共に作られるようになり、本校においては昭和3年から文集「金華」が作られてきた。それが戦争前後は文集どころではなく廃刊になっていたが、昭和28年度から「いちょうの実」という名で児童文集が作られ、今日まで続いている。「いちょうの実」文集が刊行された最初の頃は次の通りである。

28年度 第1号29年4月発行。国語研究部編集、教師の騰写判刷り34頁、28年度の作品を各学年5編ずつ収録し教師の作文指導用。

29年度 第2号30年2月発行。国語研究部編集、業者の騰写判刷り60頁、1・2学期の作文コンクールの作品から選定。各学年5編ずつを収録す。児童には分けなくて学級文庫に入れて作文指導に役立てる。

30年度 第3号発行。低学年用(60頁)・高学年用(70頁)各学年とも数編ずつを収録。業者の騰写判刷りで希望の父兄に頒布した。1部50円。

昭和31年度の第4号からタイプ印刷となり、その後に低・中・高の分冊となった。

銀杏の実文庫

銀杏の実や銀杏の実文庫についての記録は案外少ない。年度別にみると次の通り。

28年度 大バケツに3杯と小バケツに9杯。22.5立、13.2匁。売った金で図書購入。3年生は少しもらい実をうえ実生の研究をした。

29年度 9月26日の台風15号で実が早く落ちて前年より少ない。実の数1824個。算数の勉強で銀杏の樹の高さを測定した、16.3米。

32年度 実の重さ30匁。売却代金3230円で14冊の図書を購入した。算数の勉強で銀杏の樹を測定した、高さ16.7米・直径70釐。

34年度 売却代金3965円で図書を購入し、図書館のいちょう実文庫に入れた。

48年度 実の数9800個、その売却代金19,300円で図書39冊を購入し、いちょうの実文庫に入れた。

銀杏の実の収穫は大正から昭和の始め転任してきた先生によっていたが、戦後は毎年5年生の仕事となってきた。



いちょうの実文集 創刊号

銀杏の学習

銀杏を教材とした学習は戦前梅沢校長時代から盛んに行われてきたが、戦後も引き続き毎年実践してきた。下記にあげるのはその一例である。

昭和29年度 5年4部

● 銀杏の学習計画

10月5日の銀杏祭を中心に大銀杏について勉強していく事を相談した。どんな勉強をして行こうかということから次のような学習計画を立てた。

算数…実の数や量はどれだけあるか。木の高さ、まわり、実の陵形について。

理科……め木とお木とのちがいが。実や種の形調べ。葉はなぜおちるのか。

社会……銀杏の歴史。 金華小の銀杏の歴史。

国語……作文。詩。俳句。

図工……銀杏祭の写生。銀杏の葉を利用した図案。実を利用した細工物。

音楽……歌作り。

家庭……実を利用した実習。実の成分を調べる。

● 銀杏の種について（理科）

種子は球形で直径 2.5～3 種もあり、外側は汁の多い黄色の外皮で中の白い堅い皮には強い香がある。外皮の汁がつくと、かぶれて炎症をおこすことがある。銀杏の中のまるで宝石のように美しい緑色の軟かいところは大部分が胚乳で67%の澱粉、13%の蛋白質、3%の脂肪を含んでいる。普通炒って食べる、しかし生のまま食べたり食べすぎたりすると消化不良をおこし、死ぬことさえある。

● 銀杏の歴史（社会）

扇形のかわいい葉、秋の日にまばゆく照り輝く銀杏の並木。銀杏は桜と並んで日本人に一番親しみの深い植物である。しかし銀杏の葉や枝や花を調べてみるとこの植物は実に変った性質をもっていることがわかる。銀杏によく似た植物は世界中のどこをさがしてもぜんぜん見当たらない。それもその筈、銀杏の仲間は今から1億5千万年程前に非常に栄え種類も沢山あったが今は銀杏ただ1種を残して皆ほろびてしまった。つまり銀杏は日本と中国にしか生き残っていなかった。しかしその後、欧州や米国などにも移し植えられて各地に美しい銀杏の並木が作られている。

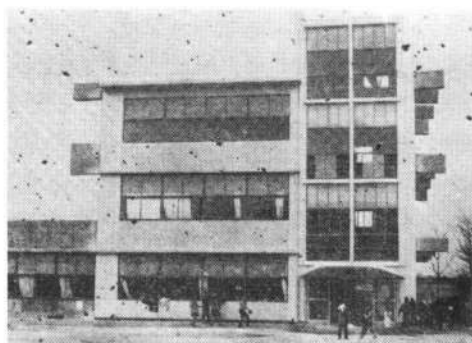
● 銀杏の木調べ 5年生全部が各町内に分かれて校下の銀杏の本数を調べた。

湊町	18本	大宮町	2本	中大桑町	5本	松屋町	2本
元浜町	1	松下町	1	下新町	1	末広町	1
玉井町	1	松山町	1	本町	5	伊奈波通	6
東材木町	1	松ヶ枝町	1	矢島町	1	末造町	4
西材木町	1	上茶屋町	1	矢島町	2	金華小	3
大宮町	1	上大桑町	1	中竹屋町	1	合計	61

鉄筋校舎に改築

旧職員 汲田史郎

昭和32年度から36年度にわたって建築された新校舎は、小学校の本格的鉄筋建築として市の技術陣が総力を挙げて設計し、鷺見校長が百年の計を樹てて苦心し要望して完成したものであります。今詳しく苦心のあとを述べることは不可能であります、その主なものを挙げてみますと、先づ校舎が一直線ではなくカーブを描いて建てられていることであります。これは運動場を少しでも広くとりたい、長い廊下は子どもが走り易い、ややもすると殺風景になりがちな堅い感じを柔らげて優美さを保ちたいという願いがこめられているのであります。その他に、廊下の寄せ木の床、防音装置の天井、教室内の北側の掲示板、採光を考えた大きなガラス窓、教室の正面の曲面黒板などに苦心のあとが伺えます。

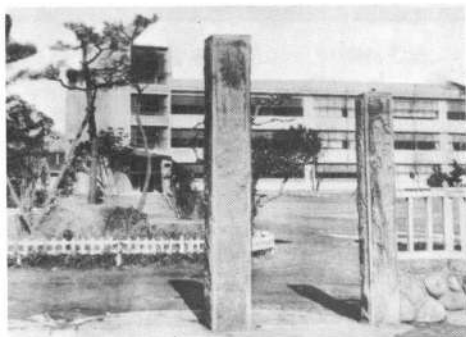


第1期工事完成 33年2月21日
東玄関とその西の4教室

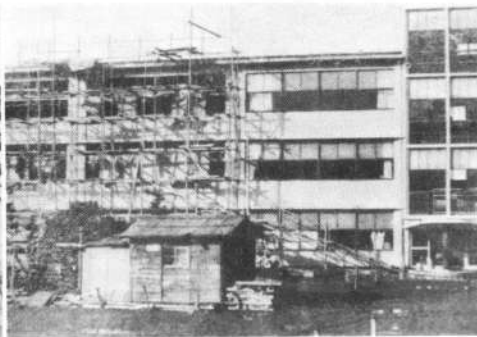


第2期工事完成 43年2月15日
第1期の西の5教室

さて着工ということになり、一番困ったことは現地の改築ということでした。特別教室や普通教室を壊してはその場に建てるのです。それで講堂をベニヤ板で間じきりし、応急の教室らしいものを4つ作りしました。取り壊した特別教室は資料室・図工室・会議室・別棟の保健室・豚舎などであります。特に資料室は前年研究発表した「創造的学習環境の構成」の中核をなすもので、古川幸男先生等が中心となり膨大な社会科学の資料が集めてありました。ですから移動は実に大変なことでした。又保健室は昭和20年春、朝居稚夫先生が子どもたちと、早田修鍊農場に移し、戦後再びもとの位置に復元された由緒ある建物でした。又豚舎は梅沢校長先生の労作教育の代表的な場であって、歴代伝えてここに至りましたが、改築と共に終止符を打ちました。



第3期工事完成 35年1月16日
第2期の西の6教室と中央玄関



第4期工事完成 36年4月8日
中央玄関の西の9教室

今偉容を誇る鉄筋校舎を仰ぐとき、これを建てるためにお骨折り下さった数多くの方々を思い出さずにはおれません。木造校舎を鉄筋校舎に改築しようという動きは昭和26年から始まりました。そして後藤弥三校長・浅野久蔵育友会長さんが市へ要望され、市会議員の森瀬・栗本・毛利・松倉の諸氏のご尽力や、広報連合会長後藤喜八氏等のご協力を思い出します。昭和27年桑原善吉さんが育友会長となり、その気運は一層昂まり、育友会役員など30数名が大垣中学校の新校舎見学に出かけたこともありました。そして育友会長は昭和29年度に中川好太郎さんとかわりましたが、鉄筋校舎に改築することが常に育友会事業の最大のことで受け継がれました。私達は育友会役員及びその他の方々の献身的なご努力を忘れないでしょう。



第五期工事完成 三十七年三月二十日
西玄関とその東の三教室
及び東端の三教室
写真は四十六年の現状

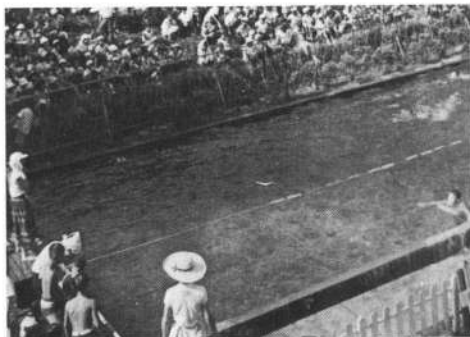
川のせきとめ

旧職員 小森芳勝

毎年、夏が近づくと十八樓裏の長良川に金華小学校専用の水泳場が設定されます。これは小学校のプールが狭くて収容しきれないことと、現在と違って流れの清い長良川で広々と水泳をさせようとのねらいでした。

今年も例年通り7月11日に5・6年が全員で長良川の水泳場の清掃をしました。これは上流から流れてきた瓶のわれや金物類など危険なものを取り除く作業でした。こうして水泳場の清掃はしたものの、この年は大変雨が少なかったことや、前年の洪水で長良川の本流がずっと北にかたよって水泳場へは水が流れ込まなくなったので、水泳場の水は足首位のところまでしかありません。これではどうも水泳ができる状態ではなかったのです。

それでこの対策について職員会が開かれました。鷺見校長先生が冒頭に「水の流れと人の身は、有為転変のならわしで、長良川の水流……」と名文句をいわれたことが今でも記憶に残っています。さていろいろな意見が出されましたが、結論的には体育部の柳瀬先生・和田先生・鈴木先生から本流の一部分をせきとめて水泳場へ水を入れることが提案され、具体案を体育部と6年担任とで合同してたてることになりました。



学校のプールで元気に水泳大会

そして具体的には、水路を作って水泳場へ水を入れるためには、材料や道具が必要となってきますので、じょれん・草笥などは学校にあるものは勿論全部使い、児童の家にあるものはできるだけ借りることにしよう、材料の蓆やアンペラは矢島町の松倉さんをお願いしよう、6年生だけでは人手が足りないので5年生・4年生も動員して、夏休みの登校日を期して決行することになりました。

8月4日登校日の午後1時から、4年生以上は学校へ集合してそれぞれ道具を持って、今の図書館の横から長良川の堤防へあがって元浜町の大きなけやきの木の下まで行列を作って炎天下を歩きました。そこで先生方の指図にしたがって作業準備をととのえました。

水泳着の子やパンツだけの子が水泳場へ入り、大きな石を運ぶ子や砂利を運ぶ子やみんなが2列に並んで作業を始めました。しかし、これは大々的なせきとめではなく、巾1米位・長さ20米位の水路を作り本流から水泳場へ水を引く作業なのです。



長良川の水泳場

27年度

みんなよく働きました。石を運んでせきをつくり、席やアンペラをあてて水もれを防ぐのですが、なかなか大変な仕事です。先ず6年男子が大きい石を本流へ

ほりこみ、流れないように先生が石を持って支え、そこへ小さい丸石を運び、そこへ席などをあてて水もれをなくするのです。本流へ大きな石をほりこんでも、ほりこんでも大きな石はごろごろ流れます。その大きな石を流れないように持ちこたえる先生も懸命です。それを見て子どもがあわてて丸石をヨイショ・ヨイショと持ってきます。みんな力をあわせて必死です。一方水路を作るのも大変です。堀るもの、堀った砂利を本流のせきとめに運ぶもの、中から頭を出した大きな石にとり組むもの、それは勇ましく壮観なものです。みんなが額に汗し懸命に働いたので、さすがの難工事でも2時間余りで完成しました。狭い水路をとうとうと水が流れ込むのを見て、子どもたちから一斉に歓声が揚がりました。このようにして例年にない川のせきとめ作業がこの年にかぎって行われたのです。

トン子のお産

11月23日は勤労感謝の日で学校は休みでした。昼頃突然学校から電話がかかってきました。早速自転車に乗ってかけつけてみると、6年1部の浅井さんや河村さんなど5人ほど今の図書館の西にあった豚舎の前でさわいでいます。「先生トン子ちゃんが子を産みました」という。早速のぞいてみると大きなトン子の横に、小さな豚の子が動いています。数えてみると8匹います。「かわいいね」というと、子どもたちは「まだ産むよ」という。トン子は苦しいのか後足をはげしく動かしています。子豚が次々と産れました。とうとう12匹も産みました。そのうちにみんな寄ってきた子どもたちは、産れたての練絹のように美しいピンク色の子豚を犬や猫の子のように抱きかかえて喜んでいました。

豚を学校で飼育することは、生産教育の一環としてずっと以前から最高学年の6年生の受け持ちでした。トン子の当番は子どもたちの楽しみでした。この時産れた12匹のうち3匹は生れて間もなく死にましたが、残りの9匹はすくすくと元気に育ちました。この子豚が大きくなって売ったお金で図書館の本を買いました。今でも図書館の中の幾冊かの本はこの時生れたトン子なのです。

伊勢湾台風

旧職員 梅田一雄

あの物凄かった伊勢湾台風の恐ろしさは終生忘れることができない。

昭和34年4月、私が金華小学校に赴任した頃は、木造校舎から鉄筋校舎にだんだん改築される工事中で、まだ木造校舎が半分以上も残り、正面玄関を入ると1階に古びた校長室・職員室・資料室……などが並んでいた。

夏休みもすんで2学期が始まり、例年のことながら台風シーズンになった。次に発生する台風は本土をそれ、秋の彼岸

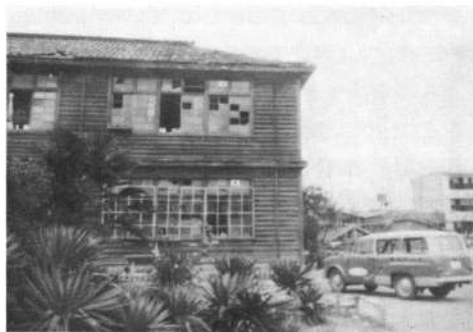
岸の中日もすぎて「やれやれ。」と思っていた頃、南方洋上に発生した台風15号は超大型となり、本州のどこかに上陸する危険性があるとニュースが伝わり、もしや東海地方を襲うのではないかという心配も生じはじめて2・3日不安な日は過ぎた。

9月26日、いよいよ紀伊半島に上陸した台風はやや東よりのコースをとって、伊勢湾を通過するらしいとのことで「こりゃひょっとしたら海岸沿いに東へ進むかな。」と思った。用心深い家庭からは雨戸の補強でカンカンと釘を打つ音も聞えてくる。

午前中雨風はさほど大したこともなかったので、授業は平常通り行った。幸いに当日は土曜日とあって、児童を早めに帰宅させて、午後からは研究会やクラブなども行われ、職員はそれぞれの教室のガラス戸やらんまなどを補強し、宿直者を残して夕方までには全員下校した。

夕方になって「台風は東へそれるんじゃないか。」と思われる反面、まともに台風が来たら大変なことになるという心配もあったので、夕食を早めに済ませ、翌朝の分のお握りを作っておいた。日がとつぶり暮れて7時頃になると、「台風はいよいよ北上を始め岐阜県の西をかすめる。」とのニュースで、岐阜市にとっては最悪の条件となった。昼間の油断もあって家屋の補強を十分してなかったのがあてたが、外は真暗で風にまじって強い雨も降り、施す術もなくあきらめた態であった。

8時頃になると風雨は益々強くなり、とうとう停電してしまった。ローソクの光をたよりに家の中をあちらへ走ったり、こちらへ来たりで、女・子どもはみんな雨戸を押えている。「あっ、戸がはづれる。」という叫び声に一寸悲壮になってきた。



瓦は飛びガラスは破れた南舎



学校の廊下の天井も落ちた

停電で情報がさっぱりわからず、天井のあちこちから雨もりが始まり、畳を上げにかかる。強い風がくるたびに、家がぐわっ、ぐわっと動き、柱時計はとくに止まり、屋根瓦は吹きとんで割れ、カラン、カラン、バラバラと落ちる。“あっ、雨戸がとんだ。という叫び声で思わず戸外へとび出し、戸を拾ってはひっくり返り、やっとのことで元の位置へもどして、釘づけにしようとしても柱がゆれるのでなかなか思うようにいかない。やっとの思いで打ちつけることができた。

ビュー、ビュー、ザァ、ザァ、吹き荒れる雨風に庭の木は全部倒され、電線がスパークしては雷光のようにひかり“これはどうなることか。と不安はつるばかりであった。

やがて10時頃になって風向きが変わり“やれやれ峠をこしたな。と胸をなでおろした。11時頃隣家へ携帯ラジオをききに行ったら、“台風は揖斐川から長良川沿いに進んで高山市の西を通り、27日午前0時には富山湾へぬけるでしょう。と放送していた。

学校の事が心配でたまらない。夜が明けると早速学校へかけつけた。校舎は建ってはいたが、瓦ははがれガラスはとび、教室によっては天井が落ちていた。校庭の樹木も殆んど倒れていたが、大銀杏だけはびくともせず、ぬっくと大空につっ立っていた。だが葉はすっかりもぎとられ、実も吹き落されてその実も朝早く誰かに拾われてしまっていた。6年生の子たちは毎年銀杏の実を売って「いちょうの実文庫」の本を買うのを楽しみにしていたのに、一晩でなくなりがっかりした。

台風は去った。だが台風のもたらした雨は記録的な豪雨となり、殊に長良川の上流に降った大雨は台風の通過後疲れはてて床についた真夜中に大洪水となって襲ってきた。それで湊町一带は勿論のこと、あふれ出た水は本堤防を乗り越して、大宮町・松ヶ枝町・梶川町……へと浸水してきた。よく寝こんでいた家では着のみ着のまま避難した。台風と水害の二重の災害をうけた家も多かった。教科書や学用品をなくした児童のために、集めた古い教科書やノートや鉛筆などを支給した。

この台風は高潮と重なった伊勢湾沿岸で大きな被害を出したので、伊勢湾台風と名づけられた。



水につかった家財をほす

梶川町

台風・大水

児童作文

昭和34年9月26日の夜から翌朝へかけての伊勢湾台風の恐ろしさは子どもにとって生涯忘れることはできない。当時のいちょうの実文集第7号からその2編を選び子どもが大暴風雨や大洪水の中でいかに生き抜いたかを記す。

恐ろしかった台風 6年 大竹利則

「ヒュー、ヒュー」風がだいふ強くなってきた。妹たちはなにも知らないでよくねている。お父さんが「風が強くなってきたが二階は大丈夫か」と言いながら、かい中電燈で足もとを照らして上がってきた。お姉さんが「大丈夫やろうか」というとお父さんが「心配せんでもええで早くねなさい」とやさしい声で言ってあたりを見まわしておりていきなされた。

外は前よりいっそうはげしく風が吹き戸が「ガタガタ」音をたてる。「ザザー、ヒュー」雨と風が雨戸を吹きつける。あわてて戸をおさえた。戸がしなう。お姉さんが「はよ、お父ちゃんをよびやー」とびっくりしたような顔でいった。ぼくは「お父ちゃん、戸がはずれそうやあ、はよ、きて」と大声によんだ。お父さんが大きな丸太を持ってきて柱におもいきりうちつけた。お母さんが青い顔をして「はよ起きて服に着かえないかんよ」と言って妹たちをおこしていた。

時計は9時ごろだろうか。ラジオで一番はげしいのは10時から1時ごろだといっていたことを思い出した。だんだんはげしく雨と風が吹きつける。「バン、バン」なにかが飛んでいくらしくはげしい音がした。みんなであわてて戸をおさえた。「ギーギー」家がゆする。瓦が飛んだらしく雨がひどくもり、足がガタガタふるえる。でもこんな時に一人でも力をゆるめたら戸がはずれてしまうと思って一生けん命おさえた。「バン」瓦が雨戸にあたったらしく穴があいた。お父さんは「うわ、こりゃいかん」といって前より強く戸をおさえた。いもうとはまだ目を細くしていた。ぼくは「台風がきたんやぞ、はよおさえんか」とどなりながら歯をくいしばって戸をおさえた。

風は波になって吹いてくる。お父さんが「下がしんばいやでみてくるわ」といって下へおりていきなされた。ぼくたちはお父さんがいないのでよけい力をいれておさえた。やっとお父さんが上がってみえた。家がまえよりはげしく動いた。ぼくはみんなと家の下敷きになるのではないかと思うと、恐ろしいようなさみしいような気持ちになった。

だいふ風がおさまった。やっと台風が通り過ぎたのだ。たたみをはがして戸にもたらかして風をふせぎ下へおりていった。時計を見たら11時50分、風が強くなってからそんなにたっていないのに、ほんとうに長かったように思えた。

午前3時ごろひどかった風も大分静かになりました。お父さんが「子どもたちはもうねよ」といいなされたのでぼくたちはふとんの中へはいりました。20分位したらおもてで近所の人が「大水ですからひなんして下さい」と大声でよぼってみえた。ぼくはうらへ走ってお父さんを起しました。みんなおかってへ集まりました。

もう水は戸のすきまからザァザァはいつてきました。お父さんは病気のおばあさんをおんぶして長良橋へ行こうかと言いなされた。妹がそばでふるえていた。おばあさんは「2階へ上げておくんない。2階なら大じょうぶや。もうこの家に50年もいるけど2階まで水が来たことはないから」といい、おじいさんも「2階におれば大じょうぶじゃ」と言いなされたので、家中2階へあがることにしました。

となりの人や向いの人が長良橋へにげて行きなされるのを見ると、家におると家ごと流されえへんかとしんばいでした。ぼくもおねえさんも手つだっているいろいろな物を2階へ上げました。ローソク・米・卵・カンズメ・仏様・ラジオやテレビ・服・ふとん時計・水をバケツに2はい。お母さんがぼくらに「自分の学用品を上げなさい」と言ったので、うらへ行きました。もう水はひざまできていました。ぼくは本・ノート・じ書など本立に入れてはこびました。帰りはもう、げた・タライ・1升びんなどが庭にういていました。ぼくは2階の手すりから下を見ていました。かいだんを水が1だん1だん登ってきます。

まだから外を見たら長良橋から表通りを流れてくる水と、横の道から流れてくる水とかがっぺいしてうずをまいて流れるので、ぼくの家と向えの家とへいろいろな物がぶっかって流れて行きます。向えの林さんの自転車がどっかの家にぶっかって流れた行きました。戸も流れて行きました。お母さんが「もしこの家が流れそうになったらどうしよう」といいだしました。お父さんは「その時はみんなの体をおびでしばって庭の松の木にからげとまっておろう」と言いなされた。おじいさんが「昔から郡上八まんから水が流れてくるのに7時間かかるから、もう水もそうふえないやろう」と言いなされた。よく見ているとほんとに水がかいだんを登ってこんようになりました。みんなふとんにもたれてだまっていました。



大洪水につかった長良橋南詰

1時間ぐらいたつとやっと明るくなって長良橋へひなんしたとなりの人が舟でかえてみえました。水もだんだんひいたので下へおりました。まだ水はぼくのももまでありました。水はものすごい早さで引いて行きました。浮いている物が流れてしまうのでおおそうどうでした。

びわ湖めぐり

旧職員 桐山富美子

この年、5年生は内海で海水浴、6年生はびわ湖めぐりを行った。私は6年2部の担当で、6年生は1部から6部までの6学級、児童数は316名であった。それだけの大部隊がバスに乗って彦根へ行きびわ湖を船で廻ったのだから壮観であった。

7月26日、朝8時半バス6台を連らねて学校を出発した。国道21号線を一路彦根をめざしてバスは走りに走る。朝の光が沿道の深緑に照り映え、バスの中は青一色、爽やかな朝風をはらみながら。彦根城の下の広場でバスを降りて、その辺を三々五々見物し船の出る時間をみはからって港まで歩く。港の突堤には白鳥丸という客船が横づけになっている。

白鳥丸にみんなが乗りこんだ。金華の子だけでももういっぱいだ。今はびわ湖めぐりに素晴らしい新鋭豪華船が就航しているが、当時は小型のこじんまりした船ばかりであって、白鳥丸もその一つであった。甲板の下の大広間はゴザ敷きである。みんなゴザの上に座って荷物をその横においた。いかにも浪花節的で面白い。

10時になると出航である。ドドドドと腹にひびくスクリューの響きと共に、船は青い湖水へ船出していった。船は舳を竹生島の方へ向けて白波をけたてて進む。湖水は眼前に雄大に広がっている。彦根城はみるみる小さく遠くなり、眼を転ずると比良の山波がかすんで見える。

船の中にはぎやかである。4部の橋田鈴子先生、6部の野中和子先生などをとりまいて、子どもたちははしゃいでいる。5部の篠田正光先生たちのグループは、何やら声高に話しあってはゲラゲラ笑っている。各学級から6人づつ参加しお世話して下さっているPTAの方々も、思い思いに陣どってのんびりしてみえる。特に中山さんには、このびわ湖めぐりについて一方ならぬお骨折りをいただいた。大広間からぬけだして甲板に出る。甲板のあちこちには子どもたちがグループになって、あたりの風光に見とれている。

アップで写されたスナップ写真。船べりに腰かけた今尾さんや岡川さんや私の髪の毛が大きく後ろになびいて、今にも白い歯がこぼれそう。これはこの時、3部の古川幸男先生が撮って下さったものであとから見て大笑い。

白鳥丸



ゴザの上でお昼の弁当をひろげてパクつく。右に左に船が傾くので口にうまく入らない。

井上 靖の本を読んでいたら、びわ湖の湖畔には十一面観音を祀ったお寺やお堂が多く、中には30年・60年に一度しか見られない秘仏があるとか、湖はいつも沢山の仏が見守っているから平和であるとか、氏特有のロマンチックな叙述でかいてある。ふと見ると1部の山川冬樹先生は父兄の河合さんと旧日本海軍に思いをはせ、戦争の想い出話をしてみえる。やがてスクリューが大ぶりの音をさせて船が止まった。竹生島へ着いたのだ。



竹生島弁天さまの前で

どつと子どもが島へ上った。大津からきた船の客も島へ上った。狭い所へ大勢で混雑する。これでは他の団体とまじって、はぐれてしまう。私が「PTAの河合さん、たのみます」と大声で叫ぶと、先頭にいた河合さんは「おじさんについてこいよ」と大声で子どもを呼んで下さる。私は組の後から古川先生の潤達な足にまけじと続く。船着場のすぐ上の急斜面な階段を一気に登って頂上へたどりつく。宝巖寺という寺の住職の説明を聞く。時間がなくて理解しにくかったが、この寺の本尊は日本三弁天の一つであって、西国めぐりの札所として信仰をあつめているし、本尊は明治維新の神仏分離まではすぐ隣にある都久夫須麻神社に安置されていたということであった。何百段ともしれない、2足長ぐらいの巾の階段をあえぎ登ったせいか、写真を今見ると心なしかあごを出してほほえましい。

「オーイ、船が出るよ」と下で待っていたお母さん方のせわしげな声に、膝をガクガクさせながら船着場に急ぐ。貝細工や杓子の土産物屋が客を引く声を横にききながらようやく船に乗りこんだ。子どもたちも船の上の人となってやれやれホッとした表情だ。午後1時15分、快い追風にスピードアップして船は白波をける。遠ざかる竹生島に手をふりさよならをする子どもたちを船は乗せて一路彦根へ向う。彦根城の下で待っていたバスに乗りこれで帰路につく。バスの中では、朝の元気を持ちこたえている連中がバスの中を時々ドッと笑わせる。こころよい風に何の夢を見ているのか、軽い寝息をたてている子たちもいた。4時半学校へ全員無事に着き解散した。

想えばここの数十年ですっかり変わってしまった。道もバスも景色も。そして当時の湖畔にゆれるあし、鼻につく田舎の香水のにおい、時たますれちがう車、ひっそりとした町並みなどをなつかしく思い出す。

ト ン 子

戦前・戦後を通じて本校において飼育学習が盛んに行われた。それは只動物を飼うだけではなく、その動物に関する全分野において研究するのである。習性を研究すれば理科となり、重量を継続的に記録すれば算数となり、俳句を作れば国語となり、歌を作ったえば音楽となった。飼育は自然に動物をかわいがる心の芽生えを育て、特に戦後のせち辛い世の中において、この優しい思いやりの心を育てることは、その時代において大切なことであった。



トン子と図書館建築中 27年度

動物は子を産む。それを育て、又それが子を産み、次第にふえていく。戦前の生産はお国のためであり、戦後は飢えを凌ぐという国民的課題に応えたものだった。その上、戦後の豚は売却代金によって沢山の備品や施設を学校へ提供してくれたのである。

戦前は牛・豚・山羊・鶏・あひる・兎が飼われ、戦後はモルモットやじゅうしまつも飼われていた。特に豚は飼育に骨が折れるが、子どもを多く産み食糧として高く売れた。学校は豚を金の卵のように大切にし、子どもたちは肌で愛情が感ぜられる生き物とあって、学校中のマスコットとして可愛がったのである。

戦後の豚の記録をまとめて次に掲げる

- 20年7月6日 子豚2頭購入 (24年12月15日に豚舎を改築する)
 25年2月 子豚生れる。名前をトン吉とつける。ぐんぐん大きくなる。
 7月 子豚は重さが13貫800匁になった。
 12月 子豚は重さが25貫500匁になった。冬休み前に売る。
 26年10月2日 子豚を買う。名前をトン子とつける。ヨークシャー種で、生れてから6ヶ月・体重2貫目、値段は1頭4,000円だった。

同日全校児童へ次のおしらせをしている。

かわいい子豚を買いました。からいものは食べさせぬよう、中へ入っていじめぬよう、竹や棒でつつかぬよう、やたらに食べさせぬようにして下さい。それから名前をトン子とつけました。どうか可愛がって下さい。

28年1月24日 トン子が子豚を6匹産む。6匹とも元気で世話をしていた6年4部の子達はじめ学校中大喜び。動物園係の北川先生も大にこにこで「育ててくれた6年4部の子たちや餌をいつも下さる十八樓・万松館や敷藁を下さる松倉直吉さんのおかげです」といわれた。

28年3月13日 トン子と子豚5匹を売る。子豚1匹(2代目トン子)を残す。第3時送別式「螢の光」の器楽合奏に送られて、トン子たちはダットサンに乗せられて、別れを惜み乍ら去った。残った子豚を可愛がって育てる。

29年3月1日 2代目トン子が子豚10匹を産む。その1匹はふみつぶされ、1匹はお腹の中で死んでいた。それから2日たって又1匹がふみつぶされて死んだ。あとの子豚7匹は元気で行儀よく並んでお乳を呑んでいる。

29年5月 子豚5匹を売る。残ったのは2代目トン子と子豚2匹だ。

29年6月11日 大垣南小学校へ子豚2匹を送る。

大垣南小学校からは先生と代表児童3名が子豚を受取りに来校す。午後3時豚舎前で送別会を行う。授業後で有志児童多数が見送る。

29年9月15日 2代目トン子が子豚13匹を産む。

30年3月 子豚を売った代金で井戸を作る。トン子の井戸と名づけたが、水族館や足洗いに使い便利。

30年9月29日 2代目トン子が子豚8匹を産む。1匹は産れるとすぐ死に7匹は元気に育つ。



よく肥えたトン子

34年度

30年11月24日 2代目トン子と子豚5匹を売る。もう1匹は大垣南小学校へ送り、残った子豚1匹(3代目トン子)を学校でかわいがって育てる。

32年3月1日 3代目トン子が子豚9匹を産む。1匹は生れるとすぐ死に翌朝又1匹が死んだ。残った7匹の子豚はぶくぶく大きくなる。

33年11月23日 3代目トン子が子豚12匹を産む。3匹は母豚の下敷になって死んだが9匹は丈夫に育つ。トン子は今までにトン子文庫・朝礼台等のおくりものをしてくれた。

34年10月13日 豚を売ったら20,800円の高い値段だった。

36年3月8日 先頃産まれた子豚6匹の中、5匹と母豚とを早田へ売る。

親豚12,500円 子豚(5頭分)22,500円 計35,000円

学校では残った子豚1匹を育てていたが、親豚に育てあげてこれを売り渡し、豚の飼育の終止符とした。

動物慰霊塚

旧職員 古川幸男

昭和37年度はいろいろな行事があった。10月25日には6年生が1泊2日で修学旅行に京都・奈良へ出かけた。12月10日には新築落成した鉄筋校舎前にその校舎にマッチした美しい曲線を描いたグリーンベルトが完成した。12月23日には本年度卒業生の寄贈になる校門も竣工した。しかし私にとって忘れることができないのは7月15日に完成したプールにまつわる動物慰霊塚のことである。

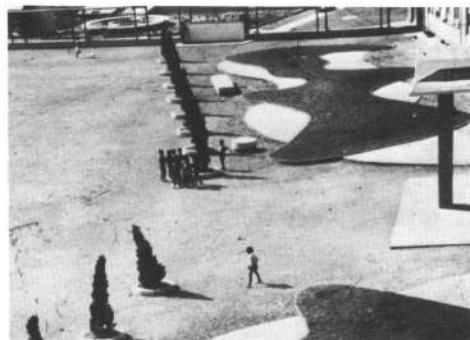
この頃3年生は毎年慰霊塚の係であった。9月の彼岸がくると、前日に慰霊塚のまわりを平素より念入りに清掃し水をうって美しく清める。そして校内放送で全校児童に「あすは動物慰霊祭です。どうか皆さんお花を持ってきて下さい」と知らせたものだ。どうしてこんなになったのだろうか。話は戦後までさかのぼる。

戦後はそれはきびしい食糧難で餓死者も出た程ひどいものだった。その時学校では「進んでものを作りだす子」「豊かな愛情のある子」を目標にしていた。だからどの学年も物を作り出したり、栽培したり、飼育したりすることに一生懸命であった。したがって学校の中にはいろいろの動物が飼われていて、6年生は給食の残りなどで豚を

飼い、5年生は北舎の北のプールで鯉を飼い、4年生はアヒル・鶏・兎などを飼っていた。これらの動物があるときは病気で死んだり、ときには野良犬におそわれて羽根や毛を無残にちぎられ小さな命をおとすといった。又教室で子どもたちが可愛がって飼っていた虫や魚が死んだり、理科の学習のために生命を捧げた蛙や魚もいた。そのたびに子どもたちは校地の隅や木の下に埋め小石を置いて花などを供えていた。



6年修学旅行 京都清水寺



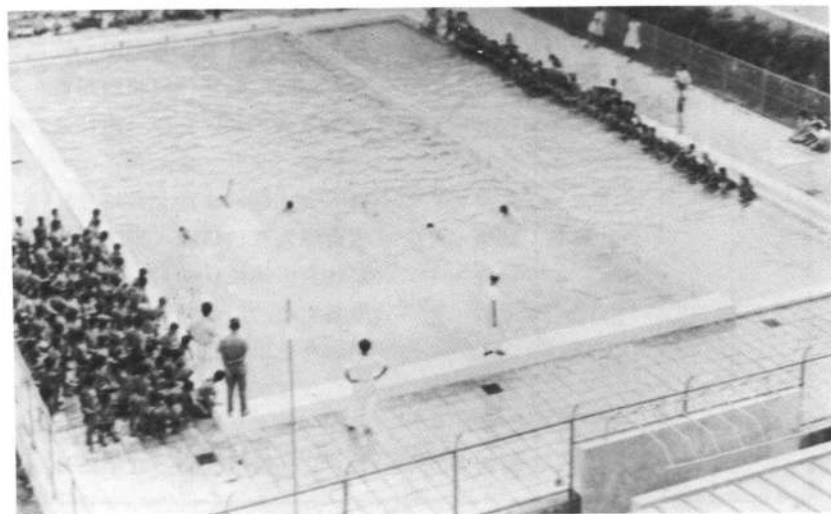
美しい曲線を描くグリーンベルト完成

そうした中で昭和28年11月かわいい動物の死に幼い心をいためた2年1部林 公子先生の組の子が慰霊の塚を作りましょうと組中で話し合い、みんな小さな手でせっせと土を盛りあげ塚を作って花を供えた。場所は講堂と南舎をつなぐ渡り廊下の西側で古井戸の上に石を置き土盛りをした小さな庭である。傍には大きな榎が2・3本あったようだ。秋になるとその葉が美しく黄色に色づいて動物たちのねむる場所としては最もふさわしいところである。ここに慰霊塚ができたのだ。塚の中央には板に「動物たちの霊」とかいた札が建てられた。

2年1部が作りあげた動物慰霊塚は全校に知れわたり、校内で死んだ動物のすべてをここへ葬るようになった。秋の彼岸がくると全校児童が花や水、それに動物たちの好きな果物まで供えておまつりするようになった。そうして2年・3年たつうちにいつしか学校の大切な行事となり、3年生が係となっていった。

その頃誰いうとなく「慰霊祭のお祭りや清掃をしっかりとやらないと、その年はたたりがある」という風説が流れはじめた。またその風説を裏付けるように事実3年担任の先生の中には長期病気で休む先生が相次いだ。「今年は3年の担任ですね。慰霊塚の係をしっかりとやらんとたたまるぞ」「今年は3年の担任だ、身体に気をつけなくては」こんな会話が年度始めの担任決定の時にささやかれた。

昭和37年、新プール建設のため慰霊塚は一瞬にしてブルドーザーにふみにじられた。「動物たちのたたりがなければよいが、古井戸も埋めてしまって」「眠っている動物がかわいそうだ」という声も出たが「子どもたちの楽しいプールになるのだから本望だろう」とみんな心の中で思った。それも今は遠い昔話になってしまった。



待望の
プールの完成し
元気に水しぶきをあげる

P T A の 活 動

昭和38年4月1日従来の育友会の名称を廃してP T Aと改称した。それと同時に規約を改正して専門委員会を一挙に整備した。この専門委員会はその後ずっと続きその名称・活動内容ともに今に至るも殆んど変わっていない。この組織及びその活動内容の計画は当時の校長林貞二氏の助言による所が大であったと思う。

昭和38年11月16日に盛大華麗な創立90周年式典を挙げ、P T A活動が世に認められて昭和39年8月18日文部大臣賞を受

けたのである。これに力を得たP T A活動はそれからますますその活動内容を深めると共に、仲よしの丘・岩石園などの力作を今に残している。又一方市P T A連合会が主催して始めた運動の大会には優勝するなどして後に続く者を奮いたたせている。



文部大臣賞の表彰状 39年8月18日

年度	会長	役員	委員会 と その活動	その他
37	丹 羽 清 二	会長 1	企画委員会 (廃品回収年3回、40万円で放送設備をす)	
		副会長 2	財務 // (予算編成・収支行使状態調査)	
		書記 2	教養 // (良親学級・他校參觀・祖父母の会)	
		会計 2	福祉 // (運動会バザー・童話会)	
			保健 // (講演会・会員体育大会11月)	
		会計監査	図書 // (図書購入及び修理・不用本回収)	
		4	給食 // (試食会・他校見学)	
			母親 // (母親文庫活用研究会・母親座談会)	
			映画 // (映画会を年4回開催)	
			会報 // (新設) (プール完成 37年7月15日)	
			学級 // (グリーンベルト完成37年12月10日)	
	町内委員	(校門改築 37年12月23日)		

年度	会長	役員	委員会 と その活動	その他
38	丹羽清	"	総務委員会（前の企画委と財務委が合併）（廃品回収） 成人教育"（前の教養委と母親委が合併）（良親学級） 福祉"（京芸人形劇鑑賞・年末助けあい） 保健体育"（水泳学校・水泳指導者講習会・金華山登山） 図書"（図書購入・古本再整備） 給食"（給食の試食・夏休み中の献立作製） 映画"（町内巡回映画） 会報"（会報発行、年4回） 校外補導"（新設）（地区別懇談会・廃品回収の世話） 学年"（新設） 町内委員（創立90周年式典挙行 38年11月16日）	
39	二	"	"	（廃品回収…配膳台購入） （文部大臣賞を受く 39年8月18日） （第1回市連バレーボール大会優勝）
40	船戸茂雄	"	"	（廃品回収、2・3階の南窓手すりとピアノ視聴覚委員会と改称（前の映画委） （オルガン教室開設 40年12月）
41	船戸茂雄	"	"	（廃品回収年4回、仲よしの丘築造・騰写機） （市連ソフトボール大会優勝） （仲よしの丘竣工 42年1月18日）
42	林	"	"	（廃品回収年3回、テレビ購入、廊下棚改造） （家庭教育学級開設）
43	義栄	"	"	（廃品回収年3回、581,454円テレビ購入） （市連ソフトボール大会優勝） （岩石園完成 44年3月27日）

創立九十周年

校舎は鉄筋に全部改築し、校舎前にグリーンベルトが完成し、プールも竣工して、学校の体裁は整った。旧来の面影は全く一変して明るくモダンな近代的学園に生まれ変わった。この年、昭和38年2月は本校創立九十周年に当るので、同窓会・PTA・学校が一体となり下記の通り記念行事並びに事業を行って祝った。

記念運動会 10月4日

毎秋行う運動会を創立九十周年記念運動会と銘うち、九十周年にふさわしい盛大な運動会を行った。好天に恵まれて朝から観衆の出足もよく終日見物の沸き上げる歓声が伊奈波の山々にこだましていた。

記念写生大会 10月22日

各学年毎に岐阜公園や岐阜駅前において記念写生大会を開いた。その作品は記念展覧会の作品作りとあって、子どもたちの熱の入れ方も大変なもので随所に傑作を生み出す努力がみられる。

記念誌発刊 11月16日

名和正一氏を編集委員長とする編集委員会が記念誌を編集し、31頁の記念誌を発刊した。その内容は創立八十周年記念誌発刊後の10年間の学校の移り変りを主にしたものである。小冊子ではあるが手際よくまとめられわかり易く好評であった。

記念植樹 11月16日

松や檜を各3本ずつ植え、記念事業のシンボルとして創立九十周年の祝典を永く後の世に残した。

記念展覧会 11月16日～18日

各教室に児童の図画・工作・手芸など力作を所狭しと展覧した。又その一角には本校の90年間の歩みをわかり易くした図表や写真も陳列された。16日の式典の日には子ども連れの両親や孫に手をひかれたお年寄りなど、子どもの作品の前に立ち止まってその出来栄えに感心していた。特に本校の歴史をスライドにした幻灯会は人気の的でいつも満員だった。そして展覧会場は終日押すな押すなの見物人で賑った。



記念展覧会 本校90年の歩みの展覧

記念式典 11月16日

前日からの秋雨もからりと晴れあがり記念式典には絶好の日和となった。伊奈波の山々も紅葉に彩どられ、上天気さそわれて記念式典に参会しようという者があとをたたく、さしも広い会場の講堂も定刻10時までいっぱいになった。

ステージに飾られた菊の香が講堂の中をひそかにただよなかで、記念式典運営委員長桑原善吉氏並びに実行委員長丹羽清二氏の手により記念式典は厳粛な中にも莊重にとり行われた。続いて記念講演が行われた。講師は大阪女子大学教授山吉 長先生で「マスコミと家庭教育」と題し熱弁をふるわれた。話の要旨は時機にぴったりで参会者に多大の感銘を与えた。

続いて校庭で記念植樹が行われて、祝賀会に移った。一方各教室ではなごやかに学校給食の会食が行われて午前の部を終った。

午後の部は午後1時半、中央玄関の上の記念施設の大時計の除幕から華々しく開かれた。九十周年記念事業として親時計を職員室に、小時計を全教室並びに中央玄関上に設置したのである。その代表として中央玄関上の大時計の除幕である。秋晴れの陽光の下、白亜の鉄筋校舎は聳えている。その中央玄関にかけられた幕を見上げて、運動場に居る全校児童・職員・大会役員・参観者一同、固唾を呑んで待っている。時はきた。かけられていた幕はサラリとおり大時計が姿をあらわした。同時に50羽の鳩が勢よくはばたいて舞い上った。みんなの手からは風船が色とりどりに碧空高く揚がっていった。今まで静まりかえっていた大観衆から一斉に「ワーッ」と歓声があがった。それは遠く金華の峰々にこだましていった。誠に九十周年記念にふさわしい劇的シーンであった。続いてマスゲームが運動場でくり展げられた。親と子が仲よく手を取り合ってフォークダンスや「90周年祝賀音頭 銀杏のもとで」を踊った。大小さまざまな影法師が秋の西日をうけて運動場にうつし出された。沢山の影法師は踊りに踊って暮れ易い秋の日は西へ傾き時は楽しくすぎた。

午後3時半になって「映画が講堂で始まります」という放送に、みんなは講堂へ吸い込まれていった。6時まで映画会である。この日は創立九十周年にふさわしい多彩な催しの連続で、子どもも大人も終生忘れることができないであろう。



大時計の除幕と同時に鳩は飛び立ち風船は揚る

敦賀の海浜学習

旧職員 野村 由

下見のこと

例年、利用していた知多の海の汚れがひどくなったので、今年は日本海側へ出かけたらどうかということになり、PTA学年委員さん方と3台の自家用車に分乗して下見に出かけることになる。

敦賀の海岸に着く。白砂青松の海岸で、近くに海水浴場もあって最適地かと思われる。船を修理していた老漁師に海のようなすを尋ねたり、水泳着に着替えて海の状態を十分に調べる。万事これでよし、決定ということになったが念には念を入れようということで敦賀セメント工場より更らに北にある赤崎小学校付近まで車をとばす。

学校を訪問して、ここに住む教師の見た最適地の海を問おうということで職員室を訪れる。厚かましいこと我がためにあらず、みな児童のためとばかり、校長先生に来訪の趣旨を伝え、見解を聞く。

種々、お話を伺っているうちに、学校近くの海ではどうか。休憩、脱衣場として学校をおかしますからということになる。一同校長先生のご厚志に感激・感謝しあつくお礼を述べて帰途につく。かくして海浜学習は敦賀の海となったのである。

交歓会の計画

このように思わぬ人の情けによってできる海浜学習を、いかにしたらよいか児童たちと討議し計画を練る中に、夏休み中だから無理かも知れないが、向こうの学校の顔が見たい、話し合いがしたい、本を持って行ってあげよう、岐阜の名物を持っていこう、ちょうちんがいい、絵葉書もいいよ……と、いろいろなアイデアが出された結果、本と絵葉書とを持っていくことになり、先方へその旨連絡をとり出発の日を待ったのである。

思い出だし、赤崎海水浴場

待ちに待った7月27日、金華山上に白雲たなびく海水浴日和。6時半バス4台をつらねて学校を出発した。赤崎海水浴場、赤崎小学校を目ざしてバスは快調に走る。

きれいな海へとびこんで泳げる

地引きあみもできる

赤崎小学校の子らにあえる

持ってきた本や絵葉書をあげたら、どんな顔して喜ぶかな

児童らの胸は、大きな期待でいっぱい。バスの中の歌声も一段とはずむ。車に酔うものなど1人もいない。みんな元気に関ヶ原・長浜をつつ走り、山々の間をぬいながら敦賀の赤崎、赤崎小学校に、ついに着く。

赤崎小学校は金華小と同じく90周年の歴史を持ち、伝統と栄光に輝く古い学校である。もう校庭では全職員・全校児童が待っていて下さる。早速交歓会を始め。本が絵葉書を送り、お互いに校歌を唱い合う。

瞳・瞳・瞳・瞳

どの子の瞳も輝き、心のカメラに感激の情景が、場面が、いくつも、いくつも写される。

グループごとに水泳の準備をする。海へ海へ喚声をあげて入る。泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ。青い山波を背にした紺碧の海。その海の中に子どもが点々と浮いている。大自然の中にとけこんで心ゆくまで泳ぎまくる。その間に順番に記念撮影をする。背景の山の青さがきわめて印象的である。地引きあみの準備ができたとのことで、全員がきそって、つなにつかまる。

「まんだ、引いたらあかんぞ」

「さっさと早く引くと、魚がにげてしまうぞ」

「ちょうしをはずすと、あかんぞ」

などと大声にどなるのが聞える。太田校長さんも手拭をかぶって先頭に頑張っている。金華の子や職員は生れて初めての地引きあみである。やがて合図とともに、つなを引き始める。だんだん引き寄せられるあみの中におどる魚・魚・魚。いるわ、いるわ。円陣になって獲物を見る。大漁に思わず歓声があがる。

楽しい1日も過ぎ、大量の魚と思いをいっぱい積んで帰路につく。お世話になった赤崎小学校の校長先生に、是非岐阜へお越し下さいと約して。いつまでも手をふって、名残りをおしみながら赤崎の子たちと別れる。



赤崎海水浴場で 5年生

赤崎小学校PTAを迎える

運動会もすぎ、錦秋の10月、赤崎小学校PTAの皆さんがバス1台で岐阜へおいでになる。歓待する。

特にT君は、足をけがした時、赤崎小学校の校長先生が自ら運転して敦賀の病院まで連れて行っていただいた、過日のお礼をのべ、すっかりよくなったT君の足を見てもらう。想えば海浜学習は十年も昔になってしまったが、今もまぶたの奥にありありと焼きついている。



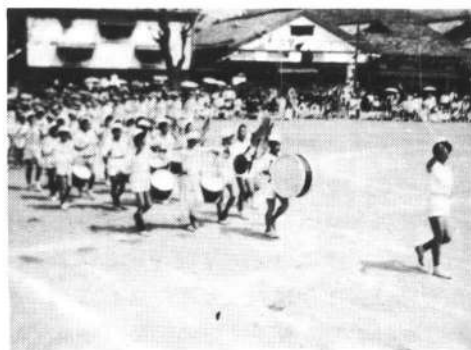
秋季大運動会

9月29日

鼓笛隊と岐阜国体

旧職員 加藤義男

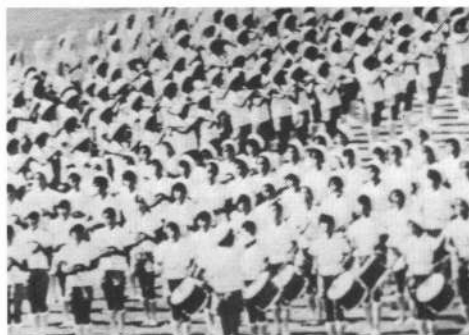
金華小学校に鼓笛隊が誕生したのは昭和35年である。この年の3月1日、徹明小学校において岐阜市ライオンズクラブより各小学校にそれぞれ鼓笛の一式が贈られた。この受領式に金華小学校が全市小学校の代表として楽器を受けとり、前もって鼓笛練習をしていた金華小がお礼に鼓笛演奏をステージの上で、全市の各学校児童会長や先生方の前で行い大喝采を浴びた。この時の演奏曲目は「ドラムマーチ」「君が代行進曲」「太平洋行進曲」などで初歩としてはかなり難しい曲だった。又編成は主指揮1・副指揮4・太太鼓1・中太鼓2・小太鼓4・シンバル1・ベルリラ1・タンブリン6・笛50である。主指揮は内海君で体格もよく堂々たるもので指揮ぶりも見事であった。指導は中島利子先生たちであった。このように本校を始め市内の各小学校に戦後初めての鼓笛隊が生れた。その後、本校の講堂において鼓笛の講習が度々行われ東京から有名な講師に来てもらい、全市の先生方や児童らに楽器の持ち方、演奏の仕方、指揮法などの指導をうけ、本校は鼓笛の中心的存在であった。



運動会における鼓笛隊 40年度

昭和35年から秋の運動会には毎年鼓笛隊が出演するようになった。人数は5・6年全員が鼓笛隊を作り、曲目も民謡などを加えて多彩となり、運動場のトラックを1周する時は、見物の父兄の万雷の拍手を浴び運動会の最大の呼び物となった。鼓笛隊は全校児童のあこがれの的となり、特に目立つ主指揮者や太鼓群などはなり手の希望者が殺到した。

昭和35年10月2日の信長祭に始めて各小学校の鼓笛隊が参加した。先づ徹明小に集合し金町通りを各小学校毎にパレードした。その時の隊形は、学校名を書いたプラカード、次に主指揮者、4歩あけてドラム群、続いて笛群の5列縦隊で、広い金町通りをいっぱい広がって行進した。曲目は「錨を挙げて」「ドラムマーチ」「君が代行進曲」などであった。このパレードの沿道は児童の父兄は勿論、見物の人々が黒山のように集まり、かわいらしいユニホーム姿の各小学校の隊員に惜しみなく拍手を送ったのである。そして信長祭には毎年鼓笛隊が市民の呼び物となった。



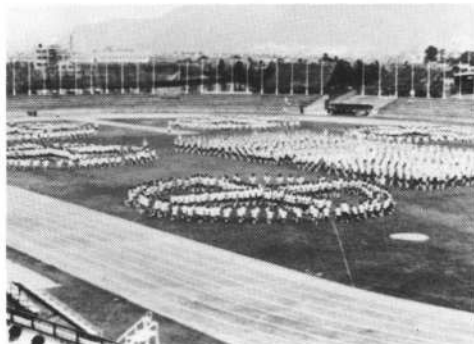
岐阜国体における鼓笛隊

昭和40年に岐阜県において国体が開催されることになり、その国体に公開演技の一つとして鼓笛隊が出演することになった。そこで各小学校の演奏技術・行進方法などを2ヶ年計画で育成するため、昭和39年に私は鼓笛の専任指導者として県から任命された。そのため本校の直接の指導は桐山富美子先生を中心にして音楽部、5・6年の担任の先生が当らしたのである。

昭和40年に入り、当日にいたるまでに何回となく県営グラウンドに集まり、行進の練習や隊形作りなど、真っ黒になって皆よく頑張った。そして待望の公開演技の日、昭和40年10月24日がやってきた。真っ青に晴れあがった絶好の日和、子どもたちは県から新しく支給されたピカピカの楽器を持ち、市内33校が晴れの演技を披露することとなった。子供の服装は白の半袖シャツ・青の短パンツ・白の長靴下・ベレー帽は指揮者とドラム群が白で笛群は橙色に統一し、花の咲いたように美しい。この時の全体の編成は、主指揮1・副指揮44・大太鼓40・中太鼓80・小太鼓160・シンバル40・ベルリラ80・タンブリン120・ピアノ200・笛1734、計2499ですばらしい大規模なものであった。

先ず全員が県営グラウンド陸上競技場の4つのゲートに分かれて待機、やがて中央指揮者の合図で4つの門から一斉に入場し、8つの4重輪になってステップをふみながら、岐阜民謡「ホツチョセ」と「かわさき」を演奏、次に「岐阜県民の歌」を演奏しながらドラム群を中心に笛群が山形を作り「岐阜の児」のメロディーにのって笛の演技をした。続いて「希望の虹」を演奏しながら笛群はトラックをパレードして退場し、最後に四ドラムがメインスタンドに向かって力強く行進し、鼓群の勇壮さを表わし乍ら退場した。

ドラム群の音はズシン・ズシンと身体全体をゆさぶり、笛群とベルリラの音は美しくどこまでも広がり、緑の芝生の上にくり広げられた音の大絵巻は国体の中でも圧巻であった。そして私の終生忘れることのない思い出となっている。



岐阜国体における鼓笛隊

仲よしの丘

旧職員 木村勝次

「泳げない。どうしたら泳げるだろう」
 (すいすい泳いでるメダカをのんでみ)
 「早く泳げるようになりたい。信じてメ
 ダカをすくってのんだ。でも泳げん」
 (もっとのめえー。たんとのもんで泳げ
 んのや)

「くやしい。メダカものんだ。水もの
 んだ。でもまだ泳げん」

そんなくり返しの中に、やっと水に浮
 き、流れにそって泳げるようになりました。
 泳げないくやしさと悲しさを経験し
 た私の小学校時代でした。そして人のやることなら努力と工夫で決してできないこと
 はないという負けじ魂のような信念を持ったのです。



プールで泳ぐ子どもたち

私が金華小へ赴任した40年頃の運動場は、どちらを見てもドッジボールばかり。リ
 レーをすれば足がもつれて転ぶし、跳び箱はこわくて跳べないという有様です。なん
 とかして体力を培いたい、ねばり強い子に育てたいと痛感しました。それで毎月体育
 的行事をもち、夏休みには山登り・ラジオ体操を行い、いろいろな運動を子どもに経
 験させ体力づくりに学校中がとりくみました。

このような学校の動きにPTAの方々も積極的に協力して下さいました。そして41
 年度に入って「楽しんで遊びながら体力が自然とつくような施設はないものか」とも
 ちかけられました。これを聞いて私はこれはいいことだ何かよい考えはと、それから
 くる日もくる日も通勤バスの窓越しに思いをめぐらしました。

「子どもはかも鹿、高い所があれば登りたがる、登ったらとびおりる」「穴があれば
 頭をつっこみたがる」「坂があれば尻をおろして滑りたがる」こんなイメージが浮かん
 できました。早速放課後、粘土とヒゴとを使って千分の一の模型を作りにかかりまし
 た。これによって金華の子たちの丈夫な体力づくりができるぞと思うと意欲は沸きま
 す。時のPTA会長船戸茂雄さんと保健体育委員長若井秀一さんが毎日のように学校
 へ来られては「どうや、できたか」と心から声援して下さいました。こわしては作り、
 作っては直して、とうとう快心の模型を作りあげました。それは夏休みも終りに近い
 暑い日でした。

二学期になるとPTAは活動を始めました。先づ土台となる莫大な土が必要です。丁度、加野医院さんが改築のため掘り出した土があったのでいただいたり、その他校下の方々からもらったりして土を集めました。ダンプが土を運ぶ。運んだ土を盛り上げる。お父さんもお母さんも鉢巻き姿で汗水を流し山作りをします。高学年の子どももスコップを手にして懸命です。

「今日はラクダのこぶのような形になったよ」「滑り台もあるよ」「トンネルやはしごもついているよ」と全校の子どもは、毎日毎日校舎の窓から首を長くして完成する日を待ちます。何せ土がダンプで50ばい、コンクリートが生コン車で10ばい、コンクリート管18本、その他、砂・金物など莫大な物がいました。総工費78万円、これは廃品回収でまかなわれた尊いお金で、それがこの体力づくりの山にかけられたのでした。

「体力づくり・仲間づくりの山ができたぞ」。早速児童会を開いて「遊び方や使い方を考えよう」「山の呼び名をどうつけよう」と相談し、学級で話し合い、アンケートをとったりしたあげく「仲よしの丘」と名づけられました。42年1月18日伊奈波神社の宮司さんによって「安全にして仲よく立派な体ができますように」とおはらいをしていただき、仲よしの丘は立派に竣工いたしました。

完成してからの休み時間は、仲よしの丘は蜂の巣をつついたようで大変なものでした。1週間位すると男の子のズボンのお尻のあたりが白くすき透って見えるやら、靴に穴があくやらで、子どもたちは夢中になって楽しんでいました。この仲よしの丘は今も全校の子どもの友として使われています。どうか丈夫な体をつくり、力強く生き抜く人間として育ててもらいたいと念じています。

完成した仲よしの丘



教室にテレビ

戦後学校の諸施設が整うにつれ、視聴覚の備品・施設も次第に充実してきて、先ずラジオ放送の利用が行われた。白黒テレビは昭和30年代になると急速に普及し始め数年ならずして校下のどの家庭にもあるようになった。そして昭和40年頃には白黒テレビは家庭におけるあたり前の生活必需品となって、珍しくなくなった。

本校においては昭和38年6月5日始めてポータブル白黒テレビ4台を購入手放送室に置いて、必要な時はこれを運んで授業に役立てていた。しかし台数が少なく同時に幾組かのクラスが視聴できず、又テレビを運んで利用するという手間もかかり不便であった。そこでPTAは2ヶ年計画をたて廃品回収の純益金で全教室に白黒テレビを設置しようということになった。

先ず昭和42年度に全教室の半分（低学年教室）、次いで43年度に残りの全教室（高学年教室）に白黒テレビ並びに付属設備としてテレビをのせる台と窓のカーテンとを完備した。そして学校中のどの学級も、好きな時に必要な番組が利用できるようになった。これは本校として視聴覚指導上、誠に特筆すべき事である。

テレビ利用による学習は設備や資料の点で、学校で教師が取り扱いたくてもできないものを興味深く提供してくれる。例えば社会科では教科書よりも新しい現在の諸外国のありのままの姿を写し出してくれる。又理科の実験では細かくて見えない所まで大きく写し出してわかり易くしてくれるし、教室内では設備の面でとうていできない実験も見せてくれるし、色々工夫してわかり易く説明してくれる。又日常のニュースなどテレビを利用し学習に役立てる分野はずいぶんとある。

このようにテレビ利用の教科は全教科に亘るが、特に社会科・理科・音楽・道徳などはその利用度が高い。昭和42年度1年生のテレビ利用番組は次の通りである。

国語……………おとぎのへや
 社会 } ……うちのひとと学校のひと
 理科 }
 音楽……………うたいましよう
 道徳……………おおきくなる子



テレビで勉強

施設の整備

学校の教育環境を整えることは、教育の能率をあげ効果を高めるのに大切なことである。本年度は前記テレビの他、次の諸施設を整えた。

●運動場の土入れ

伊勢湾台風や第2室戸台風・集中豪雨などの雨水により運動場の土は流れ荒れたので市において運動場に土を入れていただいた。

●廊下の戸棚

廊下の北側の窓下にある戸棚は、元来各学級の下駄箱として設けられたものである。それが東西の昇降口の下駄箱を設けたので不用になった。それで各学級の下駄箱を改造して各学年用戸棚とした。今まで収納場所がなくて困っていた学年用備品などは、手近な所に保管できるようになって甚だ能率的になった。この費用はPTA廃品回収によってまかなわれた。

●楽器戸棚4本と魚類観察用水槽 羽根田両吉氏の特志により整った。

●兎舎 安達正夫氏の特志により整った

現在北庭で使用している。

本校の位置標柱

6年生が卒業記念にと建てたのがこれである。

たまたま子どもたちが5年生の時、社会科の勉強で、本校の位置を示す標柱が木製で朽ちていて、やっと判読し苦い経験をした。それで卒業の際記念にと建てたのである。

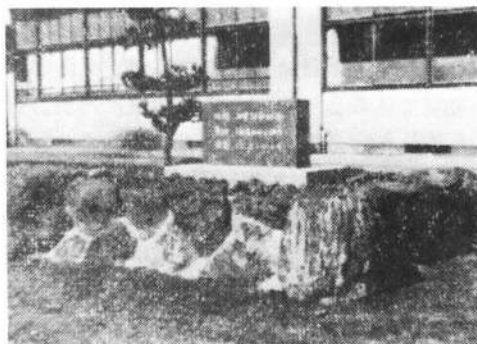
建設については、卒業生の創意と着想をそのデザインに生かし、長良川で全員が小石を拾ってその中へ入れたりして卒業の思い出の結晶としてできあがった。この手でできないところは、6年担任の先生方と6年学年委員長横幕統平さん始め学年委員の方々が中心になって行われ、周りの石探しには揖斐の春日の山奥まで出かけたり、数多いご父兄の尊い勤労作業によって完成したのである。でき上がった標柱には次の如くに刻まれている。

表面	北緯	35度25分48秒
	東経	136度16分6秒9
	標高	17.8米

裏面 長良川の流れるように清い心と

大いちょうのようなたくましさをもって

のびて行こう



完成した本校の位置標柱

岩石園作り

校西の西及び北の市道拡幅工事と新給食室建設のため、その地にあった倉庫・楽焼釜・鳥小屋・兎小屋・気象観測所・花壇を移転することになった。この好機に校地利用の全体計画をたて、今まで花壇と教材園とが混在していたのを改め、花壇は校舎の南及び西、教材園は校舎の北と決めた。この全体計画によって先ず教材園の整備を行い、魚用地を改修し、鳥小屋・兎小屋を移転改造し、新しく岩石園を作り、すべての工事を44年3月27日までに完成した。中でも岩石園の建設には最も力を入れた。

岩石園の設計・岩石集めの計画は、学校の高橋久先生を中心に理科部の先生がたて、活動や施工はPTA学年協議会長の若井秀一さんを中心にPTA執行部員の方々が大変なお骨折りをして下さった。岩石園作りは、先ず岩石集めから始まった。

根尾川へ

前もって下見に乗用車で高橋久・森本孝一両先生と私とで出かけた。岐礼の根尾川原で採石してみえた松井和雄さんにお目にかかり、訳を話すと学校の事ならどれてもさしあげましようとお心よく頼みをきいて下さった。

夏休みに終りに近い、8月25日、早朝からトラック・乗用車に分乗して岐礼に向う。岐礼の採石場には何トンもある大きな岩から1人でも持てそうな石などが堤防のように長く積みあげてある。その中から車に積み込む石を決める。みんな丸太や細引きなどを使って、人海戦術で車にのせる。日照り続きの河原は焼けつくように暑く、真夏の太陽はギラ・ギラと照りつける。みんなの顔や手足からは汗がふき出て、シャツの上に濡れ模様をえがく。いろいろの種類の石を車に積んで、意気揚々と砂塵をまきあげながら炎天下の街道を学校へ帰った。

揖斐川へ

10月12日、小雨降る土曜日の午後、下見に出かける。十六銀行揖斐川町支店で支店長の高桑義男さんから山主の増田宗平さんを紹介していただく。それから増田さんの案内で揖斐川沿いに北上し、藤橋村親谷に着き採石する石をきめる。

快晴の10月20日午前8時、トラック・乗用車隊は1路親谷へ向う。前回の経験から太い針金で作ったモッコや太い丸太を何本も準備してきたので仕事ははかどった。揖斐石の本命は青石である。小さな谷川の中にある大きな青石に何本もローブをかけ、丸太でこでたり押ししたりする。20余人の全員が全力をあげたので、さしもの青石も遂に車にのせることができた。みんな腹はべこべこ、その後で食べた松野清一さんの心づくしの五目飯のうまかったこと。紅葉の山あいを走り下り、柿の実のたわわになる西美濃の平野の中をまっしぐらに学校へ帰る。

粕川へ

10月27日、トラック・乗用車隊は一路春日谷へ向う。前もって採石と案内を松ヶ枝町の坂井正治さんから春日村の藤原銀助さんに頼んでおいて下さった。春日村川合で藤原さんと合流し、道を南にとって古屋で西に折れる。谷川べりの紅葉のトンネルの中を感嘆しながら走り抜け、砂防堰堤を一気にのぼりつめて車から降りる。目当てのさゞれ石を探す。谷川の川底にすばらしいのを見つける。堀りお



岩石園

44年3月27日完成

こしてみると意外に大きいのが、みんなこれを運ぼうと大いに張り切る。針金のモッコに乗せ前後に太い丸太を通して担ぐ。天気は急変して時おり肺然と秋雨が通りすぎる。谷々は煙り、ヒヤヒヤと小雨は衣服をぬらす。ヨイショ、ヨイショと力強い男の声が響く。急勾配の山道は雨にぬれて滑り、幾度も肝をひやししながら慎重に車まで運んでのせる。牡丹石や砂岩や粘板岩を獲物に、雨と土とで黒く汚れた顔を見合せ、大笑いしながら車にゆられて帰校する。

赤坂へ

いつものようにトラック・乗用車隊で赤坂へ向う。十六銀行赤坂支店に立ちより、支店長の西尾康男さんの紹介でマルアイ石灰工業の採石現場へ向う。現場主任の杉浦さんから赤坂産の石の説明をきき、美濃黒・美濃更紗の大理石の原石をいただく。

次に和田大理石工業へ行く。ここは加工工場で、日本は勿論外国産の大理石の原石がごろごろ置いてある。ここで台湾産の黒大理石の磨いたのをいただく。これは後に岩石園と文字をほり、現在岩石園に立っている。

岩石園の建設

岩石園を作るため岩石集めをしていると伝え聞いて、富士山の溶岩・矢作川のダム底の花崗岩・高山の松倉山の石などを学校へ届けて下さった。これで岩石の数は全部で百個余となった。石の種類と数はこれでととのった。

岩石園建設の場所は図書館の前の二宮金次郎像の西と決め、土を盛り始めた。粉雪の舞う中で大体の形を土で作った。次は岩を並べるのだ。寒風は吹き通り、校舎の裏で日が当らず、寒さは殊の外きびしい。その中でヨイショ、ヨイショとみんなで石を並べるのだ。そして石と石との間に金網を張り、その上からコンクリートを塗り、その間に低い木々を植えて、でき上がったのである。

今、岩石園に立てば、灼然の夏、紅葉の秋、西濃の山々を走り廻り、厳寒の雪降る中で岩を並べたPTA・先生方の顔が一つ一つの石の面に浮かび出てくるようだ。

環境の整備

鉄筋校舎は建てかわり、校舎の外観は整っているが、普通教室・特別教室等の内部は戦前・戦後の新旧備品が混在し雑然としているし、諸施設も整備されていない。そこで昭和43年度より環境整備5ヶ年計画を樹てた。市教委の年次計画と、市配当費によるものと、それらで足りない面をPTA廃品回収により補うものとの三本立によって面目の一新を計った。特にPTAには絶大なご協力をいただき、44年度は普通教室、45年度は特別教室を重点的に充実したのである。

普通教室

- 児童の机・腰掛。市は42年度は6年生用(木製)43年度は5年生用(鉄製上下式)44～47年度は4年生～1年生(パイプ製)を配布し、全部新品とした。
- 指導机。市配布と市配当費により45・46両年度に全教室スチール製とした。
- オルガン。使用できる6年生用2台はそのままとし、残りを全部、配当教材費により43～46年度の4ヶ年かかって新品ととりかえた。
- テレビ。42・43両年度、PTA廃品回収により全教室に新しく設置した。又テレビ用カーテンは44年度PTA廃品回収によって取りつけた。
- 整理戸棚。画紙・用紙が楽に入れられる奥行の深いスチール戸棚を44年度PTA廃品回収により全教室に整えた。
- 電灯。1階だけは鉄筋校舎建設時に設備されていた。市は45年度に2階両端、46年度に2階全室、47年度に3階全室に設備した。
- 石油ストーブ。44年度に16台を市が配布し、同時にPTA廃品回収により残り15台を整え、今までのコークスストーブに代って、石油ストーブを全教室に整えた。

特別教室・特別室

- 職員室及び校長室。個人別ロッカーを市配当費により44年度に整えた。又職員室の机並びに椅子を47年度に市配布により全部スチール製とした。
- 放送室・保健室・理科室・家庭科室。図工室の戸棚を市配当費並びにPTA廃品回収により44・45年度に整え面目を一新した。放送機は47年に市費により新品ととりかえた。



水草植物 15本のコンクリート管



扇形の花壇

施設の整備

- 図書館 閲覧機の天板が破損し学習にも差しかえるので、44年度にPTA廃品回収により天板を新品ととりかえた。

図書館は独立建物で渡り廊下がないため、履物をはきかえたり雨天の時は傘をさしたりなど不便であった。そこで市は図書館への渡り廊下を作り46年3月31日竣工した。

- 女子職員便所 今まで職員便所は大小兼用でしかも男女共用のものが1穴しかなく、多数の職員で混雑していた。特に給食調理員用のものは別にすることが保健上からも必至のことなので、早くから市当局に訴えていた。市もその必要を認め、今までの職員便所の東隣りの物置を改造して2穴の女子便所（内1穴は給食調理員用）を作り44年10月17日完成した。これで今までの不便は全く解消した。

- 気象観測所 プールの東に百葉箱があったが、新給食室建設用地になったので仮りに移転していた。しかし腐朽甚しく遂に廃棄するに至った。たまたま篤志の方の御厚意により百葉箱を新しく購入することができたので、新給食室の北に土を盛り百葉箱を備えた。風速計・地中寒暖計はPTA費により設置し、44年10月15日完成したのである。

- 楽焼釜 校地の西並びに北西の市道拡幅及びコンクリート壁造成（44年5月完成）に伴い、その用地にあった楽焼釜は取りこわされた。その代償として図書館の西に44年4月9日新しく作られた。しかし屋根がないので雨水による釜の損傷をおそれPTA費によりその小屋を作った。

- 教材園 43年度に大体できあがったが、活用し易く美観をも考えて細部に手を入れ44年度末には見ちがえるようになった。中でも井戸を掘り地下水を汲みあげて池に入れる工事と、篤志の方々の御厚意によりコンクリート管15本を並べ水草植物を栽培するようにしたことは特筆すべき事である。

- 花壇 43年度に花壇は校舎の南、教材園は校舎の北と定め、43年度は教材園の整備に努めた。44年度は花壇を作ることとし、花壇の位置、形状などを職員の手で研究し位置は新給食室の東、形は扇形と決めた。花壇の扇形のふちのコンクリート柱のピットを並べる工事はPTA費により行った。中の土入れ工事は職員と高学年児童の手によって行った。そして45年2月20日完成したのである。

- グリーンベルトの改造 職員・6年とそのPTAの手により45年12月15日完成。

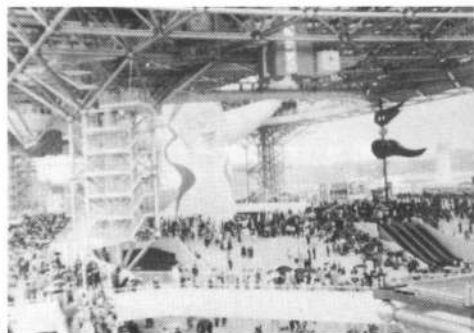
雨の万博

万国博覧会が日本の大阪千里山で開かれた。日本国中はその話でもちきりである。岐阜市では前年度から市内小中学校の見学輸送計画を立てた。何しろ日本国中から人が集まり旅館やホテルは予約で超満員だから日帰りだ。

本校の割り当ての4月20、6年生全員と付添の全職員とがバス4台を連ねて出発する。千里山のバス駐車場に着くと、団体客でいっぱいであるうっかりすると他の学校へまぎれこんでしまう。前の子の背

中にくっつくように小走りに走る。雨がポツポツ降りだし、会場の西門を通る頃には激しい雨足が舗道をたたく。万博の最大の呼び物は米国とソ連の月ロケットだ。米国館へ入るのに4時間は並ばねば入れぬというので、ソ連館めがけて雨の中を走る。ソ連館の前には既に4列になって百米以上の長蛇の列が並んでいる。ビニールの透明合羽を着た子、洋傘をさした大人、吹き降りの中を少しづつ進む。2時間程並んでようやくソ連館に入る。

ここまでは学校中まとまってきたが、これからは予定の通り班毎に見学する。班は児童数名と先生1人で構成している。私たちの班はソ連館に入るや中央ホール天井から吊った月ロケットや宇宙船の下で、それを見上げ乍ら持参の握り飯にばくつく。昼食をとったので寒さと空腹はうすらぎ人心地がつく。館内の沢山のロケットや宇宙船などに目を見張り、民芸品や写真などを見て館外に出る。万博会場は広くて到底全部は時間内に見て廻れないので、事前に班で相談した通り、並ばずにすぐ入れる、アジア・アフリカ・中南米などの各国館を見てまわる。雨は小雨になって見て廻るのに楽になった。各館内はその国の様子が一目でわかるように、パノラマや写真を掲示し珍しい特産品を陳列してあって、中には見たこともない白い虎もいるといった具合に趣向をこらしている。会場の中央には大屋根の下にお祭り広場があって、各国や日本各地の踊りや民謡などの出し物をする所だ。どこへ行っても人、人、おもちゃ箱をひっくりかえしたような賑かさである。その中から抜け出してバスに乗り、雨のあがった春の夕暮れの中を学校へ帰ってくる。この日、1日で世界の国々を見て廻ったような楽しさ珍しさであった。



万国博覧会

お祭り広場



伊自良でキャンプファイヤー 6年生

伊自良キャンプ

野外学習は大自然の中でしようというので今年は伊自良キャンプ場へ行くことになった。7月22日快晴、昼食を早目にすませて6年生は学校に集まりバスで出発する。伊自良につくと谷川のふちに黄色のテントが幾張りも並んで、杉木立の山の緑と美しいコントラストを描いている。たそがれて夕食の用意だ。あちこちから白い煙が立ちのぼり、やがて夕食が始まったとみえてドット笑い声が聞える。

夕闇があたりの山々を包む頃、キャンプ場の入口の広場でキャンプファイヤーだ。うたい、踊り、歩き、走る。黒いしじまの中にそこだけは炎に浮き出た子たちの笑顔がある。翌朝みんな谷川をさかのぼり、西の山腹を曲りくねって1列に登る。朝の太陽に青葉はむせかえるようだ。時々谷をわたる涼風が汗びっしょりの膚に心地よい。峠で一休みして一気に西の谷へ降り南へ廻って元のキャンプ場へ戻る。それから思い出多いキャンプ場を後に、正午近く学校へ帰った。

グリーンベルト改造

避難訓練の時、中消防署から校舎南を梯子車が通れるようにせよと指示があった。そこで校舎南のグリーンベルトの校舎寄りの部分を取り除き、この機会にグリーンベルトの周囲にコンクリートのピットを並べてその中に土を盛りグリーンベルト全体を20㎝高くすることにした。6月に入った快晴の日、仕事始めである。私が中央玄関から西の芝生の周りにピットを埋める溝を堀る。その後から校務員の水谷次郎さんが基礎コンクリートを打ってその上にピットを並べる。追いつ追われつ汗びっしょりになる。次に芝生めくりを昼休みや放課後全員の先生方がする。6年生が全員で卒業記念にと、めくった芝生をピットの円の外へ運び、土をピットの円の中へ運んで盛りあげその上に芝生をはる。6年PTAも全員が応援にかけつけて下さる。土が足りないので8トン車に10ばいもってきていただく。中央玄関から東も同様に行く。6年生も6年PTAも職員も運動会前にと頑張って完成した。それから6年生は笹川雅世さんからいただいた明治村付近産の花崗岩に友情の文字を刻み、東のグリーンベルトの上に据え、卒業の記念とした。



グリーンベルト改造

クラブ活動始まる



バドミントンクラブ

昭和46年度のクラブ

陸上	18人
体操	22人
ソフトボール	81人
バレーボール	18人
バドミントン	35人
卓球	32人
読書	3人
習字	5人
社会	6人
科学	32人
音楽	2人
美術	14人
新聞	7人
手芸	11人
調理	15人
園芸	2人

昭和36年4月1日より実施されてきた学習指導要領が改訂され、昭和46年4月1日より実施された。新学習指導要領は今までの教育課程の4領域（各教科・道徳・特別教育活動・学校行事等）を改め3領域（各教科・道徳・特別活動）とした。そして特別活動の中の学級会活動・学級指導は全学年毎週各1時間、クラブ活動は4年以上毎週1時間、授業時間内において実施することとなった。この新学習指導要領は昭和43年7月11日公示され、昭和45年度は移行措置として実施し、昭和46年度より実施されることとなった。

本校においては新学習指導要領により昭和45年度より実施に入った。但しクラブ活動については、運動場の広さ、体育館の代用として使用している講堂の状況等の学校事情により4年はこれを省いて実施しなかった。しかし昭和47年度より4年は各学級毎に活動内容を決めて行った。クラブは5年以上の同好の児童によって組織し、全職員（4年担任は4年のクラブ指導を行うので省く）が指導に当り、毎週水曜日の第6時限をこれに当てた。

年度の始め、子どもらの希望によって各クラブを結成しているが、ソフトボールやバレーボールなどの運動クラブには希望者が殺到している。しかし運動場の広さなど体育施設には限度があり、希望者全員を受け入れることはできず、調整をしている。

クラブはただ面白いとかというような興味本位で入るのではなく、めあてをもってクラブに入るようにさせることが大切である。その意味で4年生のうちいろいろな内容の活動を行って、どのクラブに入ったらいいかの目を開かせるよう指導している。

野外活動

前年の昭和45年度まで6年生は学校で合宿をしたり、水道山ユースホステルで泊ったり、伊自良キャンプ場へ出かけたりしていた。しかし学校としての系統・発展性がなかったので検討した結果次のように決めた。4年は海の学習、5年は野外活動、6年は修学旅行である。従って46年度だけは5・6年が8月8日より1泊2日の学校合宿を行った。学校裏の長良川の河原で飯盒炊事をして各教室で泊った。何しろ2ヶ学年の大人数であるので例年よりにぎやかで楽しかった。



畜産センターへ到着 47年9月18日

昭和47年度になって市は市内小中学校の野外活動の場として椿洞の市営畜産センター内に野外活動の施設を整えた。それまでは各学校がそれぞれ野外活動の場を選定して実施していたが、いろいろの面で問題があり市が遂に野外活動場を作ったのである。それで本校5年生は割当てられた47年9月18日畜産センターで野外活動を実施した。からりと晴れあがった初秋の朝、バスに分乗して畜産センターに到着した。本館前で出迎いの所長さんのお話をきいて、裏山の斜面の芝生で持参のおにぎりにばくつく。山あいから流れ下る谷川は芝生のふちを区切っている。すくってのどをうるおせば清冽な水は歯にしみるように冷たい。夕方までには間があるので、椿ロッジ裏から西の谷間を登るハイキングコースをたどる。



畜産センター 椿ロッジ

うす暗い木立の間を谷水に苔むした石に足をとられながら一步一步登る。後ろからカン高い声が聞えたと思うと数名の女の子に追いつかれた。共におしゃべりしながら登っていくと低い松にかこまれた尾根に出た。それより右へ少し登ると頂上だ。頂上からの眺めは実に素晴らしい。眼下に畜産センターの建物が玩具のようにかわいい。一息入れて東へ尾根を一気に駆けおろる。これまた実に壮快である。夕食を広い芝生の運動場でとっていると雨がポツポツ降りだした。夕立だ。百楽華の建物へ駆けこむと物凄い雷鳴と共に雨がザーと降りだした。間もなく雨がやんだのでキャンプファイヤーを囲んで歌い踊った。翌朝バスで帰ったが、谷水の冷たい味と頂上からの景観は今も忘れることができない。

創立百周年

昭和48年2月は本校創立満百年に当るので、年度の始めPTA執行部員と学校職員とで創立百周年記念事業実行委員会（実行委員長 若井秀一）を構成し、下記の行事及び事業を行って、創立百周年を祝った。

記念運動会 9月24日

創立百周年の子にふさわしい自主性と自信とをつけさせようと運動会の活動をできる限り子どもにゆだねた。この期待に応えて子どもたちは立派にやり遂げた。

そして中央玄関4階から下げられたサイコロ型のくす玉が、閉会式の前に割られ、中から創立百周年の垂れ幕が下がるや、子どもや観衆の大歓声が金華の峰々にこだまし、誠に百周年にふさわしい運動会であった。

記念児童作品展覧会 2月5日～10日

全校の子どもの力作を見てもらおうと、各学級の教室やその廊下、東端の特別教室を会場として展覧会が開かれた。社会・科学・図工・裁縫など授業の中で作りあげた作品が会場に展覧され、又一隅には本校百年間の写真及び教科書も展示され、連日参観者で賑った。

記念植樹 3月9日

百周年を記念して樹を植えようと、公害に強く、手入れしなくてもよい、大木になる木を下記のように選んだ。学級で1本づつを子どもとその親の手によって、運動場の東側と南側に植えた。校下の佐々木造園さんには、計画・施工など格別お骨折りをいただいて植樹は順調に運んだ。



記念運動会

木の名前	数本	高さ	幹の周り	木の名前	数量	高さ	幹の周り
ツブラジイ	5本	3米50㎝	12㎝	ソメイヨシノ	8本	3米50㎝	18㎝
クス	6	3米	15㎝	タイサンボク	2本	2米70㎝	12㎝
ヤマザクラ	2	3米50㎝	15㎝				

記念児童文集の発刊

昭和28年より毎年作ってきた「いちよ
うの実」文集の記念特大号を発刊した。
全校児童の作文をのせ、自分が子どもの
頃はこんな考えや大望をもっていたのか
と、創立百周年の頃を思い出すよすがと
した。

記念誌の発刊 3月20日

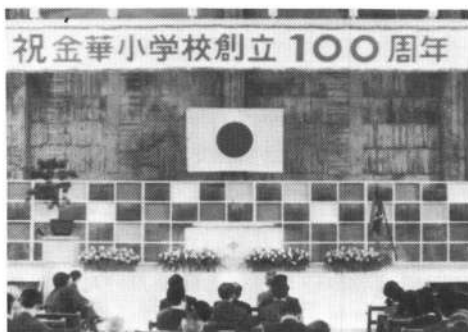
創立してから百年間の主な出来事とそ
の写真をのせた。菊判、246頁、布別染上
製の装裱、ケース入りの立派な本で、評
判は上々であった。

記念式典 3月25日

東の金華山から静々と旭日は昇り始め、長良川の瀬音は祝うかのように百年の曲を奏している。式典会場の体育館は完成前で打ち放しのコンクリート壁が、かえて力強く簡素な感じを与える。館内はきれいに掃き清められ、周りに紅白の幕を張りめぐらして、百年に一度の盛事を待っている。定刻近くなると、今日の佳き日をお祝いして参会者が続々とつめかけもう三百余名にもなった。

午前10時、記念式典は始まった。開会の辞、君が代の斉唱、旧職員や同窓生の中で亡くなられた御霊に対し黙禱と進んだ。次いで若井秀一実行委員長が壇上に立ち、創立百周年記念事業の概要をのべ、特に多年の悲願としてきた体育館建設が実現し、これにご尽力いただいた市当局並びに関係各位に対し深甚の謝意を表すると挨拶して、万雷の拍手を浴びた。続いて吉岡 勲校長はよき伝統と校風を築きあげてきた先輩諸氏に対し感謝の意をのべ、今こそ創立百周年にふさわしい子どもを作りあげて、これに答えようと結ばれ、会場を埋めた参会者に多大の感銘を与えた。

次は祝辞である。市長上松陽助氏、市教育長戸本貢氏、旧職員の河合佐治氏、地元代表として金華広報連合会長後藤喜八氏、元校長代表鷺見臣一郎氏、元PTA会長代表丹羽清二氏が次々と壇に登り栄光と伝統に輝く本校の校史をたたえ、思い出を語られた。最後に「故郷」を全員で歌って式は終わった。時に午前11時である。久しぶりで母校へ来た方々は、大銀杏を見上げ、記念品の湯呑を手にして三々五々早春の街へ散っていった。



花かおる式典ステージ

右より上松・戸本・河合・後藤の来賓各位



体 育 館 竣 工

7月2日午前10時より体育館竣工感謝の会が催された。会ではできるだけ簡素にというので一切の冗費を省いた。開会の辞、君が代斉唱に続いて、平井照二PTA会長が体育館建設のいきさつと御尽力いただいた市当局並びに関係各位に感謝の意をのべた。これを受けて、上松陽助市長並びに戸本 貢市教育長の挨拶があった。続いて体育館を建てた玉田設計事務所並びに野村建設株式会社に対し感謝状を贈呈した。それより来賓の代表として市議会副議長伊藤末次郎氏、金華広報連合会長後藤喜八氏、前PTA会長若井秀一氏より祝辞をいただいた。これに続いて吉岡 勲校長並びに本校児童代表のお礼のことばがあり閉会した。時に午前11時である。完成した体育館は、東西40米・南北18米・面積720平方米で、天井は高く床は美しい。

想えば体育館が完成するまでには、前PTA会長若井秀一氏を始め多数の方々のご尽力を忘れてはならない。

昭和8年12月28日できた講堂は老朽化してきた。そこで昭和44年4月PTA会長に就任した若井秀一氏は創立百周年記念として体育館を建設しようと決意し、校下の各種団体に呼びかけその機運を盛りあげてきた。機熟し昭和46年6月大署名運動を展開し10,830名にのぼる多数の署名を得た。それをもって請願・陳情を



当日の体育館

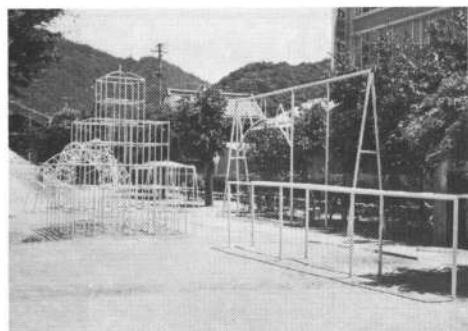
7月2日

くりかえし遂に47年3月市議会に於て予算化された。その年の9月14日講堂取りこわしが始まり、10月5日地鎮祭、48年7月2日竣工したのである。

動物慰霊碑完成

12月25日午後4時、動物慰霊碑の完成除幕式がとり行われた。去る昭和28年11月、当時2年生の子たちが考えついて土を盛り、まん中に木をさし「動物の霊」とかきお花や果物を供えておまつりしてきた。それが昭和37年5月新プールの敷地となってこわされてしまった。ところが最近、子どもたちからお墓をとという声がかかれ、校務員の水谷次郎さんをお願いして作っていただいたのである。

新しく図書館の西に建てられた碑の前には、線香をたきお花を供え、動物の世話係の4年生の子によって除幕し、次々と慰霊文を読みみんな小さな手を合わせた。



ジャングルジムと並行棒

ジャングルジム・並行棒完成

本校児童の体格は戦後劣っていたが、学校給食と家庭の食生活改善などによって向上し、近年は上位にある。しかし体力はそれに伴わず、その平均値は市・全国よりも低い。

そこで遊びの中で体力増強をねらってPTAがジャングルジムと平行棒とを12月25日完成して下さった。

両者とも特別設計の頑丈なもので、校庭の南のサーキットコース沿いに配置し

サーキットコースを走る時に利用できるようにした。完成後はジャングルジムで遊ぶ子や平行棒で腕をきたえる子たちがいつも見かけられ、児童の体力の向上に大いに役立つことを期待している。

便所竣工（運動場用）

昭和49年3月14日、体育館の前に便所が竣工した。今まで便所は全部校舎内にあって舎外にはなかったので不便であった。更らに昭和48年度から学校無人化となつて、土曜日の午後と日・祝日の日直並びに宿直はなくなった。そこで運動場で遊ぶ子どもやその時に行事をもった校下諸団体は困っていた。

それがかねてからの要望がかない運動場用便所が完成したのである。公衆便所によく似た作りで、斬新でスマートなこの便所は、今後運動場は勿論、体育館で催される各種会合にも大いに利用されることであろう。

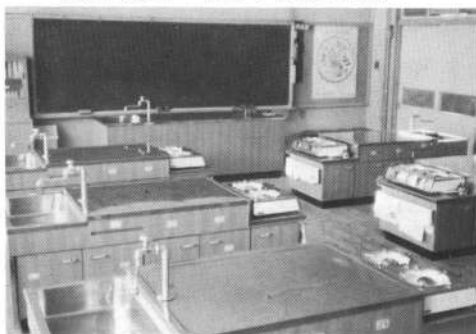
家庭科教室完成

昭和49年3月6日、家庭科教室が完成した。木造校舎を鉄筋校舎に改築していた時には、特別教室は校舎の西へ増築する予定であった。しかし昭和40年度より学級数が次第に減少し、余剰教室ができてきた。

そこで普通教室を改造して家庭科教室とした。都市ガス・水道・電気を配管し、児童用調理台8台、指導用調台1台を設備して、調理はもとより被服も指導できるよう施設が整えられた。

これで普通教室22、特別教室（理科室・理科準備室・図工室・音楽室・家庭科室・家庭科準備室）、独立図書館を有し、学校教育活動に必要な施設は整った。

家庭科教室 3月6日改造完成



P T A の 発 展

P T A の活動は本来、学校教育を理解すると同時に家庭・近隣における子どもの指導を推し進めることである。この意味から昭和44年度、従来の学級・学年委員会を重視し組織の上にも明確に位置づけてその活動を活発にした。ここにおいて学級・学年委員会、専門委員会、校外補導委員会、その4月合併した児童愛護会という4本の柱をうちたてた。

昭和47年度には創立百周年記念事業を進めるために従来の書記を幹事・副幹事として役員会の強化をはかり見事その大事業をなし遂げた。又会員の中広い教養をねらいとして昭和48年度からぞくぞくとクラブが誕生し、P T A 活動は多彩となった。



見事な廃品回収の活動 49年7月20日

年度	会長	役員	委員会 と その活動	その他
44	若井秀一	会長 1	学級委・学年委・学年協議会	(従来の総務委廃止)
		副会長 2	成人母親委員会	(前の成人教育委を改称)
		書記 2	福祉 //	(金華登山に協力・卒業生補助)
		会計 2	保健体育 //	(水泳教室・金華登山・学年対抗バレー会)
		会計監査 4	図書 //	(読書会・図書購入修理)
			給食 //	(三角布修理・パン及び牛乳工場見学)
		視聴覚 //	(テレビ番組紹介)	
		会報 //	(金華の教育・会報の発行)	
		校外補導 //	(校外生活補導・校下巡視・廃品回収協力)	
		児童愛護会	(金華児童愛護会を合併・制服を制定着用)	
	(廃品回収年3回、1001,317円石油ストーブ)			
	(教室の戸棚購入・花壇築造・教材園整備・)			
	(楽焼釜小屋建設)			

年度	会長	役員	委員会 と その活動	その他
45		〃	〃	(グリーンベルト改造完成 45年12月15日) (廃品回収年2回、613,501円児童図書購入) (第1回親子ソフトボール大会優勝)
46	若	〃	〃	(廃品回収年2回、281,180円児童図書購入)
47	井 秀 一	会長 1 1 副会長 2 幹事 2 副幹事 2 会計 2 会計監査 2	学級委・学年委・学年協議会(学級PTA・学年PTA) 成人母親委員会(祖父母の会・講演会・他校参観) 福祉 〃 (ベルマーク整理・年末助け合い) 体育 〃 (前の保健体育委を改称)(学年対抗ソフト大会) 図書 〃 (図書購入・修理) 保健給食 〃 (前の給食委を改称) (スモック修理) 視聴覚 〃 (夏休み子供映画会・人形劇鑑賞) 会報 〃 (金華のPTA・会報の発行) 校外生活 〃 (前の校外補導委を改称) (夏休み巡回) 児童愛護会(毎朝交通指導、スクールゾーンの啓蒙) (創立百周年記念式典 48年3月25日) (廃品回収年3回、865,221円)	
48	平 井	〃	〃	(体育館竣工 48年7月2日) (廃品回収年2回 764,539円) (ジャングルジム・平行棒完成 48年12月25日) (第10回市連バレーボール大会優勝) (第1回女子ソフト・第4回親子ソフト優勝)
49	照 二	〃	〃	クラブ誕生(読書・書道・絵画・楽焼・料理・ (園芸・ソフト・バレー・卓球・ (フォークダンス) (廃品回収1回 465,460円) (福祉委員会を廃止) (第5回親子ソフト優勝)

沿 革 年 表

()内は富茂登学校

創立	西暦	年度	校 名	概 要	学級数	児童数	卒 業 数	校長名
1	1873	明治 6	大 観 舎 (有道義校)	明治6年2月米屋町の尾張藩の旧役所を仮校舎にして開校、 大観舎と称す (明和6年2月7日御手洗に有道義校開校)				
2	74	7	金 華 学 校 伊 奈 波 学 校	4月校舎2階建2棟新築、1つは男子を収容し金華学校、 1つは女子を収容し伊奈波学校と称す。		金 華 学 校 伊 奈 波 学 校		吉田 伝次 説田孫三郎
3	75	8	＃					吉田 伝次
4	76	9	＃					＃
5	77	10	＃					＃
6	78	11	岐 阜 学 校	7月校舎1棟を2階建に改築、金華、伊奈波の名称を廃し て岐阜学校と称す。				味岡 正義
7	79	12	＃					＃
8	80	13	(富茂登学校)	(有道義校の名称を廃して富茂登学校と称す)				＃
9	81	14	＃	5月教則綱領公布により今までの下等、上等の二科を初等、 中等、高等の三科とす。				＃
10	82	15	＃					安藤幸之助
11	83	16	＃					＃
12	84	17	＃					＃
13	85	18	＃					＃
14	86	19	岐阜尋常 小学校	11月小学校令公布により岐阜尋常小学校(南北舎、現本校) と岐阜高等小学校(中舎、現京町小)とに分立す。				＃
15	87	20	＃					稲垣 知明
16	88	21	＃					＃
17	89	22	＃					＃

創立	西歴	年度	校名	概要	学級数	児童数	卒業 生数	校長名
18	90	23	岐阜尋常 小学校					稲垣 知剛
19	91	24	"	10月28日午後3時濃尾大震災、校舎焼失、12月1日円龍寺にて午前午后に分け授業開始。		680	128	"
20	92	25	"	4月25日米屋町に北舎竣工し円龍寺より移る。9月13日暴風雨のため屋根吹きとび18日まで臨時休業す。	8	585	122	"
21	93	26	"	9月28日中舎南舎竣工、岐阜高等小学校は鶯谷へ移転、2月12日校舎落成式挙行	8	708	152	"
22	94	27	"	1月21日唱歌、裁縫を増科目とす。	12	713	1150	"
23	95	28	"			581	133 (39)	榎本 利通
24	96	29	"		11	573	108 (33)	"
25	97	30	"			550	161 (36)	"
26	98	31	"		10	521	120 (50)	"
27	99	32	"		11	627	185 (58)	佐々木 喜一郎
28	1900	33	"	4月1日学級の名称を第○学年第○部と改称す	10	601	85 (28)	"
29	1	34	"	4月1日裁縫専修科を廃止す	11	694	134 (30)	山岡 清
30	2	35	"	10月8日校門建設(石柱、鉄扉)	13	694	152 (38)	"
31	3	36	"		12	708	165 (42)	"
32	4	37	"		13		154 (33)	"
33	5	38	"	6月19日、日直を設く			152 (47)	"
34	6	39	"				159 (34)	加藤良次郎

()内は高等科、他は尋常科

創立	西歴	年度	校名	概 要	学級数	児童数	卒業 生数	校長名
35	7	明治 40	岐阜尋常 小学校	義務教育4ヶ年制最終年			154 (34)	関谷 国治
36	8	41	"				0	"
37	9	42	"	4月1日義務教育6ヶ年に延長され尋常科第5学年を置く	15	810	0	"
38	10	43	(富茂登合併)	4月1日富茂登小学校を合併し分教場をおく。6学年を置く。10月26日大工町新校舎一棟竣工し第3学年以上の児童を収容す。			175	"
39	11	44	"	4月1日全児童を収容し、富茂登分教場を廃す 5月27日新校舎落成式挙行事	22		153	"
40	12	大正 元	"	9月23日暴風雨のため南舎階上全部吹き払わる 3日間臨時休業、その後、約1ヶ月間二部授業を行う			169	"
41	13	2	"	4月1日風害復旧工事竣工し普通授業を行う	22	1273	186	"
42	14	3	"		22	1316	180	"
43	15	4	"	5月17日火災により校舎校具全部焼失2日間臨時休業、12月12日北舎竣工、1月18日南舎竣工、普通授業に恢復	22	1359	190	"
44	16	5	"	2月28日電話新設(1092番)	23	1425	135	"
45	17	6	"	5月15日角力場を設ける	24	1492	157	"
46	18	7	"		25	1600	206	"
47	19	8	"		26	1677	200	"
48	20	9	"	12月15日北舎増築	26	1765	232	"
49	21	10	"	7月16日移転中の宿直、使丁室完成、9月26日暴風雨のため南舎階上吹き倒さる、2日間臨時休業	27	1697	243	"
50	22	11	"		26	1693	248	"
51	23	12	岐阜市岐阜尋 常高等小学校	4月1日高等科を併置し、岐阜尋常高等小学校と改称す。 6月13日治療室、使丁室移築完成。9月1日南舎改築竣工。 2月14日中舎竣工	28	1654	256	"

()内は高等科、他は尋常科

創立	西暦	年度	校名	概要	学級数	児童数	卒業生数	校長名
52	24	13	岐阜市金華尋常高等小学校	4月1日商業実務学校併設さる、9月8日東南の校地拡張完成(300坪)	28 (5)	1620 (242)	258 (88)	関谷 国治
53	25	14	"	10月1日金華尋常高等小学校と改称す	25 (6)	1533 (254)	266 (110)	"
54	26	昭和元	"	7月1日岐阜市金華青年訓練所併設さる	24 (5)	1425 (238)	242 (99)	"
55	27	2	"		23 (5)	1405 (224)	231 (95)	"
56	28	3	"	11月3日理科室に電気実験配線装置をなす	26 (5)	1384 (203)	247 (87)	"
57	29	4	"	6月22日運動場南隅に非常用井戸を掘り散水用吸水ポンプのモートル備付をなす	25 (5)	1380 (224)	218 (88)	"
58	30	5	"		25 (6)	1389 (248)	178 (144)	"
59	31	6	"		26 (4)	1437 (193)	222 (90)	加藤 気作
60	32	7	"		27 (4)	1509 (218)	220 (87)	"
61	33	8	"	7月1日北舎裏にプール新設完成、9月8日奉安庫西南隅より東南隅へ移転、12月28日講堂竣工	28 (5)	1539 (253)	225 (106)	"
62	34	9	"	2月16日 校旗樹立式を挙行	29 (5)	1577 (260)	257 (128)	"
63	35	10	"	6月30日金華商業青年学校開設	28 (5)	1635 (249)	225 (105)	"
64	36	11	"		30 (4)	1575 (244)	261 (116)	"
65	37	12	"	8月衛生室拡張工事完成 (紫外線浴槽を備える)	30 (4)	1623 (241)	260 (106)	梅沢 英造
66	38	13	"	4月20日講室内東部に畳をしき柔道場とす	29 (5)	1603 (264)	265 (113)	"
67	39	14	"	5月29日課外武道として第5学年以上に柔道、剣道(男子)薙刀(女子)を課す、9月7日校庭東方にはん登棒を設ける	28 (6)	1607 (288)	273 (132)	"
68	40	15	"		28 (6)	1569 (292)	264 (130)	"

()内は高等科、他は尋常科

創立	西歴	年度	校名	概要	学級数	児童数	卒業生数	校長名
69	41	昭和16	岐阜市金華国民学校	4月1日国民学校令発布により岐阜市金華国民学校と改称す、6月4日玄関西側に掲示場設置、3月31日金華商業青年学校廃校	28 (6)	1571 (285)	249 (113)	梅沢 英造
70	42	17	"		28 (6)	1586 (269)	265 (123)	"
71	43	18	"		27 (7)	1546 (253)	247 (98)	"
72	44	19	"		27 (7)	1608 (249)	312 (110)	"
73	45	20	"	7月9日岐阜市に大空襲があったが本校は無事、8月9日丹羽流一調導長良川にて殉職す	29 (5)	1684 (240)	232 (85)	"
74	46	21	"		30 (4)	1756 (227)	291 (108)	後藤 弥三
75	47	22	岐阜市立金華小学校	4月1日岐阜市立金華小学校と改称す 11月30日育友会結成	31	1678	329	"
76	48	23	"	9月1日菜食だけの給食開始	33	1780	276	"
77	49	24	"	7月16日視覚教育研究発表会 3月10日健康教育発表会	34	1734	284	"
78	50	25	"	9月24日角力場完成	34	1738	236	"
79	51	26	"	8月26日給食室新築落成す 10月3日保健室の一部改装完成	34	1743	275	"
80	52	27	"	1月25日同窓会結成 3月1日創立80周年記念式、校歌制定	34	1689	284	"
81	53	28	"	4月2日図書館落成す 玉堂画富士寄贈	32	1683	320	鷺見臣一郎
82	54	29	"	6月1日豚の給食小屋完成	33	1737	297	"
83	55	30	"		33	1766	314	"
84	56	31	"	5月金華児童愛護会結成(17名)	32	1692	253	"
85	57	32	"	3月21日鉄筋4教室完成	32	1643	182	"

創立	西歴	年度	校名	概 要	学級数	児童数	卒業 生数	校長名
86	58	昭和 33	岐阜市立金華 小学校	6月5日運動場撒水施設完成 2月15日鉄筋5教室完成	33	1687	265	鷺見臣一郎
87	59	34	"	1月16日鉄筋6教室と中央玄関完成	31	1605	365	"
88	60	35	"		28	1418	313	"
89	61	36	"	4月8日鉄筋9教室完成 3月20日鉄筋6教室完成	26	1266	261	林 貞二
90	62	37	"	7月15日プール完成、12月10日グリーンベルト完成 校門 改築、1月17日愛護会は全日本交通安全協会賞を受く	26	1179	218	"
91	63	38	"	4月1日育友会をPTAと改称、11月16日創立90周年記念 式典を挙行	25	1117	218	"
92	64	39	"	8月18日PTA文部大臣表彰をうける 3月はん登棒完成	24	1043	188	太田 武夫
93	65	40	"		24	1014	169	"
94	66	41	"	10月28日体育倉庫新築、11月20日丹羽先生碑除幕、1月18 日仲よしの丘竣工	24	1016	184	"
95	67	42	"		24	896	158	"
96	68	43	"	12月1日教室にテレビ設置、1月8日給食室竣工、3月日 日岩石園完成	24	951	158	松田 善逸
97	69	44	"	10月17日職員女子便所増設、10月15日気象観測所完成、12 月1日教室石油ストーブ設置、2月20日花壇完成	24	954	146	居波 重邦
98	70	45	"	12月15日グリーンベルト改造完成 3月31日図書館への廊下完成	24	947	152	"
99	71	46	"	9月20日校舎東半分の南に金網完成 12月13日公民館完成	24	920	149	吉岡 勲
100	72	47	"	8月22日全教室に電灯つく、2月5日より創立百周年記念 展覧会、3月9日植樹、3月20日記念誌発刊、3月25日記 念式典挙行	23	880	153	"
101	73	48	"	4月1日無人化始まる、7月2日体育館竣工、12月25日ジ ャングルジム・平行棒・動物慰霊碑完成、3月6日家庭科 室完成、3月14日便所完成	22	817	146	"
102	74	49	"	4月1日より校庭開放につき、土日・祭日に指導員配置 6月19日プール濾過機取りかえ	21	799	145	三浦 義明

おわりに

金華小学校職員は研究主題に基づいて個人テーマを設定し、個人研究をしている。本書は昭和48・49年度の私の個人研究「本校百年の歩み」のまとめである。それは創立以来、本校を支えてきた人達がいかんにして伝統と栄光とを築きあげてきたかを、年度別に明らかにしようとしたもので、次の内容と方法とをとった。

●取材内容として

- 1 その年度の特記事項・行事
- 2 その年度から始まった特記事項・行事
- 3 その頃のこどもの学校生活並びに遊びを中心とした校外生活、及びその頃の校下の様子やくらし

●取材方法として

でき上った話数

- | | |
|-------------------------|---------|
| 1 学校の記録の中からまとめる……………43話 | } 計103話 |
| 2 旧職員に執筆を依頼する……………31話 | |
| 3 卒業生にきいてまとめる……………29話 | |

執筆をお願いした旧職員の方々、昔話を承った卒業生の方々、どなたも誠意をもち喜んで御協力下さり、御繁忙の中を原稿をかいて届けて下さったり貴重な体験談をお話し下さった。これにこたえて懸命に努力したが今ふりかえてみると、限られた紙面や拙筆のため充分その意がつかせず、こゝにお詫びする次第である。

以上の方々の他に、多くの方々の御尽力をいただいた。それらの方々の中、主な方々の御芳名を列記して御礼とする。順序不同 敬称略

戦前の旧職員の執筆者選定について……柳原憲一先生・松原英子先生

校印の鑑定について……船戸茂雄

金華児童愛護会……………林 彰一郎・毛利吉光

小年野球について……………杉山千代吉・神谷利一郎・古川宗治部・井上幸平

吉田 清吉・永井 忠雄・松井 忠雄・近藤利夫

林 市太郎・阿曾 幸郎

写真の提供……………永井 忠雄・平下 国武

写真の複製……………小森写真館

旧職員・卒業生始め上記の方々は、私の研究に賛同し逢う毎に激励して下さった。その度毎に私は勇気づけられ、日々の朝晩は勿論の事、日曜も祝日も夏休み・冬休みも返上し寸暇を惜んで一話一話かき綴り、2ヶ年を費して遂に完成することができた。今脱稿するに当り、衷心よりこれらの方々々に御礼を申し上げる次第である。

このようにして「金華小百話」の原稿は完成し、題字も自分で書き、表紙裏に載せる岐阜県立図書館蔵の岐阜町絵図も複製を終り、これから研究紀要のような小冊子を作ろうとしていた。これを伝えきかれた校下の有志の方々が、これは後世に残すべき貴重な史録であるから永久に保存できるような本にして頒布しようと「金華小百話」刊行後援会を作って下さった。そのおかげでこのような堅牢・美麗な本ができ上ったのである。これまた愛校心の発露というべきで感謝の外はなく、全く頭の下がる思いがする。下にそれらの方々の御芳名をのせ、その御厚情の御礼とする。

「金華小百話」刊行後援会

敬称略

相談役	後藤 喜八	高橋 英吉	丹羽 清二		
代表	平井 照二				
	船戸 茂雄	若井 秀一	説田 信義	神山 修次	
	河合 良信	清水 保	中木 和水		
	村瀬美代子	喜多 幸子			
	吉田 周平	日下部博子	貝崎 栄一	高橋 正治	
	堀 倫子	山村 知之	小坂井純一	吉村 年江	
	木村 富造	堀江 一英	酒井 一郎	加藤 重光	
	吉田登喜子	佐藤 貞子			

今、本書の原稿・出版の諸準備すべて終り、静かにふりかえれば校史のすばらしさにつくづく胸をうたれる、そして本書も又その伝統を承けつぎ私をとりまく多くの方々の善意と献身とによってでき上ったのである。終りに金華小学校が永久に不滅の伝統と栄光とに光り輝くのを祈念して筆をおく。 昭和50年2月吉日 鷲見礼司

著者と
刊行後援会の方々



金 華 小 百 話

昭和50年3月1日印刷
昭和50年3月10日発行 (非売品)

著 者	鷺 見 礼 司
校 閲	平 野 徹
発 行	「金華小百話」刊行後援会
印 刷	株式会社タカダ印刷
製 本	株式会社高崎製本

明治七年十二月 建長城

一 水原長江

一 水原長江
一 水原長江

一 水原長江

又やたしつしつしつ

川 水原長江

水原長江

水原長江

舟次

舟次

舟次

舟次

舟次

甲戌 田中 寫 於 長 城
北 津 水 橋 五 郎
波 早 益 川 幸 藏 氏

水原長江



政年三野ノ國原見ノ郡ナル波
縣ノ北緯二十五度二ノ分半
一度五ノ九分合ニ書リ地勢
嶺ノ天史一名ニ書リ伊奈波
ノ其山縣東南ノ起リ南ノ
山通リノ如クノ里ノ陸ノ森
光波ノ古書ノ經ノ大海道
而北ノ長波ノ河濱ニシテ波
處ニ古ノ往來ノ便ニ如ク之連
此ノ軟橋ノ架レテ長波ノ里
際ノ九ノ七八ノ小島ノ連接ニ中
ニ長龍ノノト全環ノ管轄レ中
ノ中波盛大ノ市街ノ實信神
傳聞及ク神ノ會社等アリ風
表ノ家作ノ洋風ヲ擬シテ衝
立期コトニ登リ歌ノ實
國ニ一擊陸ノ地ヲシ故ニ三廣
悉ク蘇ノ尚客リノ一縣大人墨
此地ノ山水書キテ一春秋ノ
富ノノ就中於草山伊奈波
再長波ノ朝朝舟橋ノ身影ニ
ノノ將蘇波田氏ノ城趾ノ一
多願ノ一ノ國ノ昔ノリ名



